

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

4月号



4-APRIL '66

奇譚クラブ

昭和四十一年四月号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



4月号 ¥ 300

限定版グラビア写真集／美しき縛しめ／第八集

大塚啓子

鈴木晃子

山原清子

女斗緊縛競艶写真特集

完成

頒価一部 一〇〇〇円（送共）略号（美8）

「女性対女性」の激しい女斗美、緊縛プレイの
フォト化―動きのある縛り場面の美しい展開―

女性対女性、女性同志の組打ち（六尺禪
着用或はパンティ着用）から緊縛に至るま
での動きのある縛り動作の連続を、大塚啓
子、鈴木晃子、山原清子の三女によって傍

若無人に展開させました。数十枚の素晴らし
い美女争斗、相互緊縛の絢爛たる写真がこ
の一冊によって皆様のものとなるのです。
今すぐお申込み下さるようお待ちしております。



限定版グラビア写真集へ美しき縛しめ▽第七集完成！

山原清子 刺青の魅力を探ぐる

頒価一部一〇〇〇円（送共）

略号へ美7▽

全部最近撮影の力作！未公開の秘蔵写真集！

刺青の女王——山原清子の魅力を最高度に発揮した強烈な緊縛フオトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズ）

このグラビア写真集の刊行のために、近々三カ月の間、山原清子を連日のように煩して特写した、総て未公開の傑作写真ばかりです。山原清子の刺青の魅力を探求して、その肉体の隅から隅までを強烈な緊縛によって、マニアの皆さまの目にこらんにいれます。今

後二度と手に入らない素晴らしいとっておきの写真多数をこの「限定版写真集」のために投入いたしました。一般市販は絶対にいたしませんから、直接発行所へ「略号へ美7▽」と御記入の上、お申込み下さい。本欄に掲載の写真は、写真集には入っておりません。



本誌は自粛自粛で面白くない、自分達の参考になるところもないという男性読者の声を、臆面もなく誌上に載せてみたが、そういう気持ちもしないではない昨今の本誌の内容だが、それが、かえって女性読者から歓迎されるところとなるのだろうか。かつて本誌編集部で読者係をやってくれていた家原文子さんが、女性読者通信なんかには、余り書いてこないけれども一人で読んで楽しんでる人は案外多いんです。といていたが、たしかにバックナンバーや分譲品を求める女性はいくなくない。実行派を標ぼうする一部の男性にとつては、本誌はすでに陳腐と化しているかもしれない。しかしそれはそれでいいのであって、本誌はそういったベテランの秘伝書ではないのだから、そういった不



満は甘んじて受けよう。それよりも、実行なんか夢にもしたくないといった女性の読者が、心のアバンチュールを楽しむために、本誌を愛読してくれるということは、心暖まる思いがする。

これで女性の執筆者や寄稿家がどんどん増えてくれると一層うれしいのだが、女性読者の増加に伴って、これもあながち夢でないかもしれない。女性特有の繊細な観察や感情からキメの細まかい作品が期待されるのだが、案外女性の投稿者の中に、甚だ露骨な内容の文章を送ってくる人があっておどろかされる。今記憶しているなかでも数人そういう方があった。空

想や書く文章の範囲では、これは女性も相当なものなんだなあと感じられて面白い。

幼稚園へ通っている一人の女兒を持つ人妻で、ご主人が他に愛人を囲っているというのを知って、それなら私も浮気してやろうと、出産のとき通ったことのある産婦人科の医師とのいきさつを告白文に書いてこられたことがあった。但書きで、主人の裏切りと対する復讐の意味で、この文章を書きましたが、医師は実在しますが、私と浮気のこととは私の空想です、と書いてあった。

この女性と逢った人の話では、家の表札に、ペンネームの名札を掲げていたというのだから、相当の書きますわよ夫人なのだろうが産婦人科診察の詳細な描写が多くて残念ながら発表できなかった。

次に、二十八才の未婚の女性で毎月、数篇のまことに煽情的な内容の告白や創作を送ってこられる方があった。この人は自流の方法をまことに直接的に書いてこられ文章も非常に達者なのにも拘らず

活字にならなかったものである。

一度彼女の家を訪れたことがあったが、父が弁護士とかで、その法律事務所の応接室で色白の弱々しい感じの女性と初対面の挨拶をかわした。そのとき、彼女が非常な難聴であることを発見した。大声をあげれば通ずるのだが、用件が用件だけに、彼女がすぐ白紙を持ち出してきて筆談にうつった。

私も文章を書くことは遅くないつもりだし、彼女も又小さく切ったザラ紙にエンピツです早く走り書きした。しかし、いかに早くしても筆談というものはタイミングが合わず、もどかしいものだから私は彼女を誘って外へ出て、タクシーを拾った。だが、大声をはりあげての会話は、ムードも何もあったものではなく、結局、私は伝えたいことの半分もいえず、簡単な食事をして別れてしまった。

新刊の雑誌が出ると真っ先に速達で新しい分譲品を求める女性のことなど、あとで、この方はバーのマダムであるということがわかったのだが、この女性読者の話などいづれ次の機会に、他の方々と共にまとめて書いてみたい。

短信往来

奇ク三月号雑感

河津安春

先ず目次を開いて驚きました。まるで百貨店の期末大売出しのように、何でもありました。是は決して不平を言っているのではなく、ありません。做令、一篇でも自分の好きな作品を見出した時の喜び、それだけで満足です。

三原寛氏「しもべ」「嗜虐の歴史」

寡聞にして未だ氏の小説を拝読した記憶がありません。その意味では珍重すべきものと思います。今回は短篇でしたが、これを機会に、更に力作が拝見出来れば、吾々愛読者にとって、こんな嬉しい事はありません。少ない紙数では止むを得ない事とは存じますが、往年の名作「二百字讃歌」を凌駕する程の感銘は得られなかったのは残念でした。

ペン女王の酷使に堪えているソバイは、どんな気持ちでいるので

しょうか。一度、ソバイ自身に語らせてやって下さい。又シアツクグインの女神達の生活を具体的に御教示願えないものでしょうか。

万田不仁氏「牡丹」

毎時ものながらの艶麗な御作で、読んでいて実に楽しくなります。華美で頹廢的な草双紙の世界に遊ばせて頂いて大喜びです。欲を言えば、マチンで弱った勘蔵を、美しいおせんの手にかけて、虫けらのように殺してやったら、どんなに楽しいでしょう。

福田久文氏「深紅の歌」

二月号に引き続き嬉しい読物でした。充実した読後感は、決して頁数だけに依るものではないと信じます。最近の氏の諸作品に、以前には無かったような、洗練された深味を感じるのは、私だけでしょうか。

芳野眉美氏「優雅な生活」

マダムミツコが僅か十四行で、現われて消え去ったのは実に残念でした。必ず神酒を飲むとは限らないそうですが、吾々愛読者のイメージとしては、神酒の無い氏を考える事は出来ません。これ迄の奇クに発表されたM小説は、神酒拝受をMの最終的段階として、吾々に、ショックを与えたものでし

僕のイメージ画集「緊縛と切腹」

室井亜砂路



た。これを日常茶飯事に迄、引き下ろされたのは、実に芳野氏の功績ではありますが、反面、M小説の最高潮シーンの感激を失わしめ、その発展を阻害した氏の責任を、追求せざるを得ません。芳野眉美氏は、依って奇ク愛読者に対し、神酒小説の傑作を、次々に発表する義務が有ると思います。呵々。(御免なさい。)

馬族保先生へ。
通信欄に、大先輩の激励の言葉

を拝見したのは、全く、思わざる感激でした。拙い筆に、更に鞭打つ決意を新たに致しました。然し私共としましては、それよりも「美しい暴君」、「牛乳風呂の饗宴」等、今はM小説の古典となりました是等名作の筆者に、再び奇ク誌上での御活躍をお願いしたい希望の方が、遥かに強いようであります。尤もその時には、私如きが、貴重な誌面を汚す価値も無くなるとは存じますが。今後共、

御叱正の程を、お願い申し上げます。

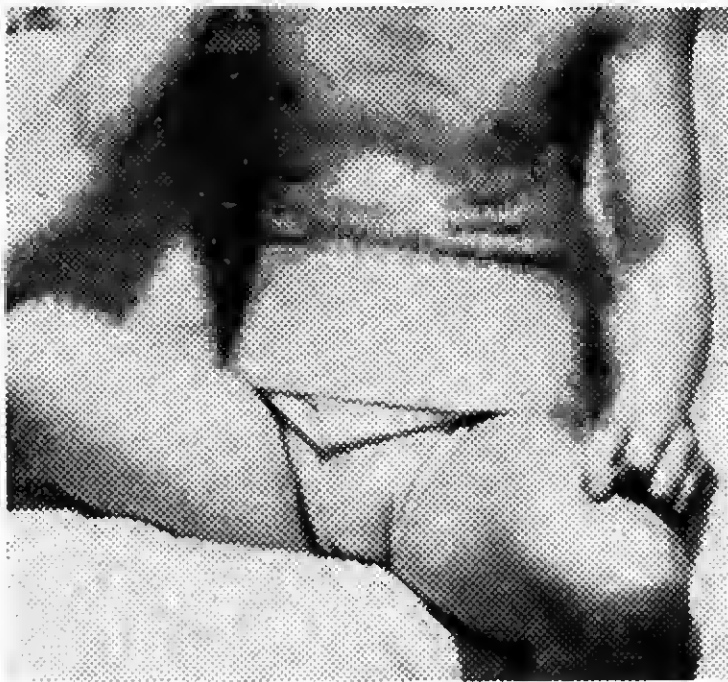
橘行司子先生へ。

KK時評の筆を投ずる等、飛んでもありません。最近、奇ク読者の批判的精神が昂揚し(雑魚交りで、私もその一人でしょう)とかく過激な言葉が乱れ飛ぶようです。

が、それなればこそ、尚更先生の温健なる時評が、奇クの指針として必要であると存じます。先生の批判に鼓舞されて、奇ク誌上に登場する新しい寄稿家も、随分多かったです。只一つ、不満を申し上げます。只一つ、不満を申し上げます。ば、どうも、Sに詳しく、Mに冷

たいと思うのは私の僻目でしょうか。辻村隆先生へ
暁名天下にあまねき、サデイス、辻村先生を一時的にもせよ、Mの境地に追い込んだ魔子女王との対面的一幕、是非共、カメラハントに御発表下さいますようお願い

い申し上げます。
且つて「奇譚三十九夜」「木曾の天狗松」等にて、吾々をドキリとさせるような、M的シーンがあった事を覚えていますが是は無理なお願いでしょうか。

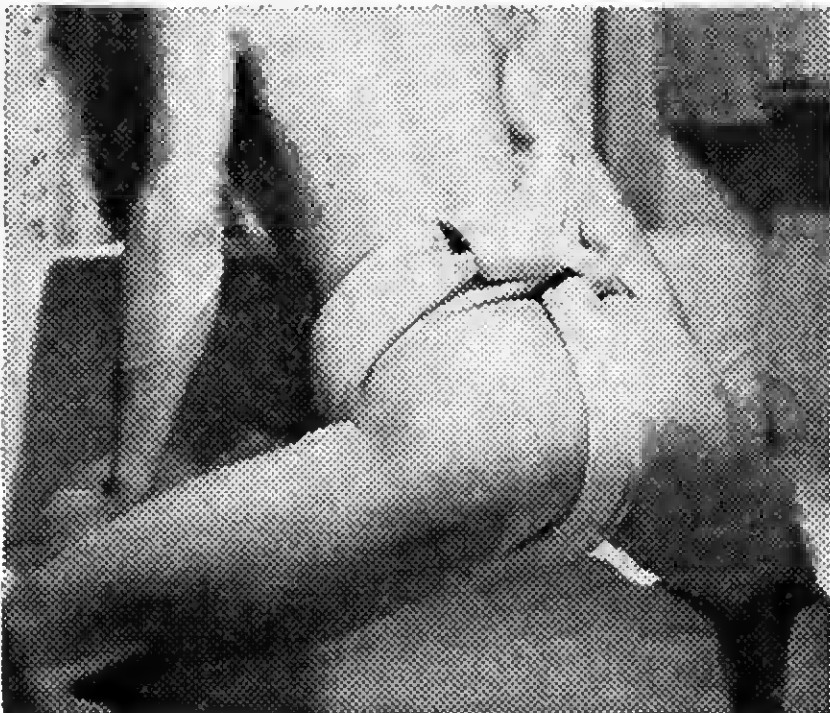


禪と女相撲

間和志締男

したのですか。私は毎夜黒の雲斎木綿のマワシを締めて床に入ります。一時は腰のまわりと立禪の結び目が背中当って寝にくかったけれど、最近はずっかり馴れて楽しい夢をみながら、すがすがしい朝を、迎えております。相撲禪愛好の皆様、男女を問わず奇クの頁から通信がたえないようにどしどし、発表して下さい。

どしどし、発表して下さい。又今迄作品を発表された先生方、どうしておられますか、新作の発表をお待ちいたします。カッとも雪崎先生お一人では大変だと思ひますので新人の方の出現を望みます。私が絵を描ければいいのですが、残念ながら駄目なので、サロンに発表してもらえばと思い、自分をモデルにした写真数枚を、同封いたしました。自分で自分が写せれば、もっと楽しい写真をお送りいたしますから、今後もどうか御期待下さい。



女相撲、禪ファンの皆様、奇ク編集部の皆様、お元気ですか。本日の通信は八女相撲ファンVの方に申し上げます。最近読者通信の頁に通信が少く、少し熱がさめた様に思いますが、ファンの方どう

い。今も白の雲斎木綿の禪を締めて、この通信を書いております。最近の傑作は、なんといっても「花の女斗美たち」を書き綴る奮闘士好太氏の連載物です。満足です。これからより以上、毎号毎号

全国の女相撲、禪ファンの皆様

の感想とお便りをお待ちしております。私達ファンの楽しい便りの交歓で、このサロンのページを満そうではありませんか。

映画通信

東山映吏

緊縛された若尾文子

『刺青』のお艶

ぱっとスクリーンに映し出されたのは、赤いもすそを乱した若尾文子扮するお艶が、赤いしごきで胸を二巻きされ、身もだえしている。カラーだけに、その迫力はますますいい。緊縛されたお艶をだきしめているのは、変質的な刺青師清助（山本学）である。

彼女をハダカにして、その美しい肌を刺青をしようというのである。素晴らしいでしである。両手はがっちり縛られている。さすがに大女優の貫録十分で、官能的な美しさを見せている。

お艶は江戸で指折りの質屋の娘だが、とても親が結婚を許しそうな手代の新助（長谷川明男）と恋をし、ためらう彼をそのかして家出をしてしまう。

そして、二人がころがりこんだのは、船宿の権次（須賀不二夫）である。彼は彼女を手ごめにしかけたり、新助を殺そうとしたあげく、彼女の手足を縛りあげてカゴ

の中に押しこめ、猿ぐつわをはめ芸者家へ売り飛ばす。権次が乾分をつかい、彼女を縛りあげるシーンは見ごたえがある。

彼女は赤い腰巻をけとばし、白い太股まで見せる。それを「足をしばってしまえ」と縛り押さえつけて、両手をねじ上げ、赤いしごきで、両手をぎゅぐゅと縛り、そして、胸をぐゅと二巻き縛りあげる。そして、豆しほりの手拭で猿ぐつわをかます。更にカゴの中へ押しこむまで、そのプロセスが細かく描かれている。

その縛りのプロセスが、このように描かれた作品は少いだらう。本当に四肢を縛り上げられ、手とり足とりされる。そして芸者家のおやじに、縛られたままでだきしめられ昔の絵画を見せられる。それが、男を肥料にして大きくなっていく女の姿である。

「お前を、そのような女に育ててやる」と、背中に女郎蜘蛛の刺青

をされる。彼女は麻薬をかがされ意識不明になっている間に、背一面に大きな女郎蜘蛛の図柄を彫りこまれる。

女郎蜘蛛——網を大きく張り、その網にひっかかった虫ケラを貪欲に食べ肥るクモ。お艶はそのクモになる決心をする。一つには自分を痛めつけた男たちに対する復しゅうである。背中にこんなものを彫られては、どうせ、まともに生きられないという絶望もあったが、根が勝気な彼女は男を手玉にとつて、うっとりとながめたくなつたのである。

たちまち彼女は、深川一の売れっ子芸者になったが、おきやんな氣質と美ぼうにひかれて、金を積んで慕い寄ってくる男たちから彼女は金をしほりとる。

それだけでは、気がすまない彼女は、手代の新助を使って、自分をこんな女にした船宿の権次をはじめ、芸者家の主人など、悪党たちをつぎつぎに殺す。金のために男を裏切ることなど平気な現代の悪女たちの軽薄な割り切り方にくらべると、お艶の生き方には、悪魔主義ともいえる抜き差しならぬ運命的なものがあるようだ。

谷崎潤一郎原作の「お艶殺し」

編集部だより

○春川ナミオ氏から八宮野政子様を送る私の画として一葉のM画が送られてきた。編集部への便りによると、只今素晴らしいM画作成中の由、いずれ送付してくれるとのことなので、M画ファンの方々にお目にかかれらると思う。

○二月上旬、四馬孝氏が来阪。久方ぶりにアブ探求の体験談を聞いたが、本職の方が忙しくて中々文章にする暇がないとは残念。そのかわり、責画の方は余暇を見てコツコツ描きためているとのことなので、そのうち何らかの形で、お目にかかれるかもしれない。

○先月号のこの欄で紹介した美貌のサジスチン花田沙登子のフォトと手記が、今月号で初めて誌上に姿を現わした。本誌のM男性モデルの募集に応じた数十名の志願者から選びだしたモデルが、先ず彼女の飼育を受けることになるだらう。

○文字通り浣腸嗜好のモデル東浦ひかるは、単なるグリセリン浣腸では飽き足りず、強制大量浣腸、空気浣腸などを希望しているのだ。

奇クサロン愛好者の皆様へ 新田英雄

長らく御無沙汰致しました。最近やっと、ひまも出来、ゆう子とのプレイも落着いて出来るようになりましたので、お便りする次第です。私達の最近のフォトをお送り致します。奇クを読むごとに多

くの夫婦の方のSMプレイの作品がサロンに発表されていることは心強い限りです。今回お送りしたフォトも、今までとあまり変わりありませんが、今までと比べ写真の技術的に少しはましなと思います、お



と「刺青」をアレンジした作品。最後にお艶が新助に、赤い棒のようなもので、ピシピシとムチ打たれる。女郎蜘蛛のイレズミの柔肌に赤いアザがつく所などもゾクゾクさせる。そしてお艶は新助を殺

し、最後には刺青師の清吉に殺される。女郎蜘蛛の背中からドクドクと赤い血が流れ出る。権次の女房——宝塚出身の藤原礼子が、夫の権次に首をしめられ殺される。白い太股をあけっぴろ

げにして死んでいるところなど、ちよつとアブナ絵的である。大女優若尾文子が、手首からがっちり緊縛され、猿ぐつわをはめられ身もだえする姿を十分たんのうさせてくれた作品だった。

送りしました。しかし思った様にゆかずリアルな感じを出すのにはまだ当分時間がかかりそうです。本来のSMのイメージからは大分はなれてしまった様な感じになってしまっていました。この次には、いまま少し考えてみるつもりです。このところ、ゆう子も少し乳房が小さくなって自分でも心配していました。一生懸命乳房を元に戻す様努力している様ですが、風邪をひいたり食欲がなかったりで、すっかりやせてしまいました。当分は元にもどりそうにないと思います。

亦、来月にフォトを送ります。少しでも皆様に見ていただける様な身体になりたいとゆう子も云っております。夫婦SM愛好者の皆様、又来月号誌上でお目にかかれるのを楽しみに。寒さきびしき折柄お身御大切に、お元気で——。

新田英雄、ゆう子

これ又、S好みの山原清子が大胆なプレイを展開。結局その後の感想では、やはり東浦ひかるも異性の手によって施された方がよく、山原清子も、男性に流腸して悲鳴を挙げさせた方がよい、との結論に一致したという。

○昨年の秋に、山原清子の友だちで妊娠腹のモデルになってもいいという人の出現を伝えておいたが今年の二月で、いよいよ妊娠八カ月ですこぶる大きなお腹になったという連絡を受けた。四月が出産予定日とかで、もう余り日がないので、わざわざ山原清子に行行って貰ったが、住所がいささか辺鄙なところにあるのと、御主人の承諾を受けれるかどうか疑問なので、只今のところ、撮影は可能か否か不明である。極力幹旋してもらっているもので、或は朗報がもたらされるかもしれない。

○編集部撮影の妊娠フォトが未だ作成されていないことではあるし彼女は二十四才の初産で、すこぶる見事なお腹に成長しているという山原清子の話なので、是非ともモデルになってほしいものだと思望する。やはり三十才未満のはりきった膨満腹が望ましい。他にも心当たりあれば御一報を乞う。



・サロン雑感・

私のプレイ写真

……………新宮明夫

本日奇ク三月号が届きました。一月号二月号で一部の投稿者同志が攻撃しあっておりましたが、どうやら小休止の形、それに対しての他の読者から批評も出ていたようです。奇クの性質上、他人から見れば独りよがりでも投稿する本人にしてみれば自分なりの正論を述べているのでしょう。SMの世間は本当に範囲が広いものですか

ら編集部御苦労も思いやられます。特定の人達だけの奇クにしてはいけないという投稿もあったようですが、本誌のように殆んどが投稿によって編集される雑誌の場合、或程度致し方ないのではないのでしょうか。特定の人達に独占されたくなければ読者それぞれが投稿すれば良いのです。広い分野の内投稿の常連者の分野だけが重視

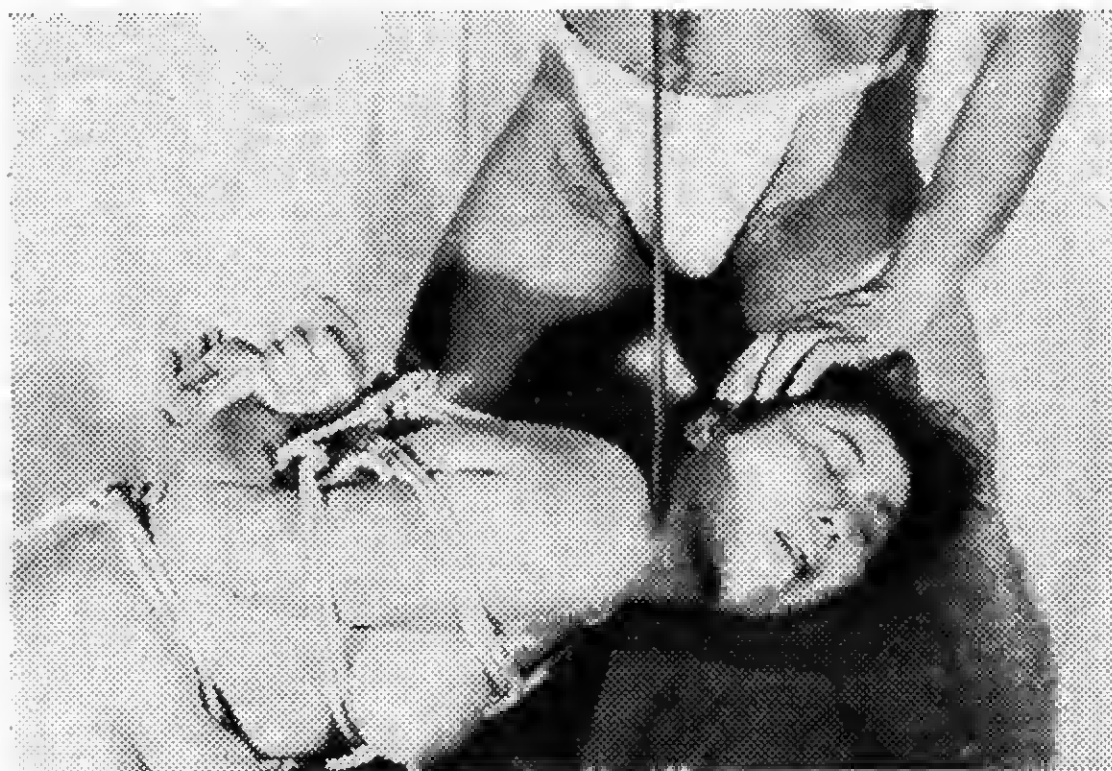
されて見えるのも当然かと思えます。

私は生首ファンであり、処刑ファンでもあり夫婦プレイの愛好者です。世帯持ちの読者でも夫婦プレイを熱望しながら奥様の協力を得られずせめて奇クを読むことで満足してゐる人達も多いと思ひます。私達のように夫婦でプレイを楽しみ、同好の御夫婦と文通とかお互いのフォト交換が出来るのは恵まれてゐると云えましょう。

亭主の好きな赤烏帽子とか云われませんが、夫婦生活にSEXが欠かせないようにSMプレイで奥様を教育すべきと思ひます。

三月号SMハントに珍らしく伊吹真砂子さんのフォトを見出しました。私が結婚する前下宿で独り奇クを愛読していた時代にいつでも彼女の姿を誌上に見出したものです。当時の

奇クが手許にありませんし、当時の彼女の身体も脳裏に薄れて想い出せませんが、辻村氏の云われるようにMよりむしろSと云った感じの容姿ではなかったでしょうか。それでもフォトで見る限り均勢のとれた立派な身体ですね。今後も



奇ク誌上にどしどし姿を現わして下さい。是非お願い致します。このような人達と自由に語りプレーの出来る辻村氏がうらやましく思います。しかし夫婦のプレーも出

来ず奇クに総べてを托していられる人達の多いことを考えると、私などまだ恵まれている方かもしれません。

奥様を写したプレーフォトを、



異常は哀しかれど詩もロマンも流れて

—カメラ・ハント／伊吹真砂子の巻／より—

よるの・たんろう

ある読者は云っている。△苦悩と栄光をVと。私は違う。夜のしじまにあっては、たあいもなくアブの世界を求めて、犬ころのように放浪し、いつも幻滅の悲哀を味わっては、橋のたもとや屋台で安焼酒をのどに流し込みおつることのみ願う。落下の精神に栄光はなく、あるものはアリ地獄の如き耽美な深淵のみである。そして苦悩

ではなく怠惰な空虚さである。そんな私にとって、△事実は小説よりも奇であるVを地で行く辻村隆さんのカメラ・ハントは、夜の彼方の私にとっては絶対ないであろう「奇蹟」を誌上に再現してくる意味で、いつもうれしく拝見させて頂いている。空想と実行派の相反する断層を痛いほどに意識しながら……。

このサロンに出す顔ぶれも、どうやら一定したようで、心ある読者？ から叱られそうですが私達のプレーの内、「女の首を斬る」二枚を同封致します。差支えなければ

ば掲載して下さい。又、新しい写真がとれましたらごらんに入れます。他の方々も、どうか皆様の作品をお寄せ下さるようお待ちいたします。

かつて△まさしく過ぎ去りしことは懐しく夢のまた夢であろうか——だが、「夢よ、もう一度」という言葉もあるVそして△いまに生きることは大切だ。そして過ぎ去ったドラマを顧みるのも私たちに夢を、力を与えてくれるVと、サロン（昭和四十年十一月号）に私は投稿した。カメラ・ハント「断層の女」（新刊三月号）の冒頭「瞬間の偶然が、過去の甘い追懐に、歳月の断層を、束の間に埋めて、突発的に繋がる事がある」の一節、書出しを見て、奇譚クラブが誌上をとおして終る事なくストリー化して行くことのうれしさをしみじみと感じた。△追懐Vを単に整理と片付けられるお方は幸せな人である。だが、生きる悲哀を身にしてみているマニアにとって回想もまた真実ではなからうか。辻村さんは、いつかのカメラ・

ハントでも、アブノーマルな人生をことさらに弁護していない。そうかと云って、深刻がっても居無い。「ほろ苦い哀愁」をただよわせながらプレイし、アブの血を燃やし、きれいな文章で別れを結んでいる。そこに、異常な哀しかれど詩もロマンも流れる——大方読者が引かれるSMの共通の場があるのだ。

私は、伊吹真砂子さんの全盛期（昭和二十八年当時）を、知らない。また私が誌上に登場した頃はすでに梨花悠紀子さんの華麗な被虐フォトもグラビヤが廃止されて姿消え既刊号在庫を求め少し知るのみである。しかしカメラ・ハントの彩筆によって、私の胸中に妖しい美しさをともなって、その映像はあざやかに生きて居りまた、これからも生き続けるだろうか。△辻村さん。美木乃々子さんのフォトありがとう。御健筆をV

短信往來

興味ある事項

についての

雑感

三原 寛

アランドロンの霧囲氣を、というより、彼は彼、アランドロンの存在には関係なく彼そのものの霧囲氣がそうなのだから、彼的な霧囲氣を漂わせた彼つまりバーのマスター氏、ナポレオンソロ的ないや、これも矢張り、彼的な軽妙さをまぶした会話で盛り立て、そして盛り立てられている客達が又何時来ても、一寸古い表現で言うなれば美男美女ばかり、美男美女といっても、スクーリンで、抱き合って、霧の波止場で涙にむせんでる様なのでなく、エレキでも手にして、テケテケテケとE線のグリスダウンでダイアモンドヘッドか夕陽の渚でもやらせたらぐっとくる様な、そういかすタイプ。黒のドレッシーな感じがぴったりの彼女、豊満で、艶やかな白肌

ヴォリュームのある胸、だから、パリの女性はシック。黒のドレスが着こなせる。女性。シェラザードのカウンターの愛嬌のいい美貌のマダム・ミレーヌ的ではなくて、彼女はやはり、彼女。ここはバー「よしの」そして、マスター氏、芳野眉美氏が、依然として、ブルー・ノートの妖しい煙のたちこめるこのバーの妖しい霧囲氣をかき立て、そしてその妖しさは黒と赤のコントラストによる妖しさでなく、やはり、アランドロンのでない彼的な紫と銀のコントラストによる妖しさで、飲み込んだビールと一緒に体内に迄滲みわたった時、タブーの古典的な香りが鼻先をかすめて、先刻のマダム・ミレーヌ的でない彼女の妖しい彼女が、一度でもそういう目

に遭わされてみたくさせずにおかない、そういったヒップをこちらに向けて通路を横切り、今度は入れ替りに、さっきのダイアモンドヘッドの彼女と同伴のポニー・ステップの彼女がそれをみた途端、踏みつけられる事以外考えられなくなる様な脚線美を、乱暴さと優雅さの中間位のみせ方で誇示しながらこちらの妄想をかき立てて苦しめる為の個室に姿を消し、そこで又ビールを、自慰的にぐいと一飲みして、どうもバー「よしの」は刺戟が強過ぎる、と考えた。芳野眉美氏の作品で神酒への憧憬をよび醒まされ、そして、芳野眉美氏の作品で神酒への渴きをかき立てられ、そして、現実の芳野氏のまさに作品中の会話の夢幻の霧囲氣に誘い込まれ、そして、芳野眉美氏には、月々の魅惑的な作品で、つまり考える為でなくまさにエンジョイすべきエンターテイメントとして夢を満たして戴けるばかりでなく、プレイベートにも、いろいろと感謝すべきアドバイスをしている大先輩です。さて、十二月号の河津安春様「ポケットブックに発見したM的小説クライマックス紹介」非常に興味深く拝読致しました。同じもの

代理部だより

○先月号で発表しました限定版グラビア写真集「美しき縛しめ」第七集「刺青の魅力を探ぐる」略号「美7」並に「美しき縛しめ」第八集「女斗緊縛競艶写真特集」略号「美8」は、二月十日に一斉に発送いたしました。○「美7」は一月末、「美8」は二月中旬に完成の予定でしたが、製本の都合にて同時に出来上ってしまいました。△「美7」お申込み下さった方々には、若干お待たせしましたことをお詫びします。○引続いて、只今準備しております限定版は、Mフォート・オンパレード△女王様に飼育される日々△これはグラビア写真集としては、初めてのM企画で、必ずやMファンの方々から絶讃を以て迎えられることと思います。○次に、先般も少し予告しました伊藤晴雨氏描く門外不出の色彩画△日本拷問私刑図譜△並に△盗賊美女凌辱図譜△の二集も、近々限定版として刊行したい考えですが、いずれも精細な彩色画ですので、出来るだけ原画の味を出すため印



是非購入したいと思いますが、入手先等御教示戴けたら幸甚です。学生時代には私も古本屋でこうした傾向のポケットブックを買い漁ったのですが、転居の度に整理したり紛失したりで、その後、街で探す暇もありませんので入手したい気持ちのみはやっております。

「嗜虐の歴史」何分私自身は物を書く事に不慣れな上に、仏語の翻訳に手間がかかり、なかなか十分の時間が割けない為、いつも超短篇になって終まいます。題材とし

ては面白いと思うのですが、折角の原文を拙い表現で台無しにしています。余暇に全く自分の楽しみみの為に訳してみたものが貴重な紙面を割いて掲載して戴き、興味をもって読んで戴いてる方のある事を知るのは過分の光栄です。

トルコVのエミ嬢。最高のクインでしたが、急に店をやめて、そのまま消息不明です。Mの扱いをすっかり心得た彼女でしたから、きつと、彼女の洗礼を受けた方も多いのではないかと存じますが、

章魚と裸女

荒波勝己

昨年の夏、三浦半島へドライブしたとき、彼女をモデルにして撮った写真の中の一枚です。生きた章魚数匹を地元の漁師から分けてもらい、お土産に持って帰るつもりだったのですが、彼女が章魚を小道具に私のヌードを撮って見たら、と提案したので、あたりに人影はなし、これ幸いと早速彼女を車の中で裸にしてケープをまわさせ、砂浜へ横たわったところへ、章魚をべったりとのせて撮ってみました。

現況御存知の方おいでになりましたら是非お知らせ下さい。谷崎潤一郎著「饒太郎」「富美子の足」題名と内容紹介のみで本文探していますが見当りません。出版社名、或は古本でお譲り戴ける方、御連絡戴けたら深謝致します。御参考迄に、マゾッホの著書小野武雄訳で新流社から発刊されています。但し、古典的価値と心理描写を別とすると、「奇譚クラブ」の諸作品程の刺激は私には得られませんでした。

刷方式装釘などについて考究中です。いずれ誌上にて詳細発表いたします。

○限定版グラビア写真集八美しき縛しめV「第九集」としましては「女性刑罰拷問特集」西洋篇として「革具に拘束される女」を企画しております。これも印刷着手次第誌上に広告いたします。

○本誌の旧号の在庫も、昭和39年昭和40年発行のものだけとなってしまい、しかもその残存部数も至って僅少となってしまいました。

最近発行の分は、若干部数保有しておりますが、これも数に限りがありますので、是非発行の都度お求め下されば幸いです。

○御注文の際は必ず何年何月号と御指定願います。どういう記事が載っている号というような御指定だけではお送りいたしかねます。代理部分譲品では、必ずA略号Vにて御注文願います。題名をお書きになると誤送や遅延の原因になりますから御承知下さい。

○御注文品のお届先を楷書にて封筒に、はっきりとお書き下さい。局留のときも、封筒の裏面に何々県何局留、何某と、お書き願います。御氏名の脱落が間々ありますので、御注意願います。



宮野政子様を送る私の画

春川 ナミオ

宮野政子様——

春川ナミオが誌上にて画をプレゼント致します。

十二月号誌上で始めて貴女を知りました。私の絵を誌上にてお受け取り下さい。私がいつも頭に描いている理想の女性、貴女そのものです。

五尺五寸、十九貫、すばらしいグラマーです。大都会東京にお住いの貴女は、近代女性の代表その

ものです。超グラマーの貴女が、すばらしいサジスチンであることは、男性の憧れの的です。

私はそのすばらしい貴女を想像しながら、S女性M男性に喜ばれる絵を大いに描きたいのです。本当は貴女をモデルに出来れば、どんなにすばらしいでしょう。

「政子女王様、是非私を奴隷にしてください！」

いつの間にか、こんなことを書

サロンの楽我記

辻村 隆

(第二十二回)

文通既に二年有余、お互いにすべてを知り合っているが、東京と大阪との隔たりが壁となつて、ついぞ今迄会う機会がなかった芳野眉美さんと、この正月遂に出逢つた。一月九日から十三日まで、四泊五日、私の陋屋に滞在されて関西の、いわゆるコッテリした面白さをすっかりと、味わってもらつた。ほんとに数日があつたという間に経ってしまった。お互いに仕事もあるのだ、そうそう遊んでもいられないので、今年の夏の再会を期して別れたが、実に愉しい五日間であつた。精しくは、彼との対談で述べてあるので、ここでは避けるが、会って尚更、彼の人が好きになつた。

中三日おいて、十数年振りにこれ又珍らしい人の訪問を受けた。かつて一時その麗筆に魅せられて六十通のファンレターを寄せられたという。岡田咲子さんである。いろいろ事情もあつて、永い間、鳴りをひそめておられたが余暇が出来たので、ぼつぼつと又書き出されたが、何しろ、一昔の歳月の

空白に、すっかり戸まどつてしまつて、私に原稿を持って来られたのである。どの程度まで書いていやら見当もつかないとおっしゃる。拝見して昔々らの、プレイの鮮やかな描写に恐れ入る。京子とか静子とか出てくるので、一寸「花と蛇」と錯覚、しかし岡田咲子さん独特の気風にあふれている。題までが「忘れていた人」と、カムバックを暗示している。最近、とみに淋しい、奇巧の小説陣を充実させてくれる恰好の人である。時を忘れて語り合ったが、ともすれば一昔前の懐古談に走つた。岡田咲子さんの今後の健闘を祈つてやまない。

この正月、カメラ・ハントは思いもかけず収獲が多かつた。増田夫妻のプレイ。千日前の盛り場で拾つた小悪魔の群れ。奈良県天理市の教祖八十年祭で、ヒョッコリ出くわしたU氏の紹介で撮つた鰐淵晴子そっくりの彼女、それに伊吹真砂子の紹介で知った、デパートの二人の娘。この二人は春の

いてしまいました。春川ナミオは貴女に憧れているのです。

五尺五寸、十五貫の私が、十九貫のポリウムの貴女を背にしなからM画を描いている姿、想像するだけでなく、実際に喉に夢みながら……。

では宮野政子様。そのすばらし

M女性以外不要 変った求人広告

お手伝いさんを求む

一、年令二十五才までの美しい

M女性に限る

一、待遇、個室、寝具貸与、三

食付(家族並)俸給詳細は面談の

上、飛切り優遇す

一、旅費全額支給

人間として無視され虐げられ、

責められる事を望むのがMのMた

る所以であるが、事実上、小説等

に出てくる主人公の様に朝から晩

までクサリにつながられ、ムチに追

われ次から次へと受ける厳しい拷

問、読んでいて我々マニアは、S

Mそれぞれの立場から、真にゾク

ゾクする様な感じを受けます。

しかし、これはあくまで紙上の

夢として法治国家においては実現

することは出来ないでしょう。

い肉体美をくれぐれもお大切に。

春川ナミオは貴女に対して限りない慕情を抱きつつ、この拙い画を描きました。ナミオの心情に若し、いささかなりとも哀れとおぼし召されましたら、一筆の憐憫を賜わりますよう、不遜ながら心よりお願い申し上げます。

私は趣味として、お互いがよく

理解し合い傷つくことなくプレー

をすることに依って、快感を得る

ことが出来たら、我々同好者にと

って、どんなにか人生が楽しく過

せることだろうかと思案します。

それも四六時中というのではな

く、プレーをしているときを除い

ては一般家庭と変らない生活を営

むわけです。即ち「昼は貴婦人夜

は妖婦」といったように、夜のみ

プレーをする。こんな趣味と実益

をかねた求人広告は如何でしょう

か。当方は三十六才の妻帯者。二

十八才、妻も同性の方を責めたり

一緒に責められることを望んでお

ります。皆様のご希望なりご意見

をお待ちしております。

(浜田八姓名在社VSS生)

予約をしてある。こうして列記すると、カメラ・ハントの種は、浜の真砂の様に尽きそうもない。だから人生は嬉しい。生きていてよ

かったとしみじみ思う。いずれ号を追って、彼女達との出来事を次々と発表して、行きたいと思いま



乱刃の中の女志士

六角京之介

女性の切腹をテーマにしたカラー写真です。槍がすまに囲まれた女志士が、進退きわまって自ら腹をかき切るという場面を、一人の

女性をモデルとして作成してみました。

最近女性切腹の記事や絵画写真の掲載が少なくて淋しく思っていましたので、他の寄稿家の投稿のきっかけの一助にでもなればと思

って、お送りしました。拙い作品ですが御批判賜れば幸いです。

「サロン散文」………保藤久人

「時」の想い —それぞれに—

◎人それぞれ………思いは異なる。

三月号本文は一人一作。此処暫らく続いた読者の意向が浸透したかのような、バラエティに富んだ内容で、こういう形態を、皆さんが望んでおられたのではないかとふと思った。その意味で、私も遠慮し、△落穂拾い▽は稿を改めることにして休むことにした。少し残念だったけれども——。

このところ、本格的なSM小説出でよ、という声盛ん。しかし序にいわして貰うなら、本格的に近いものを、僅か二十枚前後の原稿用紙にまとめていくことは大変な……というより、難儀な作業。余程の文才がないと出来ないことで小説多量を求めるならば、現在の頁数では本文は、僅か数篇、ということになりかねない。このことは三月号編集後記にあるとおりで編集部でも苦慮しておられる。増頁↓部数拡大↓値上↓条例圧迫。

ずい分と難問が山積してくる。

先ず今のところは「続く」ことが第一義ではないだろうか。(小説を……と、私自身も希っている。

しかし、当面する現実に対したとき、編集部宜しく、と依存するより他、方法がないように思うのだが——)

◎人それぞれ………好みも異なる。

実際に、そうでなければ人生の快味も失なわれてしまいそう。

A君は、吉永小百合が好きだという。B君は妖精のような加賀まりこの熱烈なファンだし、C夫人は、モーニングショウと睨みつけるのが日課で、D子さんは舟木一夫の声にウットリし、E嬢は、ブルジョアの演奏に熱狂的な情熱を示し、ごく自然に全身をゆすり始める。この辺りに、われわれ人間のバラエティがあり、そうでなければ困ったことになってしまいうような気がする。

吉永小百合といえば、元旦のTVでの馬上の英姿は見事だった。きくところでは、彼女は旧島津藩

の馬術指南役の直系だそう。そういう話題にウトイ私は始めて知って感心したものだ。手綱捌きの巧みさもその故なのか。彼女、三木鮎郎の質問に、馬上から答えている。

「とってもいい気持ち。何ともいえない」

「優越感」を覚え「えます」だって——。随分と味のある言葉で、思わずドキッとしたものだ。!

◎人それぞれ………選択も異なる。

ブラウン管に珍らしいカップルが登場した。お客さまとして招かれたのだったと思うが、二組の一卵性双生児。片方は男性で他方は女性。或る時、或る場所

で、男の一人が女の一人を認めて意気を感じ連鎖的に、兄は姉と、弟は妹と、忽ち二組が誕生したそう。いろいろ裏話もきいたが、うまい具合に興味も同じで、何となく意志も通じ合うという。

浣腸の幻想

室井亜砂路画



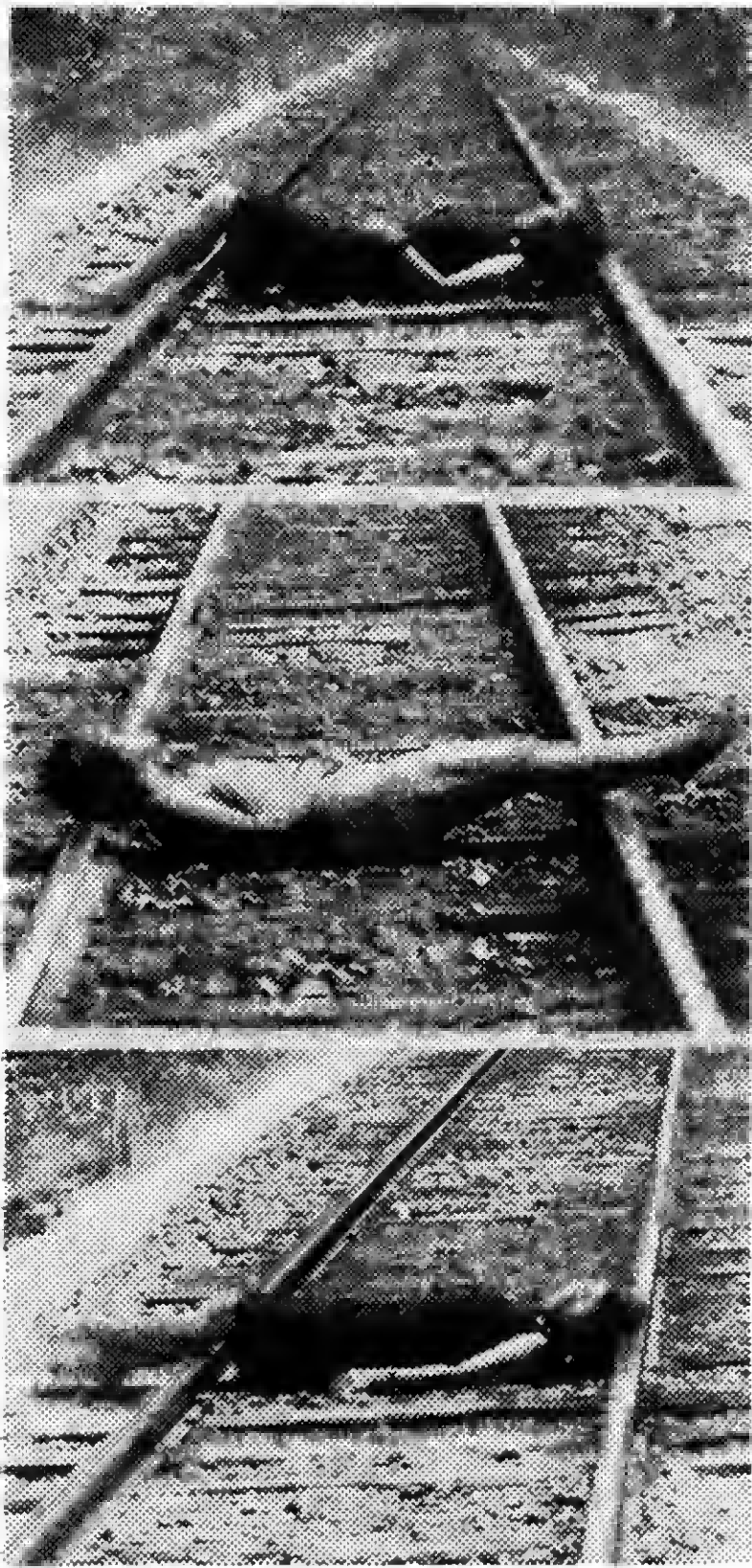


写真 鉄路に横たわる美女

モデル・大塚啓子
撮影・塚本鉄三

一人が虫垂炎になったら残り三人も次々と……。現在、同じ家に住んでおられて至極円満だということだが、私が拝見したところどちらが、どちらやら良く分らない。好みまで一緒だと聞かされると、何か起りそうな、少なくとも或る種のユーモアを感じたものだが、次の話題は、どういう風に子供が産まれるか、という点だそう

な。私は二組の相似カップルを拝見しつつ妖しい想いにしたったが――。
◎人それぞれ……言葉も心も異なる。
人それぞれという言葉も意味も何気ない普通のもので日頃は何とも思わないのに、時にふと、或はしみじみと思ひみることがある。誌上参加するようになって尚更そ

の感が強い。同一物を異角から見ると、それは当然の一般的な社会現象なのだが、誌上という、特異な限定された場所に集約されてみると、それぞれに……という言葉と意味が、ものの見事に生きてくるのを痛感する。
あくまで個人的な主義・主張なので、其処には「是」も「非」もない。何がある、と強いていうな

ら、生き人間が確在する……とでもいうか。その意味で自分を（主張を）大切にすると同程度に相手の存在をもまた、尊重しなければいけないように思う。
◎人それぞれ……と書くことは多いが、どうやら予定の紙数も尽きたので、この辺で――。

(41・1・23)

国道からそれて少しばかり歩いたところに、思いがけない鉄道の線路が山峡に長々と伸びていた。ピカピカに光った鉄路が初夏の陽に映えてまぶしい。そのとき、同好した大塚啓子さんが、突然、線路の上によこになるから写真を撮とってくれないか、というのだ。線路は単線であるし、見通しはあるので安全を見きわめて、私は彼女に合図をした。先ず洋服のまま次第に着衣を脱いで下着姿になりパンティ一枚になったとき数人のハイカーがやってきた。
物珍らしそうに寄ってくるので私は大塚さんを主体に彼等を背景に入れようとカメラを向けたところ、一斉に廻れ右をして背中を見せながら去っていた。

マニアの手帖

花田沙登子

私の飼育しているドレイ

どなたか、私の飼犬に
なりませんか？

＜縄を弄ぶ花田沙登子＞



私は二年前から一人の青年を奴隷として飼育しています。足舐めから始まって神酒授与に至るまでMプレイの一通りは、私の命令通りやれるように教育しましたが、彼はスタイリストの恥かしがり屋で、奔放であけ放しの私には、どうも物足りないのです。それで、M男性で私の飼犬になりたい希望者があつたら、初歩から仕込んでみたいのです。私は写

真でごらんの通りのオキヤンで美貌のグラマー。年令はご想像にまかせますが、奴隷の彼は、今でも二十才だと信じ込んでいます。でも、それより上だただけはいっておきます。私の美貌とスタミナの餌食になりたいM男性は、遠慮なく申し出なさい。私のグラマー写真、まだまだ沢山あるので拝ませてあげてもよろしい。本当は奴隷をお尻の

下に引き敷いて、こてんこてんにいじめている写真もあるのですが、恥かしがりの彼が尻込みするので私だけ発表します。

本誌は二年前から読んでいますが、誌上に現われたM男性は、空想にばかり走って、現実の女王様の御恵みに浴した幸福者は少いようですね。これからは私がドシドシいじめてあげるから、本当のサジステンというものが、どんなものであるかよくよく味あうがよいわ。でも、途中でネをあげた

って、宥してあげないわヨ。そんなこらえ性のない奴は、最初から志願しないこと。

大の男の自由を奪って、嫌だということや痛いことや、きたならしいことを、うんとしてやりたい私。ムチ打ったり顔をお尻で押しつぶしたり、いくらM男性でも、きつと、そのときは宥してほしいと思いますヨ。でも、あとで必ずよかった、もう一度女王様のお恵みを受けたいと思うようにしてあげますから、私に一旦とりつかれたら虜になってしまいます。それ



／花田沙登子のグラマーぶり／

でもよかったら、私は貴方をコヤシにして肥ります。

これからは、誌上にも、どんどん載せてもらいうつもりですが、グラビアが廃止だそうで残念です。分譲品としてでもよいから、全国のM男性の前に、私の美貌を誇りたいと思っております。

いずれ私の詳しい告白は誌上に書きたいと思っておりますが、志願者が多ければ多いほど、それらを材料にして、豊富な文章を綴りましょう。

「青木順子ショーについて」呼び掛け

岩木 一夫

青木順子ショーは、まだ当分の間、關西方面を巡回するとの由、我々順子ファンにとって誠に残念でなりません。いつ頃になったら關東方面へ巡業にこられるでしょう。か。小生は十年來の奇クのファンであります、何といつても青木順子ショー程私を引きつけたものはありません。我々マニアにとっては最高のものです。

奇ク二月号の「青木順子ショーについて」八九鬼頭佐渡氏Vよりの便りを拝見して、いても立ってもいられず筆をとった次第です。

小生も關東地域のショー劇場でしたら大体の所見て歩いておりませんが、未だかつて順子ショーのようない素晴しいショーを見た事は有りません。昨年暮に船橋の大宝劇場で上映された或るエロダクシオンプロによる「めす猫の宿」という愛欲アクシヨンドラマが割合サジスチックな場面を展開して、わずかながら私を喜ばせてくれました。又十二月の或る日、大宮市内でふと目についたのが川口劇場の

ストリップの看板でした。二つのポスターには猿ぐつわをかけられて荒縄で女体がくくられている絵でした。小生もしや青木順子ショーではと胸をときめかして川口劇場へ行ってみましたが、何の事もなく普通のストリップショーでがっかりして帰ってきました。

くねる女体、うなる鞭、そこにかもし出される桃源境、思っただけでもぞくぞく致します。なんとか、こういったショーが上演されないでしようか。青木順子ショーの中、小生のアイデアを取り入れて頂ければ幸いに存じます。

大正末期から昭和初期にかけてのうらぶれた旅廻りのサーカス団をバックに売られてきた若い娘を団長がブラジャーとパンティ一枚の姿にし、鞭でびしびし打ちながら苦しい一輪車の曲乗りを仕込まれます。この娘に順子さんが扮します。サーカス娘はヒイヒイうめきながら懸命に一輪車へ乗ろうとするのへ、そんななまくら芸でお客様が喜ぶと思うのかといって、順

子さんの尻を皮鞭で打ちすぎる団長（向井一也氏扮する）。尻に無数の鞭あとを残して氣を失った順子さんを団長が最後に愛撫するといったものです。そして当時のサーカス娘の哀愁を出してもらいたいと思います。

サーカス娘を順子さん、団長を向井一也氏といったふうにしてやれば、この種のファンは喜ぶこと間違いないと思います。如何でしょう辻村さん、たまにお会いすることのこと。この種のショーを願ひして下さいませんか。このようなサーカスものショーが両氏によって上演されるとなれば、

小生どこへでも飛んでいって必ず見ます。辻村さんより、よろしくお伝え下さい。關東でも川口、大宮、船橋、立川、川崎、鶴見、浜松ら、かなりきわどいショーもやっております。その他青木順子ショーを上演できそうな劇場が沢山あります。

最後に青木順子さん向井一也氏共に健康でいられますとともに關東地区にも巡業にこられてファンを喜ばせて下さい。お願い致します。奇クにおいては、今後とも青木順子さんについては、くわしく発表されんことを望む次第です。





夜乃探郎先生へ

山中冬子

奇誌二月号にて私は私の手記を題材にされた夜乃先生の「牝犬羞恥地獄」を読ませて頂きました。

いつものように、ご主人から奇誌を見せて頂いたのですが「これを読んでみる」といわれて、あの文章を読ませて頂いたとき、私は何とも表現できない、恥しいような、情けないような、それでいて少し嬉しいような気持ちにさせられました。体がふるえてさえないりました。特に、この△私▽が、犬の真似をしてチンチンをしたり、△片足上げてションした▽りする場面は、全く読むだけで、いつもの責めを受けているときより恥しさが増してきました。

「直腸鏡検査」など、あの通りのことはされておられません、似たようなお仕置を受けたことがありますので、そのときのことを思い出しました。でも、私は、夜乃先

生を恨めしく思っております。私はともかく、あの文章を読んだお手伝いさんや運転手さんは、本氣になって怒ってしまったました。特にくみ子さまは、ズベ公あがりで一層のことでした。いくらフィクションといっても、くみ子さまの身になっては怒るのが当り前かもしれません。実際、私は皆さんにいじめられ責められますが、時には同情もされ、鞭の傷なども親切に手当してもらったりしているので決して、皆が夜乃先生の書かれたような人達ではないのです。私は、ご主人様やくみ子さまに「結局、お前がへんな手記を書くからだ」などと叱られ（実際はご主人に書かされているのですが）私の体で償いをしなければなりません。いつもの通り、私はすぐさま着物を脱いで正座し、くみ子さまの前で平伏して、お許し

を乞いました。たちまち、くみ子さまの平手打ちが私の両頬にひびきました。こんな時、私は決して顔をそむけたりせず、打たれやすいようにしていません。打たれやすいと命じられています。顔をあげて、どんな打たれ方にも身をさらしてなければならぬのは、辛いことです。

ご主人が、「くみ子、今日は、冬に何をしても構わんよ、うんと痛めつけてやれ」といわれ、やがて私は、夕暮の庭先に引き出されました。凍えてしまいそうな寒さでした。私は冷たい庭土の上でカエルのまねをさせられました。足を奇妙な恰好に広げて、鳴声までするのです。その恰好でカエルのように飛べといわれるのですが、中々うまく出来るものではありません。

「ソレッ」という掛声と共に皮鞭がとんでまいり、お尻や背中、肉がひきさかれるような痛さを感じて、一生けん命、ひざに力を入れてはねようとしましたが、思うようにゆきませんでした。その後、鞭の傷にウイスキーやキンカンを塗られて、打たれるよりもひどい痛みに泣かされましたが、それでやっと、お仕置は許されました。

でも、その晩は、後手錠と足錠をかけられて廊下に放り出されましたので、一晩中、痛みと寒さで一睡もできず泣き明かしてしまいました。何だか、夜乃先生が恨めしく、先生のために、こんなに責められているような気がしてしまいました。

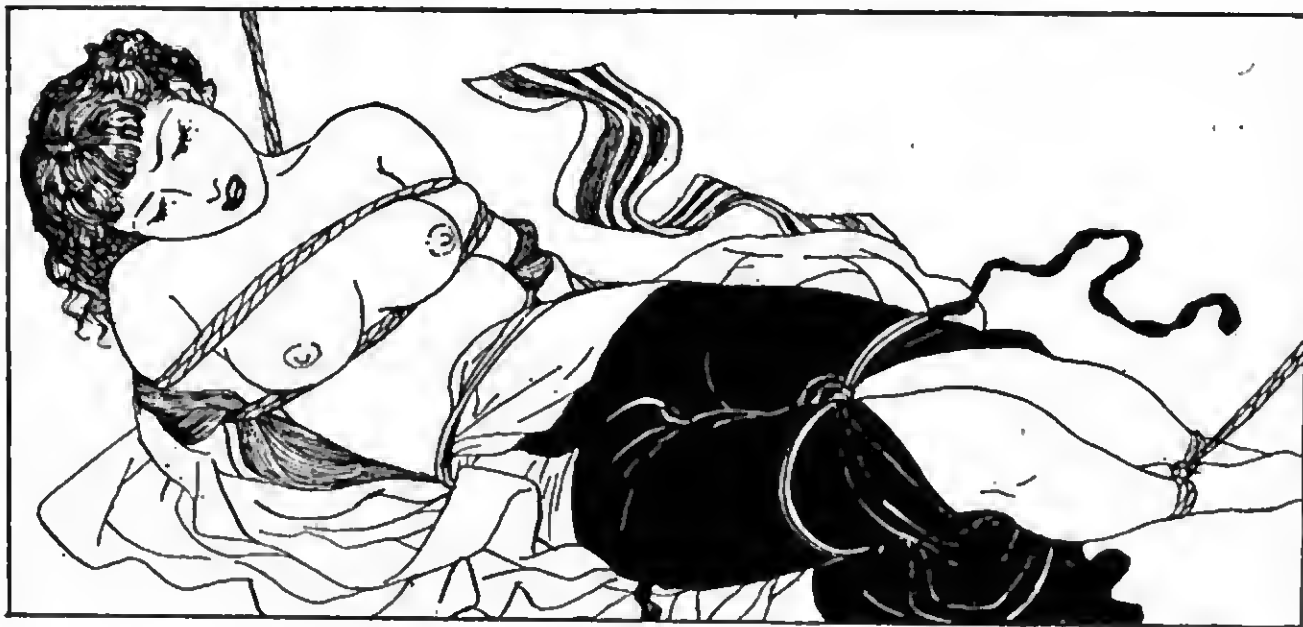
翌朝、珍らしく、くみ子さんが早く起きてこられて、みじめな姿でころがっている私の所へきて、やさしい言葉をかけて下さいました。「少しやりすぎたみたいね、痛かったでしょう」さすがに、気にして下さったかと思うと、また涙がこみ上げてきました。

「冷えたでしょう。オシッコしたいのなら、させてさげるわ」といわれ、足錠だけははずして下さいました。冷えきって、我慢できなくなっていたところでしたので助かりました。でも、いつもの例でトイレを使うことは許されませんので、後手錠のまま、自分でやっと雨戸を一枚あげ、庭にとび出して家の裏の方にじゃがみました。早朝の寒さの中で、後手錠のまま用を足さなければならぬのか、どんなに悲しいことでしょうか。でも誰にも見られていないだけが私にとって幸せなのです。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 41 年 4 月号

(1966年・4月号<第20巻第4号・通刊213号>)



本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

芳野眉美・辻村隆Ⅱ対談

「友あり遠方より来たる

亦愉しからず哉」

辻村 隆

場所 辻村隆宅 応接間

日時 一月十三日

(おそい朝食後のひととき)

(ガール・ハントしたユリコのネクタールをいただいたこと)

——早いもので、もう五日間も経ってしまっ
た。いよいよ帰りますか——

「五日間がまるで夢のようですよ。ボクの関西旅行の目的は、辻村さんのお蔭で十二分に果しちゃった。最初は辻村さんに逢って、いろいろ参考になるものを見せて頂いて、関西ストリップを見て、関西の旨いものを喰い歩いて、京都、奈良の仏を見て廻るだけだったんです。それが予想もしていなかったお土産が沢山あって、実のところ感激に間誤ついち

やっているんですよ」

——しかも、朝帰りのお土産までついた——
「そうなんです。昨夜のことなんか、全然予期していなかった収穫です。でも、辻村さんだって、結構うまくやってたじゃないですか。あのマスマとかいってた子、可愛いじゃない？ 約束出来ましたか？」——さあ、カメラ・ハントのネタになるかどうか、今夜逢って見ないと分らんですが、タネになるかも知れないとすると、私は案外貪^{どん}らんなんです。うまくゆけば書きますよ。それより、芳野さんの相手の子どうでした。うまくやったんでしょう——

「ユリコっていうんですがネ。まさか、あんなにたやすくノメるとは思ひもかけなかったですヨ。辻村さん、しきりにすすめるもんだ

から、あれから別れて彼女にサケのませちゃったんですよ。バー経営のボクのことでしょう。若い娘の、のみ易くて、酔っ払うカクテルはお手のものですヨネ。うまく注文してやったので、すっかり酔っ払っちゃって、意気投合しましたネ。ボクは大阪の盛り場で、辻村さんと別れて西も東も分らない。彼女にどこか知らないかって聞いたたら、上六ってところにスゴくかたまっているんですネ。あの手のホテルが……。どんどん案内してくれまじたヨ。ワリカシいける顔だし、若くて発刺とした子でしょう。大阪の少女はスゴイなと思った」

——私もまさかあんたが、そこまでいけるとは思わなかった、実の処——

「上六って何だと思ったら、上本町六丁目の



略称なんですね。大阪は略称の多いところですね。その手前の日本一が、日本橋一丁目だし、天六というのが天神橋六丁目、ウメシンといったら梅田新道だなんて、何が何だか始めてだとサッパリ分らない」

——そんな言葉は大阪に多いですよ。大阪人にはミナミといえはすぐ分るが、よその国の人ならミナミといったってピンとこない。つまり、千日前、道頓堀、戎橋、心斎橋辺りを引くくめてミナミなんです。キタというと梅田、曽根崎界限のことなんです。そんな

ことはまあいい、ユリコちゃんと、それでどうなったの？——

「ユリコがその一角の、かなりデラックスなホテルに、勝手知ったるごとくドンドン入って行くものだから、ボクはすっかり間誤っちゃって。どっちがハントしたのか分りやしない。ユリコに『よく知ってるんだネ、始めてじゃなさそうネ』ときいたら、一ぺんだけ連れて来て貰ったっていうんですネ。しかしね、若い男なら誰だって構やしないって子じゃないんです。チットもすれていないんですよネ。どんな心理なんかな」

——芳野さんがスゴくハンスサムだし、東京だっていうもんだから、一瞬惚れで一夜のアバンチュールを楽しむつもりだったんでしょ。きっと——
「でしようね多分。ボクもそう思いますよ。酔っ払っていて、大分理性を失っていたのかも知れないナ。ありきたりのセックスじゃハッスルしない

ボクでしょう。ひょっとすると、ノメるかも知れないって考えが、ムラムラッと湧いてきちゃって、ユリコにノマセロっていったんです——。何のイミか判らないものだから、最初はキョトンとしていた」

——相手も驚いた。というより、そりゃ分らないでしょうネ——

「だから、当然ボクが説明しなけりゃならんでしょう。でもネ、案外、あっさりしたものです。ノンだお口でキッスしちゃうやよ。歯を磨いてからにしてネといわれて参った」

——で、味は？——

「若い青々とした子のユリンはいいですネ。新鮮ですネ。いただと途端にシャッキリして、ユリコを可愛いくなくて抱きしめたくなっちゃった」

——朝まで一緒にいたの——

「いいえ、帰りましたよ、あの娘だけ。ボクは一人ポッチだし、何だか面倒くさくなっちゃって、一人でそのまま泊っちゃったけど——
——思いがけぬ収穫ってわけだネ。ただどすぐに逢ってホテルへ行って、そんなにうまくゆくもんかね。不思議だナ——

（関西ストリップのこと）

「聞きしに勝る露出振りですネ。すっかり気

をのまれちゃった。東京じゃトツても、ああはゆかないですネ」

——大阪だって、あそこまではダメなんですよ。でもネ一寸地方へ行くとかなりロコッなんですネ。N市は全市が観光都市でしょう。だから、観光客相手もあって、幾分大目に見ているんでしょう。しかしいくら正月興行とはいえ、入場料七五〇円は高いネ。数年前なら歌舞伎座の一等入場料金ですからネ——。

「ボクはちっとも高くないと思いましたネ。だって、特出し三人を含めて九人出ましたですが、九人共これすべてご開帳なら、一人当り八〇円ちよつとで見られた勘定でしょう。ヌードスタジオなんかに入つて、やきもきさせられちゃつて、チラリと見せてもらつて千円も払わねばならぬとすると、安いものですよ。全く」

「だけどあの時、芳野さん舞台のストリップ——と握手したと思つたら、千円札握らせただしよう。貰った女の方が吃驚していた。関西人間の私にはあの心理は分らないんだ。気に入ったといつたつて、ほんのゆきずりのストリップに気前よく祝儀を渡す気が——」

「第一回の昼過ぎだったので、客の入りも少なくてカブリつきへ座りましたが、ボクは嬉

しくなつちゃうと無駄づかいしたくなる癖があるんですネ。辻村さんだって随分ヤニ下つていたですよ。だけど千円の効めはあつたでしょう。舞台の袖のカーテンの破れ穴から覗いて、あの人がワケですね。それから出てくる女の子のサービスのいいことといったら。どの子もみなボク達の前でパツと派手にやってくれるもんだから、他のお客さんに悪いと思つた」

——ストリップは永い間見なかったが、以前にくらべて、女の子自体の素質もよくなつたし、踊りだつてマシだし、それに正月興行のせいか衣裳にもかなり金をかけている。あの特出しの中では「^{コトブキエイク}寿栄子」なんて人、とてもよかつたんじゃない？」

「肌も荒れていないし、素質もありますね。第一若いものですものネ。ボクは京都の千中ミュージックに青木順子がかかっているときいていたもんだから、少し足伸ばしたかったが、とうとうゆけず終いでしたネ」

——去年の夏、私の家を訪問するようになっていたのだが、彼女より速達もらつて行けないうつて返事でガッカリしましてネ。それに彼女達、何だか人目を避けるようにしているんですね。あまり尻を追いかけると、反っ

て迷惑そうなんです。箕田氏や私としても、SMの人達だから、同好の士を売出したく考えて、随分あれこれいつて見たが結局ダメでした。私は彼等のプライベイトの事情を知っているだけに何も書けない。痛し搔ゆしですよ——

「辻村さんとの、最初の交遊が、ボクが貴方に出した、青木順子後援会の申込みだった。とすると、青木順子さんは、ボクと貴方を結んでくれた恩人つてわけですナ」

——向井一也さんと青木順子さんと私との、三人の四帖半プレイの、あの強烈な味は、恐らく私も一生忘れられないと思いますよ。それだけに、あの人達をソツとしておいてあげて、遠くからお二人の幸福を見守つてあげていたい気持なんです——

「青木順子さんのをノメたら、ボクの最高だな。辻村さんの口ききなら可能性があるんですがね」

——実現させてあげたいね。しかしアンタがそれを書く、われもわれもと希望者があらわれて彼女も困るでしょう——

「書きたいビッグニュースだし、書けばそりゃさぞかしうるさいことでしょう。まあ、そのことは辻村さんにお任せしますよ」



(ネクタールということ)

——ドイツ語でハルン、英語でならユリンですが、ネクタールとか神酒なんてことは一体いつ頃からいい出したんですか?——

「私が奇クに最初に投稿したのが、『硝子便所』でしたが、未だ高校時代だったから、未恐ろしき少年でしたネ。とも角ノム話一辺倒

で、無論それに関連したようなことばかり書いていたのですが、あの頃『家畜人ヤプー』を書いておられた沼正三氏が、誌上で私にネクタールという立派な言葉を送って下さったのです。沼さんは随分博学の人でしたネ。何処の言葉かは私も不勉強でよく分らないんですヨ。沼氏の言によると、神酒というギリシヤカラテン語らしいが、それ以来、皆さんネクタールという言葉を使われ、専らハルンに使われるようになったんです。」

——神酒と書くと、おみきと思えて仕方ないんですな。私も奇譚三十九夜物語で、この神酒に近い効めを現わす、一少女のハルンの万病に効くとかいった物語を、中国の古典を探し出して書いたことありますが、本当にそんなことあるものでしょうかネ——

「書いたご本人がボクに訊ねるのはオカしい話ですね。でもヤケドをすると、すぐハルンをその個所にかければ、痛みが薄らぎ効果あるといいますが、これは含有するアンモニアのせいでしょう。若いエネルギーの豊富な、昔の軍人の便所から、新鮮なハルンを集めてきて、これからホルモンを抽出したという話もききましたが、恐らく本当でしょう」

——軍隊で思い出したが、私も四年近く軍隊

にとられ、随分イヤなめにあって来たのですが、最後の南方の孤島で、次々戦友が栄養失調で死んでいったのですヨ。あのストリップを見ていて、私はつくづく思いましたよ。こんな面白いものも見ることが出来なくて、ムザムザ死んでいった英霊は本当に気の毒だったネ。軍国主義の当時は勿論、戦前は到底想像も出来なかったショウですからね。近頃大分戦死者英霊に対する考えも変わって来たけどもっともっとわれわれは、戦死者英霊の気の毒さを察してあげなければいけないと思う——

「私は戦後派で、辻村さんのように戦死者の気の毒さという点はピンと来ませんが、そのお考えには共鳴出来ますネ。今の時代のような、こんな愉しさを知らずに死んでいった人は気の毒だと思えますよ」

——ところで、ネクタール戴いて、体の調子どうもないの? 本当はそれが一番ききたかったんだけど——

「この通りピンピンしていますから、何ともないんでしょう。でも一度体内から放出したものを、コップなり瓶にうけて、それをノメといわれるとノメませんね。じかに口移しに受けて呑むその刹那の感触、それが醍醐味なんですよ」

——奇クで見ると、芳野眉美がノムからとい
って、試して見る人もいるが——

「ばかげてますね。内心嫌悪を感じたり、ま
た人がやるから、そいじゃ自分も一度試しに
やってみようなんて、そんな性質のものじゃ
ないんです。ユリン奉戴者は真似や酔興で出
来るものじゃない。好きだからノムのです」

——じゃあ私はよそう。小田実の文じゃない
が、ことSMに関するのなら何でもしてや
ろうと思っている私だが、これはよし——
「そりゃおやめなさい。辻村さんはその方
の趣味のない人だから……」

（箕田編集長の招待をうけたこと）

「あれは天王寺の茶臼山『本陣』っていう国
際観光旅館なんですネ。一寸凝っていたじゃ
ありませんか」

——山原清子後援会の第一回座談会はアソコ
でした。芳野さんは、過去十数年奇クに書い
ておられて、箕田氏と逢うのは今度が最初だ
なんて信じられませんネ。お互いに大層改ま
って挨拶したじゃないの——

「もっと神経質そうな人かと思ったら、逢っ
て見て私の想像と、スゴく違う人なので驚き
ました。でも、とつてももてなして頂いて恐
縮でしたよ。あの時箕田さんへんなこと仰有



って料理注文したでしょう。テッチリとか何
とか、あれフグじゃないですか」

——フグの水だきが関西ではテッチリなん
です。フグは鉄砲のようにアタると死ぬとい
うところから、フグを鉄砲っていうんです。そ
の鉄砲のテツをとってテッチリ。だからフグ
の刺身が、テツのサシミで「テツサ」って妙

な言葉になるんですね——

「しかし、仲居さんが矢絰にカツラをつけて
お酌をしてくれて、ボク達は大名風に金蘭の
座布団に脇息、そして陣羽織というイデタチ
は、いかにも関西好みの商法がうかがわれて
面白いですね。ボク達三人の話をきいていて
仲居さんが度胆をヌカれていましたよ。縛っ
たり、ノンだり、虐じめたりの話ばかりです
からネ」

——一種の感覚の麻痺なんですネ。人がき
いたら気狂いのような話を、箕田氏と私はいつ
も平然とやるもんだから、そりゃ始めて列席
した人ならビックリしますよネ——

「夜乃探郎氏なんか、よくボクを材料に使う
んですが、箕田氏の意見をきいたら、功罪相
半ばしているんですネ。夜乃氏がいろいろ書
き立ててくれるもんだから、他の人は一体ど
んなことを書いているんだろうと思って、反
ってボクのものを読んでくれるんだナ。その
点彼に感謝しないといけないですネ。しかし
才人惜しむらくは少し、才に溺れて書き過ぎ
たって感じですね。辻村さんや、ボクぐら
いの程度の遅々たる書き振りがいたら、あの
人のもあれで結構いいんですよ」

——箕田さんも、その点反省されていました

が、とも角、ツーといえばカーと書いてくるらしいんです。私など散々尻を叩かれなくて書けないのに、よくあれだけ書く暇があるなあと感じるんです。ドンドン原稿送ってくるものだから、つい箕田さんも情に負けて、一つの号に沢山のせ過ぎちゃった。その結果一部の人からはわれわれの雑誌を一部の人間が壟断するのお叱りだったらしいよ——

「でも箕田さんは案外公平ですネ。編集部が掲載の実権を握っているんだから、もし内容で不都合とか、酷評とかあればのせなけりゃいいんだと思うんです。それを雑誌の公開誌上で、賛否交々、ドンドン論議させているんだから、案外お人が悪い」

——夜乃探郎、久我庄一、木戸川健、橘行司子等一連の人は、確かに沈滞した奇クに、一風変った新鮮味を盛ってくれましたよ。今迄はグラビアの愉しさだけで買っていた人も、ああ、バカスカ書き立てると、一度よんで見たくなりますものネ。しかし箕田氏も奇クの輿論を気にし出したのか、夜乃氏、久我氏等の原稿は大分控え目にして、順次掲載してゆくといいましたネ——

「あの旺盛な筆力には完全にカブトを脱ぎますね。しかし辻村さんのカメラ・ハントには

敬服してますよ。次々とうまい工合に、あんなにカメラ・ハントの対象があるもんだなあ——」

——撮ることは事実です。しかしその端緒はいわば似たりよったりが本当です。しかしそれでは同巧異曲になってしまいます。だからある友達の質問に、こんなことをいいましたよ。カメラ・ハントは皆フィクションかいつてきくから、いや本当もあるって。じゃあ皆本当かいつてきかれたら、フィクションも混っているって。そうでしょう、アンタの「濡れにぞ濡れし」だって全部ホントじゃないでしょう？——

「その通りです。真実と虚偽が、混然と入り交って、一つのハーモニイをつくりあげるのでしょうネ。ボクなんか、辻村さんほどネタがないもの……」

——いやあ、ごけんそん——。

（伊吹真砂子のノンだこと）

「最近、伊吹真砂子に京都で逢われて、カメラ・ハントに「断層の女」って題で書いたのは本当だったんですね？」

——あれは本当。出逢いの個所は一寸フィクションだけど。読めば判るですよ。偶然過ぎる——

「しかし、伊吹さんを紹介して載いて、スゴく嬉しかった。あんまり変らないじゃありませんか」

——私も不思議に思うくらいです。だから三人でホテルに行った時も、アンタ最初は伊吹だと信じなかった。正真正銘の、一昔前ならした彼女ですよ。しかし意外だったなあ、アンタがノムこと一辺倒じゃなくて、やはりSMのプレイに興味もっていたことが……——

「そりゃ幾ら何でも、いきなり会ってノマセろってはいえませんか。それに辻村さんのプレイ振りを拝見することにも興味あったし」

——よくやりますよ、あの人は——。ちっともイヤな顔をしない。近頃珍らしいんじゃないかな。芳野さんが是非というもんだからクリスタール試みたけど、あの激しい放出迄はちょっとやそつとでは誰も見せやしない——

「絵具をわざわざ買って来て、お風呂の湯の温水に絵具をとかして感じ出してくれるなんて、辻村さんも随分サービス精神オーセイだとつくづく感謝ですよ。でもいよいよという段になって、伊吹さんはボクにノマセるシーンを、貴方がしきりに、そのシャッターチャンスをねらっているものだから、結局緊張し過ぎてどうしても出ない。あぐくの果てに、

二人でお風呂に入って、悪いけど辻村さんに縛って貰って、やっと頂戴しました。しかし伊吹さんのあの献身的な努力には頭が下りました」

——伊吹さんが、クリスタールO・Kということとは収穫でしたよ。今迄、ポーズだけのものは随分とったが、実際にイザとなると、ほんの僅かの人しか、実施出来なかったんですよ——

「縛っていても、クリスタールしていても、辻村さんの場合、つまりどんなプレイにでも実に愉しそうにやっていますネ」

——誰だって愉しいんじゃないですか。好きなことをしているんだもの。クリスタールの話を大阪のある人に喋べたら、彼から伊吹さんへ対して、真剣に結婚の仲介を頼まれて困まっているんです。その人は、クリスタールなしでは夫婦生活出来ない人なんです。少し厄介だと思うけど、そんな人もいますよ、世の中には——

(魔子のこと)

「辻村さんが仰有った魔子も架空じゃなかったですネ。あんまりスゴい美人なので、すっかり驚きましたよ。あの美人の口から、Sがどうの、奴隷にしてあげるの、ハルンがど

うのと紅い口から喋べられると、まったく世の中はすごい分広いなアと思ったですよ」

——でも約束できてよかったじゃない——

「ええ、お蔭様で……。何しろ慌ただしいひとときでしょう。プレイする間なんてないから、内心困ったなアと思っていたら、ボクの心をチャンと見抜いて、来月雑誌社の用件をかねて東京へ出てきてくれるそうです。スゴく愉しみにしていますよ」

——見識は高いが、それだけに女王振りは板についたもんだよ。私も彼女にかかって、すっかりM扱いにされちゃったが、甘美なる降服って感じだね。芳野さんもきっとMにされてしまうね。始めはお高く止ってイヤな女だと思っていたが、あれが彼女の持味なんだ。一旦女王扱いすると、男心をくすぐり愉ませてくれる。それでいて家がいいからガツガツしない。最初に私がカメラ・ハントの対象として、縛ろうとしたのが間違いだっただな。男への屈服がプライド上許さないんだ。

男を屈服させるテクニックは、その代り今迄の過去のどの女性よりも心得ているネ——
「たしかに会って判りましたが、Mの人達にとっては垂涎ものでしょうネ。しかし辻村さんは約束は堅いですネ。あれだけ魔子の緊縛

を撮っていながら、彼女との約束があるから発表しないところなど大したもんです」

——あれだけの美女だもの、うずうずしているんだが、彼女、奇クを読んでいるんでネ。約束を破ったといわれるのが、私にとって一番つらい——

「魔子との東京でのデートの模様、書いたっていいんでしょう」

——どうぞどうぞ。文章だけならO・Kなんだ——

(増田夫婦のこと)

——増田夫妻に逢った感じはどうでした——
「カメラ・ハントのフォトははっきりしないから、増田みゆきさんがどんな人かは、あまり予備知識なかったのですが、逢って見て、その第一印象は、スゴく可愛い人だと思いましたよ。結婚して僅か一年そこそこで、よくあそこまでプレイ出来るようになったものだツクズク羨やましかったですネ」

——それに普段は、とっても仲がいいでしょう。私もいつも当てられ通しなんですよ、みゆきさんの鼻孔の穴を大分拡大したらいいですネ——

「ボクは、カメラ・ハントの『鼻責版夫婦善哉』を読んで、みゆきさんの鼻穴のあいいてい

るのは嘘だと思っていたんですが、本当だったんですね。それにしても、鼻責めの拡張したものばかりで、鼻穴にいろいろと貫通させたものが少ないですネ」

——最初の時、それを撮ったけど、箕田さんがフोटをのせなかったんですよ。フोटを彼はあまり気にし過ぎますね。数日前電話した時、来月号のカメラ・ハントの例の伊吹真砂子を書いた「断層の女」ね。あれにも、梨花と伊吹との二人のプレイ振りを、わざわざ伊吹から借りて送ったのにオミットしてしまったらしい。読者へのサービスのつもりで、梨花を今一度と思って折角送ったのに、これは残念ですよ。——

「増田夫婦が、いろいろアルバムを見せてくれましたが、実際、素晴らしいものがありますネ。増田さんが、これからみゆきさん相手にSMの相互プレイをとって行くというのですが、季節季節の歳時記的なものを取り入れるのは、プレイとしても面白い試みですネ。辻村さん、しきりに書けと奨めていらっしゃった。正月の檻の前の重ね餅の鼻責めなんか、構想も愉快だし、みゆきさんもムコさんを虐じめてハツラツとしている」

——何とか書く気になったらしいですよ。増

田喜代司の鼻責めシリーズで、短くてもいいからドンドン書けばいいって奨めましたよ。少しヒントをいっておいだから、きつと書くでしょう——

「いわば典型的な、夫婦プレイなんですからネ。私はみゆきさんのを無精にノミたくなつたが、旦那さんの眼の前では、とうとういい出せなかった」

——理解のある人だから大丈夫でしょう。まあ、そう次々とノムことばかり考えたって、そいつはいきなり無理かも知れない。もし時間あれば、プレイしたっていいっていいけど、京都からの帰り途中で、もう午後十時前でしよう。あんな時間からは一寸無理だし、増田夫妻は今回のことにしときましようや——

「あの日は、石庭、苔寺と行って、魔子に逢って、増田夫妻に逢って、実に盛沢山でしたネ。流石にボクもクタクタになっちゃった」

（古き仏のことども）

「辻村さんと出掛けた京都の竜安寺の石庭、西芳寺の苔庭はよかったですよ。アブの感覚がすっかり片隅に押しやられて、あの変哲もない禅寺のよさにすっかり打たれてしまいうんですネ」

——竜安寺の湯どーふはおいしかったネ——

「あの淡泊の味は、京の味ですネ。あれなら荒れたボクの胃腸でもいくらでも入ります」

——奈良の方は雨で大変だったでしょう——

「雨だからなおさらよかったと思います。西の京駅前の軽食堂に荷物を預けて、カメラと傘だけの自由の姿で歩き廻りました。薬師寺が恰度秘仏開扉の時期で幸運でした。一二〇〇年前の吉祥天女を見られただけでも、雨の中をわざわざ来た甲斐がありました。それに日光、月光ボサツの偉大さにも驚き、谷崎の「フウテン老人」になる仏足石も拝見して大収穫でしたヨ。雨の唐招提寺はボクたった一人。傘をさして広々した金堂、講堂を歩けるなんて夢のようでしたヨ——晴れた日に、もう一度ぜひ行って見たいですよ」

——ネクタールに感激し、プレイに歓び、そして古仏に魅かれる。一見して違う世界であっても、それが一つの頭脳に同居しているのが、われわれ人間なんですネ。しかし有意義でホントによかった。帰りも飛行機で——

「ええ、そのつもりです。こうして辻村さんと話していて、三、四時間後にはもう東京に近いものですよ。来る気になれば」

——じゃあ、くれぐれもお元気でネ。また逢う日まで、さようなら……——



のおと・あと・らんだむ (三)

千草 忠 夫

六、SMにおける

美とは何か？

奇クの評論を読んでいると、よく「美」という言葉に出会う。例えば、

「『花と蛇』が小説か、読物かという問題はそこに美があるか、どうかできまるものと考えられる」(十一月号、久我庄一氏「文学的悪讃美論」)

「江戸川乱歩氏はSMプレイなどは、しなかっただろうが、空想による耽美的なSMマニ

アではなかったらうか」(十一月号、久我庄一氏「江戸川乱歩の影の世界」)

「近代感覚によるSMは、嘗つての定義的サジズム乃至マゾヒズムに比較し、その思想・心理・感覚、凡ゆる面で異質的進歩発展を遂げ、人間の心の中に、美的要素を含みつつ健全に育っていると言つては可笑しからうか」(十二月号、保藤久人氏「エス・アンド・エム」)

「何故、乱調に美が感じられるのか。それこそSMの本質である。木戸川健氏が、とりわ

け、活字体的な、ポスター的な、ドレミファ的な、女の子を見ると、ムラムラしてくるのは、乱調させて、草書体の美を、モドレの美を、不協和音の美を、見出したい欲求の為である」(十二月号、木戸川健氏「木戸川健氏の耽美的生活」)

「こう考えてくると、コプロ趣味もそうだが神酒党とは、そこに△美▽が感じなければ成立しないと言ふことになるようだ。だから、実感論者でもありうる」(一月号、夜乃探郎氏「五彩の虹の水玉はしお辛かった!」)等々。

私はかねがね、これらの論文を読んで、そこに用いられている「美」という言葉が、どんな意味で用いられているのか考えて見たいものだと考えていたのだが、二月号で夜乃探郎氏が「珍学的善讃美論」を発表され、その中で次のように述べられているのを見て、筆を取る気になった。即ち、

「女を責めることは△美▽である。それをなめるのはたまらなくスリルあり、よい気持である。スケベイ(ワイセツ)という言葉はマニアの中では通用しない。もし△花と蛇▽が小説として△美▽があるなら△美▽は、昔から悪ではないことになっている。ワイセツ

でもない。芸術として評される。△文学に悪を▽でなく△文学の悪は善である▽善を讃美しようとしてシャレるべきではないか」(傍点筆者)

これらの論文を読んで共通に感じることが美という言葉の持つ意味を充分に考え、その場所に美という言葉を持ち出すことの可否を十分吟味した上で使用しているのだろうか、という疑問である。私の誤解かもしれないが「美」があたかもデウス・エクス・マキナのように用いられているような感じがしてならない。「美」さえかつぎ出せば、すべてが一挙に解決されるといった安易な気持ちで、そこに感じられるような気がしてならない。私はあらためて問いたい。SM的嗜好における美とは何か? と。

いったい、我々の求めているのは「美」なのであるか? 夜乃氏は「女を責めることは△美▽である」と言っておられるが、この表現はまことにアイマイである。私の解釈では「女を責めるのは美の追求のためである」ということになるが果して正しいかどうか。若し正しいとすれば、夜乃氏の考えは間違っている。女を責めるのは、美の追求などというもっともらしいことではなくて、エロチック

な満足を得る為である。

人はエロチックな欲求を満足させる為にSM的行為を行なう。これは私には動かすことのできない真実のように思われる。そして、その行為の結果得られるのは、快感による満足である。この行為の際、人は結果として得られる快感を十分なものとする為に、ひとつの条件を常に求める。その条件が美である。同じ女を責めるにしても、醜女よりも美女が良いのは当然の事である。だからといって、美女探しにうきみをやつして、この世を終るバカはない。美はあくまでも条件であって、目的ではない。

しかし、今一度ふり返って夜乃氏の△美▽なるものが、女を責めるといふ行為の結果得られる快感を指すものならば、それはそれでうなずけない事はない。快感は、その感覚的な新親性から、容易に美感と置き換えられるからである。「快美」といふ言葉があることでも、それが知れよう。

だが、それでもなお、私はすなおに前に進むことができない。

女を責める、というとき、その行為は常に相手(女)の存在を予想している。とすれば我々の「責める」といふ行為は倫理的なもの

とならざるを得ない。責めることに限らず、行為——他者の存在を予定した行為——は、常に倫理的な問題を内包しているのである。その事を考えた場合、我々は、ただ「美の追求」とだけ言ってすましている事はできなくなりはないか? その行為の善悪という問題がからんで来はしまいか?

この行為が夫婦間とか両者の相互理解の上に行なわれる場合は、さして大きな問題とはなりえないかもしれないが、それでもそのような行為を、行なう自己の内面的な問題は残る。それでもなお、「美の追求」という簡単なことだけで、すましてしまうことができるものであろうか? この問題をウヤムヤにごまかすために、自己の行為そのものを美化しようとするために、デウス・エクス・マキナとして「美」をかつぎ出すというようなことが、果してないであろうか?

「耽美」とか、「耽美派」とかいふ言葉がある。この言葉を、人はどのように解しているだろうか? 世俗をはなれて自己の趣味に耽溺すること、並びにそのような通人めいた人、というように解している人が多いのではなからうか? 若しそうなら、そんな人は真の耽美派という言葉に値しない。それは単に審美

家と称されるべきであろう。

耽美とは、そのようなスタチックなものではなくて、もっとダイナミックなもの、言いかえれば脱俗的なものではなくて、反俗的なものでなくてはならない。そうでなくては、そこに美の思想が生まれる筈がない。

美とは非倫理的な概念である。その世界は倫理的な世界と次元を異にしている。一方、われわれの行為は常に倫理的な世界に束縛されている。そこでいま、われわれが感覚的な美を行為の上で追求していった場合、ある地点でどうしても倫理的な枠、つまり社会的規範を越えざるを得なくなる。即ち、快樂原則と現実原則との衝突が必然的に招来されるのである。当然そこに、美の追求者は、世の指弾を覚悟しなければならない。谷崎潤一郎が江戸川乱歩が、世の道徳家から、どのような批評を受けたかは知る通りである。現に、奇クも同じような性質の弾圧にあっている。

だが、それだけならば人はあるいは耐えてゆけるかもしれない。世捨て人となつて、自己の世界に引きこもることも可能であるかも知れない。奇クの論調に見られる弱々しさ、世間のお眼こほしを願っているような口調もあるいは、こういったことのあらわれかも知

れない。しかし、それだけではすまない問題が、その人の内部に起る。どうしても対決してなくてはならない重大な問題が、その人をとらえる。

人が感覚的美のみを手がかりとして行動するときその人の倫理感は動揺し変化させられる。その人の面前で世界は従来と全く異なつた相貌を呈してくる。あれほど強固と思われた自我すらも変質して、その人は全くの異邦人として、この世界に立たねばならなくなる。

人はこのような不安、恐怖にどうしたら耐えることができるだろうか？ここに美を追求する者が、対決しなければならぬ問題がある。自己の行為を美化するだけではすましておれない根本的な問題がある。

「われわれのは、そんな深刻なものではなくて、たんなるプレイにすぎない」と言う人もあるかも知れない。それなら、美とか耽美とかいうおおげさな言葉を用いないがよい。われわれは濡れ手に粟を掴むように、美を獲得することはできないのだ。それを得るためには、われわれは自己の存在を賭けねばならない。少なくとも、それだけの精神的緊張と決意が必要なのである。

ドストエフスキーは、『カラマーゾフの兄

弟』の中で、ドミートリイに次のような言葉を言わせている。

「美——美という奴は恐ろしい怖^{おっ}かないもんだよ！つまり、杓子定規に決めることが出来ないから、それで恐ろしいのだ。なぜって、神様は人間に謎ばかりかけていらっしやるもんなあ。美の中では両方の岸が一つに出会って、すべての矛盾が一緒に住んでいるのだ。

(中略) ええ畜生、何が何だか、分りゃしない。本当に！理性の目で汚辱と見えるものが感情の目には、立派な美と見えるんだからなあ。一体悪業の中に美があるのかしらん？とここで、お前は信じないだろうが、大多数の人間にとっては、まったく悪業の中に美が潜んでいるのだ——お前はこの秘密を知ってたかい？美は恐ろしいばかりでなく神秘なのだ。これが俺には怖^{おっ}かない。いわば悪魔と神の戦いだ、そしてその戦場が人間の心なのだ」

「美」を論ずる者は、少なくとも「美とは怖^{おっ}かないものだ」という認識を持った上でなくては安易と評されても致し方ないであろう。

七、「エロスの涙」

『エロスの涙』が日本で出版されてから、す

でに一年以上もたっているから、すでにその内容は奇ク誌上に紹介されているかもしれない。とすれば、ここで私が再び取り上げるのは、蛇足ということになるが、私なりに本書を紹介してみたいという衝動をおさえ切れず筆を取った。

著者のジョルジュ・バタイユは、フランスの哲学者ということになっているが、渋沢竜彦氏の紹介によると「一九二三年から一九四二年まで、じつに二十年間もパリ国立図書館にまじめに勤めていた男」で、それから胸をわずらって図書館をやめ、しばらく田舎で静養した後、「一九四九年以後には、ふたたびカルパントラ図書館、次いでオルレアン図書館の館長」になり、最近亡くなったという。

バタイユが哲学者として、どの系統に入るものか、私は全く不案内だが、日本で翻訳の出ている『文学と悪』によると、実存主義的な色彩が濃いようである。又、渋沢氏によればアポリネール、モオリス・エーヌとならんで「二十世紀のエロティシズムの探求者」とされている。バタイユの著作が最初に日本に紹介されたのは、その主著である「エロチシズム」（昭和三十四年ダヴィッド社）ではな

いかと思うが、「エロスの涙」は「エロチシズム」の美術版といえる内容を持っている。即ち、人間の根元的な衝動の一つであるエロチシズムが美術の世界において、どのような形で表現されて来たかを、数々の作品を通じて解いているのである。「エロスの涙」の原著がフランスで発禁の厄にあったというのもおそらく挿入された（挿画の方が文よりもはるかに多くのページを占めているのだが）絵画の複製写真の故ではなかったかと推測される。それほど本書に挿入してある絵画の数々は、普通の美術書では見られない珍品ばかりなのである。（もっとも、本書がエロチシズムの立場から集めた画集だから、当然のことなのだが）

私がここに紹介しようというのはバタイユの思想ではなくて、その絵なのである。文明が原始時代から今日まで発展してくる間に、人類は現実原則の要求に従って、もろもろの衝動の抑圧をよぎなくされて来た。美術にあっては同様に、人間の心に不安と動揺を呼びさますような、どこか『過剰』なものを秘めたものは、真の調和を持って構成された正統的な『傑作』の枠から除外され、美術館の奥深くしまいこまれる結果をまねいた。過度にエロチックなもの、グロテスクなもの

などがそれである。

バタイユは、それら人間の本源的な衝動に動かされて制作された絵画の数々を、たんに掘りおこして見せてくれる。かつては狂気とさえ言われた印象派の絵が、現代美術の源流となったように、バタイユは、それら不当に無視されてきた作品の復権を叫ぶのである。最近の美術界で、ドイツルネッサンスの美術（中でもボッシュ）やマニエリズムの美術の再評価が盛んなのは、このことと無縁ではない。

さて、むずかしい話はこれくらいにして、内容の紹介に移るが、ざっと通覧して印象に残るのは、残酷とグロテスクということである。エロチックな印象が薄いのは意外であつた。もっとも、この残酷もグロテスクもすべてエロチックなものに結びついていることは言うまでもないので、エロチックなものが直接的に表現されたものが少ないという意味である。エロチシズムと残酷——この結びつきをバタイユは追求したかったのかもしれないし抑圧されたエロチシズムの表現は残酷味を強くするともいえる。

とにかく、生首派の人に喜ばれそうな作品が沢山ある。但し、首を切られているのは、

メドゥーサの首をのぞいて、すべて男性であることを断っておかねばならない。となるとこれはM派の男性諸氏に喜ばれる絵ということになるのかも知れない。

『ユデトとホロフェルネス』と題する絵が数枚ある。どんな物語なのかは知らないが、ユデトという美女がホロフェルネスのひげ面首を掴んでいる図である。同じ図柄のものとして、周知の『ヨハネとサロメ』がある。これもかなりある。中でも私を戦慄させたのは、(ことわっておくが、私はS派である) 十七

世紀フランドルの無名作家の筆になるそれである。当時の貴女の服装に美々しく着飾った、可憐ともいえる表情のサロメが、うらめしげに眼をつむったヨハネの首をのせた大皿を捧げ持っている図である。サロメの美少女ともいえる無邪気な面立ちと、おどろおどろした生首との対照が、ゾクゾクするような妖しいエロチズムを感じさせる。

生首の中の圧巻は何といっても、ルーベンス描くところの『メドゥーサ』であろう。その髪の毛の一本一本が蛇に変じて、血糊の中に転がっている首の上を無数にはいまわり、首の切り口にわいて出たかと思われるうじ虫がフッフツと血をなめている。首の周囲にはト

カゲがサソリがクモが群がっている。見るだけで、なまぐさい風が吹きつけてくるような気分させられる凄惨とも妖美ともつかない絵である。なぜルーベンスほどの巨匠がこのような絵を描いたか。その秘密はおそらく本誌の読者には不安であろう。

巨匠といえば、レンブラントの描く性交図(といっても、そのものズバリのもの想像してはならない)と、修道女が道ばたにしゃがんで大小便をやらかしているユーモラスなエッチングもある。

その他の眼立つ題材としては「レダ」(獣姦)「ロトとその娘たち」(父娘姦)「ゆあみするスザンナ」(覗視)「アダムとイブ」「愛と死」(美女と死神)等々がある。これらギリシャ神話や聖書の中の挿話をかりて、画家たちが何を表現しようとしたかは、論ずるまでもなく、見る者の胸にじかに迫ってくる。

そして、すべての最後に、中国の清朝における『刻み切りの刑』の写真が数葉、それまでの絵で高ぶっていた情感にとどめを刺すように現れる。その写真に見られる、処刑される男(残念ながら男)の、むしろ恍惚とした表情こそ、バタイユがこの書物の結論として

主張しようとする、エロチズムと死との近親性の証明に外ならない。

『エロスの涙』は一種の画集である。しかしそこら辺の美術書とことなり、見終った後に残るのは、美に洗われたすがすがしい感情なんかではなくて、人間衝動の持つ暗くどろどろしたものに對する恐怖とやりきれなさ、それに不思議な恍惚感などである。不完全な単色の図版のせいもあるだろうが、『美』などというものより程遠い印象のみが残るのである。

ただひとつ不思議に思ったことは、私のようなS派の男を喜ばせるような絵が皆無だったことである。男が女を責めることによって快感を得るということは、当然過ぎて人間衝動の過剰を示す題材とはならないのだろうか?それとも、画家たちが騎士道精神に毒され過ぎていて、そのような題材を手がけることをためらったせいでもあろうか?とにかくこれは一考に値する興味深い事実である。そして、このことが、S派の私にとってこの画集に対する不満といえは不満であった。

終りに、私のこのまずしい紹介を読まれてひとつ買ってやろうか、と考えられる方のために一言。

本書はあきれる程高価である上に、中味をちよつとのぞいてやろうと思つても、今では本屋には並べてないであらう。(その意味でこれを買う人は、よほどの決心をしなければならぬことになる。その点、私の紹介が何人かの人に怨嗟の種をまくのではないかとお

それている）出版社は、いつも売れそうもないムズカシイ本ばかり出している現代思潮社（発禁になった『悪徳の栄え』を出した出版社）そして定価は三千八百円。縦横二十センチたらず、ページ数にしてわずか二百八十ページの本がこれ程高価なのは、稀覯本ならい

ざしらず、私にとっては前代未聞であった。私も清水の舞台から飛び降りるような気持ちで買ったのだが、後悔はしていない。物の価値はそれを必要とする程度によって定まる、というのはいやほやり真理である。

限定版写真集 美しき縛しめ (第五集) 完成！

アルバム

女性刑罰拷問特集

△日本版▽

頒価 一〇〇〇円(送共) 略号〔美5〕

モデル……………美木乃々子……………山原清子

待望のグラビヤ印刷によるアート紙の「刑罰拷問写真集」成る

映画紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の「日本拷問刑罰集」並に山原清子嬢出演の「入墨女賊拷問刑罰集」の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、いち早く多数のお申込みを頂き迫力ある「刑罰写真集」Vとして好評を賜りました。その頃よりアート紙に對するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛しめ」限定版写真集の一卷として、前記映画紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従つて内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と

二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子
二嬢による「日本版」を八美しき縛しめ
(第五集)として刊行いたしました。
純白の特アート紙に對する極めて鮮明な
グラビヤ印刷による迫力のある写真集を是
非お残め下さい。七十四葉の八女性拷問
写真がぎっしりと全紙面を埋めてフアンの
方々の御一見を得ております。売切れに
なりますと絶対に入手できません。どうか
未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあって苦悶する女囚八葉一葉（美木乃々子）○白州の上で非人の騷りものになる女囚八葉連統四葉（美木乃々子）○牢内にて折檻を受ける女囚——海老縛りと答打ち。八葉連統四葉（美木乃々子）○非人に縛り上げられる哀れな女囚八葉連統十二葉（美木乃々子）○海老責めに放置され全身蒼白となった女囚八葉二葉（美木乃々子）○非人に不浄繩を掛けられいたぶられる女囚八葉二葉（美木乃々子）○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶える女囚八葉連統八葉（美木乃々子）○算盤責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚八葉四葉（美木乃々子）○荒縄で乳房もくびれるまで縛られた女囚八葉三葉（美木乃々子）○土壇で胴斬りにされる死罪の女囚八葉四葉（美木乃々子）○算盤責めと石抱きの拷問八葉四葉（美木乃々子）○囚衣を剥がされ竹のささらで打たれる女囚八葉四葉（美木乃々子）○刺青を晒して木馬責にあう女囚八葉三葉（美木乃々子）○海老縛りでムチ打ちに喘ぐ女囚八葉四葉（美木乃々子）○竹の棒に悶える女囚八葉四葉（美木乃々子）○全裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八葉一葉（美木乃々子）○磯台に括られた人墨姐御吊りにされた女囚八葉一葉（美木乃々子）

以上合計七十四葉——

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒 淵 嬰 一

ビブリオテーケー

さいへんせい

△希臘神話の再編成▽

アピス

西紀紀元前一四九五年一月初（エジプト暦七月）の或る夜。

国運隆昌を極める第十八王朝治下エジプト王国の首府テーベ。

大羊街を西に上った高台全域を占める王宮は煌々たる不夜城の光輝を放ち、下町の上に巍然と君臨していた。

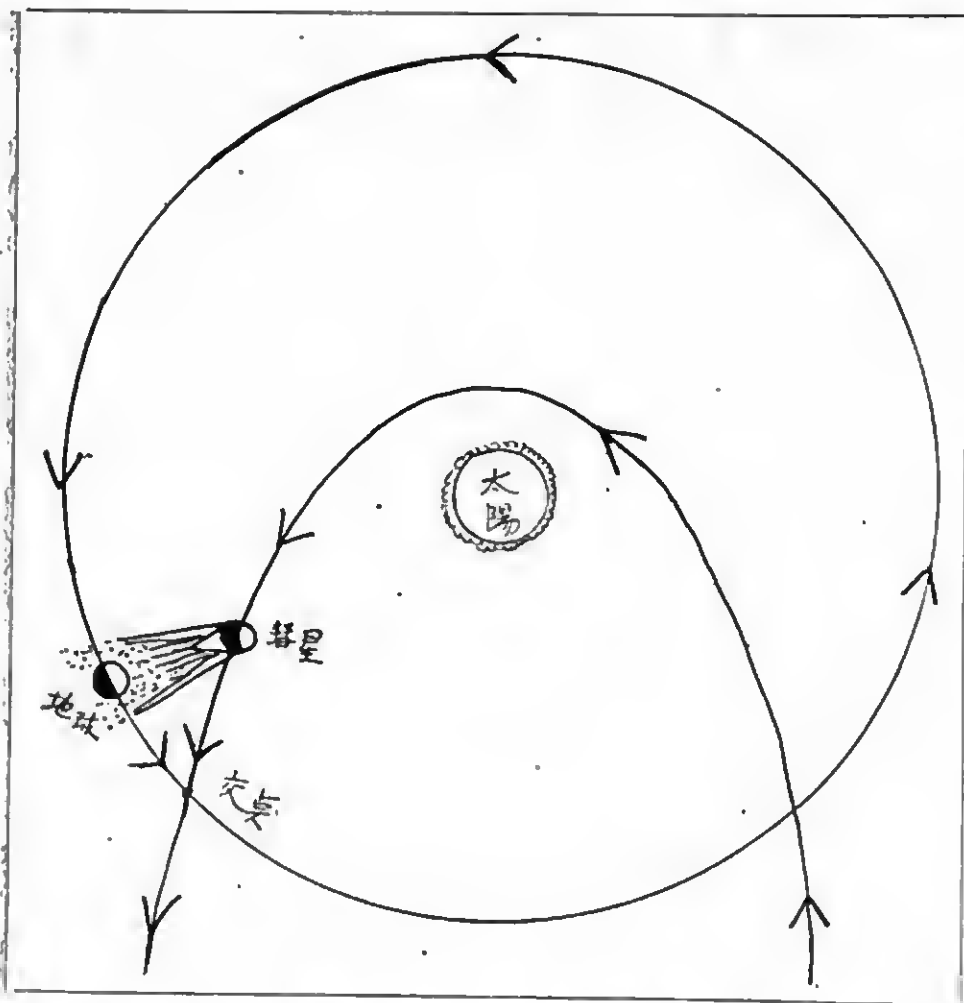
当時ハンムラビの創始せるバビロン第一王朝すでに倒れてメソポタミヤに統一勢力なくヒッタイト未だ強大ならず、ミタンニ興起せず、ギリシヤは野蠻状態にあり、カナーンからシリヤにかけては小邦分立する中に、独り

エジプトのみ強盛富裕を誇った。クレテ王国と海陸の支配権を分割占有し、世界を二分する観すらあった。

エジプトは第十八王朝の開祖アハモス一世が百年にわたる牧羊王朝の支配を倒し、ヒクソス遊牧民を追放して以来、二千年の伝統を破って帝国主義を国是とし、フェニキヤからヌビヤにまで、宗主権を及ぼす大帝國を創った。その功は初代アハモス一世、三代トトメス一世に帰せられるべきであるが、当主四代王トトメス二世も三十才を越えたばかりの壮年で、武勇の君主として知られていた。（衆知のごとくエジプトのナポレオンたる征服王トトメス三世が出て極盛時代を現出したのは本篇の二代後である）

だが、全エジプトの民心は不穩に動揺していた。数年来金牛宮にあった新しい星は次第に大きくなり、かつ運行速度を増し、双女宮から巨蟹宮を経て獅子宮に移り、その視直径は太陽に等しく、光輝は満月を凌ぎ、髪のごとき二本の尾をひく怪異な姿を天の一角に曝していた。視力の鋭い者なら髪コウの中間に芒と伸びた光の尾が視角四度以上に亘って連る様を見分ける事が出来た。併しこの天体は彗星ではない。通常の彗星が数箇月以上見える事はない。かつ彗星は頭部といえども透明なはずである。この怪天体は余りにも明るく主体は明瞭な円盤状を呈していた。

民衆はナイルの岸に、家の屋根に、神殿の階段に群って天変に戦慄し、僧侶は天文台に



集って日々に大きくなる天体を追求しながらこれに振廻されていた。

いかなる凶事が起る前兆か。

宮殿の奥、猫頭神^{バスト}を祭った神王^{ファラオ}の居間では

大臣イプワーが諮問に答えていた。

「クレテ王国のギリシヤ征伐は私達が予測した以上の大作戦であるごとく思われます。クレテ海軍はキクラデス諸島に前進根拠地を定

めサラミス、エギナ、エウボエアの諸島を攻略しアッティカの三方を封鎖しつつこの冬を越す計画かと推定します。本土進攻はおそらく季節明け。それも単なる荒掠でなく、アッティカ全土の潰滅が目標と見えます。ナイル河の減水季にクレテ人が買い求めた麦の分量は十万人の一年分に相当し、通常の輸入ではありません。玉葱もこれに準じます。かつ銅

素材や膠も多量に購入し、フェニキヤからの報告では莫大な皮革を注文しているようで

戦時需要である事に疑いありません。一方クレテからの船載品は激減し、殊に油と青銅器は皆無に近い状態です。クレテ王国の全経済はこの戦役に動員されている模様です」

イプワーは五十才位の実直そうな官僚だった。葦紙^{パピルス}の文書を広げながら神王^{ファラオ}に状況を説明した。

「クレテ王国は素晴らしい国だな。国王の意志一つで総動員が出来る。それに較べわがエジプトでは神にして王などと

いわれても太陽神^{アムモン}以下の神殿領は手が付けられず、傭兵は高給を払わなければならず、無態な官吏多数を擁していなければ政治が出来ない」

トトメス二世は若いだけに簡明にいった。儀式の後でもあろうか。上王国の百合と下王国の葦を象徴する紅白二重冠を戴き、黄金の蛇と太陽を飾り、鉤杖と鞭の王章は傍の卓上に置いてあった。黒褐色に陽やけし、眼光鋭く、四肢逞しく、武勇の王者たる相貌表れ、精悍の気がみなぎっていた。

「恐れながら陛下。クレテの総人口六十万とエジプト帝国の、四百万を御秤量願います。陛下の統治し給う国土は、クレテに百倍します。政治の組織、運用が異なるのは自然の理法と存じます」

大臣イプワーは、トトメス一世の代から優れた行政手腕を買われていた。

「詭弁は申すな。エジプトの国力は土地と人だがクレテ王国のそれは船と金だ。異質のものを比較して何になる。確かにエジプトは広く人も多い。併し世界の陸のせまい地域しか治めておらぬぞ。だがクレテは海の全部を支配している」

「なれど陛下。クレテの財力に就いてならば

今こそ数十年來の貿易赤字を取り戻す好機と心得ます。クレテ王国に売り渡す麦の価格を引き上げては、いかがでございましょう」

鎖国主義を旨とし、自給自足経済を保っていたエジプトは、第十八王朝に至り帝国主義に変化し、宮廷の豪奢と相俟って輸入が激増していた。最近ではヌビヤに産する金の半分をクレテ王国に持ち去られている状態だった。

「他人の窮状につけ込むのはよろしくありません。エジプトは陸で、クレテは海で、共に栄える事こそ天の道に叶うものでしょう」

この室内に居る三人中の第三の人物が始めて口を開いた。三十才少し前か。膚の色はハム種の特長通り浅黒いが整った顔の女性だった。その瞳は黒く、眼は切れ長く、美人に有り勝ちな冷たさを感じさせない。柔和な感じをただよわせていた。これこそハトシエプスト王妃である。鷹神の翼を飾り、後年エジプト史上最大の名君と謳われるようになる大女王の威厳を内に秘めつつも穏やかな態度を表に保っていた。

「女が政治に口をはさむのはよくないと常々申し聞かせてあるのに解らないようだな。国事に感情が入ってはならないのだ。余もクレテ王国に売却する麦の価格引き上げに反対だ

がそれは王妃の共存共栄論ではない。純粹の国策からだ。余は準備成り次第シリヤからキリキヤ方面に出兵しようと思っているが、この作戦にはクレテ海軍の協力と同意が必要となる。フェニキヤで立派な軍艦が作れるようになるまではクレテ人に恩を売って味方にしておかなければならないのだ」

大政治家兼戦略家トトメス二世は明快にいった。

「御卓見、恐れ入りました」

大臣イプワーは丁寧に頭を下げた。

「エジプト王国に関係ない事ながら戦争は好ましくないものです。クレテ王国のような文明国が野蛮なギリシヤを討って、この上何を欲しいというのでしょうか」

智勇兼備の先王トトメス一世が生んだ聡明な娘はクレテとギリシヤの開戦理由など一年前に知悉していた。それでも自問しなければならぬほどに徹底した平和主義者だった。これは、夫たるトトメス二世と相容れなかった。

「イプワー。王妃の申す事に構うな。次を申せ。戦雲はクレテだけではあるまい」

トトメス二世が催促した。

「御意。シリヤの地には東方からフルリ人が

押し寄せ、ボガズキョイに都したヒッタイト人は北より窺い、セム人の諸族はカナーンの地を狙って蠢動しております」

「シリヤを征服して両河地方の貿易を独占する為には先ずセム人を撃破しなければならぬようだな。派遣軍の増加が必要か」

「その事でございます。陛下。騒がしきはむしろケムの内。ゴシエンの地こそ御用心が肝要かと存じます」

「ハピル人の奴隷い共か。集団脱走の動きは察して居る。併し武器も統一も持たない彼等に何が出来ようぞ。ペルシウムには余の第一戦軍軍団を配置してある故、脱走してもシナイの砂漠に奔るしかあるまい。砂漠の中で餓えて死ぬのが解っているものを」

「それが、最近彼等の中にモーセという名の予言者を自称する者が現れ、妄説を行って奴隷い共を煽動して居ります。カナーンの地、ヨルダン河の流域こそ神がハピル人に約束した土地であるとか。ハピル人は元来十二の異なる神を拝む統一のない種族の集団でしたが、モーセは新しい神を説いて精神的合同を計画しているごとくです。天に現れた新しい星はハピル人を導く神とも説いています。全エジプトがああ星に恐怖を覚えて居る際ですから

これを棄て置けば人心を惑わす原因ともなりましよう」

ハピル人はカピリ人ともヘブライ人とも呼ばれる。セム人種を主とする一団で、ナイル三角洲の東寄り、ゴーシエンに集落を作っていた。かつて下エジプトを支配していたヒクソス人の牧羊王朝がアハモス一世に倒された時セ 人の一部が逃げ遅れて第十八王朝の王室に直属する集団奴れいとなったが、これがハピル人の起源である。以後七十五年を経過し人は数代入れ替ったが、ハピル人は煉瓦、漆喰、石切等の重労働に集団酷使されながらも人口増加を見せていた。

集団奴れいは専制君主にとって便利な労働力である。鉱山、神殿、宮殿、工場等の仕事はこの無償勤労者が利用された。殊に第十八王朝は各種建築物の造営においてエジプト史上最大を誇るものである。ハピル人の奴れいはこの目的で働かされたから、捕虜や犯罪者や破産者が不断に補充編入された。その中にはカナン地方の出身者が多く、追われて来た地の肥沃を皆に告げた。ハピル人に与えられたゴーシエンは低湿地で余り農耕に適さない。ハピル人は、その土地で辛うじて食糧を自給しながら、窯業や鉱業の重課を負わされ

ていた。筆者はその人口を七万と仮定する。聖書は壮丁だけで六十万と記しているが、それが事実なら逃げ出すよりもエジプト全土を横領する方が容易だろう。エジプトは奴れいを家庭に分配する国で、集団奴れいの比率は少い。エジプトの総人口四百万。常備軍五万に対し、無視するには多過ぎ、叛乱を企てるには弱過ぎる数を推定した。

「あの星は彗星なのか。何か新しい種類の天体なのか。天に大きな星が現れただけで、地上には何の災変も起っていないのに騒ぐ事はあるまい。あの星の正体を人民に教えて恐れる事は無いと断言する事は出来ないのか」

トトメス二世は迷信家ではないが、民衆の恐慌を防止する手段は剣しか知らなかった。

「太陽神の僧侶を呼び寄せます」

「太陽神の僧は聞き飽きた。彼等は古い記録を沢山持っているが、今度の天象は全く新しい事であろう。気休めは聞きたくない」

大臣イプワーは暫く苦慮していたが、やがて余り気の進まないような奉答をした。

「聖牛神殿にエジプトに無い天文術を能くする者がおります。身分の低い者ですが」

「修学僧か。納所か。それとも外国人か」

「それが、僧侶ではありません。元来シドン

の王が奉った女奴隷で現在、は巫女の下働きをしています。名はアリアドネ。何でもクレテの星学を修めたとかで」

「女か。併しクレテ王国では女官が祭祠や観測をするそう。クレテの天文学はエジプトより進んでいるという。即刻呼べ」

アリアドネとコルクユネが染料工場の苦役を免除されてイシユタール神殿に戻されたのは紀元前一四九六年八月初。厳重な拘束付監禁だったが怪しげな技術は課されなかった。

アリアドネの忍耐力に対しては幾分かの尊敬さえ払われた。一ヶ月の休養では汚染した髪や皮膚が元通りに戻りはしなかったが、天性の麗質がそれを補った。エジプト王が天象観測の技術者を求めているという噂を聞いた九月、アリアドネとコルクユネはエジプトに貢納される奴隷に加えられた。驢馬に揺られて

テーベに到着したのが十月末。アリアドネは直ちに聖牛神殿に入れられた。更に二ヶ月。アリアドネはエジプトの聖牛にクレテの海神を思い出しながら仕えた。地位は最下級の巫女で、掃除や雑用が多かったが、天体観測に

関する技術は忽ち高僧の認める所となった。

聖牛神殿が宮廷に奉呈する曆表や天測の正確詳細な事は太陽神のそれを凌いだ。

アリアドネはコルキユネを伴い、イプワーに導かれて参内した。

アリアドネはエジプト風の、身体に密着する亜麻服を着ていた。この軽羅は弾力があって吸湿性も良く、少しでも汗をかくと身体のあらゆる曲面が、その透けて見える程だった。焦茶色の髪はたばねて、脇に垂らしていた。尖端には未だ幾分か紫色が残っていたがその不調和が却って、色彩の美を加えて見えた。労働と旅行で傷んだ皮膚は漸く地の純白を恢復し、ハム人種には見られない輝きを放っていた。今年十九才。併し南国の風習と異り、純潔を保ち続けた身体は、その立派な体格にも拘らず、女性を表す局部の発達を抑制し、容姿と共に幾分かの子供らしさを見せていた。

コルキユネは短い上着を着てアリアドネの後に従っていた。髪はエジプト風に短く切り揃え、黄色のリボンで鉢巻状に束ねていた。今年三十七才だが、エジプト風の食事や辛勞のため、むしろ瘦せて見えた。

大臣イプワーがアリアドネとコルキユネを謁見の間に導いた。玉座にはトトメス二世とハトシエプスト王妃が着座していた。両側には侍臣、武官、僧侶、宮廷付魔術師が並び、

そして玉座の前では三人の老人が引見を受けていた。イプワーはアリアドネに手で合図して暫し待つように命じ、アリアドネ達は謁見の間の入口で立ち止った。

アリアドネは神王を間近に観察した。威厳のある君主だと思った。ハトシエプスト王妃も美しいと感じた。併しクレテ王国の豪華に較べると、テーベの王城も神王の権威も一廻り小さいものに見えた。(エジプト新王国が極盛を極め、今に伝る神殿や宮殿を多数造営したのは約二百年後のラムセス二世時代である)アリアドネの関心はむしろ三人の年寄りに向けられていた。二人は白髯を長く伸ばした老爺で、その一人はアカシヤ材の杖を持ち他の一人は総白髪のお婆だった。三人共貧相に見えた。床で織った、黄と黒の縦縞模様の外袍を縄帯で締めていた。

「レビの神が、私達に対して怒っておられます。ハピル人一同揃って神を祭らなければなりません。私達はケムの方々の忌み嫌う種類の犠牲を祭壇に捧げますので、この祭儀をゴ―シエンの内で行う事は出来ません。ハピル人一同を砂漠の中へ三日行程入らせて戴きたく、お願いに参上致しました」

杖を持った老人がいった。言葉は丁寧だ

が神王の前でも平伏せず対等に話しかけた。「あの人は誰ですか」

アリアドネが小声で大臣に聞いた。

「氣遣いだよ。杖を持っているのがアロン。後に黙って立っているのがその弟でモーセ。老婆はミリアム。一番若いモーセが八十才だそう。ハピル人の予言者と称しているが、妖しい術を使う気味の悪い連中だ」

イプワーは説明しながら太陽神の牛角を額に当てて魔除けの呪術を行った。アリアドネは迅速に見破った。アロンは杖を鳴らしながら強そうにしているが一番臆病のようだ。ミリアムも余り自信があるように見えない。黙っているモーセの気魄だけが眼に見えない手となって他の二人を支えている。これは大した人物だ。葡萄酒神の宣教師オーナロスより優れているかもしれない。

「詐りを申すな。砂漠の中に三日行くと称してその実は国外に逃亡する気であるが、汝等の首が胴から離れずにいるのは余の妃の特別な恩寵と思え。妃は神と聞くと何でも尊重する故、今の所、汝等は安全であるが、妃が反対しなければ余自身で無礼者を斬首する所なるぞ。神の御告などと眼に見えないものを持ち出して余を動かし得ると思うか。詢それ

が神の意志なら余の眼前で証拠を見せよ。万
 一余の満足出来る兆候が現れぬ時は汝等の首
 三つ揃って飛ぶものと覚悟せよ」

トトメス二世は明らかに怒っていた。アロ
 ンが微かに慄えた。ミリアムは一寸モーセを
 振返った。独りモーセだけが厳然と直立し、
 僅かに頷いた。老婆ミリアムは何事か決心し
 たように進み出た。

「神の示現の証拠、お見せ致します」

玉座の正面で掌を拡げた。そして手を懷中
 に入れ、袋を取り出した。両手は癩病のよう
 な真白に変わっていた。次に掌を返すと袋を逆
 にして灰をまいた。灰は忽ち無数の蛇に変化
 した。そのように見えた。侍臣達は慌て騒い
 だ。

併しアリアドネは苦笑した。動物磁気を拒
 斥する努力は一瞬で足りた。此処にも集團幻
 覚を神と称する者達が居る。然もそれを神王
 に対して試みる程ハピル人は無智なのか。エ
 ジプト宮廷に幻覚を破る者が一人もいないと
 思っているのか。

幻覚に陥ち入らなかったのはアリアドネだ
 けではなかった。トトメス二世自身は灰と蛇
 を見分ける程の精神集中力を持っていなかつ
 たが、この作用が人為的なものである事を確

信し、臣下の魔術師の能力を充分に信頼して
 いた。半眼を閉じて泰然と構えた。期待に応
 えるべく神王の左隣から宮廷魔術師が進み出
 ながらいった。

「陛下。これは神の示現ではありません。只
 の魔法です。小臣が破って御覧に入れます」

魔術師は懷中から一つかみの砂を出して投
 げた。砂からは蜻蛉が湧いて出た。幻覚同志
 が空中で衝突した。魔術師の感化力はミリア
 ムを圧倒し蜻蛉は蛇を一匹宛喰べて行った。

今度はアロンが進み出た。小石を一握り転
 がした。小石は同数の蛙を生じ、見る間に蜻
 蛉を呑み尽くした。

それでもトトメス二世は驚かなかった。右
 隣の太陽神僧が進み出、帯を数本抛った。帯
 は蛇の如く蠕動しエジプトコブラに化けた。
 蛙は次々に丸呑みにされた。

幻覚の感化力は次第に増幅された。アリア
 ドネも最初の間こそ兇戯的幻術と思っていた
 が次第に重苦しい圧力を感じ、幾度か催眠状
 態に吸い込まれそうになった。その度にクレ
 テの太陽神の黄金円盤を思い浮かべて邪念を
 振り払った。

モーセが進み出た。アロンはそれに励まさ
 れてアカシヤ材の大杖を投げた。モーセの両

眼が火のように燃えた。強烈な脳波幅射が放
 射されているようだった。杖は大王蛇になり
 エジプトコブラを片端から呑み込んだ。エジ
 プト側の魔術師は必死に術を尽くしたが何も
 出来ず、次第に圧倒された。

「これは魔法ではありません。正しく神の御
 技です」

魔術師共は顔を覆って退却した。ハトシエ
 プスト王妃は悲鳴をあげて逃げようとしたが
 腰を抜がして立てなくなった。

「レビ神の示現、御覧になりましたか」

アロンが勝ち誇って、畳みかけるようにい
 った。大王蛇は鎌首を擡げて玉座を窺った。

そのような気がした。武勇のトトメス二世も
 思わず腰を浮かせた。脂汗が流れている。

この時、アリアドネが静かに歩み出た。ト
 トメス二世の前で軽く一礼すると恐れる気色
 もなく大王蛇の尾を掴んだ。持ち上げながら
 軽く一振した。幻覚は破れ、蛇は元の杖に戻
 っていた。アリアドネの手の中から帯や小石
 や砂や灰が流れ落ち、床に散乱した。

トトメス二世は大きく吐息をもらしながら
 玉座の椅子に坐り直した。

アリアドネは杖をアロンに返した。アロン
 は呆然と受け取った。この瞬間アリアドネは

真正面の至近距離から電撃の如き衝動を受けた。明らかにモーセが発した感応波だった。

アリアドネは一寸動揺したが、すぐ立ち直った。微笑を以ってモーセを見返した。「わたしには幻覚が通用しませんよ」という無言の挑戦だった。

エジプト側の魔術師二人はこの交戦を察知した。驚愕の色を面上に表しながら神王の耳元で何事か告げた。トトメス二世も感嘆の表情で深く頷いた。

「ハピルの予言者よ。其方達という神の示現が詐りである事は歴然だ。罰として労役を強化する。煉瓦製造に使用する薬は今後、供給しない。汝等自ら畑の刈株をほり起して集めるがよい。而して煉瓦の納入数量を減少する事は認めない。怠る者は死刑。解ったら疾く退いて働け」

モーセもアロンもミリアムも、悄然と出て行った。それを見送りながらアリアドネはコルキユネを振り返って小声でいった。

「わたしは悪い事をしたのでしょうか。幻覚を神の示現などと称しているから、破って見せたのだけれど、苦しんでいる可哀想な人達を一層苦しめる結果になったのではないかしら。若しそうなら償わなければなりません」

併しトトメス二世は手離しで喜んでいた。

「イプワーよ。卿の召し連れた聖牛の巫女は天下第一の魔術師だ。余は嘉納するぞ。この者を妃の身边に置いて余の顧問にしたいと思う。聖牛神殿に交渉してもらいたい。クレテの魔女よ。名は何という」

アリアドネとコルキユネは神王の前に平伏した。

読者の中には、筆者が余りに軽々しく催眠術的現象を取り扱う事に不快を覚える合理主義者も多数居られる事と思う。

確かに現代では斯かる実例は極めて稀にしか起らない。だが古代から中世にかけては条件が異っていた。大多数の不幸な民衆はこのような超自然的霊媒力の実在を信じ、奇蹟の救済を期待し、暗示にかかり易い虚脱状態に在った。一方、社会の上層部や最高智識階級も靈感の開発に真剣な努力を注いでいた。元来動物磁気とか催眠術とかいうものは先天的素質を必要とする。而して一神教発生以前の古代に於いては斯かる才能を備えた人物の大部分が有効に活用された。従って交霊現象は現代よりはるかに起り易く、又承認され易かったといえる。

現代では如何。

靈感能力は困った事に自然科学的天分と多くの共通点を持っている。即ち環境と教育如何では霊媒術者たり得る者の大部分は未萌の内に滔々として理論物理学その他の部門に流れ去り、交霊とは無関係、否積極的にこれを否定したがる種類の者になって了っている。

仮に、稀有の偶然に依って、交霊能力を有する者が今の世に発見されたとしても。彼又は彼女は宗教家を含む、現代人を以って自認する社会人全部の無慈悲な批判に曝され、詐欺の非難を受けるか、又は無責任なジャーナリズムの脅にされる運命にある。

現代人は科学の何たるかを半分しか理解しないにも拘らず「科学的」なる語をらん用し「霊媒」のような語は聞いただけで反撓したがる。交霊術者が同時に科学的証明の出来る教養を持たない限り、狂人として懷疑の中に葬られるか、または新興宗教の教祖に祭り上げられて、墮落の中に終るかの何れかであるう。

アリアドネは靈的感応力の所有者ではなかった。併し靈感の理解者であり、偉大なエウローペや幻妖なパーシファエーの影響を受けて育ったため、他から仕掛けられる催眠効果や幻覚を分析したり排除したりする精神力は

充分に磨かれていた。

「アリアドネ。余はもう一つ其方の才能に期待したい。天に現れた巨大な彗星は何を意味するか。その正体は何か。これが解るか」

トトメス二世が下問した。

「わたしはクレテの天文学を少しばかり修めました。その方法を用い、エジプト中の観測結果を集めて計算致しました。エジプトは南北に長いナイル河に沿った国ですから同一緯度上に二つ以上の天文台がある場合も少くありません。天文台間の距離は正確な地図で判明しておりますから、二地点からの視角差を利用して彗星と大地との距離が解り、視直径を測れば彗星の実際の大きさが出せます。また、天球上の移動を三点だけ観測すればその軌道が計算出来、従って将来の位置も算出する事が可能です」

アリアドネは、充分の自信を以って奉答したが、トトメス二世は面白くない顔で聞いていた。当時のエジプト天文学は地球が天空上に浮遊する球体である事を理解し月の体積を地球の七十二分の一（実際は四十九分の一）と算出したりしていたが、暦学と占星術に基礎を置く全体系は、クレテの航海天文学から発達した実用科学に及ぶべくもなかった。か

つクレテの数学は既に二次曲線の理論を解明していた。

「余は難解な理論を好まない。簡単に結論のみを申せ」

アリアドネは丁ねいに頭を下げた。

「あの彗星は地球と同じ位の大きさと実質を持ち、地球軌道と交って運行しています。間もなく地球軌道を横断して太陽に接近し、一旦は太陽の向う側に入って見えなくなります。が、間もなく東天に現れ、今から六ヶ月の後地球と同時に交点を通過致します」

僧侶達の面上を恐怖の色が走った。併しトトメス二世は未だ理解しなかった。

「もっと解り易くいつて欲しい。一体何が起るのだ」

「あの彗星と地球は六ヶ月後に衝突します」

アリアドネは遠慮せずに行った。今度はトトメス二世も愕然とした。

「衝突だと。その結果は何うなる」

「それは解りません。陛下の僧正様や博士様に御下問賜りますようお願い致します」

僧侶や魔術師は神王フアラオの傍に寄って小声で何か訴えた。どうやらアリアドネの天変地異説を否定して安心させようとする如くだった。「アリアドネよ。よく正直に教えてくれた。

褒美を授けるぞ。何なりと望みを申せ」

トトメス二世は、主権者の紋切口上を述べた。語調からは驚嘆や親愛の感情が消え失せていた。聡明なアリアドネは自分の奏上が事実上無視され、更に自分が危険視されている事を迅速に感知した。アリアドネの解説は恐慌を招くに充分であり、僧侶の権威を冒す性質のものであり、斯かる重大な発言を為すには余りにも若輩だった。一方において、アリアドネが試みた、悪意のない行為で絶望的苦境に追い込まれる結果となったハピル人指導者に対する激しい自責が心を悩ました。それは純情なアリアドネの耐え得る限界を越えていた。此処にいてはならない、と思った。

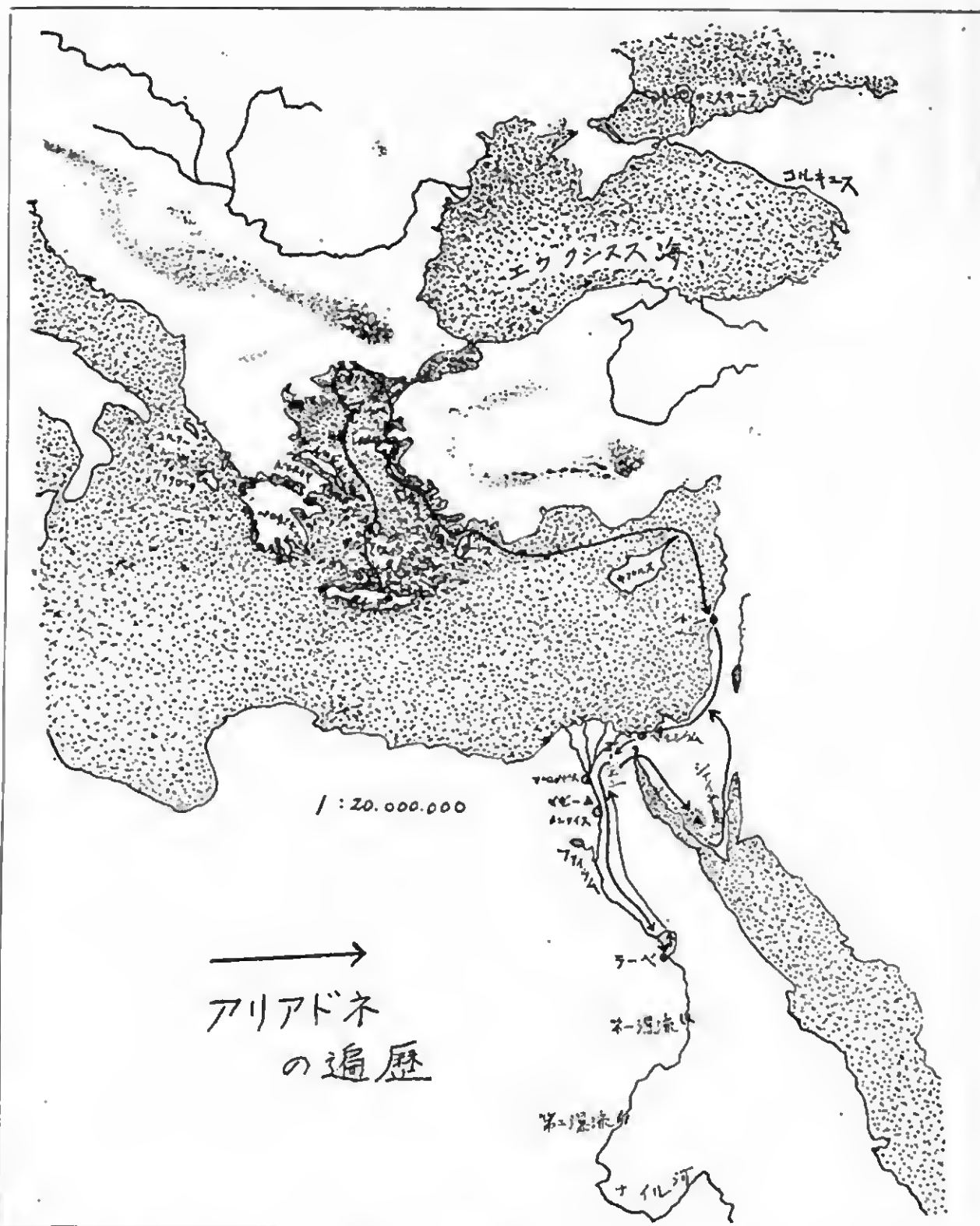
「ゴーシエンに、行かせて戴きたいと存じます。ハピル人と共に働きたいのです」

アリアドネは明瞭にいった。神王フアラオも、王妃も、大臣も、すべての者が驚いた。

二月初。ゴーシエンの低地では半裸のハピル人達が日干煉瓦の製造に酷使されていた。ナイル河の泥を濾して良質の粘土を振り分ける。年寄達が麦の刈株を切り刻む。若い者は粘土の中に腰まで漬って踏みながら泥と藁を攪拌する泥塗れの重労働である。エネプト人の監督が鞭を持って怠る者を叩いている。

ナイル河の粘土はメソポタミヤに較べて粗く、粘結力も弱い為、斯く人力を注ぎ込んでも余り上等の建材にならなかったが、奴隷労

働で安価、大量に供給されるので都市計画の要素たり得た。この苦役に服している集団の中にアリアドネがいた。麻の粗布で腰と胸を



アリアドネ の遍歴

巻くだけの半裸体は下半身に泥の皮膚を被り長い髪は高い髷に結って頭上にまき上げていたが、顔も髪も粘土の飛沫を浴びていた。

夜になった。怪しい天体はゴーションにも煌々たる光を注いだ。疲れ切っているハピル人は仰ぎ見る程の元氣を持たなかった。何事が起っても今より悪くはなるまいという諦めもあった。ゴーションの地でハピル人は極めて微弱な自治を許され、沼地を耕して得た僅かな麦で、かろうじて餓死しない程度の自給をしていた。夜の食事と睡眠だけがハピル人の自由だった。併し今日はその夜さえもが騒然としている。

泥煉瓦の掘立小屋に囲まれて比較的大きな天幕がある。其処から灯がもれ、多人数の気配がした。羊脂の明りの中に二十人程の人影が認められた。ハピル十二族の代表者達らしい。上座にモーセがいた。併し見るからに意気消沈の態で、柱にもたれ、無気力な眼で宙を見凝めていた。

「モーセ。元氣を出して対策を考えて下さい。貴下だけが頼みなのだから。神王は私達の労役を重くしただけでは足らず、私達の中に間諜を放って来たのですよ」

モーセに呼びかけたのは老婆ミリアムだった。アロンは立ち上って皆に訴えた。

「皆聞いてくれ。エジプトを出よという神の示現に嘘はない。だが我々の詢が足らなかつた為か、苦しみ方が不充分なのか、神は途中で見離され、魔術師に勝を譲られた。その魔女が此処に居るアリアドネだ。それが神の御意志なら致し方ないが、我等の予言者はこの女に通力を破られて以来すっかり自信を失い、見られる通りの有様となつて了つた」

皆に囲まれた土間の中央にアリアドネとコルキユネがいた。麻の粗布で胸と腰を包むだけの労働着で、アリアドネの方は下半身泥に塗れた俛の姿だった。二人は背中を密着し合つて坐り、両手は背の間に隠れていた。胸も腹も頸も、石曳用の太綱で固く巻かれ、投げ出した両足首も揃えて縛つてあつた。周囲には殺氣が満ち、棍棒や太杖を持っている者も何人かいた。

「モーセの通力を破る程の魔女が間諜になつて潜入したのだ。エジプト人に感付かれる危険を承知で屠るべきだろうか。この魔女さえいなければモーセに敵う者はいない。併しそれ程の魔女だから殺しても生き返るかもしれない。四肢も首も寸断して砂漠に埋めなければ

は安心出来ないだろう。それとも神王に遠慮して殺さずに追い返すべきか」

アロンは更に続けようとしたが、この時今迄黙っていたモーセが重々しく口を開いた。「何かありそうだ。私が、自分で調べてみたい。今夜はこれ位で一応解散して貰いたい」それはアリアドネが始めて聞いたモーセの声だった。意外な程に甲高い響く声だった。

ハピル人達は黙つて出て行き、後には三人の予言者兄弟と、それに縛られた俛のアリアドネとコルキユネが残された。

「アリアドネよ。君は恐ろしいという事を知らないようだね。先刻アロンが死刑の提案を行つた時にも、顔色一つ変えなかつた。何故だ。君の自信の根拠は何だろう」

モーセは灯皿を掲げてアリアドネの顔をのぞき込んだ。アリアドネは縛られた俛、顔を上げ綺麗な瞳でモーセを見返した。

「アリアドネ。私は君を間諜とは思っていない。髪も皮膚も我々とは色が違ふし、君は美人であり過ぎる。すぐ解る特徴を備えて間諜が務る筈もない。神王が馬鹿だとしても君を間諜に使つたりしないだろう。では何故、最下等の労働に加つたのだ。何か罪を犯したのか。いや、そうではあるまい。君は私の術を

破つて神王の為に大功を樹てた。君が苦役を負つたのは罰ではない。間諜でもない」

モーセは独りで語つた。アリアドネの考えにいる事が薄々解るような態度だった。

「アリアドネ。私の常識では、手を後ろに縛られて如何なる術も使えない筈なのだが、君はそれだけ縛られても平然としているね。君の信念を、何という、神が支えているのだろう。私の術を破つたのは君が始めてだ。私は自信を失つて了つたが、君をうらんではない。それが神の御意志なのだから。併し神は何のようない目的で君を遣されたのだろうか」アリアドネはエジプト語もセム系諸語も理解し得た。可能な限り縛られた姿勢を起しながらいった。

「贖罪をしたからです。私は貴下達が何のように苦しんでいるかを知りませんでしたが。それで只の幻覺を御神示と称して居られるのを見た時、悪意なしに破つて了つたのです。私の軽卒な行為で貴下達の苦役を倍加する結果になつた事はあの後で知りました。神王はわたしに望み通りの褒賞を約束して下さいましたから、私は褒賞にゴーシェンで働かして欲しいと願いました。貴下達に負わされてゐる労役を一人分だけでも軽くしてあげ

たかったからです。そして、私に出来る償いは、これだけしかないのです」

モーセは深く頷いた。言葉だけでなく、誠意を直接思想の形で受け取るのではないかと思われる位に理解が迅速だった。

「君のした事は正しい。神の意志を証明するのに人間の手段を用いるべきではなかった。そして私は君程、純粋な者を見た事がない。私の幻覚を破った心霊力の根源も、その純粋性の中に宿っているのだろう」

アロンとミリアムが両側から縄を解いた。ハピル人は金属の叉物の所持を禁ぜられ、網は貴重品だったから複雑な縄目の一つ宛老人の指先で解かなければならなかった。

「アリアドネ。聞いてくれ。私は悩んでいるのだ。私が神の示現を受けたのは、本当なのだ。でも、それを証明する方法がない」

八十才の老予言者は、十九才の少女に助力を乞うた。

「私は幻を見る。エジプト中の水が血に変わるのだ。灰のような塵が湧き立つ。疫病、蝗の群。天からは晴れた日に雹が降って来る。その雹は地に落ちると同時に火と変じるのだ。物凄い風の唸り。そして、一寸先も見えない闇。やがて明りが見える。海が真二つに割れ

海水は壁のように立ち、海底が見えている。大きな声が天上から聞えて来る。この道を通ってエジプトを出よ。空には真赤な竜が躍っている。電光。地響き。渦巻。火柱。私は同じ幻を三度も見た。これを神の示現と信じていた。君に術を破られるまでは」

アリアドネは、モーセの枯枝のような掌を優しく両手の間にはさんだ。

「自信を取り戻して下さい。御覧になったものは幻ではありません。多分それと同じ事が将来起るでしょう。予知感覚というものでしょうか。わたしにはそのような能力が有りませんから直感で見通す事は出来ませんが、その代りにクレテで覚えた天文の知識を持っています。聖牛^{アピス}神殿での観測結果から計算すると、天に見えている彗星は五ヶ月後に空一杯に見える位近寄ります。空に見える火の竜はその彗星でしょう。血の雨や裂けた海が何を意味するのか解りませんが、一つの星が大地に衝突するまで接近するのも未だかつて無かった現象ですから、何のような事が起るか私の乏しい知識では推測出来ないけれど、想像以上の天変地異が現れても不思議ではありません。そして私がクレテ王国に居た頃に聞いた所では、星と共に愛と平等の神が降臨さ

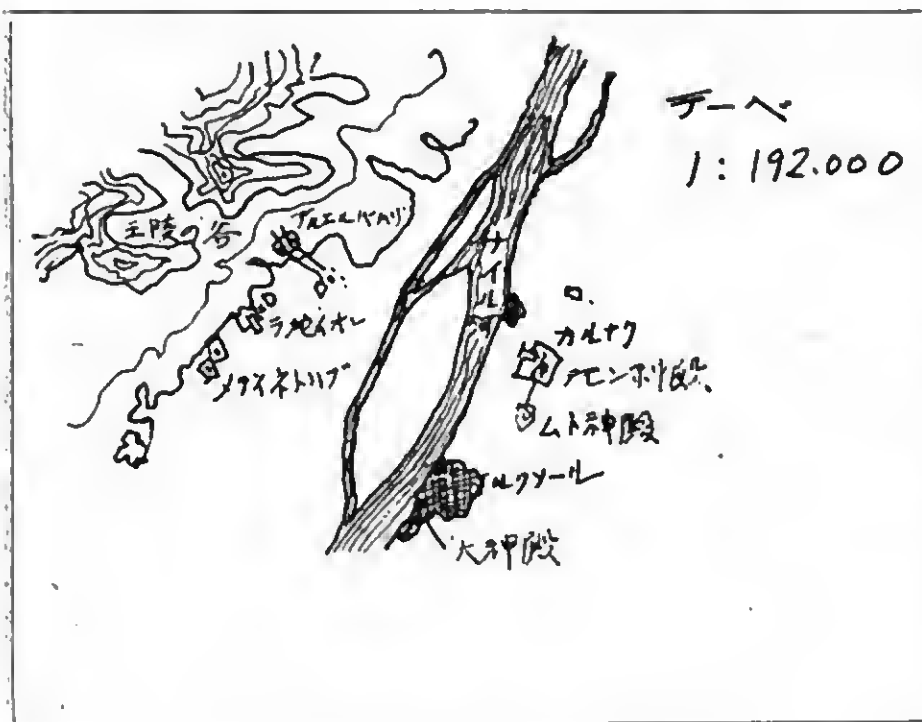
れるのだそうです。ハピル人がエジプトを出て自由を得る機会が有るとすれば、その時でしょう。又、それ以外に無いでしょう」

モーセはアリアドネの手を握り返した。

「有難う。私はハピル人の予言者として自信を持つ。君のいう五ヶ月先を期してハピル人に自由を与える日の為に民を励まそう。アリアドネ。どうかハピル人の為に力を貸して貰いたい。レビの神を受け入れてくれるなら一層嬉しいのだが」

「私はクレテ王国で海神の巫女をしていました。又、太陽神^{ヒュベリオン}を心から信仰していました。でもクレテ島を出た本当の目的はあの彗星と共に降臨される筈の新しい神、愛の神をお迎えする為なのです。レビの神がわたしの求める愛の神なら何時でも受け入れますが、五ヶ月先の証拠を見るまでは今の儘で居たいと思います。でもお仲間に加えて戴いたからには出来る限りお役に立ちます。医術の心得も幾らかありますし、航海天測を習いましたから砂漠の中でも方角が解ります。体は疲れるという事を知らない程に鍛えてあります」

聖書の記述には反するが、筆者はヘブライ人がヤーヴェー唯一神の信仰に達した時期を出エジプトのはるか後、紀元前一二五〇年頃



と考えている。十二族の神はエジプトに準じて蛇の神や牡牛の神だった。アリアドネとコルキユネはハピル人の中に迎え入れられた。問題の怪天体は彗星型の長楕円軌道をえがきその遠日点は木星軌道を越え、近日点は水星軌道付近にあったと推定される。然も太陽系の一員として軌道面は黄道面と一致し、二点において地球軌道と交差していた。両天体が同時に、交点を通過すれば衝突は必然であ

る。而してこの天体は突然太陽系に参加したものであり、ヴェリコフスキーの説に依れば木星の一部が、噴出分離して生じたものだった。アリアドネがゴーシェンに送られた二月初に怪天体は地球軌道を横断し、地球を追い越して太陽光の中に一旦姿を消した。視直径も一時は縮少した。神王の宮廷や神殿の僧侶は真相を悟らずして仮の安心を貪り、悪霊退散の感謝を諸神殿に捧げた。併し怪天体は祈願を嘲笑する如くに太陽を追い越して暁の東天に現れた。視直径は太陽より大きく、白昼でも輝いて見えた。内惑星の位置だったから太陽光を反射した片側は三日月形を呈し、弦の突端は大気の散光の為に鋭く伸びて内側に曲り、牛角の如く感じられた。エジプト人は聖牛を観察し、メソポタミヤやフェニキヤのセム人は牛角の冠を戴くイシュタール女神を拝み、アッティカのギリシヤ人は金牛頭の兜をかぶったアテナ女神の姿をこの星の中に見た。そしてアリアドネはクレテの海神とエジプトの聖牛が混然一体化したと認めた。

怪天体は近日点通過の際、太陽の六千万軒以内に近寄り、その表面温度は摂氏三百五十度を越えた。これは鉛の融点以上である。故に地球に接近して来た時の表面は赤熱状態に

あり、太陽の反対側にあつて光を反射しない表面も自力発光で片割月のごとき微光を放っていた。トトメス二世の宮廷は震駭した。僧侶も魔術師も対策を立てられなかった。

六月初。トトメス二世は王族、側近を連れて氣候快適なテーベを離れ、上下両エジプトの中間に位するメンフィスに行宮を定めた。近衛軍がこれに随行した。全エジプトに拡りつつある恐慌の気配に対処する為だった。併し相手が彗星ではトトメス二世の武勇もエジプト正規軍の戦力も無価値である。

メンフィスはハピル人が居住するゴーシェンから一日行程である。ハトシェプスト王妃はアリアドネを思い出し、急使を送った。

六月十日夜。アリアドネとコルキユネは行宮において神王の前に平伏していた。

「アリアドネよ。余の為に、あの彗星の意味する災の正体と、その対策を解き教えよ。何なりとかなえよう。其方自身及びハピル人の待遇に関して要望があれば申せ」

トトメス二世は明らかに焦燥していた。アリアドネは王妃から参内用の衣裳を与えられたが故意に着用せず、奴隷の短い麻服を纏って現れた。神王夫妻への挑戦とも思われた。「恐れ多き事ながら卒直に申し上げますと、

新しい神の御降臨に際して地上の大動乱は免れません。古い秩序はすべて倒れます。彗星が大地に接する時、世界に血の雨が降り、大火が山野を焼き、死と破壊が普く及ぶでしょう。その期間中宮殿にお住いになってはなりません。野に出て天幕に住み、武器金銀を手離し、奴隷を解放して神をお迎えされるようお奨め致します」

アリアドネはモーセに感化を与えると同時に、モーセの靈感に触れて自身も神懸りのなっていた。

二時間後。アリアドネは離宮の地下牢で床に臥っていた。両手首には二本の鎖が掛けられ、その末端は壁の青銅環に繋いである。麻の粗衣は背部が引き裂かれ、無数の鞭跡に血が滲んでいた。

傍にはコルキユネがいた。アリアドネに連坐したらしい。併し鞭は受けなかった。両手に掛けられた鎖も長いのをういて牢内を歩き廻れるようにしてあった。

「アリアドネ様。信念は曲げるべきでないとしても、神王の前で奉答するには言葉が過ぎたではありませんか。即座に首が落ちなかったのが不思議な程です」

コルキユネは重い鎖をひき擦りながらアリ

アドネの肩や腰を揉んでいた。

「御免なさい。コルキユネまで巻き込んで了って。でも気がついた時はもういった後だったのです。何か解らない大きな意志に動かされたみたい。それにあと数日で降臨される新しい神のお力を、試してみたくもなったのです。クレテ島を出てからナクソス。レムノストラキヤ。シドン。そしてエジプトと巡り続けたが愛の神は未だ見つけていないでしょう。落ちる極限まで落ち込んだ時に救って下さる神が本当の神ではないかしら」

アリアドネの論理は余りにも飛躍しているのでコルキユネには追従出来なかった。遂に精神の平衡を失ったのではないかと疑った。

同じ頃。ハトシェプスト王妃は宮廷の衣裳を脱ぎ棄て、侍女数人と共に麻の粗衣を着て宮殿を出ようとしていた。衛兵が見咎めてトメス二世に通報した。

「妃よ。我々は神王と王后だぞ。人民の安全と安心を計る義務がある。彗星や妄言に驚いて一時なりとも統治を怠るのは戦場で逃亡するに等しい罪と思わぬか」

神王は阻止しようとしたが、ハトシェプスト王妃は聞かなかった。

「神の御意志には神王と雖も従わなければな

☆男性モデル募集☆

左記要領にて「男性モデル」を募集いたしますから御応募下さい。

一、御希望の方は年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）併記の上お申込み下さい。

一、当方の求めているものは、揮美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装等です。口絵には掲載いたしません、分譲写真として公開可能の方です。

一、採用の方には、撮影の日時場所など詳細連絡の上お打合せします。

一、写真撮影を好まない方でMプレイのみ御希望の時は、その旨、お申下さいます。但し費用の御負担の出来る方に限り

△編集部▽

りません。御降臨に際して何事も起らなかったらアリアドネと一緒に罰して戴きます」

怪天体は既に地球の引力圏内に入り、急速に距離を短縮していた。この天体に付随する濃厚な大気や塵埃は太陽に接近した際の熱で運動量を増し、本体を離れて宇宙空間に噴射された。ガスや微粒子は太陽の光圧で押し流

され彗星の尾のごとく太陽の反対方向に長く伸びた。故にこの天体は図のごとき位置関係で地球に接近して来たものと思われる。尾は正面から見ると幾つにも分れ、全世界の人類を戦慄させた。各民族は七頭七尾、九頭から百頭の竜、又は大蛇に関する伝説を後代に伝えた。ティアマート、ミッドガルド蛇、レルネアの九頭大蛇^{ヒュドラ}。ティフォン八俣大蛇。アリマン。セス。レビサン等々。そのあるものは天の東端から西端に及び、あるものは大地を一巻きして自分の口で尾をくわえ、あるものは八山八谷に連ったといわれる。

六月十一日早朝。レビの神に民族解放を祈願しつつ夜を明かしたモーセは薄明の中に意外な色彩を発見した。

「血だ。天から血が降った。神の示現は正しかったぞ。第一の予言は実現されたのだ」

沼も河も、凡ゆる水は血紅色に染まっていた。地球は遂に怪天体が彗星形に噴射する尾部の末端に触れたのだ。尾の尖端部は最も軽い物質で形成されていたが、四三酸化鉄その他水溶性赤色微粒子が地球表面に降下し、全世界の水を一時に赤く染めたのだった。

大臣イプワーは、この災変を免れて生き残り、天変地異をパピルスに書き残した。この

パピルスは発掘され、解説された。「ナイル河が血に変わった。水が無くてはエジプトは亡びる」とイプワーは書いている。これは聖書出埃及記七章二十節以下に合致する。

水が血に変わったのはエジプトだけではなかった。世界中の海・湖・河が一時に赤くなった。メキシコのマヤ族キシエ文書において大地震動した日に河が血になった昔の伝説を伝え、スレース人はティフォンの血で赤くなった山に血漿山^{ヘムス}の名を与え、北欧神話^{カレワラ}は世界の終末において世界を掩う血の雨を記し、東洋の一神話^{ひの}は肥河^{ひの}を赤く染めた八頭蛇の血流を語っている。

六月十二日。ナイル河は水中酸素の欠乏で斃死した魚の浮流死体で満たされ、悪臭は全エジプトに漲った。

「コルキュネ。起きて。助けて頂戴」

アリアドネは短い鎖で壁の環に手首をつながれていたから殆んど自由が効かなかった。いかに柔軟でも錠をかけた鎖から脱ける事は出来ない。比較的自由なコルキュネが起きて見ると衣服の間にも体の下にも夥しい蛙が侵入して来つつある所だった。水中から追い立てられた蛙は宮殿や神殿や民家や牢獄に上り込んだ。エジプト中が蛙に悩まされた。アリ

アドネが蛙を潰し、コルキュネがそれを窓から棄てた。蛙の害は数日に亘って続いた。

彗星本体の接近と共に地球は尾の濃密な部分と触れ始め、肉眼で視認し得る大きさの塵埃が降って来た。旧約聖書出埃及記第九章八節以下は、煤や灰のごとき微粒子が多量に落下した事を暗示する。これ等の宇宙塵的物質は地球の大気を通過して来た為、摩擦熱で人畜を火傷せしめるに足る程の状態となっていた。戸外で熱い塵に直接触れた者は皮膚表面に水疱性腫瘍を生じた。

「イプワーよ。神王^{フアラオ}を諫めて下さい。異変はこれだけで終わらないでしょう。宮殿も金銀も一旦放棄して穴居するよう奨めて下さい。アリアドネを釈放し、モーセ以下のハピル人に自由を与えなければなりません」

ハトシェプスト王妃は堅穴の上に天幕を張り、野外で粗衣粗食の生活をしていた。

「陛下も若し神王^{フアラオ}でなかったら、そのようになさりたいのかもしれないです。併し王者には臆病が許されないのです。どうか勇気を奮って陛下のお側にもどって下さい」

大臣は王妃を説得しようとした。だがこの時、天一杯に爆発音が響きわたった。閃光。走る火の玉。煙の帯が乱れ飛んだ。

地球は、彗星の尾の中心へと、突き進んでいた。聖書の大音響^{コソント}は雷と訳されているが、隕石の落下に伴う摩擦音や破裂音であろう。落下物は、塵から隕石へと次第に大きくなった。聖書の記すバラドとは、地に落ちると同時に火となって燃え上る電ではなく、赤熱せる隕石の豪雨であつたと思われる。収容せざるに残されていた家畜は打ち倒された。イプワ^イは、パピルスに「樹木も穀物も打ち倒された」有様を記した。これは聖書の記述と一致する。

モーセ始めハピル人達も、これ程の天災は予期していなかった。

「見よ。エジプトは亡びるぞ。蝗の害。嵐。暗黒。そして海の分れる時、我々の自由を得る時が来るのだ」

モーセは叫び続けたがハピル人自体も石の雨に打たれて逃げ惑っていた。

怪天体の引力が潮汐作用を及ぼし始めた。その摩擦は一時的に地球の自転速度を遅らせた。聖書は三日連続の夜を記しているが、支那の年代記は十日間沈まなかった太陽を伝えている。剛体としての地球は一時停止したが大気は慣性で運動を持続した。巨大な西風が両極地方を除く全世界を吹き荒れた。

地殻の内部では熔岩が摩擦して発熱した。西風は熱風と変った。異状高温の中に夥しい蛇、蛇、蝗が発生した。アフリカの蝗群は通常シロコ風と共に移動するが、今回の大天災に際してはリビヤの奥に生じた害虫の大群がエジプトに殺到して隕石雨に荒された畑の残る青物を喰い尽くした。聖書は害虫がエジプト全土にいかなる惨害を被らせたかを鮮烈に描写し、且つ蝗の群が停止する所も知らずに東方へ移動し続け、紅海に消えて行く有様を暗示に富む文章で伝えている。

オリエント一帯を含む地域は夜の側において停止するか乃至緩速化した。怪天体の吐き出す粒子、炭化水素、及び地殻熱に依って生じた多量の水蒸気は世界の空を掩った。灯火は前代未聞の西風に吹き消された。

「アリアドネ」

風の唸りの中から微かに人声が聞き分けられた。コルキュネ^コのではない女の声だった。

「誰方です」

鎖を鳴らしてアリアドネが起き上った。

「ハトシエプスト^{フテラオ}です。頑迷な夫に代って貴女に頼みます。神王とエジプトの為に祈って下さい」

窓から何かが投げ込まれた。鎖を解く鍵だ

った。アリアドネは窓の方を向いて叫んだ。「王妃様。斯うなつては免れる方法はありません。地の中に穴を掘って待つだけです」

だがその声は一陣の突風と共に厚い闇の中に吹き消された。王妃の気配も解らない。

半時間後。鎖を解いたアリアドネとコルキュネは嵐の中によろめき出していた。時に六月二十日。(ユダヤ暦一月十四日) 過越の日である。地殻と熔岩圈の不均衡は全世界に亘る大地震を惹起した。凡ゆる火山が一斉に活動を開始した。神の衝撃^{ノガフ}がエジプトの宮殿、神殿、牢獄を打った。

「アリアドネ様。危い」

どう音と共に宮殿の柱廊が裂けた。大地は波のごとく揺れた。嵐は尚も、その上を吹き捲る。

「コルキュネ。早く」

人間の絶叫などは物の数ではない。すべては地響きと破片と土煙の中に掻き消えた。

(未完)

× × ×

× × ×

アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成！

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

〔出演モデル〕 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売切れですが、「美4」「美5」「美6」は只今在庫しております。引続いて「美7」「美8」の企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌になとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をはだけ (山原)
荒縄と荒蕪で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しぼり (山原)
赤いオシメカパー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカパーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)	手摺りに開股責め (梨花)
両手吊りに耐えぬく (玉田)	裸身の開股縛り (大塚)
後手吊り麻柱晒し (山原)	お茶目ぶり発揮 (長野)
ネットをかぶらせる (梨花)	猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)
山の木に曝す (絹川)	高島田の全裸の縛り (山原)
庭前に見せる艶姿 (山原)	裸身にハイヒール (大塚)
高小手足首縛り (大塚)	プロックの石抱き (木村)
手ぐさり足枷 (絹川)	生ゴムの猿ぐつわ (大塚)
裸身に光と影の綾 (大塚)	緊縛の悦慮表情 (梨花)
後手は高々と吊り (梨花)	後手に縛はきびしく (刑部)
木馬に跨がる乙女 (大塚)	豊満に挑戦する縄 (東浦)
逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)	黒紐は白肌に映える (絹川)
デニムの拘束衣 (大塚)	裸身を踏まれる (大塚)
海老縛りに耐える (東浦)	破られたシニミーズ (梨花)
女囚第六十三号 (梨花)	六尺棒は白く映える (大塚)
吐きだした布片 (絹川)	いたぶられる足 (梨花)
白肌にフンドシ縛り (大塚)	蕨の中の緊縛肢体 (大塚)
後手の背面さらし (山原)	鼻責めにあう晃子 (鈴木)
柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)	責めに酔う恍惚境 (東浦)
後手吊りに浮かぶ女 (梨花)	逆エビにもだえる (山原)
鎖に吊られた両手 (大塚)	椅子責め媚態 (大塚)
黒革製の猿ぐつわ (新井)	見事な臍窩を晒す (大塚)
スタレの中の晒し (玉田)	豊満を割る縦縛り (東浦)
巻煙草責め (大塚)	足下にもがき苦しむ (新井)
日本髪腰巻しぼり (山原)	黒革のフンドシ縛り (大塚)
後手高小手しぼり (絹川)	浣腸器の恐怖 (大塚)
立木縛りムチ打ち (桜井)	美肌は縄に酔う (長野)
エビしぼり苦悶姿態 (梨花)	吊られ吊られて (木村)
高島田着物あて姿 (山原)	白禪の後手しぼり (大塚)
臀部誇張股間縛り (大塚)	責めに愉悅する女 (山原)
強烈な後手と乳房 (梨花)	マゾの境地露呈 (木村)
脱げかけたズロース (絹川)	プレイに疲れはてる (絹川)
柱に後手しぼり (玉田)	乳房は光り輝やく (大塚)
強烈な鼻ひねり (大塚)	全裸美プラス縄目 (長野)
足挙げ椅子しぼり (東浦)	

女性切腹随想

高野原美



このところ一時は花と咲いた女性切腹も、影をひそめてしまい、淋しいかぎりである。女性の豊満な腹部を愛し、その愛すべき豊かな皮下脂肪の皮膚を切り裂いて神秘的な内臓を露出して悶える色白の女体の魅力は、私の心を惹きつけてやまない。女体切腹は、その

対象が神聖な神秘にみちた女体であるだけに尽きぬ魅力がある。美しいものを徹底的に痛めつけ、その若しみ悶え呻く姿は、だれしも男性が潜在的に持っているサジスチックな心理を満足させるものと云えるでしょう。奇ク誌も、最近グラフィア頁も廃止し、

酷なショッキング場面を極力排除して、青少年保護条令として暴れ廻っている無法物と対決し、無理に事を起さぬ方針をとっておられる時だけに、没になっている原稿も多いのではないかと思われる。

私も、女性切腹のファンとして、遅筆のため筆は進まないのも毎月とは行かないが、女性切腹、妊婦膨満腹、女体解剖を題材として女の腹部の妖しい魅力を書いて来た。それだけに女性の魅力的な腹の作品が少ないことに失望し、もう一度花を咲かせて欲しいと望むのです。

今日、分譲フォトだけは、大塚啓子嬢が独り気焔を吐いて女性切腹の悲壯美をファンの前に、その豊満な肉体で演じているが、それだけに本誌の上でも、もっと作品があらわれることを希望するのです。

○

少し前の記事になるが、大塚啓子嬢の切腹フォトについて意見がでていた。立腹は「なよなよしたポーズでは切れないと思います。ヒザをし、しっかり開いてふんばらないと力が入りません」刀の持ち方は「コブシを腹に当てて引く位にしないで、深さが加減できず深く突込みすぎて引き回せない」と分譲フォト

についての鋭い批評があった。

今日まで数多くの分譲フォトが出されているが、それに対して意見は、かぞえるほどしかでていないようです。奇ク誌の評価は高く今迄は古本屋で山積みになっていたのであるが、殆んど姿を消してしまい、たまに豪華なグラビア時代のものを発見しても、定価よりも高価な価をつけてあると云う状態である。

人間性を徹底的に追求して、その上品な仮面を剥ぎ取り、その裏面に横臥わる動物本能的な醜の中から、本当の意味の暖かい人間味を美しく描き出す。それだけに人間臭が強く、仮面をかぶって粧った疑似紳士的な親しみが感じられるのである。

奇ク誌ほど、美しく粧い、上品な言葉を使い、自分たちだけが神聖な人間様であるとお高くとまり、羞しそうにしなをつくる女性を徹底的にあばき仮面を剥いだものはないでしょう。近代文明の中で、最も原始的な自然のままの人間を描き出し、羞恥を取り除き、美しい女性に真白い豊かな臀部をむき出しにして、野外で大小便を、それも男性の目の前でさせる位のことを演じさせている本誌の英断は、風俗雑誌として、また人間の秘められた心理の探究として後世にのこる大事業をして

いるものと云わねばならない。

それだけに分譲フォトも、擬態とは云えども真迫に近いものが要求されてもいいのではないかと思う。その意味でも「分譲フォト批判」の頁をさいて、読者の批評、意見等も掲載し、よりよい分譲フォトを発表してゆかれることを望むのです。

○

沖田氏が、「切腹マニアである半面大小腸とか、女性だけの下腹部内の胎児を宿す諸臓器には特に深い興味を持っている内臓マニアでもあるのです。今後真実味溢れる切腹画を描く為にも参考資料としては是非解剖写真（出来るだけ女性の）を、入手して戴きたいのです。其の訳は解剖による皮肉を切裂いた時の創口の開き方、創口から見た内臓の列び具合又傷口から流れだした腸、たれ下り重なり合った腸管の様子、其の他諸臓器の実物の色とか腸の曲形などを正しく知ることにあるのです」と熱心な質問を提出しておられたが、その場だけに終り回答はなかったようなので女体切腹や解剖ファンのために要点だけを記しておきたい。精しいことは解剖学・法医学・外科手術学書を参考にしていただきたい。

○

艶やかな白い肌は、皮膚と皮下脂肪よりなっている。皮膚の厚みは〇・三七―五ミリ位であって、女性の場合は男性より薄く、また前部は背（側）部よりも薄い。この内側に皮下脂肪があり女性の場合は、からだの曲線美をなし豊満な美しさを見せている。特に日本の女性の場合は、臍部の臍の下部に豊かな皮下脂肪がつく傾向にあり、俗に下腹部が膨れると云う状態になります。そのため、臍下を切る切腹の場合には、その脂肪のため刀を突立てることも、引廻すことも非常に力を要し切り開いた時に、切り口から黄色い（今迄数篇の本誌の作品で白い脂肪がとあったが誤りです）皮下脂肪が顔を出して来ます。この場合、引締って張切った腹の女性ほど、皮下脂肪は大きくその姿をあらわして来ます。

この内側に腹筋が姿を見せて来ます。この筋肉は、臍をはさんで両側によく發育した腹直筋が縦に走り、この脇腹側に三層の筋肉が脇腹にかけて走っています。即ち外側から外腹斜筋・内腹斜筋・腹横筋であります。これらの腹筋の健膜が前腹壁の真中、正中線で合して白線をなしています。ですから臍を通る縦の線のところには、筋肉は欠いており、よく女性切腹の作品で「臍の下のところ激痛

におそわれ」と白線の部分が最も痛いように書かれています。これも間違っているようです。

ただし臍の丸い窪みに「刀を突き刺すとジーンと痺れるような痛み」とあるのは、この部分に皮下脂肪がないため、同じ力で引廻してきた刀がより深く突立ち、従ってその直下の腹膜に触れ、そのため激しく痛むと解釈するなら妥当なようです。

この場合の腹膜は、大網といって脂肪がべっとりとのった膜で、これは小腸や大腸全体の前を、おおうように前腹部に垂れ下がっています。

腹を切った場合、皮膚や筋肉の痛みは、勿論激痛として感じられます。しかし、同じ疼痛でも内臓では不快感を伴う激痛で、腹膜まで刀が突き立てられると嘔吐、失心がおこり易く、反射的に顔面の蒼白、冷汗、流涎、瞳孔散大、血圧降下、排尿、排便などが起ります。腹膜には、脳脊髄神経が通っているのです。特に激しい痛みを感じるのです。

小腸は、帯橙白色で六米余りの管になった臓器です。十二指腸は、胃の幽門からはじまり、長さ二五センチ、巾四一六センチでC字形に曲り、その彎曲部に脾臓の頭部を入れ、

この大部分は、腹膜で腹腔の後壁に固着しています。空腸は二・五米、巾二・七センチで左上腹部に、回腸は三・五米、巾二・五センチで右下腹部にあり、長い腸間膜と呼ばれる腹膜をもっており移動性があります。この腸間膜は、一二二五センチの長さがあるので腹を切った場合、空・回腸は、切り口よりその姿を現わす原因となります。

大腸は、腹腔の外周に沿って、馬蹄形に走り、約一・七米で直径は約七・五センチの管になっています。淡橙色をしています。盲腸は右下腹部にあって行きつまりの嚢をなし、その先に虫様突起を持つ五―六センチの短い腸で、発育の弱い、盲腸間膜で左後腹壁に癒着している。結腸は上行結腸二十センチ、横行結腸五十センチ、下行結腸二五センチ、S字状結腸四五センチからなり、直腸二十センチに連なっています。

上行結腸は横行結腸に移行する右結腸曲の付近では短い腸間膜を有するが、他は直接後腹壁に接着し、横行結腸は普通は胃の下側、即ち臍の上を横に走るが、充滿している時は臍より下方に移動する。これは長い横行結腸間膜があるため可動性にとんでいるためである。下行結腸は直接腹後壁に接着しているが

S状結腸は結腸間膜を有し可動性に富む。結腸は、他の腸と異なり外景が変化を見せている。即ち結腸紐という紐状の筋肉が三本縦に走り、そのため結腸膨起という膨出部をつくっている。

女性の場合、腹部臓器として女子生殖器である卵巣、卵管、子宮、膣がみられるが、これらは骨盤腔内の下腹部に存在し、膀胱（帯橙白色）の後部にある。

卵巣は、長さ三センチ、巾一・五センチ、厚さ一センチほどの帯赤灰白色の臓器で、表面は卵胞の隆起のため半球形隆起、排卵後の癒退などのため凹凸を呈している。卵管は子宮に連なり帯橙白色七―十五センチ、巾二―八ミリの細い管である。子宮は腔に連なり帯橙白色で全長七センチ、最大巾四・三センチ厚さ二・五センチの臓器である。

○

切腹は、一般の場合、臍の下方を切り裂くので、先ず皮膚とその下の厚い皮下脂肪を切り、腹筋まで切断する。深く突立てると大網―脂肪にとんだ腹膜まで達するので内部臓器が露出してくる無念腹になる。露出されるのは、腸間膜で腹後壁に固着されている臓器に限られるので、空回腸および横行結腸と云う

ことになる。

その他、日本人の場合は胃下垂が多いので胃が臍下まで垂れ下っているときには当然見えて来ます。

下腹部を切り裂いたとき、普通の筋肉層までの切腹の場合には、女性では下腹部の皮下脂肪が厚いので切り口からザクロの様に黄色い脂肪がとび出して傷口を覆うように露出し出血は余りひどいものではありません。血汐は白い下腹部の豊かな隆起を糸のような筋を引いて流れ、余程のことがない限り下腹部を真赤に染め太腿まで流れた血汐が朱に染めて溜ると云うことはないでしょう。浅く切った場合の出血は思ったより少ないものです。

切り裂くと云うことですが、女性の弾力に富んだ脂肪質のお腹は、刀を突立てるのも大変な努力がいるでしょう。下腹を膨らし力を入れて腹壁を張るようにして突立てないと簡単には突立てることはできません。そのためには立腹であるか又は、正座したとしても、やや腰を浮かすか上体を反らす等によって腹壁を緊張させねばなりません。決して上体を前に屈して下腹部が見える状態では切れません。女性が切腹の時に腰紐で太腿を縛るのは切る時に体を後に反らせ下腹部を突き出すよ

うにして切り裂いて行くため、仰向に倒れ、その時に着物の裾が乱れ羞しい太腿が見えることを怖れるためなので、前に倒れるならその心配はないのです。

また切ると云うのも脂肪や筋肉は簡単にきれませんが、解剖などでもメスの刃を皮膚の上を滑らせるようにして切るから切れるのである、深く突き立て、そのまま引っ張っても切れるものではありません。ですから刀を左脇腹に軽く突立て、腹の皮膚の上から力を入れて刀を滑るようにして引き廻す。その力の強さが深さを決定づける訳です。力一杯、両手で左脇腹に深々と刀を突立てたとしても、その深さのまま右に引張っても刀はビクともするものではない。その時は、刀を抜き気味に滑らせて引かねば切れない。これは肉を包丁で色々に切って見られると納得が行くことでしょう。

切腹は、前作『新・解体新書』でも触れておいたように至難の業であり、侍でも失敗して生きかえる位のものであり、簡単にはそれだけでは死ぬものではない。必ず他の致死的手段を併用しなければ長時間悶々として苦しみ続けます。勿論仰向けに倒れ伏して苦悶し続けます。

私は、最近では切腹分譲フォトを見ていませんが、大塚啓子嬢の『血紅切腹連続写真』や『美しき女の屍体』『切腹に苦悶する女』等女体切腹のフォトが真迫の演技で理論通りに撮られているかどうか知りたい気持ちは切なるものがあります。最初の頃は、啓子嬢の切腹フォトも、下腹部の緊張がたりず、前屈みの姿勢で豊かな腹に刀を当てていたのですが、どれ程成長していることでしょう。

大塚嬢の切腹フォトの演技指導も許されるなら、やって見たいものです。

余談になりましたが、沖田氏ほか女体切腹、解剖マニアの参考にでもなれば、幸せであります。なお、女性の解剖写真は入手は不可能です。人間の解剖は故人の人格も考え、また遺族の承諾を得て学問の発展のため行なうもので、興味半分のものではなく、学問的には写真を撮っても、一切門外不出のものであるべきものです。

×

×

×

×

×

×

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

「妻の写真にそえて」

河村 操

――縛った女の思い出――

結婚して十三年くらいになります。独身時代には商売女を四人ばかり、縛ったことがあります。貧しい経験でお恥ずかしいことです。が、女性を縛った経験はこの女たちと妻を入れて五人、これが小生の体験のすべてです。

五人のうちでは四人目の女性（美佐子）が一番縛りに協力してくれたように思います。しかし総じてみんな、ほんとうの協力者であったとは思いません。しかし、それでよかったとも思っています。もしほんとに理解し協力してくれるような女性にであっていたら、それこそ底なし沼におちこむように溺れこんでいたかも知れないと思います。所せん私共

はアマチュアで、平凡な日常生活のほんのかたわらに、秘かにアバンチュールを楽しんでゆこうという凡人にすぎないのですから。

最初の女性は和歌山の女でした。和歌浦のある旅館の一室でした。夏の暑い夜、蚊帳の中で寝巻の前をはだけ乍ら、尚むしむしと汗ばむ頃でした。女は勝気な性^{さが}でした。もうその頃はすこしお互いにあきが来かけている頃で、酒も入っていました。ちわけんかの様なことから発展して、いや発展さして「くくってしまうぞ」とばかりに寝巻の紐で後手に縛りました。随分抵抗して蚊帳の中を転げまわって逃げましたが、決して本気で逃げたの

でもないわけです。

結局両手首をうしろ手に縛られてしまうと女は「こんなこととして、私このまま帳場へ逃げていって、こんなに括られたといいつけてやる」などといっていました。さきほどもいうように勝気で、男まさりの女ですから、多分に口惜しさもあったようです。手首の後手だけでしたが、しかしそんなことが、かえって印象的で、いまに当時のことを覚えている次第です。

二人目の女は、大阪南の某遊廓の女郎でした。美しくはないが若くて、見事な肉体を持っていました。酔っぱらって友人と出かけ



見さかいもなくあがった家の妓でしたが、酔いにまかせて、「俺は女を縛るんだ」というようなことをいったとみえます。その妓が急に「くくってよ。さあ早くくくって」といい乍ら丸はだかになって床に俯伏せになり両手を背中にもわしているあたりで、だんだんこちらの意識がよみがえってきたのです。

まだ酔眼もうろうでいささかとまどっていると、「なにしてるのよ。早くしなさいよ」といわれて、「よーっ」とばかり私の帯と女のしごきを取りませて後手にしばりました。まず手首を重ねて縛り、もう一本で豊かな胸から二の腕をしめて、さきほどの手首を縛った紐につないだのです。

しかし豊満な肉体には何程の緊縛感もなかったと思います。しかし妓は自分で「くくってくれ」と要求し乍ら、さして深い経験をもっているようでもなく、その程度の縛りで明らかに昂奮しているようでした。俄に縛られた裸身体で立上ると、「お小用にゆきたい」といい出します。「便所か」と思わずききかえました。折角縛ったのに、すぐ解いてやるのが惜しかったからです。ところが、妓は「着物着せてよ。前を押えてついてきて」というのです。

情ない話ですが、この役断わるわけにはまいません。「よし」とばかりに脱ぎすててあった女の着物を肩から羽織らして、後ろから合わせた前を押えて

やり乍ら、部屋の外へ、少しばかり離れた便所へついていったものです。便所へ入れば勿論着物をまくりあげてやる。白い肌と胸にかかった縄目をみせ乍ら、彼女は勇敢にやりました。そして私の方をみて「恥かしいわ」といったものです。

この妓は確かにマゾ性がありました。部屋へ戻ってから、私は次回を約束しました。しかしそれは勿論縛りの約束です。そして、こんなしごきや紐では駄目だから、麻縄を用意しろといったのです。「用意するわ。だけどそんなものあるかしら」としばらく考えて、「そうだ。裏の物置きに入ってるかも知れないわ」と申します。何も妓に用意させなくとも、私がつけてくればよいようなものですがその辺が女に自分のくくられる縄を自分で用意さすという何ともいえない楽しみのあるところでした。（この後も私はそうしました）同時に籠の鳥の女郎の身で自由な世界に目をむけず、なんとか籠の中で自分の周囲に縄をみつけようと考えている妓の身を、あわれと思う感情も動きました。

そしてこの時の約束は実行されたのです。私は又酔っぱらってその家へ行き、その妓のところにあがりました。その時、妓はたんす



の中から、真黒に油かなんかで染まっている丈夫そうな麻縄を、数条とりだしてみせたのです。「用意しておいたわ」と彼女はいいました。

その夜は私は前よりも酔っぱらっていました。今から思っても縛っていった過程を思い出せないのですが、とにかく首縄後手高手小手のガンジガラミに縛って彼女はヒイヒイ悲鳴をあげたのです。とうとう隣の部屋の妓がききつけて、やり手婆が入ってきました。婆

は「まあこんなに縛って」と私をにらみ乍ら縄をときました。素面なら到底居たたまれない場面になったのですが、案外私は朝までいたし、妓も婆にしかられ乍ら、結構つきあっていました。しかし流石にそれ以来、その家に入る気になれませんでした。

三人目は姫路の女です。スラリとした背恰好でスタイルが良く美しい目をして実は一番ほれた女です。仲々縛る段階にゆけませんでしたが、あるとき有馬温泉に一泊旅行をしました。

明け方の薄明りが真白の障子をとおして、部屋の中を青くそめていました。湯治場の朝の気分は又格別です。私は女を抱きよせ乍ら俯伏にし、背中によって冗談のように彼女の両手を後手にまわしました。「くくってしまうかな」といってみると、「いやよ」含み笑いをしながら本気にしません。その声音に力

を得て、素早く寝巻の紐で両手首を括り合わせました。

「まあ、いやっ。ほんとに、くくってしまうなんて、やめて。やめて」

意外に強い反発であり、これ以上は、とてもすすめそうになく、適当にきりあげる方が無難だと思いました。しかしこれだけでは、どうしても虫がおさまらず、又神戸市内の某旅館に泊ったとき、試みました。その時には相当つき合いも回を重ね、女に対する自信も深まっていたので、多少の抵抗は覚悟の上でした。いきなり両肩肌を脱がし、ほっそりと青白い素肌に胸にかけて紐をまき、後手に縛りました。

このときも随分いやがりすぐほかしてしまいました。縛りに対する嫌悪感をどの女よりも一番感じさす態度でしたが、しかし女というものは妙なもので、そんな中にも、一方では自分の一番微妙な真底の感情を縛られるということによって、男の前にさらけ出すのをおそれて、逃げるのだとも思わすところがあるのです。手前勝手な判断かも知れませんが、決してそのことから逃げ去るのでなく、といって自分からそこに手をさしだすことはないが、何となくそのまわりをウロウロしてい



るといような態度を示すものだということ
を、実感で知ったのです。

この女はその後高知までつれて行きました
が、大阪港から高知行の一等船室の中で、ま
た縛ってやろうとしました。ところが残念な
ことに縄の持ち合せがありません。船の寝巻
は短い紐しかついてないし、女は洋装でしご
きもないという有様で、全くお手あげです。

彼女はいたずらそうに笑って「今日はお気
の毒ね。なんにもありませんわ」といいまし

た。デパートの買い物包みの紐が目についた
ので、「これでくくってやるぞ」といったの
ですが、到底役に立ちそうもなく感じも出ま
せん。涙をのんだ次第です。その女とも、な
んとなく別れてしまって六、七年もたった頃
大阪のさるバーでひよっこりあいました。懐
しさにかられて数度通いましたが、彼女は同
席の友だちなどのいる前で、「カーさんに私
むかしは随分いじめられたのよ」などと目で
物いわし乍ら、思わせぶりをいうのです。そ

んなことをいわれると
あの程度のことなのに
十分に縛りに関心をも
っていたのだなと思わ
ざるをえないものです
から、それなら今度こ
そと執心をもやしたの
ですがこれも手管の一
つかも知れません。結
局はそのこともなく、
いつか又別れてしま
いました。

四人目は数年前に本
誌に「月明に泣く」と
いう題で投稿したとこ

ろ、思わずも掲載をして頂いた中の美佐子で
す。勝手なことをいわして貰えば彼女は私を
愛し、私の関心をひくが為に、私の性情を理
解して自分から「くくってほしい」といった
女です。それだけに美佐子のことは、私には
いまも忘れられない思い出のある女です。

以上の四人は、いずれも商売女又はそれに
近い職業の女でした。私が彼女らに近づいた
のは、その職業に応じた金銭を媒介としてで
したが、しかし縛りということは彼女らの職
業の中にあつたわけではありません。縛りは
私と彼女達の間の感情的和合の中から生
れた、私はそう解釈したいのです。

だから誰かを縛りたいと、ただそれのみで
面識もない人を求めるのは、無理な話しだと
思います。縛るということも、結局は男女の
愛情の基盤から発露するものでありたいと思
うのです。

妻は早くからなんとなく訓練してきたつも
りです。それでも今もって全く非協力的なの
で嫌になってしまいます。同封の写真は近年
のものですが、ご笑覧頂ければ幸いです。衣
裳は私の好みですが、近頃はすこしまだ違っ
たものも用意しています。



八^や重^え桜^{ざくら}

／＼花物語・3／＼

万 田 不 仁

春の夜ふけである。元寺社奉行鴻巣主膳は愛妾勢以と同衾して絵草紙を見ていた。役職を退いてからの彼は朋山と号し、かねて趣味のあった書画骨董、俳諧などを楽しむ平穩な日々を過ごしていた。

「フッフ、旦那様、今夜のは、また少し変わった趣向で、ございますのネ、絵は雪麿ですか？」

横目に極彩色の絵をながめた勢以があくびをおさえたような声で聞く。むっちりとした体のいい年増女の勢以には還暦に達した朋山の老の血を暖めるに必要な読み本や絵草紙のたぐいが子供だましの玩具ほどにしか思えない。

「いや、これは宇多川英鳥じゃ、文はいま評判の柳亭寅彦、文といい絵といい、あいまって、なかなかおもしろい」

そう応えて、朋山があまり興味のなさそうな妾にちらちらと頁を繰って示した絵草紙の題は「艶色女武者暦」贅沢な刷りのあぶな絵が行灯のあかりに、どぎつい色合いをさらしている。

描くところは、女武者のさまざまな組討ちの図であった。

板額と浅利冠者と与市の一騎打ちがある。矢を肩に受けて落馬した板額をいけどりにすべく与市が上に乗って、力いっぱい押えつけて

いる。板額は「星月夜頭晦録」によれば「容貌甚だ醜く、頗る般若の面に似て、色殊に黒し」という醜女だが、ここには緋おどしの鎧の似合う色白の豊満な美女に描き、紺いとおどしの大鎧に身を固めたむくつけき与市の武者ぶりに対し、征服される女のあわれさを現わして、そこに見る者の嗜虐欲を刺激する絵師のはからいが露骨にうかがわれた。組討ち図と言ってもあぶな絵なのだから双方ともみな華やかな鎧の下はまっ裸で、組敷かれた板額の必死にもがく両足の開きよう、草摺りがはねあがって、あらわになった白い内腿、そこへ誇張して描きこまれた逞しい与市の男の

なやみ、与市の足の剛そうな毛胫など、あくどい秘画の趣きをたっぷり盛り上げた緊密な筆はこびだ。

巴御前と内田三郎家吉の組討ちがある。六十人力と言われた家吉も旭將軍の愛妾巴の豪力にはかなわず馬のりに組敷かれている。巴の萌黄おどしの鎧の草摺りがよじれ、まぐれて女武者の青白い太腿の下に家吉の秘画の男特有の恍惚とした顔がある。その表情がまた大きな瞳をみひらいた巴のきつい顔つきと対照して、被虐を好む読者の陰った心に充分訴えている。

織田信忠が諏訪莊右エ門の妻女と戦っている。細面の可憐な女房は信忠に眉尖刀を叩き落とされ、体を海老のように押し曲げられむざんに押えつけられている。信忠の白羽二重の下帯と女房の緋の下帯びが結んだように絡んで、両者のはだかの脚がややこしくもつれている。

長尾為景の妾松江とうら若い雑兵。血に染まった白糸おどしの鎧を着た大柄な松江の膝下に粗末な雑兵具足をつけた少年がのし鳥賊みたいに押しひしがれている。松江の大きな尻の下に少年のほっそりした両脚がぐったりと延びて、目を閉じた少年の顔には年上の女

に馬のりに跨られ、いじめられ、なぶられる欲びの色が浮かんでいる。

「ねエ、旦那さま、もうおよりになったらいかか？ フッフ今夜は私、巴になりましたよ、か、それとも板額に？」

勢以の白い手が朋山からやんわりと絵草紙を取りあげた。

肉置きがいい女の体の重みがしっとり朋山の下腹の上に加わったとき、にわかに廊下にとどっとただならぬ音がした。

「くせ者、動くなッ」

そんな声とともに激しく雨戸が外されたらしい物音に、朋山は、枕刀を取って飛び起きた。

気丈な勢以が戸を開けて見ると、庭の雪見灯籠の前にぼうッと霞がかった春月の黄ばんだ光を浴びて、覆面、紫がかった忍者風の装束の者が中腰の構えで立っていた。

「なに者！」

朋山が老眼をこらす間に追いついた家士の一人が手槍を鋭くくせ者の胸板目掛けて突き出していた。

びゅッ——濃い紫の影が瞬間怪鳥のように躍りあがった。月かげにぶく一条の線が光って伸びたかと思うと、家士は槍を取り落し

片手に顔を蔽うて、どうと芝に倒れ伏した。

「狼藉者、神妙にせい」

傷手にくず折れた家士の体を飛び起すようにして上背のある第二の家士が長い刀をふりかざして斬りかかっていった。紫の影は飛びすさり、築山のほうへ逃げながら右手を挙げて、また、きらッと光の条を放った。うわッと言う悲鳴が第二の家士の口から出た。

——くさり鎌だ。朋山はようやくさとした。築山の陰へ走り去るくせ者の左手にぎらりと月かげをはじいた鎌があったのを朋山は確かに見て取った。

★

加代は非常な決心をして家を出た。全く金に困っていた。

横山町の筆問屋の職人だった兄の庄吉の病がひどく悪かった。

寒の明けぎわに降った大雪が江戸中を真白にした。その雪の溶けだすころから春の暖気に病も動くのか、庄吉の労咳は一段と悪化し何度も血をはいた。とうぜん薬代もかさんで加代が賃仕事や洗濯で得る僅かな金ではどうにも世帯がやっていけなくなっていた。

行く先は常磐津の師匠文字清のうら店ながら小ぎれいな住居だ。急ぎ足の加代は道々頭

「春になって風邪ひいちゃったよ、花見だつてえのに、意気地がないや、兄さんのあんばいはどうだえ？」

いつもの愛想よい文字清の笑顔に

「はい、ありがとうございます、そのことで実は今日は……」

と、加代は急流を泳ぎ渡るような思い切った表情で、常磐津の師匠の目を見返した。

先日、顔を見せた娘だという若い女は留守で、その娘の部屋になっている四畳半で加代は耐えがたい恥を忍んだ。朱塗りの衣桁に娘のものらしいきれいな春着が掛かっていて、加代は気楽そうなその娘とわが身の上とをくらべて、ふっと泪ぐんだ。

何とも羞恥の情を抑えがたく、うつ向いて文字清のいれてくれた茶をのんでいると客が

挿絵画家 募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応募を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。

○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。

来た。

やせた、顔色のよくない中年の男だった。

加代はそれをしおに座を立った。

「あれは与力だよ。やもめで、うるさく通ってくるんだよ、なあにネ、常磐津なんかうまくなるしろもんじゃないんだよ」

玄関に送って来た文字清が囁いた。それから、

「お前さんも承知だろうが、ちかごろお大名や旗本衆の奥向きを荒らしている女泥棒、あれがまたゆうべ本所の南割下水の木原様とかいうお旗本の家へ忍びこんだそうだよ、ほんに女ながら肝の太いやつだねエ、あの与力はそいつを縛ろうと一生懸命なのサ、あれでも稼業のほうは仲々のものだそうだよ」

と、小声で言った。

☆

行灯の明りは暗くしてある。

体を横たえるとぶっかり沈みこむ柔らかな褥に仰向けに寝た朋山の胸の上に勢以が馬のりに乗って男の首を両手で締めつけていた。

閨房で交わされる秘密の悦楽にはいる前によく行なう戯れのひとつだった。

上に跨って、男の首を締めあげようとする女の手を男の手がさえぎる。男の両足がしき

りに空を蹴り、蹠が褥をすべる。しかし、小柄の老いた男の抵抗は、いい体格の三十女の力に永くあらがえるものではない。先ず男の右腕が強引に女の左の膝頭に敷かれる。つぎに女は両手で男の左手を掴み、右の膝にそれを固く敷きこんでしまふ。そしてやおら男の喉を締めにかかるのである。もう何度もこんなことをしている勢以はいくらかめんど臭そうに朋山の性的嗜好に應えて演技している風があったが、朋山はその都度老の血を傾けてこの前戯に夢中になる。

それにしても湯巻きをしどけなく乱して、白くふくやかな腿を灯にさらしてする女の馬のりのいたぶりは朋山のような老人の回春剤としては、かなりあくの強いものには違いなかった。

朋山はやがてある快感にうめいた。

すると、いつか朋山をよるこぼせた絵草紙中の巴御前か松江のように男をどっかり組敷いている勢以の背後にふと黒い影が忍び寄った。勢以は己れの尻の下でマゾ的悦楽にひたっている朋山を、いっそうたんのうさせることにかかっている何も気付かぬ。

黒い影は、ふわりと広がって、勢以を後ろから抱きかかえるようにした。

低い、押し殺した気合いとともに勢以は朋山の上から横ざまにすり落ちた。

「やッ、何者？」

驚愕して起きなおる朋山の首へ影はにぶく光る一条の線を投げかけた。

「うわッ、慮外者！」

不意の闖入者に目をむいた朋山の首、つい今しがたまで愛妾のやわらかい白い手にじわじわ締められていた首に、くさり鎌の重たい分銅のついたくさがりがきりきり巻きついた。「静にしてくんな、おいら物取りじゃねエ。お前さんに傷をつけるような乱暴もしねエ。ただちよいといただきえてえものがあるんだ。ハハハ、じゃやっぱり物取りてえことになるかナ」

朋山の寝間に忍び入ったくせ者は低い、細い声で言った。

ほの暗い行灯の光で見ると、彼はどうやら藍微塵らしい袷を着て、裾をまくり上げ、芥子玉の手拭で頬かむりしている。

「だ、誰ぞ出……」

出合えと叫ぼうとした朋山は、首に巻かれたくさを強く引いたくせ者の力にもろくも蒲団にうつ伏した。その朋山の背にすかさず片膝かけたくせ者は、すばやくねじあげた朋

山の両手を黒っぽい細紐で緊縛した。

「窮屈だろうが、ついでに足も縛らしてもらうぜ」

ほんと蹴られて、仰向けにされた朋山の腹の上にくせ者は馬のりになった。

「声を出されちゃ迷惑だ。無益の殺生はしたくねエ、暫く辛抱してもらうぜ」

ふところから出した、紺の手拭でさるぐつわ。それからゆっくりと朋山の首からくさをはずし鎌を鞘におさめた。朋山はかりにも元寺社奉行だ。閨中の戯れの無防備なおりとはいえあまりの不覚、屈辱にさるぐつわのうちでせつなく唸いたが彼はくせ者に組敷かれ、頬かむりの間から見える長いまつ毛にけむる黒い瞳、己れの腹に跨っている相手の尻のやわらかさ、それに裾をはしよって下帯にきわ立つあらわな両腿の白さに、ふたたび目をむかざるを得なかった。（き、貴様女だな?!）と、朋山は叫びたかった。が言葉にならぬ。

「フフフフ、見破ったも見破られたもねエやナ、こうすりゃわかつちまう。おいら女だよ。フフフフ、察しがついたろう、昨今武家屋敷を狙ってる不敵な女賊てえのは私さ」女はどうにも抵抗しようのない朋山の胸の

上に尻を進めて

「お前さん、そこに当て身をくらって気絶しているお妾さんに、こんなにしてもらってたネ。私も女だ、女にこんな風にされるのは嫌いじゃないだろう。だが私はお前さんを馬にして祭文を語ってるひまがねエのサ。私がここに来たのはこいつさ、この屏風だ。これを剥がしていくよ」

こう言うと、女は立ちあがって、二曲一双の枕屏風の前にいった。

「この屏風にちりばめた女拓に用があつたのサ。いくら金に不自由しねエとはいえ、あんまりじゃないか、お前さん。金が欲しいばかりに女のだいじなところに墨をぬって、おやまア朱墨もあるぜ、こりやア大方生娘のじやないかね。こんなものはお前さんの気をたかぶらせる、薬かも知れねエが、悪い洒落だよ。はがしてくぜ、焼いちまうよ」

女は黒い、赤い、大きな花びらを散らしたような屏風の模様、女拓模様の表を比首の先で、すっかり切り取った。それからうつ伏している勢以を抱き起こし、活を入れると、たちまち廊下に出て足音もせず消えていった。家士たちを呼ぼうにも夢からさめたような勢以には声も出なかった。

☆

桜ももう八重桜のさかりになって、江戸の春も爛けていた。用足しに出た加代は花見客で賑わう町中で、そっと肩をたたかれた。

「あら、どなた様でしたかしら？」

桜模様の絵日傘をさした面長の小いきな女

に覚えがなかった。女は笑くぼを見せて笑っている。とっさに思い出せない顔だった。

「私よ、文字清の娘のおしん」

絵日傘をくるりと回した。そしてつと加代のそばにぴったり寄って、薄紙に包んだものを加代の手に押付けると

「これ、あんたのだいじなもの、お返しするから、さっそく焼きすててしまいなさいナ、じゃ」

と口早に言って、そのままさっさと人混みのなかに姿を消してしまった。

——なんでしょう？

加代は不審の思いで、人通りを道の片隅へ避けて、そっと紙包みを開いてみて、あっと驚いた。

女拓が、朱墨で薄い和紙に印した己れのはずかしい女のしるしが、上質の紙に鮮やかにあってあるではないか。耳たぶまで赤くなつた加代は急いで、それをふところ深くかくして、そそくさと歩きだした。

(おわり)

〔浣腸フォト新版〕

△山原清子が無類の浣腸マニア東浦ひかるに施す力作浣腸写真▽

○浣腸後介添排便

大手札六枚二組 一〇〇〇円 略号(かね)

○百CCの溶液注入

大手札六枚二組 一〇〇〇円 略号(かと)

○グリセリン溶液注腸

大手札六枚二組 一〇〇〇円 略号(かて)

○シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かた)

○イルリガートル

嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(かち)

○アース浣腸補助

大手札四枚二組 七〇〇円 略号(かの)

○イルリガートルの浣腸

大手札十枚二組 一五〇〇円 略号(かも)

○オシメを着用させる

大手札六枚二組 一〇〇〇円 略号(むし)

○ゴム製力バー着用

大手札六枚一組 一〇〇〇円 略号(むに)

〔女相撲と女斗美写真〕

△湖畔女相撲(第一回)▽

モデル 大塚啓子、東浦ひかる

〔第一組〕 略号(すや)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

〔第二組〕 略号(すゆ)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

〔第三組〕 略号(すよ)

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二五〇〇円

△女斗美場面写真▽

〔砂浜での格闘〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すえ)

〔叢で止めをさす〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すう)

〔松林の中での死斗〕

大手札十二枚一組 一〇〇〇円 略号(すき)

〔責めフォト新版〕

○全裸強烈縛り

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なの)

○猿ぐつわにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なむ)

○真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なれ)

○膨大な臀部責め

大手札三枚一組 三〇〇円 略号(なに)

女相撲物語

“花の女斗美たち”

(5)

奮斗士好太

△カット・雪崎京人提供▽

つぎの日のことです。

登校して私が教室へ入ったとたんに

「おはよう」

松田さんが声をかけました。

きのう一日ですっかりうちとけてしまったのでした。そしてふたりとも、もうずっと以前から仲よしだったような気がするのです。

今までは、お話がしてみたいなあという気持があっても、何となくお互いに遠慮し合っていたようで、時たまお話をしても、話題が続かず、ポツン、ポツンと雨だれが落ちるみたいに、話のカケラを出し合って、そのくせもどかしく感じていたものでした。丁度目に見えないベールが、ふたりの間をへだてていた感じだったのが、一晩のうちにすっかり取

り払われて、今朝はもう松田さんの存在がスゴク身近かなものに思われるのです。

スポーツを通じて、おたがいに心と心を理解し合うものであるということは、これまでいろいろな本に書かれてあるのを読んでいたのですが、そのうえに相撲の場合は、マワシをつけていると言うものの、文字どおり素裸になって、おたがいのからだのシミズミまでも見せ合うのですから、これ以上親密なふれ合いはないと思うのです。

「立派な人って、何の飾りもつけない裸になったって、やっぱり、立派に見えるものなんだわ」

私は、きのうの松田さんのマワシ姿を思い浮かべました。

私が、始めてマワシを締めもらった時のことを今になってみると全く恥かしいばかりなのです。うれしいような、テレくさいような気持で、やたらと津野さんやヒロちゃんとふざけて、二年生の小林さんなどに叱られたのですが、松田さんは、そんな態度がちっともないのです。

落ちついた様子で今井さんや、笠原さんの注意に素直に耳をかたむけているのを見て、「立派だなァ」と思い、そしてますますこの人が好きになってしまったのです。

そんな松田さんにくらべると私たちの裸をけいべつした田村さんなんかは、自分を飾り立てておかまいと自信の持てない心の貧しい人なんだわと思い、あべこべにこっちがけい



そこらじゅうが痛くてヒイヒイ言ったんじやない？」

と聞きました。

きのう部屋で、ヒロちゃんからマワシを締めてもらった松田さんは、それから練習場へ入って、私たちの練習とは別に、笠原さんから個人指導みたいな形で、例の「そんきよの姿勢」だとか「四股の構え」などをミッチリと教えられたのでした。

笠原さんは、乱暴な口のきき方はしないし、親切な態度で教えてくれるので、ついそのペースに乗せられてしまうのですが、実はこのていねいに教えるというのがくせもので、シボラレているという気持ちのしないうちに笠原さんの思うままに、されてしまうのです。

ですから笠原さんにつかまったが最後、完全にグロッキーになってしまったことを覚悟しなければなりません。

しかし、そんなにグロッキーになってもスゴクシボラレタという気が起きないのは笠原さんの人柄が皆に好かれているからなのだと思うのです。

きのうの松田さんも、この「笠原ペース」にすっかり乗せられて汗ビッシヨリ、マワシ

を二回も締め直しをしなければならなかった程の猛練習でしたが、おしまいにはとうとう「もうダメ。わたし立てません」

半分泣き声のような悲鳴を上げて、ヘタバツてしまったのでした。

そして練習が終って部屋へもどってから「あァあ、わたし、お家まで歩いて帰れないかもしれないわ」

グッタリして、椅子に腰を下ろしたまま、しばらくはマワシを解く気力もなくなってしまうようなのでした。そして津野さんやヒロちゃんなど口の悪い人たちに

「どう？ 救急車を呼んであげようか」とか

「まあ今日は良いけど、明日が見ものネ。どこかの関節がはずれてないかレントゲンを撮ってもらたら」

と、からかわれて真顔で心配していたのです。松田さんはニッコリ笑うと、首を左右に曲げて

「おかげさまで、どうやら起きられたワ。でもからだを動かすと、やっぱり痛いわ」

と言いました。そして、声をひそめると

「でも、マワシってほんとにいい感じね。マワシを締めると気持ちまでピリッとするわ。わ

べつするのがほんとなのだと考えたのです。

「何を考えてるの」

松田さんに言われて、私はあわてて

「おはよう」

とあいさつを返してから

「どうだったの？今朝は無事に起きられた？」

たし、マワシを締めるなんて、きのうが始めてでしょ、スゴクテレちゃった」

松田さんはちょっと赤くなりました。そしてむこうの方で、おしゃべりをしているヒロちゃんを見ながら

「それに、あの人ったら、わたしが裸になってるのに、いつまでたってもおしゃべりばかりして、マワシを締めるのを手伝ってくれないでしょ、こっちはそれこそ一糸まとわぬ全裸だったのに、誰か入ってきやしないかと思って気がじゃなかったワ」

私もあの時の事を思い出して、素裸のままですわソワソワしていた松田さんの姿を考えてツインヤニヤ笑ってしまいました。松田さんは「アラ、笑わないでよ。ホントに恥かしかったワ」

「ごめんなさい。ヒロちゃんて、おしゃべりが始まると、止まらなくなっちゃうのよ。彼女、舌のブレーキが故障してるのよ」

「よく言っというてよ。でも、あなたが止めてくれたから助かったけど」

「ええ、言っておくわ。でも、そんなにテレビるようになんか見えなかったわ。スゴク落ちついていて、わたしホントに感心しちゃったんだけど」

「そう見てくれたのは、ありがたいけど、ほんとのところは、もう胸がドキドキして、立ってる感じがしないのよ。顔が赤くなるくらいなら、あたりまえなんですよけど、全裸になってるでしょ、もうまるでからだ中がカーッとほてるようだったわ」

「へー。わからなかったわ」

「だから、みんなを紹介された時だって、相手の人の顔がまぶしくてとても見れないの。だれが何さんていうのか、さっぱりわからなかったし、第一自分のからだ地面からはなれてるみたいなの。腰と股をこうギュッと締め上げられてるわけでしょう、何だかフワフワと浮き上がりそうなの奇妙な気持ちだったわ」

松田さんは、ちょっと興奮しているようでした。

「でも、あなたがマワシを締めているスタイルってなかなか、さっそうとしてるわね」

松田さんにそう言われて、私はびっくりしました。「アラ、そんなことないわ。わたしなんか鉛筆みだいに、ヒョロヒョロしてるから……」

「ウウン、そうじゃないわ。あなたは肥っていないけど、骨組がガッシリしてるから裸になった方が立派だわ。ウソだと思ったら今度

マワシを締めた時鏡にうつして見てごらん」

「アラ、そんな……」

彼女が、こんなにおしゃべりするのを見るのは初めてです。

「でもね、最初はそんなだったけど、そのうちになんかこうファイトが湧いてくるってのかしら、思いッ切り騒ぎたくなって、自分でもビックリしちゃった。お家へ帰ってから腰のあたりが熱ッポイの、いつまでもマワシをしてるみたいなの気持ちだったワ」

私はまるで自分のことを言われているみたいなのにびっくりし、思わず顔が赤くなりました。松田さんの言っていることは、私がやはり初めてマワシを締めてもらった時の気持ちとそっくりなのです。その時、私は二年生の榎本さんに締めるのを手伝ってもらったのでしたけれど、股や腰に、あのズッシリした肌ざわりのするマワシがグイグイと締め込まれてくるのにつれて、おなかの中に熱いものが生まれて、それが喉の方につき上がってくるような感じがしたのでした。私は全く驚きました。そして胸がドキドキするほど嬉しくなり松田さんと一緒に相撲をやれることを、ほんとうによかったと思いました。すると松田さんは、ちょっと困ったような顔になって



「でもね、困ったことがあるのよ」
と言います。

「なァに？ 何かあったの？」
私がびっくりしますと

「マワシのすれたところがピリピリして痛い
のよ、おうちへ帰ってから見たら、腰のこ
ろが真赤になってるの、このままで、またマ
ワシ締めてたら、皮がむけちゃうんじゃない

かしら。あなたはどうかだったの？」

「わたしも、やっぱり赤くなって、ピリピリ
したけど……いくらなんでも皮がむけちゃう
なんてことないでしょ。あなたの場合は初め
てだったのに、いきなり新しいマワシを締
めたんでしょ、だからよけいすれたんじゃない
かしら。わたしたちの時は、あれより厚い
選手用のマワシだったんだけど、からだにな

じんでたから、かえってすれな
かったのかもしれないわね」

「あら、そう。水野さんなんか
におだてられて損しちゃった」

「でも、直きなれると思うわ」

「そうかしら。痛くてたまんな
いようならスナップスで貼って
来ようかと思ってるのよ」

松田さんは、そんな姿を想像
したのかおかしそうに笑い、私
も

「まるでおとしよりだわね、貼
ってみたら良いわ、そのうちに
腰が曲がってくるわよ」

と顔を、見合わせて笑いまし
た。

松田さんとこんなに仲良しに

なれたのは、ほんとうに嬉しいことでしたが
そのかわり心配ごともあるのです。それは
きのうの例の事件を、田村さんが大げさに、
ふいちょうして歩くんじゃないかしらとい
うことなのです。口のうまい、おしゃべりや
田村さんのことです。ほんとうのことを
知らない人は、皆、田村さんの言うことだけ
を信用するかも知れません。次から次へとう
わさがひろまって先生方の耳に入ったら……
それがいちばん心配したことなのです。

しかし、教室の様子は、別に私の心配した
ようなことはなく、いつもと変わりはないみ
たでした。田村さんにも、休み時間に廊下で
会いましたが、ニコツとして行き過ぎたほ
どで、妙なそぶりは感じられませんでした。ま
たヒロちゃんの方にしても、相変わらず、何
かいたずらを言っては、まわりに集まった人
たちを笑わせていましたが、それもきのうの
こととはちがう話のようでした。

でも、私は何か心配で、授業が始まって
からも、先生方の誰かが知ってらっしゃるん
じゃないかしらと、入って来られる毎にヒヤ
ヒヤしていました。どなたも何もおっしゃ
らないまま、とうとう最後の時間が来てしま
ったのです。長い長い時間が終ってやっと終

業のベル、それはまるで私にとっては、囚人が自分のくさを断ち切ってくれる鋸のひびきを聞いているようにさえ聞えるのでした。

ホッとして、しばらくは立ち上がる気にもなれません。松田さんにうながされてようやく机の上を片づけました。それでもヒロちゃん

がやってくるころには気持も晴ればれして「サア、今日もがんばろう。それに松田さん

もいっしょなんだから」
そう思うと急に元気が出てくるのでした。
「サア、今日は新らしいマワシでひとつ張り切ってやるか」

ヒロちゃんは男の人みたいな言い方をして「何かわからないことがあったら、わたしに聞いてちょうだいね。親切に指導してあげるから」

私と松田さんは吹き出すのをこらえるのがやっとでした。私たち三人が部屋へ行くと、いつもは私たちよりおそい笠原さんがめずらしく、もう来ていました。

私たちがドアを開けて入って行っても、椅子に腰をかけ、前の机にほおづえをついた姿勢のまま、こちらに顔を向けようとしませんでした。考えごとにしては何か憂うつそうなボンヤリした感じですよ。鞆も机の上に、らんぼう

に置かれたままでした。

何かおもしろくないことでもあったのだろうかと思つた私はハッとしました。

もしや誰かがきのうのあのことを、笠原さんに話したんじゃないかしら、それで笠原さんがふきげんになってるのじゃないかしら……私は心配になつてヒロちゃんの方を見ますとヒロちゃんも同じような気持になつたらしく、ちょっと眉をひそめてみせました。

私たちは、ソツと笠原さんの脇を通りぬけて、奥のロッカーのところへ行きました。扉を開けて鞆やなどを入れようとした時、はじめて笠原さんが私たちに声をかけました。

「ちょっと、あんた……水野さん」

名前を呼ばれたヒロちゃんは、ドキッとした様子で、鞆をロッカーに入れようとしていた手が止まりました。

「ハイ」

という返事の声も、いつものヒロちゃんのようにではなく小さくてよそ行きの声でした。

「チョッとお話があるから一緒にきてちょうだい」

笠原さんはそう言つて、私の方へもチラリと目を走らせると

「それから、あんたも……」

「ハイ」

私は返事をしましたが、声がふるえたようでした。

きのうのあのできごとが、まるで映画の断片を思い出すように、クルクルと頭の中を回転します。心配していたことが、とうとうやって来たという思いに胸がふさがつて、せっかく松田さんに、先輩ぶりを見せようと張り切っていた気持が、たちまちしぼんでしまいました。

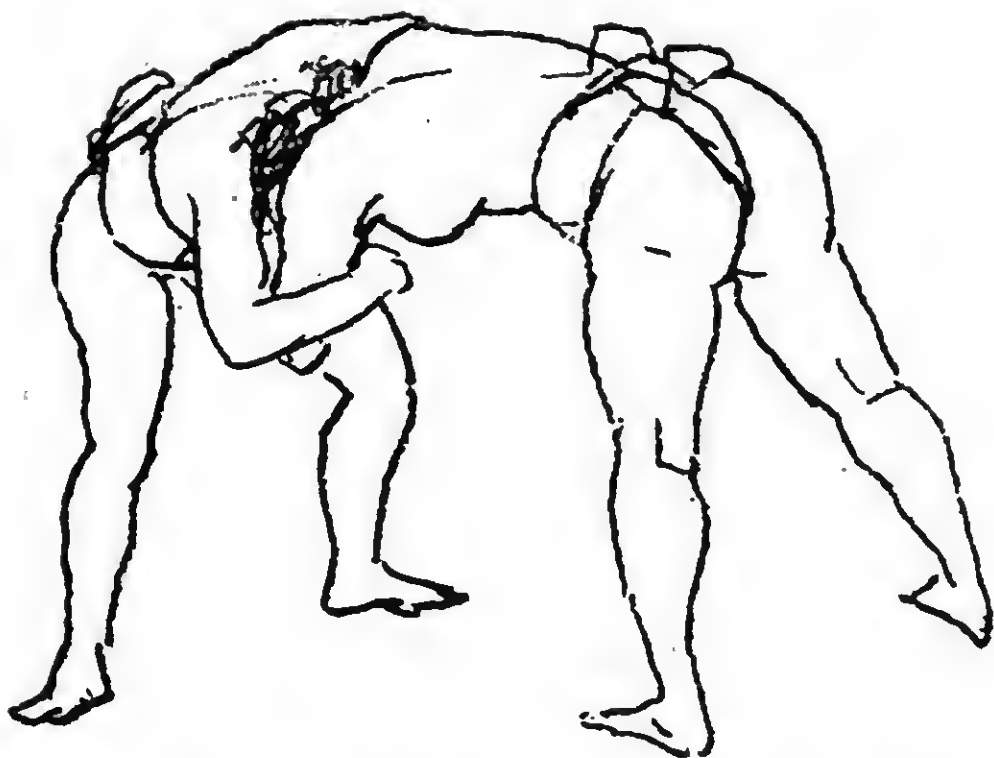
笠原さんは、心配そうに見送る松田さんに「あんたは練習してちょうだい。ああそうか、あんた、まだマワシはひとりではできないわね。だれか来た人に、締めてもらつてよ」

そう言つと、さっさとドアを開けて廊下へ出て行きました。

どうもいつもの笠原さんとは大分ちがうのです。いつもだったらきのう入ったばかりの人をうつちゃつて出かけてしまうというようなことはしない笠原さんなのです。よほどのふきげんなのでしょうか。

「きのうのことかしらネ？」

笠原さんのあとから廊下へ出ながら、ヒロちゃんが小さな声でささやきました。



「きまつてるじゃないの」

と答えましたが、心配でそれ以上声が出ないのです。

「どこへ行くのかしら」

というヒロちゃんの声も、うわの空にしか聞こえませんでした。

笠原さんはだまりこんだまま、廊下を進んで行きます。私とヒロちゃんは、そのあとから二人ならんで歩きながら、だんだんと気持ちが重くなって、それにつれて頭も垂れて行くのでした。

笠原さんが廊下の角を左の方へ曲がった時私はハッと思いつくと、一ぺんにスーッと頭の中の血が引いて行くのを感じました。左へ曲がったその行く先には、職員室があるので。そうです行く先は職員室だったのです。

「先生に呼ばれたんだわ……とうとう……」
そう思うと、急に足が重くなり、からだごと地面の中へ引き込まれて行くような気持ちになりました。

「きのうのことを聞かれるんだわ。あんなことを全部話しをしなくちゃダメかしら……」ヒロちゃんと二人でマワシ姿で出かけたことや田村さんに大声でフンドシかつぎなどとかからかわれたことや、ヒロちゃんがおこって自分のマワシをはずしかけたりしたことなど……
ああ……考えただけで恥かしい……先生に呼びつけられて叱られたりして、明日からもう学校へも来られやしないわ」

頭のなかが混乱して、考えることが悪い方へだけしか進みません。ヒロちゃんがとなり

で何か言っているようでしたけれど、何もわかりません。

「ヒロちゃんが一緒に行こうなんて、さそわなければ、こんなことにならなかったのに……ヒロちゃんの言うことばかりきいてやっていたから悪かったんだわ。もうこんどはゼツタイにいっしょにならないから」

足もとを見ながら悲しい決心をします。

「笠原さんだっていきなり先生のところへ引っぱって行くななんてヒドいわ。そりゃマワシ姿で校内を歩きまわったのは悪いけど、遊びに行っただんじやないもの……それを知ってるのに何もあやまってくれなかったのかしら」
さかうらみと言うのでしょうか、何も言わないで歩いていく笠原さんさえ憎らしくなってくるのでした。

「でもおかしいわ、主任のT先生は何にもおっしゃらなかったし、わたしの方を見た時だっけいつもと変らない様子だったわ……職員室へ呼ばれるくらいならT先生にだって聞かれるのが当たり前なのに……」

そんなことを考えていた私は、そのT先生が職員室のドアを開けて、私たちの前に出てこられたのには、ほんとうに呼吸が止まったかと思ったほどびくりました。

しかしT先生は、私とヒロちゃんを見ると「ヨオ」

と笑いかけて

「なんだ、ボクに何か用事か？」

と気軽に尋ねるのです。

「……」

口ごもりながら、笠原さんに目をやりますと笠原さんはT先生にえしゃくしたただけで、相変らず黙りこんだまま職員室の前を通りすぎて行きますので、私はあわてて

「イイエ」

と答えますと、T先生はそれ以上何もおっしゃらず、いそがしそうに私たちが今来た方へ行ってしまいました。

「T先生は何も知ってらっしゃらない様子だし……そうすると職員室へ呼ばれたのじゃないのかしら」

私は不安が一つ消えてホッとした気持ちになりました。しかし相変らず、どこへ何をしに連れて行かれるのかしらという心配はなくなりません。

「なまいきだというので、三年生たちの集まっているところへ連れて行かれてシゴかれるのかしら……きのうやったようにして見ろなんて言われたらどうしよう」

などとまた新しい不安がムクムクと黒い雲のように胸の奥から広がってくるのです。

「どこまで行くんですか？」

とうとうたまらなくなったのか、ヒロちゃんが前を歩いて行く笠原さんに尋ねました。「もうすぐそこよ」

笠原さんは、やっと私たちの方をふりかえると

「そう心配しなくていいわよ」

私とヒロちゃんの顔を見くらべながら言いました。

気のせい、さっき部屋にいた時と比べると憂うつそうな表情がゆるんで、いつものおだやかな笠原さんにもどったように見えるのでした。

「ホーッ」

とヒロちゃんが、胸一ぱいにたまっていた緊張を吐き出すような、長いため息をしました。額にかかった髪をかき上げる手などにもやや生気がもどったようです。

私も不安はまだ残っているものの、心配しなくていいという笠原さんのことばに、どうやら落ちつきが取りもどせました。顔を上げて見る外の花壇の花が、急に白黒からカラー・フィルムに変わったみたいに色とりどりの鮮

やかさで目に飛びこんできました。

笠原さんに連れて行かれたところは、講堂のわきの藤棚の下でした。

もうかなり暑くなった日射しが藤棚の葉にさえ切られて、手頃なやわらかい日かげをつくっていました。近くにあるテニスコートからは、ポン……ポン……という軽いラケットのひびきと若々しい張りのあるかけ声が、吹き通る風に乗って聞こえてきます。わたしたちのほかは、みんな楽しそうでした。

笠原さんは、藤棚の下にあるベンチの一つに私とヒロちゃんを並んで腰かけさせ、自分はその前に向かいあって腰を下しました。

ちょっとした間沈黙が続き、私とヒロちゃんはその重みに耐えられずにうつむきました。

「ねえ……」

笠原さんがその沈黙を破って声をかけました。思わず「ビクッ」として顔を上げますと「あんたたち、きのうわたしに注意されてから、一体何をしてきたの？」

笠原さんはそれまで胸の内にしまいこんでいたものを一ぺんに吐き出してしまおうような感じの早口でたずねました。

「すみません」

ヒロちゃんが、一度上げた顔をまたうつむ

いて、小さな声で申しわけなさそうに言いました。

「すみませんじゃないわ。わたし、今日ほんとに恥かしかったわ。幸い聞かせてくれた人が、バカなことをしない人だったから良かったけど、そうでなかったら、とんでもない評判がひろがるよ」

わたしは笠原さんの、この言葉を聞いて、笠原さんには申しわけないことなのですからど内心ホッとしたのでした。きのうのことを知っている人は、大ぜいいないらしいと思っただけです。

しかし、笠原さんは、下を向いたままのヒロちゃんに

「だまってちゃわからないわ」

たたみかけるように

「あんたが黙ってるのは、わたしの聞いたことが全部ほんとうだって思ってもいいっていう意味なの？ つまり、あんたが、あの田村とかっていう子と口げんかをして、言い負かされてストリップをして見せたってのは、みんなほんとなの？」

わたしは笠原さんの話が、あんまりデタラメなのにびっくりしましたが、ヒロちゃんはみるみる首筋まで赤くなり、キッと頭を上げ

ると笠原さんをにらむように見て

「ヒドイわ。そんなのデタラメだわ。わたしいくらおてんばでもそんなことしませんわ」と言っ、ポロポロと涙をこぼしてぐしゃがりました。

「誰がそんなことを言ってたのですか？」

私も、そんなことを口にする笠原さんに腹が立って、つかかるような口調で聞きました。

「聞かしてくれたのは同級生よ。その人は田村とかって言うその子から聞いたって言ってたわ」

私はそれでやっと、大体のことが呑みこめたのでした。

田村さんの近所には三年生のOさんという人がいるのです。そのOさんが笠原さんと同級だということは知りませんでした。田村さんは毎朝そのOさんといっしょに学校へ来るのです。ですから、その時に田村さんが、例の調子で、あることないことを、おしゃべりしたにちがいないのです。

「あの子は口がうまくって、ひとの悪口ばかり言いふらすのがとくいなんです。宣伝カーってアダ名がついてるほどなんです。笠原さんが、そんな話を信用なさるなんて……あんまりだわ」

まりだわ」

ヒロちゃんは涙をふこうともせずに、くやしそうに言いました。

「ほんとなんです。わたしたち、あんな人の言うことなんか誰も信用しませんわ」

わたしも我慢できなくなって言いました。

そして、こんなひどいことをかげで言いながら、平気な顔をしていた田村さんが心の底から憎らしくなって、ツバをかけてやりたいくらいでした。

「じゃ、ほんとうはどうだったっていうの」と笠原さんが、少しやさしい調子になって尋ねました。

ヒロちゃんも、ようやく落ちつきを取り戻して、ハンカチで涙をぬぐい、それから、きのうの「一幕」を話し始めました。

ヒロちゃんの話してる間、笠原さんは何も口をはさまずに黙って聞いていましたが、ヒロちゃんの話が一段落すると、

「あんたは、その間、ただポカンとして眺めていたの？」

いきなり私に尋ねました。

わたしは、ちょっとボンヤリしていたところだったのでドギマギして

「イイエ……あの……」

といいかけますと、ヒロちゃんが「そうじゃないわ。テルちゃんは、いっしょうけんめいとめてくれたんですけど……わたしがカッコしちゃうってだから、テルちゃん言うことときかなかったんです」と説明してくれました。

「そう」

笠原さんはヒロちゃんの弁解に軽うなずきました。そして視線を上げると、しばらくの間遠くの空に浮かんでいる雲を見つめていました。三人の間に話とぎれると、またニススコートの声が聞こえてきました。それは私たちの間に流れている沈んだ空気とはまるで別な世界からのようなカラッとした明るい響きでした。

私とヒロちゃんとは、黙りこんでしまった笠原さんの顔を両方から、心配そうに見つめていました。しかし笠原さんは視線を一所に止めたまま沈黙を続けているのです。

私とヒロちゃんは、どちらからともなくソッと目を交わしました。

すると笠原さんは急に

「アッハッハ……」

大きな声で笑い出したのです。

空の方へアゴを上げて、まるでおなかの中

を入れかえするみたい大きな口を開けて笑っているのです。

笑い声が青く澄んだ空へ登って行くのを見ながら笑っているような、そんな笑原さんを私とヒロちゃんはアツケにとられて眺めていました。

「笠原さん、頭がヘンになっちゃったんじゃないだろうか？」

そんな私たちの目つきがわかったのか、笠原さんは、笑いすぎて涙の出たきたのをぬぐいながらようやく笑いを止めました。

「ねエ。その田村って子が途中で逃げ出さないでいたら、あんたどうするつもりだった？ほんとにマワシをとって素っ裸になっちゃった？」

とヒロちゃんをからって、またおかしそうに笑い出しました。

私もようやく笠原さんの笑いの理由がわかったし、私自身も、同じことをきのう聞いていただけに、今度はヒロちゃんがどんな返事をするかとニヤニヤしながら、ヒロちゃんの顔を見ました。

ヒロちゃんは赤くなって、下をむいたつきり草をむいています。

笠原さんは、笑いをこらえながら

「わたしだったら、ゼツタイ逃げ出したりなんかしないワ。せっかくのヌードショーが見られるっていうのにねエ」

ヒロちゃんの顔をのぞきこむようにしてかかります。ヒロちゃんは聞えない程の声で「サァー？ わかりません。わたし、よっぱどノボせていたんですわ」

恥かしそうに言ってニコッと、それでもテレクさそうに笑いました。

「でもねえ」

笠原さんは、私とヒロちゃんを見てまじめな顔になると

「そりや、デタラメを言いふらして歩くのは確かに良くないわよ。でも、この場合は、そんなことを言われるだけの原因は、あんたたちが作ってるわけよ。わたしが注意したようにマワシ姿のまま歩きまわったりしなければこんなよいけいな心配をしなくてもよかったはずだわ」

と言って、私に

「あんたも、この勇敢な人がそんなことをやるのを止めさせなきゃダメよ。言うことを聞かなかったら、ひっぱたいじゃないよ。それがほんとの友だちよ」

と言って

「こんなくらいですんで幸運よ。これからはずっとゼッタイにこんなことをしちゃダメよ。先生がたに知れたら、また相撲部閉鎖なんて言い出されるかも知れないのよ」

と眉をひそめました。

「また……って、前にも相撲部が止めになったことがあったのですか？」

ヒロちゃんがビックリしてたずねました。

「あったわ」

笠原さんはそう言って、遠くの方を眺めるような目付きをしましたが、

「まあ、その話はあとで聞かせるわ。今日の話はこれだけにして、ほかの人たちにはだま

連続組写真Mフット

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名〕
〔M男性……Mモデル志願者M・H氏〕
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊富な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐めしめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化しました。縄、ローソク、浣腸器などの小道具を用い、マゾファンクの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。どうか、この写真集にてマゾの醍醐味を心ゆくまで味わって下さい。

っておくから、あんたたちも心配しないでいいわよ。あんたたちにちょうどいい薬になったでしょうからネ」

と言って立ち上がりました。そして

「さ、練習練習。今日はあんたたち二人だけ特別でいいいにシボッてあげるからね。いいわネ、ふんどしかつぎさん」

と私たちをコワイ顔をつくって見下ろしました。

「ウワァ」

ヒロちゃんが悲鳴をあげました。

「それくらいの罰は当然ヨ。それとも先生にお話して裁判してもらった方が……」

「やりますやります」

ヒロちゃんはあわててとび上がるように立ち上がりました。そして私の腕を引っばって「ホラ、あんたもいっしょだって。ともだちってありがたいわネ」

「大めいわくだワ。ヤレヤレ」

笠原さんは私の立ち上がるのを見ると、先になんて歩きかけましたが、ふとふり返って「ア、それから、あんたたち、今日から新しいマワシにしてちょうだい。それで、きのうまでの選手用の乾ききやならないわけだけど、二人で屋根へ上がってちょうだい」

「屋根の上へ？」

ヒロちゃんが不安そうに言いました。

「そうよ。折り目を全部ひろげて、日光に当てるわけよ」

「困ったワ。わたし高所恐怖症で高いところダメなんです」

ヒロちゃんはもう逃げ腰になっています。

「いいワ。イヤなら先……」

笠原さんが言いかけると、ヒロちゃんは、まるでその口をふさぐような手つきで

「いいです。わたし上がります」

すっかり笠原さんのペースに乗せられて、ヒロちゃんと私は部屋へ引き返しました。しかし、気にしていたことがハッキリ片づいて足どりも軽くなる思いでした。

「サア、これで思い切って練習できるワ」

と、となりのヒロちゃんを見ると、ヒロちゃんも片目をつぶって

「ゴメンね」

小さな声で言いながら、私の手をギュッと握ってきました。私も握りかえしながら「やっぱりこの人とは離れられないんだわ」と感じたのでした。

(未完)

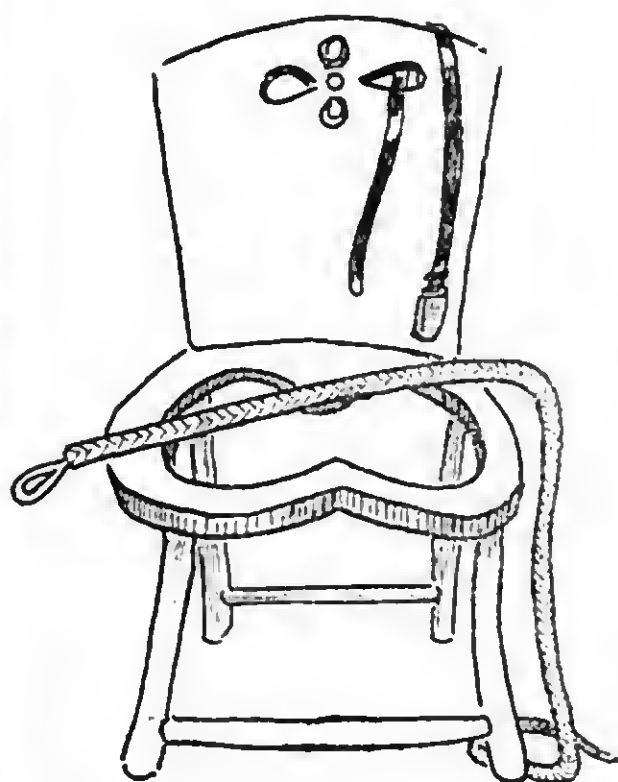
連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

△第十九章 そのかみのこと（十九）▽

（コンピエーヌ婦人刑務所へ）

西 条 操



七月下旬のひる近く、ミシュリーヌはマド

レーヌと繋がって、詰所の床を磨いていた。

警視庁の留置場で一緒だった元バス車掌のマ

ドレーヌは懲役八カ月の確定女囚。此の秋に

は刑期も満了だから、おそらく此のままこ

で服役することだろう。出払って室内には誰

もいないが、あけ放しの扉のすぐそばには当

直デスクがあり、その婦人看守が絶えず眼を

光らせる。床を四つ這う手足をとめて、ミシ

ュリーヌは肘で額を拭いた。モップを与えて

貰えないので、油雑巾を握ってリノリウム

床を這いずり回らねばならないのだ。

「四年だなんて、ほんとにお気の毒だわ」

暑さに喘ぎながらマドレーヌが小声が云っ

た。

「仕方ないわ。もうどうしようもないもの。

それに、私は悪いことしたのよ」

「そうですねえ。ああ、暑い。堪まらない

わ」

そよとの風もない床に両手両足をついて、

マドレーヌは、当直デスクの扇風機を盗み見

た。室内の扇風機は、天井のも卓上のも全部

停まっている。

「私、出して貰ったら、どうしようかしら。

雇って下さる所があるかしら？」

「更生保護委員とかいう所があるそうよ」

「そうね。でも、みじめでしょうねえ。あな

たはどうなさるの？ ちゃんとした方がおあ

りなんでしょうけど」

「そんなひどくないわ。ひとりぼっちよ。ま

あ、刑務所の中で考えるわ。私は長いんです

もの」

ミシュリーヌは自嘲の笑みを淋しく浮べ、

腰鎖を床にジャラリと引摺った。当直婦人看守の眼がそれた気配だ。ミシュリーヌは汗の泌みる手首をそっと搔いた

「手、ひどくすりむけてますわね」

とマドレーヌが同情する。

「どうしてももがいてしまうのね。今日もお願いするわ、すまないけど」

「あら、そんな気兼ねはちっとも要らないのよ。お互い様だもの。私だっていつやられるか分ったもんじゃないし。でも、今日もまだ赦してくれないのかしら」

「もう二、三日は駄目だと思うわ」

「けど、ほんとにひどいですわ。あんなこと位で、そんな……それも悪気じゃなかったのにねえ」

「囚人だもの、仕方ないわ」

ミシュリーヌの両手首が痛々しいのは、房内後手錠のせいだ。檻の錠箱に触れた廉で、三日前から喰っている罰だ。灰色の眼のカギ鼻が女囚を引き立てて来て檻に叩き込んだのはいいが、解いた革ロープを振り回した拍子に鉄格子にからみつき、近くにいたミシュリーヌがつい手を出して手伝って仕舞ったのだった。手伝わせるだけ手伝わせておいて、灰色の眼はその革ロープでミシュリーヌの

手をピシリと打ち

「余計なことをおしでないよッ」

ときめつけたものだ。

「許可もなしに立ったのね。それはまあ許してやるとして、錠箱に触ったのはどういうことだい？ 逃げるつもりかい」

装備品の戒具取扱いの失態を見られたてれ隠しもあったのだろう。

「当分手錠かけとくわ。ここへおいでッ、後ろ向いて」

その場で即座に後手錠をガッチリかけられたミシュリーヌは、これでもう三日間、檻の中の身の世話を、マドレーヌから受けている。

「ああ暑い。腕もだるいし少し休みたいわ」

マドレーヌが溜息をついた。

「駄目よ、怠けちゃ。労役なのよ、普通のお仕事してるんじゃないのよ」

「あなた、ほんとに感心だわ。そんなひどいことされても恨みごと一つ言わないし」

「だって、覚悟してるもの。ただ、社会の人達に見られる時だけは、その決心もぐらつくんだけど」

「そうねえ。ほんとにあの時は堪まらないわね。絶対に逃げないから、この鎖だけはかけ

ないで欲しいと思わない？ ああ、今日の鎖のきついこと」

マドレーヌは嘆いて腰鎖を撫でた。

「看守さんによって締め方が違うのよ。きつい担当さんの時は諦めることね」

ミシュリーヌやマドレーヌなどはまだいいのだ。ウェストがどこか分らない程に肥えた女囚は、思い切り締め上げないと抜けるおそれがあるので、泣き出す程にくびられて仕舞う。尤も半年も服役すれば、大抵のデブ女もウェストがはつきりして来るものだが。

「でも、考えて見ると、この服着せられてからは、鎖なしに檻を出たことないのよね」

「ほんと。情けないわねえ。人間扱いしてくれないのね。でも、中で労役するのは、うっとうしいけど気が楽でいいわ。あら、これなんだろ？ なかなか落ちないわ」

マドレーヌは、床にこびりついた赤いものをこする。

「口紅よ。かけらを踏んずけたのね」

「ああ、そうね」

マドレーヌは必々と見詰め、鼻を寄せて匂いをかぎ、嘔り上げて涙ぐむ。懐しむような風情は哀しく憫れだった。

「もう……何カ月になるかしらッ」

「お化粧のこと考えてるのね。誰に見て貰うの？」

「あら、だって女のたしなみよ。あなただって、やっぱりしたいんじゃないかって？」

「それはそうよ。でも仕方ないじゃないの。顔を洗うお水だって自由には使えないのよ。

髪の手拭だって、たまにしかさせて貰えないし。そんなこと、考えるだけみじめだわ」

「諦め切ってるのね」

「そうよ。人並みのことをさせて貰える訳がないもの。私達、罪人なのよ。身だしなみをさせて貰えないのも刑のうちだわ」

「ほんとに健気なのねえ。ああ、膝が痛い」

マドレーヌは顔をしかめ、あたりを見回わした。並ぶソファや椅子、ほんのちよつとでいいからその柔らかなクッションに深々と憩うて見たい。硬い物の上には載せたことのない尻や、コンクリートの壁にさえもたれることのない背が、その柔らかさにたまげて痺れることだろう。しかし如何に想って見たとて、そんなことが許される身ではないのだ。

靴音が聞えて床の二人は口を噤んだ。入ってきたのはエメリーヌ婦人看守。二人の女囚はホッと体をゆるめた。出廷業務の緊張に疲

れたエメリーヌは腰バンドをはずし、ソファに身を沈めた。ややあって

「お前達、少し休んでいいわ。暑いわね」

と扇風機を廻す。

「綺麗になったこと。もういいから、少しお休み。楽にしているのよ」

二人の女囚はいそいそと身を起した。休んでいいと許された所で、そこらの椅子にかけると訳にはいかない。女囚達は床に尻を下ろして両膝を抱いた。囚衣の裾は窮屈であぐらはかけないし、壁にもたれることも御法度。これが許される限りの楽な姿勢なのだ。エメリーヌは冷水器の水を自分だけ美味そうに飲み卓上扇風機の風を分けてやろうともしない。床におどおどと物悲しげな女囚の姿を見ると哀れでもあるが、けじめはちゃんとつけねばならないのだ。労役時間中をこうして休ませてやるだけでもお慈悲なのだ。デスクの当直看守はエメリーヌの後輩、床に憩う女囚達をじろりと見たが黙っていた。

「二二七号」

エメリーヌが言った。

「はい」

振り仰ぐミシュリーヌを眺めて何か言いかけたエメリーヌは、それきり黙って髪を直し

始めた。エメリーヌには、ミシュリーヌが今日の午後に執行課へ出頭させられることが分っていた。言わずと知れたこと、刑務所送りの言い渡しだ。教えてやりたかったし励ましてもやりたかった。しかし、言い渡し前に洩らすのは法務事務官として服務規程違反だ。制帽のピンを留めたエメリーヌはきびしく言った。

「さあ、労役を続けるのよ」

二人の女囚は鎖を鳴らし、再び這いずり始めた。

(明日は私が連れて行ってやりたいんだけどそうは行かないらしいわ。ポーラの筈ね。可哀想に)

エメリーヌは今日限りの女囚の背を見下ろして吐息をつき、早昼をしたためるべく食堂へ去った。

午後になると、ミシュリーヌは執行課へ曳かれ、空のデスクの前で待たされた。人柄のいいアネット婦人看守がぶつぶついう頃、漸くデスクの主が戻って来た。自慢の首から肩胸にかけてを強調するドレスを着た婦人課員はミシュリーヌを碌に見もせず言い渡した。

「二二七号。ミシュリーヌ・ダリユー。お前を明日コンピエーヌ刑務所へ送ります。まじ

めに刑に服するのよ」

「はい」

ミシュリーヌは、事務的に冷淡な相手を見やって静かに答えた。あんなドレスを着て、あんな風に化粧をして、ちゃんとした椅子に好きな時に掛けられるのは何年先のことなのだろうか。ミシュリーヌは哀しかったが、それでもくどくどと説明めいたことを長々と立たされて、聞かされるよりすっぱりしている。

「私明日は非番なの。だから今言っとくわ」

アネットはミシュリーヌに廊下で言う。

「どんなことがあってもくじけちゃ駄目よ。」

「苦しいだろうけど辛抱するのよ、いい？」

「はい。いろいろと御世話になりました。ありがとうございました」

肩を並べたアネットに、ミシュリーヌは心からの感謝を述べた。エメリーヌとこのアネットとは、陰になり日向になって如何に庇っていたわってくれたことか。

「綺麗な体になったら訪ねて来てね。出来ることなら何でもして上げるわ」

喉を熱くしたミシュリーヌは、わざとおどけて言った。

「きっとお礼に伺いますわ。けど、もうこん

なに縛ったりしないで下さいね」

「ホ、ホ、ホ。その時は、先ず身体検査をするわね。綺麗な体になってたらいけど、少しでも汚れてたら駄目よ。また縛っちゃうから」

アネットは笑って言った。

「冗談はさておいて、ほんとに、訪ねて来てね。堂々と大威張りで来たらしいのよ。私、撲ったことあったかしら？ 若し何だったらその時に撲り返してくれたっていいのよ。喜んで打たれるわ」

ミシュリーヌの眸がうるんだ。アネットにも一度だけ頬を打たれたことがあった。しかし、確かにミシュリーヌの方が悪かったのだ。何しろ、腰鎖を握って身悶えしたのだから。

「いいえ、アネット様。あなたに打たれたことなどございませんわ」

ミシュリーヌはそう答え、背を屈めて眼を抑えた。その手首を眺めてアネットが眉をひそめる。

「ひどくなってるのね。もう四、五日になるんじゃない？ ポーラにかかっちゃ、石ころもダイヤモンドも一からげなんだものね。薬つけたげたいけど」

ポーラ・マルチネリは例の灰色の眼のカギ鼻、アネットより二階級上の大女だ。アネットはとうとう薬もつけてくれずに退出して行ったが、そう言ってくれただけで、ミシュリーヌは泣きたい程に嬉しかった。

マドレーヌは一号捕縄をひしひしとかけられて、詰所の床に脚折ってきちんと坐らされてソファにふんぞり返るポーラに油を絞られていた。再び鎖に繋がった二人は洗濯を命じられた。汗臭い自分の囚衣はそのまま気持ち悪く着て、職員や看守の、下着の山と取組まされる。

「先刻はどうしたの？ 捕縄かけられてたわね」

ミシュリーヌは声をひそめて尋ね、ふやけた手首の傷痕に泌みる石鹸をこらえた。

「それが何だか分らないの。ボヤボヤしてるからヤキを入れてやるって言ったかと思うと態度が悪いから罰だとも言っし。いきなり縛り上げられちゃったのよ。苦しかったわ」

どうせポーラの暇つぶしの槍玉に上げられたのだ。

「早くしないと乾かないじゃないの。何時と思ってるの？」

やって来たポーラ婦人看守は罵って、ゴム

ホースの一発ずつを二人の背に当てた。洗い終えて干しおえたのが三時過ぎ。既に同囚のあらかたはぶち込まれ済みの鉄檻の前で、入念な裸検身。ポーラの検身は常に意地悪く、女囚たちは彼女に、担当されることを忌み嫌う。尤も、そのポーラの検身が刑務所の身体捜検並みなのだが。

再び囚衣をまとったミシュリーヌの前で、ポーラが手錠をカチャリと鳴らせた。哀願した所で無駄なこと、腕ねじ上げられて痛い目を見るだけだ。少しは哀訴し抵抗の真似ごと位して見せた方が、この灰色の眼のカギ鼻女は喜ぶかも知れない。ミシュリーヌはおとなしく後手錠を受けた。これで、明朝まで痒い所も自分では搔けないし、下着もずらせないのだ。

(ああ、今夜が最後だというのに後手錠なのね。やっぱりストップなしだわ。明日の朝は手が干切れそうになってることね)

ポーラ婦人看守はギヤの軽々と回わる手錠を使用するし、遂に今日もストップを利かせてくれない。ミシュリーヌは鋼鉄環の余裕を手首に確かめながら向き直り、跪まずいて頭を垂れた。

「ありがとうございます」

灰色の眼のカギ鼻は、縛しめてやった女囚が礼を言わないと面機嫌が悪いのだ。

ミシュリーヌは拘留所最後の夕食をマドレーヌに食べさせて貰い、かけて貰った毛布にくるまり、握った両こぶしに後ろ腰を乗せて仰臥し最後の一夜を汗にまみれて苦吟した。

「ミシュリーヌ。私よ」

呼ぶ声に気付いて見ると、隣りの鉄檻からクラリス・シモンが呼んでいた。点呼の時、聞き覚えのある声だと思っていたが、やはりクラリスが今日から赤縞落ちしたのだ。

「上告、取り下げちゃったの。四年よ」

クラリスは、ミシュリーヌを、じっと見詰めた。

「あんた、明日行くのね。又一緒になるかもね。雄々しく行っといで」

クラリスは片眼をつぶって笑った。

翌朝はミシュリーヌには労役なし。マドレーヌも誰もいないので、朝食は犬の様にして食べた。引き出されて手錠が漸くはずされ、詰所の入口横で靴磨きだ。腰鎖がないので、うずくまっても楽だった。磨く靴は婦人看守の制靴、勿論今日の護送を担当するお方のものだ。お手数をかけて護送して頂く訳けだから、心こめてピカピカに、底までも舐めた様にしなければならぬことになっている。さすがにミシュリーヌもみじめな心地だった。この特大サイズの制靴の主はポーラ・マルチネリ婦人看守。

「磨くんだよ」

と投げ与えられた時から、ミシュリーヌは観念していた。あの灰色の眼のカギ鼻に連れられて行くのだ。一かけらの憫れみもない冷酷さで護送されることだろう。

「まだかい？ 靴磨きも満足に出来ないんだね、ノロマ!!」

現われたポーラが罵りして検査する。

「何だい、この磨き方は。こんな靴穿いて街を歩けというのかい？」

「すみません。磨き直させて下さいまし」

「いいよ、もう。時間がないわ」

スリッパを穿き替えたポーラは女囚の鼻先に足を突きつけた。靴紐を結べというのだ。ゆるくてもきつくても蹴られることだろう。ミシュリーヌは黙って丁寧に結んだ。

「さてと。分ってるだろうけど、私が連れてってやるからね。神妙にしないとひどいよ」

ポーラ婦人看守はシオルダーバッグに書類を投げ込みながら、見下ろして言った。女囚ミシュリーヌの送り状だ。

「はい。御面倒かけます。お願い致します」

ミシュリーヌは床にひれ伏して言った。こんなことまで言ったりはしないでもいいのだがこのカギ鼻の大女の前ではつい卑屈になってしまう。我れながら情けなく口惜しいが、御機嫌を損ねまいとする一念からそうなってしまうのだ。

（半年も繋がれてると、こんな仕草や言葉が身についてしまうのね、悲しいわ。まだ四年近くあるのねえ。刑務所ってどんな所かしらここより染な筈ないわ。ああ、せめてアネットかエメリーヌに護送して貰えたらねえ。でも、ベルミたいな若い小娘に引張られて行くよりいいわね。あ、ドレスを着せて、貰えるんだわ）ポーラがドスの利いた声で命じた。

「ここで脱いで行きな」

ミシュリーヌは囚衣を全部脱いだ。暑いし、ドレスを着れるのだと思うと、むしろいいそいと嬉しい。素肌の腰に革ロープをかけようとしてポーラがやめた。

「革ロープが汚れるからね。汗臭くて薄汚い女だね、お前は」

顔さえも充分に洗わせないでおいで勝手なものだ。

「皆さんにお礼位い言って行ったらどうなの

さ。お世話になった癖に恩知らずな女だね」

ミシュリーヌは床にひれ伏して、居合わせる婦人看守にお礼を言われた。

「お世話になりました。ありがとうございますしました」

知らん顔をしている中で一人だけがチラと見やって言った。

「まじめに勤めるのよ。そして、綺麗になつて出といで」

そう言ってくれたのは若いブルネットの新任者、エメリーヌやアネットと仲がよく、出勤時の化粧を念入りに落していた。

「両手ついてッ。腰をあげて。舌を出して、お行きッ」

ポーラはミシュリーヌの尻を蹴る。四つ這いもいいところ、生まれたままの姿で腰を高くとあげて舌を出し、靴先で蹴られながら追われて床を行くのだ。床磨きの労役女囚達が盗み見て眼を丸くした。こんなにまでされることは滅多にないことだ。ポーラ婦人看守の朝食のトーストが焦げ過ぎていたのだろう。準備室までの床は長い。ミシュリーヌはホロリとしずくだけ泣いた。二人の足音が追いついた。靴音はエメリーヌ、革サンダルのはアンジェラだ。

「まあ!!」

とエメリーヌがたまげ、非難のまなざしをポーラに向ける。

「いえね、身檢兼用なのよ」

ポーラは平然としてはいたが少しは気がひけるらしい。エメリーヌだと知ったミシュリーヌはク、ク、ク、と肩震わせた。

「あらッ、あんたは!!」

気付いたアンジェラがポーラを振り向いて睨みつけ、手錠を腹に鳴らして身悶えした。

「おとなしくおしッ」

腰ロープを手繰って引き絞ったエメリーヌが叱りつけて肘を掴む。

「だ、だって、あんまりなことをするじゃないのッ。いくら懲役人だって人間よ。それにこのひとは……」

「お黙りッ」

「い、いたいッ。かんにん……」

肘の急所を掴まれこねられ、アンジェラは悲鳴をあげた。次から次に余罪が出て来るアンジェラは未だ予審の段階、しかも彼女もエメリーヌには従順だ。アンジェラを引き立てて追い越して行くエメリーヌの脚を、ミシュリーヌは泣きながら見送った。引込めた舌を見付かって二度、膝を床に触れさせて二度

ミシュリーヌは準備室に辿り着くまでに数回蹴り転がされた。

「おや、泣いてんのかい？　これから監獄へ行こうという性悪女が、案外意気地がないんだね。口惜しけりゃ相手になってやるよ」

床にもがいて再び這い始める女囚をポーラはせせら笑う。

「ふん。見たところ、お前は相当多勢の男を知ってるね。商売人じゃないらしいけど、締まりのない道具だよ。刑務所にゃオス猫一匹居やしないよ、気の毒だけど。ま、タツプリ鎖をかけて頂いたら、少しは引き締まって身持ちが直るといふもんだよ」

ポーラは後ろから見下ろして女囚の胸を抉り、ミシュリーヌは躍りかかってもやりたい気持ちを漸く抑えるのだった。

小突き回わされ、はね回わり、命じられる姿勢や動作に息弾ませての身体検査が改めて行われ、屈辱に喘ぐミシュリーヌの姿をポーラは眼を細めて眺めた。美しい同性をいたぶるのはいい気持なのだ。ポーラに見れば多勢の見物衆のいないのが残念な位だろう。シャワーを浴びたミシュリーヌは、そのまま又も四つ這って身を乾かす。

「あ、本館の方々に御挨拶しなくちゃね」

紫煙を吐きながらポーラがからかい、女囚はまさかと思いつつも

「かんにんして下さいまし、それだけは……」と哀願を洩らした。

「おや、舌を引込めたねッ」

生乾きの尻から腿にかけて革ロープが吸いつき、女囚は苦痛に全身をよじる。

「言うことときかないと、ずっと舌出させて連れて行くよッ」

ミシュリーヌの荷物を運んで来たマドレーヌが眼を丸くし、その鎖仲間は四つ這いの裸か身を品定めした。

「おそいじゃないのッ」

今度はポーラがそっちに噛みつき、二人はあわてて荷物を台の上に置いた。

かび臭い下着をつけ、しわだらけのドレスをまといながら、ミシュリーヌは何故か涙が溢れた。素足に穿くハイヒールは薄汚れてひびきえ入り、指で掻き上げた金髪をゴム紐で束ねる。

「いつまでおめかししてるんだい。いい加減におし」

きめつけるポーラが持つものを見て、ミシュリーヌは悲しかった。鍵のかかる鋼鉄と革具を身につけて行かねばならないのだ。諦ら

めてはいるものの、決して逃げはしないのにも思っただけ。しかし受刑囚の身が錠と鍵なしに、鉄格子の外へ出られる道理はないのだ。

「お願いします」

ドレスのしわを未練氣に引張った両手をそろえ、ミシュリーヌは護送者の前に頭を垂れた。革ロープのついた護送用手錠が両手首にガッチリとかけられ、手首が回かせない程に締められ、その重さが骨に、ずしりとこたえた。その両手に持たされたスツケースは、コートを無理に詰め込んだので、ふくれて重い。革ロープを手許に束ねて握ったポーラが制服の肩にショルダーバッグをゆすり上げた。歩き出すと、スツケースの持ち辛さが忽ち身にこたえた。如何に持ち難く歩き辛くとも、体の前でしか提げられないのだ。よろけてハイヒールの片方を飛ばした女囚を、ポーラが咽喉で嘲笑った。明るい戸外の門に待つ自動車、それに乗り込むまでの長かったこと。ホッとしたミシュリーヌは、去り行く建物とコンクリート塀を横目で眺めやった。半年の間閉じ込められていた鉄格子と鉄扉と錠と鎖の世界、今そこを去って別の世界へ行くのだ。そこにも、鉄格子と錠と鍵と、そして

きびしい規則と苦役とが待っている。乗った車は自由の世界を走り、窓に見える人々は楽しげに行き来しているが、この身はそこから隔絶された哀しい境涯、体には鍵をかけられて、その鍵を持つ者が握る革ロープの長さの外へは金輪際出ては行けぬ護送囚なのだ。

ミシュリーヌは膝のスーツケースの下へ両手潜らせようと、忽ち見咎めた護送者が革ロープをガチッと引張り、手錠の両手をスーツケースの上に置かせた。唇を噛む女囚の胸に突然恐怖が噴き上げる。未知の世界の恐怖しさ、これから連れて行かれる世界への恐怖にミシュリーヌの、柔らかい胸が締めつけられた。逃げられるものなら、という衝動が全身を貫き走り、誰か助けてくれないかと、切ない眸に必死の想いをこめて窓外を盗み見る。しかし、そんな発作的行動に備えて戒具を施してあるのだ。どんなに従順な囚人でも信用は出来ない。囚人は常に逃走の意図を持つものなのだ。女囚ミシュリーヌは絶望の想いで両手の手錠と、それに繋がる革ロープと、そして、それをしっかりと握る法務事務官とを見やり、首をガククリと垂れた。「娑婆に出たいんだね。でも可哀想に、未だお前は年季が始まったばかりなんだよ」

ポーラが嘲けり、そして言った。

「さあ、着いたわ。降りるんだよッ」

眼をあげたミシュリーヌは愕然とした。そのまま車で送られるものとはばかり思っていたのに、そこはノール駅の駅前広場だった。

「ここで……ここで降りるんですの？ ああ」

女囚は喘いだ、革ロープは容赦なく引かれ、扉が開いて手錠がガツと喰い込む。この護送用手錠を手荒に引張られると、大の男でも呻いていうことをきくものだ。悲鳴をあげたミシュリーヌは辛うじて持ったスーツケースを膝に蹴り、転がり出てよろめき、真昼間の駅前広場に息詰めて立った。忽ち眼襖の針が刺さり、周囲の物音がすべて嘲笑に聞え、眼前が昏くなる心地だった。うなだれた頭が更に深々と垂れ、堪まらなくなった女囚は両手に顔を埋める。

「荷物を置いていいと誰が許したの？ 持ってるのよッ。馬鹿」

大声で罵られたミシュリーヌは全身を熱くし、そして観念した。どんなにして見た所で人々の眼から隠れることは出来ないのだ。

(見苦しいことはよした方がいいわ。雄々しく行かなきゃ)

女囚は顔から離れた両手にスーツケースを

再び提げた。

「御苦勞様。じゃ……」

警官の運転する車は去り、ミシュリーヌは曳かれて人々の前を歩いた。両手の手錠を隠す術もなく、男達の眼は素足に注がれる。

(冬ドレスだったらねえ。袖に隠せるんだけど。ああ、どうして皆そんなに見るの？ そんな眼でジロジロ眺めるの？ 悪いことした女は私だけじゃないのよ、沢山いるわ)

知った人に見られたら、と思うと、両手に光る手錠だけは何としても隠したかった。しかし、手錠を隠した所で何になろう。延びる革ロープは前後左右から丸見えだし、第一、並んで歩く婦人看守の制服のいかめしさは嫌でも人目につくのだ。この制服の隣りでうなだれる女は囚人に決まっている。如何にしてもあげ得ないミシュリーヌの眸に、並んで歩くポーラの濃紺スカートと太い脚が見えた。音忍ばせて素足を踏み出す自分のハイヒールのみじめさ、それに引きかえ、遠慮もなく音高く鳴らす護送者の靴はピカピカ光る。磨かされ、紐結ばされた靴だ。女囚はみじめに胸詰まらせて吸り上げた。

ポーラ婦人看守は遠慮容赦もあらばこそ、女囚を引き摺り回わして切符を買い、時刻表

を確かめ、ホームへ出る前にスタンドで飲み物を立ち飲みだ。何しろ大女だし、夏の盛りに制服をキッチリ着ているのだから無理もない。

「おい、デッカイ婦警さん。その女にも飲ませてやったらどうだね？ 重い荷物持って可哀想じゃないか」

「そうだよなあ。見ろよ、凄え別嬪だぜ、ありゃあ。俺は化粧なんか誤魔化されはしないんだからな。何をやらかしたんだい。え？ 姐ちゃん。なあ、そんな腕輪じゃ手が折れちまいそうじゃないか」

「何さ。いくら別嬪でも懲役人じゃ仕方ないだろ。それとも何かい、逃がしてやって抱いてやる気なの？ ホラ。二フランだよ」

太った給仕女がビールのコップを男達の前に投げ出した。

ミシュリーヌは必死に膝を立てて待っていた。もとより飲物を与えて貰えるとは思っていないが、この婦人看守の憫れみのなさ加減に泣けて来る。手錠はこじて痛いし、肩は抜けそうだし、人々の視線は全身を撫で回すのだ。ミシュリーヌは一刻も早く刑務所の鉄格子の中へ入りたかった。

「何をショゲてるんだい？ え？ 二二七号」

ポーラ婦人看守は唇を拭いながら、大声で番号を囁める。

「さあ、来るんだよッ。よろよろするんじゃないの」

革ロープを引くポーラを、ミシュリーヌはちらと見上げた。

「フ、フ、フ、私が恨めしいのかい。護送中だって刑は執行中なんだよ。恥かしい思いをちつとばかりさせられる位が何さ。懲役人の勤めのうちだよ」

ミシュリーヌは唇を噛んで、悲哀と怒りを胸に噛みしめ、腕のたるさに脂汗滲ませてホームに出た。列車は未だ入って居らず、又してもホームで立ちん坊だ。人々が寄って来ては眺めて行く。

（見たいのなら、いくらでも見るがいいわ。私、刑務所へ送られる女囚なの。刑期は四年よ）

そう喚きたくなったミシュリーヌは初めて僅かに顔をあげ、少し離れてかたまっている人々を眺めた。眼の合った若い娘がおぞましげに顔をそむけた。肩がもげそうで我慢出来ない。

「あの担当様。荷物、おかせて頂けません」
「駄目。この辺は置引きや女スリが多いから

ね。フ、フ、フ」

ポーラは灰色の眼で、意地悪く笑うのだった。

「あの、お願いです。ちょっと、これ、ゆるめて下さいまし。とてもきつくて、もう……」
「寝呆けるんじゃないよ。着くまでは金輪際駄目だね。そりゃ鍵は持ってるよ、ホラね。着いたら嫌でも持って帰るさ。向うへ行ったら解いてやるよ。尤も、すぐに別のを嵌められるだろうけどね」

婦人看守は鍵を見せびらかせてせせら笑うのだった。ずきずき痛む枷痕もこの女のせいなのに。

列車は近郊回りの鈍行、コンピエーヌまでは二時間の行程だ。重い荷物を膝にミシュリーヌは三等車の片隅でホッと喘ぎ、額の汗を手の甲で押し拭いた。隣りに坐わるポーラが白いハンカチで首筋を拭く。女囚は背もたれのある椅子に掛けるのは生れて初めての様な気がして涙ぐむのだった。背もたれがあればあったで、今度は背中をそれにピッタリつけて、両手をスーツケースの上に姿勢を正しく坐わっていなければならぬ。喰い入る手錠は痛いし、身動きする度に鋭い眸が注がれるし、ゴトゴト走る列車の中で暑さにうだり

ながらの苦行だ。気付いた人々が囁き合つて、見に来る連中もいる。護送中といえども刑の執行は停止される訳ではないのだから、服役女囚の身には当然の苦しみと恥かしめ、ポーラ婦人看守は自分も暑いことだろうに、窓は五センチ程しか、開けてくれないのだった。

(でもこの上に腰枷、脚鎖かけられて送られる人もいるのよ。手錠だけなんだから、辛抱しなくちゃ。汽車のおそいこと。でも、早く着いて欲しい様な欲しくない様な気分だわ)

ミシュリーヌは首を立てて背をまっすぐ延ばし、固く眼をつぶって身じろぎもしなかった。四人掛ボックスには他に誰もいないのが救いだった。尤もかなり空いているし、わざわざ手鍵の女の前に来て座わる物好きもいないのだろう。明るい真夏の太陽の下、なだらかな起伏の丘陵と緑の森が車窓を過ぎ、正午少し前、汽車はコンピエーヌ駅に着いた。静かな田舎の小駅、しかし近在には名所旧蹟もあって、落ち着いた構内は人影もなし、という訳には行かない。

「あら、今日も一人、連れてかれるわ」
ピンクのエプロンが愛らしい小娘が、売店の中で眺めて言った。

「ほんと。今週はこれで三人目ね」

年かさの女がメモから顔をあげて答え、電気機関車の笛がかん高く鳴った。

「でも、可哀想ね。まだ若いじゃない？ どんな気持ちしら」

「あんなにしててあんなに見えるんだから、まだ廿五、六ね。しょげて涙ぐんでるわ」

「今日の婦警さんは、ごつくて怖い小母さんだこと」

「あら、婦警さんじゃなくてよ。看守さんだわ、法務事務官。あれ相当偉いらしいわね」

「その何とか官だから、余計いじらしく見えちゃうのね。あ、いらっしやいませ」

買物の若い男は去り、女囚と制服もコンコースの角を曲って消えた。

「ねえ、男っていやねえ、あの女の脚ばかり見ちゃってるのよ」

「素足だものね。けど、いい恰好の脚してたわね。今頃はいいけど冬は辛らいと思うわ、靴下穿かせて貰えないんだものねえ」

「それにコートもなしよ。人間、あんな風にはなりたくないわねえ」

「ほんと、全くよね。何だかだというけど、やっぱり生き地獄みたいなんだって。あら、何を差し上げます？」

駅前を覗いたポーラ法務事務官は舌打ちした。何の手違いか、迎えの車が来ていないのだ。

「何だって!! 故障で、まだ三十分はかかるって？」

駅長室の電話に噛みついたポーラは眉を寄せる。赤ら顔の駅員が通りすがりにミシュリーヌの腰を素早く撫で

「タクシー代は自腹切れていうの？」

ポーラが手荒く革ロープを引いて、女囚を手許に手繰り寄せる。

「……いいよ、歩くわ」

ポーラは不機嫌に電話を切り、女囚は身を硬くして顔色を窺った。

「少し暑いけど、ピクニックのつもりで歩くのもいいね。キリキリ歩くんだよッ」

「はい、すみません」

女囚はつい謝って仕舞った。固くなったハイヒールは素足に痛いし、前で一本棒に荷物を提げる両腕はもげそうだが、歩けと言われれば、どこまでも歩いて行くしかない。

「あれっ、とうとう駅からも、おひろいさせることになったのかい？」

「おめえが税金払ってやらねえからよ」

「てやがんでえ。でもよお、今日のは凄えシ

ヤンだな。勿体ないことしやがる」

「あの野郎、荷物持ってやりやいいのによ」

「バックヤローあのごついのだって女だぜ」

「あそうか。道理でスカート穿いてやがら。」

俺、荷物持って一緒に行ってやりてえや。い

い脚してるじゃねえか」

「俺の女房を代わりにぶち込んで、という算

段には行かねえかな」

男達は舌なめずりして馬鹿話に興じ、ミシ

ユリーヌは、深々とうなだれて駅前の町を歩

む。ながい拘禁生活に裏れたミシユリーヌだ

ったが、それならそれで却って凄艶な程なの

だった。町並みを過ぎて、のどかな並木道が

続き、女囚は喘いで遅れ勝ちだ。丘のふもと

の樹陰でポーラは立ち停まった。女囚はホッ

として肩で顔を拭う。

「少し休むとするか」

ポーラはハンカチを草に敷き、腰をおろし

た。ミシユリーヌは泣きたいみじめさを、じ

っと耐えて立ちうなだれた。荷物さえも、許

しなしには置けない分際なのだ。けなげに立

ちつくす女囚を眺めた婦人看守が意外にも言

った。

「よし。お前も坐っていいよ」

夢かと喜んだ女囚は草の上に崩折れ、荷物

を投げ出して大きく喘いだ。

「ありがとうございます。助かりましたわ」

微風が吹き、女囚は不自由な手でドレスの

あちこちを摘まむ。

「いいとこだろ？ お前の行く所はあの森の

向うにあるんだよ」

ポーラは顎をしゃくって示し、あくびして

草に臥せった。

(ほんとに、いいとこだわ)

蒼い空や流れる白雲、樹々の葉をそよぐ風

や草の香り。ミシユリーヌは、眺め聴き嗅い

だ。半年に余る拘禁生活を灰色に送った身に

は、涙のこぼれる心地だった。

(でも、刑務所の中は矢張り灰色のコンクリ

ートと冷たい鉄格子に決まってるわ)

そばのポーラは、革ロープを握る手もゆる

めてまどろんでいる。子供が三人、夏の陽光

の中をはしゃいで、小川の向うを駆けて行っ

た。

(ああ、自由の身になりたいわ。刑務所なん

かに行くのは嫌よ)

ミシユリーヌは、あたりを打ち眺めて切な

く想う。

(ああ、でも駄目ね。こんなものを嵌められ

てるんだもの。この方に連れられて行くより

仕方ないんだわ)

女囚は両手の手錠を悲しく見下ろし、ガチ

ヤつかせ引張って見て、その拘束のきびしさ

に絶望した。

(このひとにかけられたのね。安心して寝て

るわ。口惜しいけど、どうも出来ないのね、

この傷だってこのひとのせいなのよ。ああ、

ずきずきするわ。こんなにきつく嵌めなくて

も抜けやしないのに。手錠で、ほんとに嫌な

道具なこと。でも囚人にはつき物だから、仕

方ないわねえ。護送用の物ともなると、ほん

とにごつくて頑丈で重いものね。あら、革ロー

プ、手から放しちゃうてるわ。案外、呑気な

ところもあるのね、このひと)

まどろむポーラ看守を残して、このまま逃

げれば逃げられるだろう。しかし、手錠姿で

は直ちに捕まってしまうに決まっている。

(あ、そうだわ、鍵をあそこに、納ってるの

よ)

ミシユリーヌの眸が一瞬輝やいた。先刻、

パリのノール駅のホームで見せびらかした鍵

は、あの襟裏のポケットに納められた筈だ。

誘惑は堪え難い程に全身を駆け巡り、わなな

く両腕が、おそろおそろ動いては引込められ

る。思い定めて健気に殊勝なミシユリーヌ程

の囚人でも、僅かの勇気で自由になれるとなれば、危うく分別を忘れもするのだ。

(ああ、駄目よ。私としたことが何という)

エメリーヌやアネットの顔と言葉を思い出し、ミシュリーヌは両手を膝に音立てて置き金髪を打ち振って思いを断ち切った。

「オヤ？ 私、眠っちゃったらしいね」

ポーラが眼覚めて伸びをし、ミシュリーヌはホッと安心した。これでもう、詰まらないことを考えずに済む。

「お前は、ほんとに神妙だね。規程違反だけど」

身を起したポーラは、ミシュリーヌが切な

く見つめた襟のポケットから、小さな鍵を摘まみ出した。黙って顎をしゃくり、戸惑いつつ差し出す女囚の手から、左手だけ鋼鉄環をはずす。

「御褒美だよ。汽車の中でも姿勢を崩さなかったし、態度がいいからね。さ、痒ゆいところでも搔くといいよ」

開いた鋼鉄環を空で閉じながら、ポーラは言った。

「まあ!! ありがとうございます」

別々になった両手の嬉しさに、女囚は右手を革ロープにあずけたまま、左手で体のあちこちをいじった。冷酷一点張りかと思って怖

れていたポーラ・マルチネリだが、その灰色の眸に人間らしい思いやりの色が浮ぶことも時にはあるのだ。

「さあ、ぼつぼつ行こうかね。もう一軒位かしら。街なかのあんな所にいると、いいピクニックになったよ、今日は。お腹が空いたねえ」

ポーラは再び顎をしゃくり、女囚は自分で手錠を左手にかけ差し出して検査を乞うた。森の中を通れば少し近道、小径の凹凸に女囚の脚がしばしばよろけ、抜けそうな肩に荷物を取落しかける。大きな樅の木の下で立ち停ったポーラが黙って又も左手をはずしてくれた。片手錠は利腕にかけるのが定法だ。女囚は眸に感謝を溢れさせ、体の左側に荷物を提げた。歩き易くてスニーカーも軽くなった心地、ミシュリーヌは心からの礼を述べた。この婦人看守を恨んだこともあるのが済まない様だった。灰色の眼のカギ鼻は、最後になって、ミシュリーヌのどこかが気に入ったのだ。森の小径には人影もなく、立ち並ぶ樹々の切れ目に、明るい野末や山の端や小川が見えた。ポーラは時々自分の囚人を見やりながら、黙って革ロープを短く曳く。

(いいとこね、この辺は。刑を終えたら散歩

現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号〔文献〕

○限定版写真集「豊満と清楚」

女体緊縛グラフィック集
頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号〔美4〕

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」

日本版
頒価 一〇〇〇円 略号〔美5〕

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号〔美6〕

したいわ。気の向くままに歩き回って、好きな所でお弁当を食べるのよ)

女囚は右手を前に突き出して曳かれつつ思ふのだった。人目も無い静かな道を縛しめもゆるめられ、護送担当官と唯二人で黙々と歩いて行くと、刑を受けに牢獄へ曳かれるのだという実感が胸にしみじみとひろがった。鬼の様に怖れていたこの婦人看守だが、先刻から僅かの憫れみをかけてくれていると、つい哀しみを訴えて甘えたくもなる。ミシュリーヌは手錠をぶら下げる右手をあげ、顔を寄せて睨を押えた。

「泣いたって仕方ないじゃないの」

ポーラは眉を寄せていった。わざと邪慳を装おった声だった。

(このひとだって、そんなに冷酷じゃないのね。他人が見てると、わざと冷たくするたちなのよ。拘置所ではずい分苛められたし、今日だって死ぬ程恥かしい思いをさせられたけど、もう恨まないことよ。私を縛って連れて行くのがお仕事なんだから。この暑いのに、私のために御苦労だと思わうわ)

女囚は眼をあげて、婦人法務事官の制服の背に滲む汗を見た。

かなたに、建物の群と高いコンクリート塀

が長々と見えて来た。

(あそこなのね。とうとう来たんだわ)

女囚は溜息と共に荷物を持ち直した。罪ある女の終着点、曳かれるべきところへ遂に来たのだ。

(ああ、何と塀の高いこと。あの中には鉄格子とコンクリートの箱があって……。あの中

でこれから暮らすのね、ああ……) 女囚は思わず脚を停めて振り返り、緑の森と明るい道を見やった。護送者が黙って革ロープを引張る。右手にぶら下がる鋼鉄環の一つが揺れて陽にきらめき、もう一個の鋼鉄環が手首に喰い込んだ。眼前百米に見えるいかめしい鉄門。

(ああかんにんして。逃げたい、逃がして)

今こそ女囚ミシュリーヌは痛切に自由を想った。右腕が一杯に延び、喘いで踏み出す膝が崩折れそう。四年ノ打たれた刑期を思うと、この地面に、しがみつきたい心地だった。しかし、いかに泣いたとて訴えたとして所詮無駄なこと、垣間見た外界には忽ち別れを告げて、番号付きの獄衣と見知らぬ刑執行者達、鉄格子と鎖と苦役の待つあの中へ入って行くほかはないのだ。きびしく見据えて革ロープを手繰るのは、同性ながらも体力秀でた

大柄の女性。職務を遂行するこの制服が、右手首の鋼鉄環をはずしてくれる筈もなく、握る革ロープを放す気ずかいもない。その気になれば女囚の腕ねじ上げて、その小柄な体を引き摺ってでも行くだろう。あの鉄門を入って引渡すまでは、この女囚の身柄は彼女の全責任だ。

(私、どうしたのかしら。刑を受けに行かなくちゃ。あの中で罪の償いをするのよ)

思い直した女囚は辛うじて観念し、曳かれて再びしおしおと歩むのだった。

心乱れた女囚ミシュリーヌが気付く訳もなかったが、その姿を物陰から見送る若い女性がいた。ハンカチを眼に当てるその女性はイヴェット・ヴラディ。非番の彼女は報らせを受けて官舎を飛び出し、門の前で車を降りる姿だけでもせめて見たいものと、一時間前から立ちつくしていたのだ。個人的連絡をひそかにしてくれたのは拘置所勤務の友人、ミシュリーヌがひれ伏しての挨拶に詰所で唯一人応えた若い婦人看守だった。電話の手違いで、連絡が当日になってしまったのだ。

(ああ、何とおいたわしい。何年振りかでお逢いするというのに、隠れていなくちゃいけないなんて。でも、今飛び出したりしたらま

ずいわ。相変らずお綺麗で上品でいらっしやること。駅からあおして歩いていらしたのね車どうしたのかしら。でも、片手だけにして貰えてよかったですこと。あのひと、あんな顔してても案外やさしいのね。ロープ一本かけなくても逃げる様な奥様じゃないことよ）イヴェットはブラウスの胸押えて女囚の背を見送る。

（さすがにお悲しいのね。ションボリ歩いて

いらっしやるわ。どの監舎になるのかしら。昨日はうちにはその気配もなかったし、半端の房もないし。ほかはどうなのかしら。下っぱ事務官は悲しいこと。私がせめて課長補佐位だったらねえ。入って行って様子見ようかしら。いや、駄目よ。気付かれてバレでもしたら、元も子もないわ。おお神様、どうか三監へお見えになる様に……）

願いが叶う見込は六分の一、想いをこめて

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

ハンカチの陰から眺める女囚の後ろ姿が、門の少し手前で、腕掴まれて立ち停まった。横向きになった女囚の左手が荷物を提げたまま前に回わされ、手首に近寄る鋼鉄環がキラリと光る。入獄する女囚が門に入る時には、手錠を両手に歩くのが当然なのだ。

女囚ミシユリーヌは、突然手を振りもぎつた。いい様のない想いが全身を駆け巡り、訳の分らぬ衝動に全身がのた打つ。

「いやッ。いやよッ！」

駄々っ子の様に脚を踏みもだえ、手錠と革ロープをぶら下げた右手を振り回わし、涙を浮べて喘ぎ叫ぶ。おとなしく手錠を受けるものと思っていたポーラ婦人看守は、一瞬呆氣にとられて眼をパチパチさせた。ひそかに眺めるイヴェットも驚いて唇をあげ、そして蒼くなった。

（そんなことなすっちゃ駄目ですわ、奥様。そんな反抗みたいなことなされると……）

門の守衛室の窓に二、三人の顔が現われ、通りすがりの主婦風が子供を押して遠くを回る。ポーラ・マルチネリの灰色の眸に、忽ち怒りが燃えた。

（ついやさしくすると、すぐつけ上って！）夢中で振り回わす右腕がガッと引き下ろさ

れ引き寄せられ、あつという間に背にねじられた。したたかに喰い込んでこじる鋼鉄環の痛みと、折れる様な腕、肩の疼きに、女囚は我れに返って悲鳴をあげた。脚がよろめき、ハイヒールが飛び、荷物を落した左手が空に悶える。

「おとなしくおしッ。ここをどこだと思ってるの？ 所もあるうに正門の前で！」

右手首が更にほんの僅かねじられ、三センチばかり吊り上げられ、倍加した苦痛に女囚は脂汗を浮べた。

「お、お赦し下さいまし。悪うございました。お赦し下さいまし。も、もう……ウ……かんにんして……ヒーツ……」

悲鳴と哀願はイヴェットの耳にも聞え、彼女は耳掩って目をそむけた。しかし、あれは明らかにミシュリーヌ奥様がいけないのだ。あんな風にすれば、イヴェットでも色をなして押えつけるだろう。

ポーラ婦人看守は漸く腕を放し、呻いた女囚は両膝を道に落した。

「自分でかけるんだよッ」

ミシュリーヌは、痺れた右指先に鋼鉄環をまさぐり、ドレスの腹あたりをも使い、後悔の涙を流しながら漸く左手にも嵌めた。

(手錠位のこと、私一体、どうしたのかしら。気が狂ったのかしらねえ)

「申し訳ございませんでした。お手数かけてすみません」

女囚は首を垂れ両手を差し出して見せた。跪まずいたままの女囚の金髪がグイと掴まれ、打ち仰いだ頬に平手が飛んだ。塵一つない刑務所正門前の白昼の道路上で、激しい往復ビンタの雨が鳴り続ける。通りかかる男女は、このあたりの行刑機関に勤める人かその家族、少々ひどいことをしたって気兼ねはいらない。眺め聞くイヴェットの胸は掻き回わされてつぶれる心地、じっと耐えるミシュリーヌの頬ははれ上って口中に血が流れた。

「分ったかいッ。一応、ここはこれで済ませてやるよ。おいでッ」

見下ろしてどなるポーラの眸は、面目をつぶされた怒りと憎悪に燃えて、すでに一かけらの憫れみもない。手荒に引かれた革ロープ女囚は呻いて地に這い、力なく立ち上がって荷物を前に提げた。両腕を革ロープにあずけたまま、素足にハイヒールを探ぐる。

(あれで済めば、いいんだけど)

我がことの様に蒼ざめたイヴェットが見送るとは露知らず、ミシュリーヌは打ちしおれ

て獄門を潜った。ポーラが守衛に書類を提示し、制帽の男が女囚の品定めをした。電話はもう済んでいる。背後に軋んで再び閉じる鉄門の冷厳さ、喘いで立ちすくむミシュリーヌの前に、二名の保安課婦人看守が威圧する様に立った。

入獄女囚の身柄は、門を入れれば刑務所当局の管轄になる。正門の内側、守衛室の前で、身柄の仮受渡しを行なうのが通例だ。保安課の一人はポーラより一階級上の襟章、しかしポーラは敬礼もせずに書類を突き出した。「ミシュリーヌ・ダリユー。パリ拘置所からです」

襟章を光らせた保安課婦人看守は欠礼を咎める色を浮べたが、護送車の手落ちを思い出したのか、黙って書類を受領した。護送用手錠が荒々しくはずされた。手首をなでる暇もなく、もう一人の保安課のスカートが前に立って、忽ち又も手錠だ。置くことを許されない荷物をもったまま、ミシュリーヌは両手をもち上げて手錠を受けた。門を潜るや否や有無もなく、見も知らぬ女性の手でかけられる手錠は哀しい。痛々しい両手首にガッキと嵌められたこの銀色の道具は、すでに刑務所の備品なのだ。

初めて受けた刑務所の手錠の冷たさ硬さは骨にしみ渡った。見詰めながらミシュリーヌは両手を下ろして垂れ、やけつく頬を耐らえつつうなだれた。

「こんな顔してますけどね、なかなかの女ですよ。しおしおしてると思って油断しない様にね」

と、ポーラは戒具をショルダーバッグにはうり込む。

「ふむ。罪状から見ると刑が重い様ね。たちの悪い女なんだろ」

襟章ピカピカは書類をパラパラとめくり、女囚を、頭のさきから足さきまで鋭く見据えた。

（ひどいこと、いわれるものね。情けないこと）

ミシュリーヌは、そつと唇を噛み、塩辛い唾を呑み込んだ。何といわれようと、口答え一つ出来ない身なのだ。お慈悲を願うには、まじめに勤めて認めて頂くほかないのだ。

「顔をお見せ」

女囚は、おそろおそろ顔をあげる。

「ふむ。顔はまああのツラだね。おや、何だかはれてるわね」

「あ、そうそう。たった今、門に入る時に反

抗的態度を示したんですのよ」

とポーラが報告する。あとの処理は刑務所のやることだ。

「そう。ま、ありがちなことね。でも一応調べといて頂戴。守衛さん達も、見てただろうし」

「はい」

答えた部下がメモし、女囚は震え上がる。先刻の凄まじいビンタだけでは未だ済まないかも知れないのだ。

盗み見る本館前の庭は広々と明るいが、ミシュリーヌの胸は悲哀に閉ざされて真暗だ。

制服姿の同性三人に取囲まれて手錠姿で立たされ、品物同様に書類付きで受渡しされる。はじめは泣きたい程に哀しい。留置場から拘置所へ、そして今とうとう刑務所へ連れて来られたのだ。自分がどんなことをした女であるかは、身柄について回る書類に、はっきりと非情に記されていることだろう。

女囚は眸をあげて、あたりのたたずまいを見回した。ずっと向うの植込みのあたりで腰連鎖を鈍く光らせる赤縞服が数組。たった一人の制服が掃除労役を監視する。

（私も今日からあの一人になるのね。奴隷になった気で勤めましょう）

ミシュリーヌは漸く気を取り直し、覚悟が甦えて来た。門衛室に入っていた保安課のスカートが出て来た。

「さ、行くんだよ」

命じる声は非情で冷たく、眺める目は新規購入の牛馬をでも見る様だ。

「はい」

答えた女囚は思い出して、ポーラの長身に向き直り、頭を垂れた。

「ありがとうございます。お手数かけました」

「ふん。今頃、点数あげたっておそいよ」

嘲ったポーラは後ろからついて来た。

女囚は自分の手から離れたのだ。もう、責任はない。本館で身柄受領書を貰えば御用済み、食事をしてブラブラ戻るだけだ。

（このランチは安くて美味いからね。誰かタカれるのに逢わないかしら。帰りの車は大丈夫だろうね。歩くのはもう御免だよ）

女囚ミシュリーヌはドレスと白い下着とに別れを告げ、嚴重な身体搜検、身柄確認、健康診断を素裸で受け、胸迫る想いで赤縞囚衣をかぶり、そして両手に嵌められた旧式手錠の重さにタマげて打ちひしがれた。マルチーヌ刑務課長の説教を受ける女囚の脚が棒にな

り、両手が痺れて硬張った頃、満腹したポーラは正門前で自動車に乗り込んでいた。

「……分ったね？」

マルチーヌがきめつけて胸許を直す。どうもこの新式ブラジャーはピッタリしない。

「はい。よく分りました。まじめに刑を受けさせて頂きます。よろしくお願い致します」

女囚は目を伏せてハッキリといった。

「なかなか結構よ。その気持を忘れない様にね。お行き」

女囚ミシュリーヌは曳かれて去った。課長は正門前でことには遂に触れなかった。保安課婦人看守が握りつぶしたのだ。灰色の目のカギ鼻は欠礼などして気に喰わなかったし門衛の男が庇ったせいもある。男が一枚かめば、常に美人は得だし、不器量女は損だ。そして又、マルチーヌ課長は指図書にある符号をマークした。担当監舎に処遇区分を示唆する個人的なその連絡符号は、最高級ではないにしても、相当な寛容処遇を勧告していたのだった。

ミシュリーヌは大きく息をして、第四監房の鉄格子を潜った。三十分の間、鎖を挟んで支えていた両膝の内側が鈍く疼く。奥から二つ目の寝台に腰をおろし、若い婦人看守が閉

じる鉄格子戸の音をしみじみ聞いた。

(これでとうとう、完全な懲役人なのね。咽喉がカラカラだし、お腹も空いたわ。頼んで見ようかしら。でも駄目ね。撲られるのがおちだわ)

女囚ミシュリーヌには昼食はおろか水一滴すらも、遂に与えられなかった。

(こうして四年間暮らすのね。昼はこき使われて苦役して、済んだらこの檻の中へ叩き込まれるのよ。何の楽しみもなしに、明けても暮れても規則、規則、規則……。でも仕方ないわ、わるいことした罪人なんだから。当然の制裁だわ。ところで、皆ないけど、どこでどんなことさせられてるのかしら。お仕事だって辛いことさせられるんでしょうね。でも、嫌だといったって駄目よね。このマツトの固いこと。拘置所に較べると砂と石だわ。けど、床に寝るより何ほいいか。それに労役の時は別の服があるなんて、嬉しいじゃない。まだよく分らないけど、思ったよりひどいとこじゃない様ね。でも規則はよく守らなくちゃ)

鉄格子の外からはおそらく見えないであろう両足を、床のマークからはみ出ない様にキチンとおき、咽喉をカラカラにしつつも、身

じろぎ一つしまいと背を延ばすミシュリーヌだった。そんなミシュリーヌを覗いた若い制服娘が、うなずきながら立ち去って行った。

夕食前の一刻、ミシュリーヌに引きあわされた数十名の女囚達は、あるいは好意をあるいは反感を示した。素直な関心を示して仲間として受け入れるのもいるし、その美しさに目を輝やかす骨太な女もいる。肩すくめて見るは、自分の容姿に些かの自信ある連中、いかにミシュリーヌが美しく優雅な容姿であろうとも、相手が同性連中ともなれば仕方ない。

日課の身体搜検。これが毎日かと思うと胸ふさがる思いだった。「直入」女囚ならば恐らく最初は咽喉を通らぬ夕食も、ミシュリーヌにとっては拘置所よりもはるかに美味しいと思えた。みじめな点呼は覚悟の前だが床に脚折って坐わる時間の長さには些か参った。勿論、ベッドの上に坐らせては貰えない。摘発された女囚は鉄格子の内側に膝をつけ、床に脚を折った。

「二時間ばかりそうしてるがいいわ。崩すと捕縄かけるよッ」

言い渡された女囚の嚙る鼻の音がミシュリーヌにも聞えた。

「あんたのベッドにいたのは今朝本館動めになったのよ。仮釈だって。羨ましいわねえ。私は未だ嘆願資格もないんだよ、あーあ」

ここでも隣りの女囚は、放火で六年の赤毛四十女、ミシュリーヌは疲れて目を閉じた。灰色の天井を見上げていると、いろいろな感慨が胸に湧き、涙があふれて来るのだった。

その頃、イヴェット・ヴラディは漸くミシュリーヌの情報を掴んで、神を恨んでいた。「今日、初めて独りで収監業務をやったわ。凄い美人。不びんになっちゃう位に神妙だった」

たわ」

何気なく訪れて探りを入れたイヴェットにロゼットが、寮のソファで明るくいったのだ。ロゼットは四監勤務だ。胸つぶれたイヴェットは力を落して、さりげなくいった。

「小柄金髪の美人ね」

「あら、そうよ。よく知ってるわね」

「だって、美人だといったでしょ」

今日の入獄女囚は他にはいない筈だ。それでも、と思つて確かめたイヴェットは、ガクリと肩落とす。

「私より美しい？ ホホホ。年はいくつ位？何をしたの？」

「あら、よそのことがえらく気になるのね。わるいけど、あなたよりずっと美しいわ。小切手の横領だったかしら。えーと、三十だったわ。何号だったっけ。私、数字に弱いのがあ、暑い。クーラー、利いてんの？」

あの蒸風呂の様な監房に苦吟するミシュリーヌの姿を思ったイヴェットは、思わずビシリといってしまった。

「利いてるわよ。私、ちっとも暑くないわ」

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

美貌で清潔感溢れる新人美木乃々子嬢の体当り演技と読者有志のセッ作成並に責役出演とにより完成された「日本女性拷問刑罰集スチール」は、発表以来、同好者の間で大変な評判を賜わりまして是非一組、お求め下さい

木馬責め

三枚一組 略号(もと)
後手高小手に縛られた女囚が三角木馬に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫ぶ姿――

海老責め

三枚一組 略号(もに)
両足の拇指はくの字にそり反つて激しい苦痛と羞恥に悶えぬく凄絶な女囚の海老責め――

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)
白州の粗砂に引き据えられた女囚は高小手首縄に絞られて竹のささらで、肩口を叩かれる――

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)
白紙で目かくしされた女死刑囚は土壇に仰向けに横たえられて、白刃一閃、哀れ女囚の腹は――

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)
柔らかい脛に算盤板のギザギザが喰い込むのに更に膝の上へ伊豆石をのせて非人が揺さぶる痛さ――

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)
白州の上の女囚がどす黒い捕縄で厳しく縛られ非人の手で竹の棒を縄目に捻じ込められて呻く――

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)
腰の乱れを必死に防ごうとする真白い足を八の字に開かせて足首に非情の縄をからませてゆく――

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)
均整のとれた見事な肢体と肌、殊にすらりと伸びた脛と素足をあらわに投げだして悶える女囚――

S
M
カ
メ
ラ
・
ハ
ン
ト・・・・・
△小原真澄の巻▽
・・・・・「可愛い小悪魔の群れ」
む辻
村
隆

「可愛い小悪魔の群れ」

雨の上った黄昏の舗道に、電が立籠め始めた。御堂筋のネオンが宵闇に煙って五彩の光を投げている。新年宴会の未だ続く席をぬけて、私は料亭Aの酒いきれの喧燥から脱出して、独り今、雨上りの御堂筋を歩いている。

体調を考えると、日本酒の盃が容赦なく廻されてくるのは苦痛である。正月のしめの内の屠蘇気分もぬけ切れず、つい進められるままに度を過した、酒のほろ苦さが心につかえて残っている。そっと独り抜けた私には、確かに一つの目的があった。

△マスミは果して約束通り、今日も来ているだろうか——▽

可愛い小悪魔は、断髪の頭をふり立て、

ベンチャーズのダイヤモンド・ヘッドにのって、強烈なエレキギターのリズムの中で、モンキーダンスに踊り狂う、若者の群れの中へと消えていったのだが……。

私と芳野眉美は思わず、顔を見合わせ、二人にだけ分る苦笑を洩らしあった。昨夜のことだった。芳野眉美はひる過ぎ伊丹から日航で帰京した。

話は一夜週のぼらなければならぬ。

× × ×

芳野眉美と過す、最後の夜だった。既にこの五日間、私と彼はいつも行動を共にして、夜の猟奇への探求とアブの追求に寧日もなかった。そして昼は、夜の生臭さを払拭するか

のように、京都の竜安寺の石庭、西芳寺（苔寺）の静寂の中に禅の鮮烈さを知ろうとし、奈良の薬師寺、唐招提寺で、古き仏達へ、古への郷愁を求めたりしていた。

奇クを通じ、文通では既に二年に近い交遊であっても、彼と相見えるのは、今が初めてである。始めて逢った刹那のぎこちなさは、数分後には雲散霧消して、最早私達は十年の知己の如く、赤裸々に語り合っていた。（この項については、別掲「芳野眉美との対談」で詳しく述べようと思っています）、毎夜、彼は私の陋屋の離れ屋で泊り、夜更けて三更に到る迄も話し合ったりしていた。私宅での滞在中、彼の経営する東京のバーは休業であ



る。おなじみもあって、そうそうも休んでおられず、愈々最後の夜私は芳野眉美を夜の大阪の巷へ案内したのである。この夜はアブの探求から離れどちらかといえば、大阪の味を知ってもらうのが目的だったのだ。

私は努めてゲテモノを好んで歩き廻った。ジャンジャン横丁は釜が崎界限、新世界の一面にある。一本十円の串カツをほうばり、一本十円のドテ焼に彼は舌鼓を打っていた。関西のきつねうどんは、関東に較べて、ダシがスゴく淡泊だが旨いとほめたり一杯二十円のミキサーのバナナジュースの安さに目をまろくしていた。一目でそれと分る飛田辺りの、男娼を興味深く眺め、ニコソンのたむろする動物園前から地下鉄で、私達はミナミへ出た。なんばで降りて、階段を昇ると、戎橋の雑踏の一角に出る。

地下鉄の昇りきった出口に大きなニュースビラが貼ってある。青森県三沢市で大火、そんな新年早々の暗いニュースも、肩を組んで歩く若者達は一顧だにしない。気の毒であっても、また、私達にとっても、そのニュースは、遠い他国の出来事に過ぎない。数日経てば誰も忘れ果ててしまうだろう。インドのシヤストリ首相が死んでも、若者は騒がないが巨人軍の王選手が、婚約発表すれば、若者は目の色変えてケンケンゴウゴウのご時世である。若い娘は、大劇の橋幸夫の実演に、我を忘れて痺めいているのだ。

そんな空気の大阪の最大の盛り場を、私と芳野眉美は、当てもなくさすらっている。

千日前へ出て、千日デパートの前の路面を渡り、スバル座の「メリーポピンズ」のデカデカした看板を横眼に歩いて行く。法善寺境内へ通ずる露路の角に、近頃珍らしい鯛焼屋がある。一ピキ二十円、鯛焼の甘く焼ける匂いが私達の鼻孔をくすぐる。思わず立止った店頭へ、ドヤドヤと三人の少女が、私達を押しつけるようにして店前に立った。

どの少女も高校生刈りというのか髪を無雑作に短く刈り上げて、前髪は剃刀そぎの九重佑三子ばりのカットスタイルである。チェックのストラックスがモモヒキのように、ピタリ体に纏いついて、豊かな双唇が、これ見よがしに張りきっている。めいめいお好みの単色の深いトックリセーターに、胸がパッチリとふくらんでいる。どの少女も皆、私の長女や二女の年頃だ。いやあるいは今年高校を卒業する長女より下かも知れない。

彼女達はめいめいに二匹ずつの鯛焼を、紙に包まず素手で受取ると、さっさと各人が五十円玉を出したり、十円硬貨を数えたりして金を払っていた。割り切っているのだろう。合計六匹で百二十円のささやかな甘いものも彼女達は四十円ずつのワリカンである。

「このタイヤキは、ごっつうおいしいんやで……どうや、イカすやろ」

一人の少女が、連れの娘にいつている。そ

の聲の終らぬ内、既にタイヤキの頭に少女はかぶりついて、アンコの熱さに、口を尖らせ鯛焼の一切れを口中で転がしながら、無心に笑ってうなずいている。

「おっちゃん、お先に——」

ひとときわ、あどけない少女が、私にさりげなく声を掛けて、くると背を向けた。立止っている私達の先を越して買った彼女達の、さばさばしたアイサツである。思わず微笑みがこみ上げて、

「そんなに、オイシイの？」

と私はきき返す。

「ウン、うち、これ大好きなんや。每晚買っねん」

「そう、じゃあ、おじさんが、もっと沢山買ってあげようか？」と私。

「二百円ばかり、大急ぎで包んで下さいよ」

アウンの呼吸で、芳野眉美が、さっと札を出す。

「でも、知らん人に買ってもらうワケあれへんわ。なあみんな……」と可愛い娘。

「いいじゃないですか。これっポッチ、みんな買っちゃったって、タカがしれてるんだから。いいですよ、遠慮しなくて……」

芳野眉美は匆々にくるんだ、熱い紙包を、

ドサリと少女に手渡した。三人の少女は、たべさしのタイヤキを手にして、皆んな呆気にとられてポカンとしている。

「お兄いちゃん、大阪の人と違うね」

もう一人の少女が、芳野眉美にいった。私

はおっちゃん、彼はお兄いちゃんである。エトが一廻りも違うと、かくも変わってくる。

しかも彼は年令以上に若く見えて、坊ちゃん坊ちゃんしている。真赤なセーター、短かいダスターコートので立ちは、大学生ぐらいにしか見えないのだ。

「ええ、東京ですよ」

彼の返事につられて、可愛い少女が代弁するように聞いた。この少女がマスミであることは、あとで分るが、いちいち可愛い少女では煩雑だから、以下マスミで呼ぼう。

「そやろと思うたわ。言葉違もん、スグ分るわ。何かお兄いちゃん、用事で大阪へ来たの？」

既に鯛焼屋の前を離れて、道頓堀に向う途中の会話である。何となく私達は雑然と一群になって歩いていった。彼は私の顔を見る。咄嗟に返事に困ったのだ。まさか関西へのアブの探求ともいえない。私は横から助け舟。

「なあーに、お遊び場所の見学だよ。この人

若く見えるけれど、東京でバーを経営しているんだよ。大学出のマスター兼バーテン兼ホストってところかな。君達いい処を知ってたら案内してよ。お勘定は勿論こっちもちでどう？ 私はここに住んでいても、あまりそんな処は知らないんでネ。さっぱりなんだ」

傍らから芳野眉美が、

「そうなんですよ。どこでもいいから連れてって下さいよ。お勘定心配いらないから。愉しくやりましょうよ」

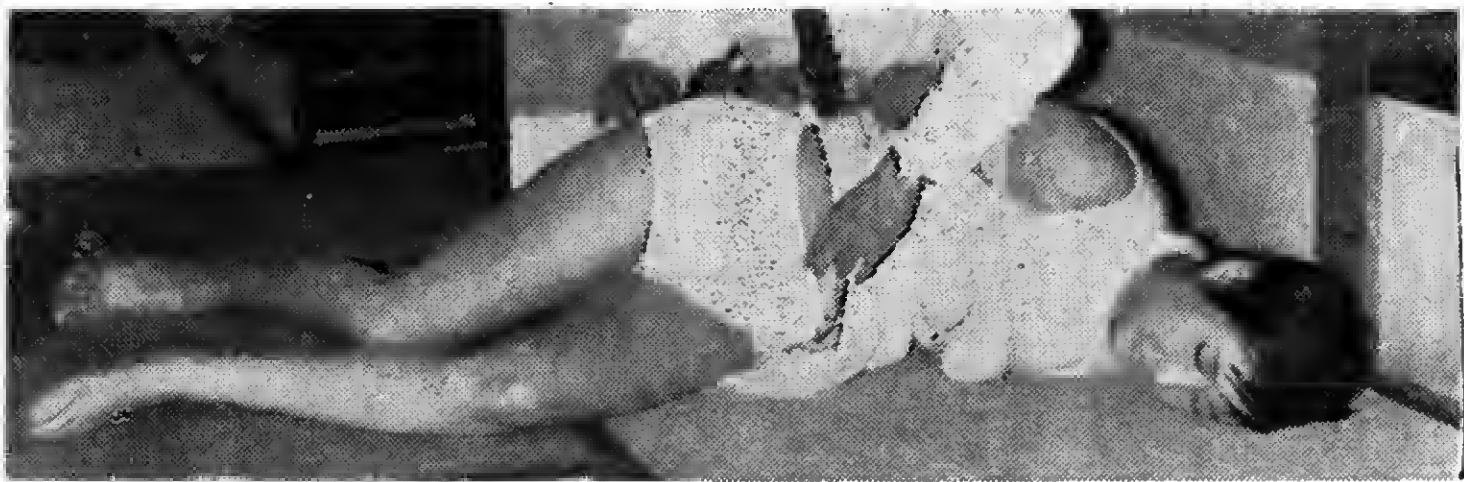
と、ツーといえばカーで、至極調子いい。

三人は芳野眉美を改めて見直したようだった。ヒソヒソと頭をよせて相談。すぐに纏まったと見える。マスミがいった。この娘はどうもリーダー格と見える。いつしか、私と彼には暗黙のうちに、ガールハントのあわよくばの気持がきざしていたことは否めない。

「ほんまに三人も一緒に行ってかめへんの？ それやったら、安くて面白いとこ知ってるんやけど——」

「ええ、いいですとも。高くついたって構いませんよ。もしおなか空いていたら、食事をしたっていいですよ。どうぞどうぞ」

芳野眉美は洒々している。私の腕時計は午後九時を少し廻っている。タイヤキを二匹ず



つワリカンで
買うくらいだ
から、どうせ
彼女達満足な
食事もしてい
ないのだろう
と、彼は咄嗟
に見抜いたら
しい。

果してそう
だった。若い
だけに細かい
芸当が出来な
い。彼女達は
一様にハラヘ
ッタと顔に書
いた表情にな
った。

「ほんなら遠
慮せんと奢っ
てもらいます
わ。そうしよ
うか」

マズミは連
れの二人にと

も、私達へともなく呟やいて、急に生き生き
してきた。

「スバル座の前を入った処に、フランス料理
で『大使館』っていうレストランありますね
ん。この鶏の唐揚げが、すごくおいしいん
ですねん」

ハキハキした娘である。ドンドン先に立っ
て、私達を引張って行く。ニューミュンヘン
の大使館レストラン。構えのいい割に案外安
い。こんなところを、少女達は巧みに知って
いる。雰囲気デラックスめいて、その癖安
い。

「案外に安いので驚きましたよ」

彼は私に囁いた。小ビール一本とそれぞれ
の注文の品を前に三人の娘はしきりにパクつ
いている。私と彼はゲテモノ喰いで満腹なの
で、生ジョッキでつまみ程度。彼女達の健啖
振りを二人で楽しく眺めていた。

三人の産地は、河内カルメン八尾である。

中学を出て既に何がしかの稼ぎを家に入れる
家計でもあるらしい。中学同級の三人共成人
式が今年というから、幼なく見える。しかし
よく見ればカラーケーキのメーキャップに、
眼くまが入っている。結構、成長しているの
だ。

休みの日だけでなく、ウィークデイでも仕
事が終わると、若さを発散させに巷の灯を求め
て出てくるらしい。なにがしかの僅かの金を
めいめい握って——。非行少女とまではゆか
なくとも、若い世代に乗り遅れまいとする、
無鉄砲ともいえる幾分無軌道めいた行為が、
すごく愉しいらしいのであろう。よく見れば
どの娘も未だあどけなさが残っていた。一人
はユリゴ、もう一人はチン（顔がくしゃくし
ゃとしていて、造作が真中に固まっていた、
眼玉がまんまるく、確かに愛玩犬チンに似て
いる。本名は知らない）。そして、私も彼も
何となく魅かれた娘はマズミといった。昭和
二十一年の終戦っ子だから、今年成人式。昔
風に数え年でいえば二十一才か。もう本来な
らば、すっかり一人前の女性であっていい筈
だ。中学卒のコンプレックスが、反面、彼女
達をズベ公めいた高校生スタイルに意識して
しているのかも知れない。

食事、三十分。私達二人が危険人物でない
と、彼女達流のカンで探ぐると、すっかりタ
カる気になってきたらしい。私達がガールハ
ントした気味なのは太甘で、案外彼女達は
ボーイハントしている気味なのかも知れな
かった。甘いムードがただよい、いわば彼女

達は狙れてきつつあった。

(女三人に男二人——チンが一人余計になつてきたな。敬意を表わして、芳野眉美にマスを、マユミにマスマ——。とすると私はユリコを相手にして見ようか、案外可愛いじゃないか。いしだあゆみをお多福にしたご面相だが、ムチムチ張り切ったカラダは悪くないだろう。オモシロクナルゾ)

そんなけしからぬ気持さえ、うずうずとわき上ってくるのであった。

話の弾みで、芳野眉美が、明日の日航機で東京へ帰ることを知ると、娘達は、口々に残念さを口に出した。

「もう一日、大阪にいたらええのに、残念やなあ。ウチら、もっともっと、ええとこ案内したげるのに」

ユリコが如何にも名残り惜しげにいった。

「もう一日早く知ればよかったネ。でもネ、これ以上お店をしめておれないんだよ。また飛んでくるからね。あとしばらくの時間、ジャンジャン遊んじゃいますよ。じゃあ行きましよう」

レストランを出ると、ユリコとチンが両側から彼の腕をとって中に挟んだ。マスマが私の腕に垂れ下るようにして、そっと私に囁く

「おじさん、お名前教えて？」

私は苦笑して住所と名を告げる。

「忙がしいことなかったら、あしたまた逢えへん？ おじさんとウチと二人だけで……」

親子程年が違つても、所詮男は浮気者である。私は腕にかかったマスマの指をぐっと強く握りしめた。O・Kのしるしである。多少照れながらも悪い気はしない。

前をゆくユリコと芳野眉美は、しきりに何か話している。チンは相手にされず、一寸すねた素振りだ。

「チンちゃんがフラれてるよ。こっちへ呼んだらどう？」

私は見兼ねてマスマにいう。

「ほんとは邪魔なんやわ、あの娘。まあいいわ、ウチはおじさんと約束出来たし、こっちへ呼んだるわ」

「その前に聞くがね。東京のプレイボーイとユリコを二人にしてやったらどう？」

「その方がいいわ。ええ工合にやるでしょ」マスマは何かを感じて悪戯っぽく笑い、声を潜めて私の耳許で囁いた。

「あの子、バージンと違うんやし、もう」

「君は？」

「エッチ——。もう相手したらへんし——」

マスマは私の腕を強くひねった。それは媚態に近かったが、娘の羞恥かも知れない。処女、非処女、そんな点は問題ではない。私にはじわじわとS・Mへの疼きが起ってきた。

ハヤッタルデー▽

ええ、気持で叫んで、一向やれなかったノッポのピッチャーの言葉が浮かんで消えた。舗道は黒く濡れて、雲間から、淡い月の光がペーブメントを朧ろに照らし出していた。

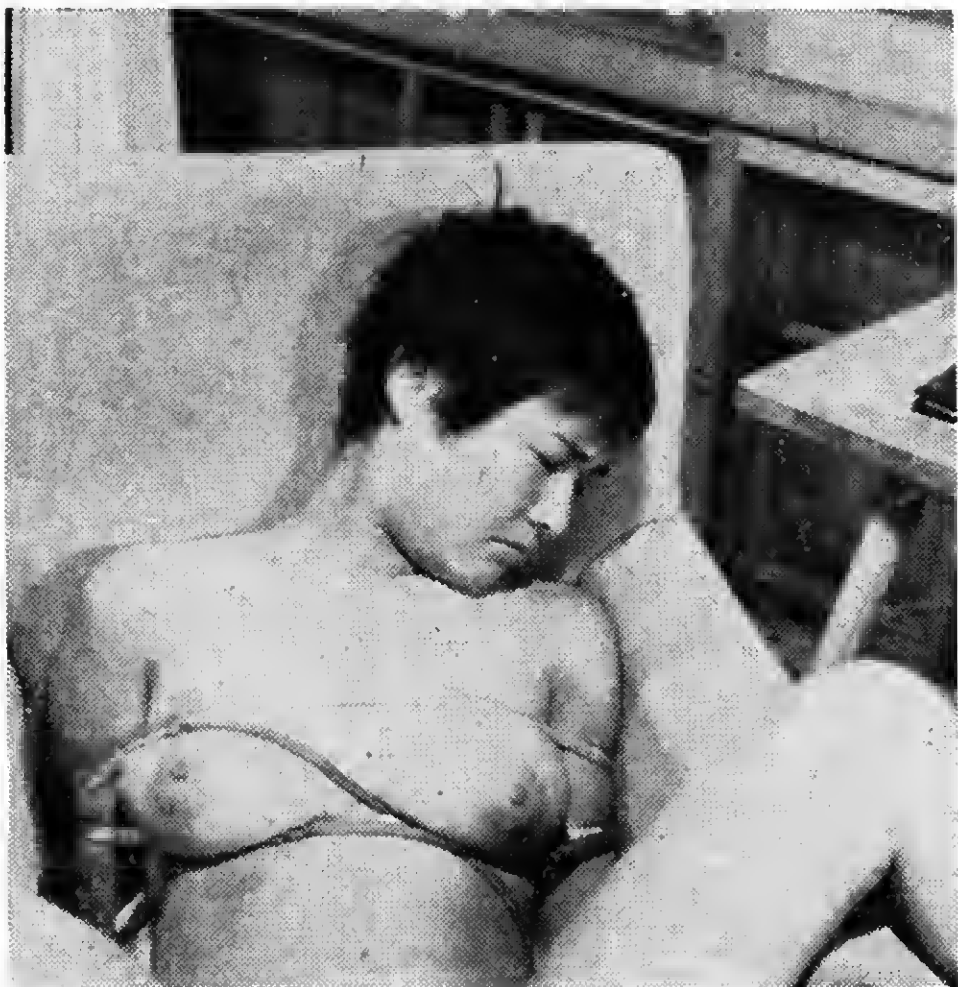
× × ×

ダンス喫茶で、私とマスマ、チンのグループと、芳野眉美、ユリコの二人組とは、離れ離れに坐っていた。人いきれとワインやコーヒーの匂いと紫煙で、どす黒く濁り切った空気の中で、私達はいつしか酔っていた。

ビートルズの「ヘルプ」が激しいリズムを一杯にまき散らし、ベンチャーズの「キャラバン」が、エレキにのって、ルームの中に充満していった。

努めてチンにもご気嫌をとってやった。マスマもチンも、甘いカクテルに酔い、エレキのリズムに酔っていった。

ほてった頬を撫でていた私の肩に、手がのつた。振り返えると芳野眉美が、意味あり気な笑みを浮べて立っている。



「別行動かまいませんか？」

「勿論、その気で、きをきかせているんですよ」

「スイマセンねえ。うまく行けば今夜お宅へ帰らないかも知れません。奥さんにうまく仰有って下さいネ」

「いいですとも、開けてますよ、うちは。ユリコでいいんですか？」

「ズバリ申しましたよ。ツキアウかって……」

大阪娘は判りが早いですよ。明日ご報告しますよ。じゃあ、そちらもよろしくね」

傍らのマスミは私達のやりとりを薄々察している模様だった。チンは飲めないカクテルを、この時とばかり飲んで、カウンターに首を垂れてグロッキー。

「行ったよ」

「そうね。ユリコ見掛けより大胆やわ」

「チンがのびたよ」

「ほってもいけないし、厄介なこやわ」

マスミはじれったそうにチンを凝視した。事実それは私にとっても、同じ想いであった。チンさえいなければ、この夜どうなったか知れない。私はしなやかなマスミの指をいじくっていた。安い紅玉のまがいものの指輪が、カクテル光線を受けてチラチラ紅く光る。

「明日、時計買ってあげようか——」

「ホント。わあスゴイ。うちも持ってたんやけど、安物やさかい、こわしてしめたの。おじさん、いい人やわ」

「その代り、あとがこわい」

「ウウン、こわくない」

時計代りの鍍金の腕輪を、マスミはそっと押え、私に大胆にも顔を近づけて、衆人の中で、音を立てて、私の頬にキッスした。

立ち去り兼ねた芳野眉美が、私の背をつついた。「(適当にウマくやってるネ)」といったのだろう。彼に聞えよがしに私はマスミにさりげなくSMのプレイの誘導を始めた。

「時計は時計。でもね、明日はどこかでマスミを縛って泣かせるかも知れないぞ」

「ウチをくくるの。ええわ。おじさんの好きなようになったげる」

「裸にしようよ」

「ええわ。体には一寸自信あるから……」

「写真とるかも知れんよ」

「シェーッー」

マスミは右手を頭に、左手を胸にやって、マンガのおそ松君仕込みの、流行の恰好をして見せた。私達は思わずゲラゲラ笑う。ここには陰惨な空気はミジンもない。マスミは陽性な可愛い小悪魔だ。このマンモスのダン

ス喫茶は、めいめいの若いカップルが、人は人、我れ関せずと、互いの青春を謳歌している。くちづけも、抱擁も、ペッティングすら誰も意に介さない。そこにはカップルだけの青春が単独にあるだけだった。

.....

(冒頭に還る) 可愛い小悪魔は、断髪の頭をふり立て、ベンチャーズのダイヤモンド・ヘッドにのって、強烈なエレキギターのリズムの中で、モンキーダンスに踊り狂う若者の群れの中へと消えていったのだった。

× × ×

午前十時、芳野眉美は心持ち、張ればったい眼で、間違っても戻って来た。家内に照れたように頭をかくと、朝食の味噌汁を旨そうに啜った。家内もすべて彼の性質を知っているから朝帰りにも深くはきかない。私は同じ食卓の朝餉に向って彼にきく。

「戦果は、どうだった」

「人は見掛けによらんもんですね。すっかりクタクタにされちゃいましたよ」

「で、ノンドの？」

彼はにやりと笑ってうなづく。目的は果たらしい。うまく口説いたものだ。

「春に旅費送るから、東京へ出てこないかっ

ていったら、喜んでいましたよ。あの調子なら出てくるでしょう。伊吹真砂子と、小川ユリコ、戦果二人をあげて、東京へ凱旋とまいりましょう」

二時間ばかり奇巧用の対談をしたあと、あわただしく旅装をととのえ、芳野眉美はボストンバッグ一つを提げて、私達に丁寧な礼を述べて去っていった。伊丹まで送ったかったが、夕方よりマسمミとの一件もあるので、我が家で再会を期して別れた。

生憎の今日も雨、飄然と現われ、飄然と去って行く彼の後姿を、私と家内はしばしば見送っていた。

「おいしいのかしら？」

妻がポツリとつぶやいた。

「え？ 何が……？」

「いやね。分ってるでしょ」

「ああ、そうか。悲願千人飲みをやっているからね。人皆それぞれアジが違うが、真実いって私にも分らない。一度お前のをノンで見ようか」

「バカねえ」

私が入っても、家内はいつ迄も芳野眉美の後姿を見送って入りかねていた。どうやら彼がスゴクお気に入りらしい。江戸っ子の金

の使い振りに、つましく家事をやりくりする妻は、すっかり眩惑されたらしい。

午後から新年宴会――

「よく毎日毎日、出られるもんですねエ」

半ば呆れ、半ばたしなめるようにつぶやいて、それでも妻は、雨によれた私の靴をせっせと磨いていた。私はマسمミの一件をいそびれてしまった。大抵のS・Mプレイはすべて妻に告げる私なのだが、芳野眉美に先を越されて口を切るきっかけを失ったのだ。まあ結果を見てから白状しよう。プレイと割切れば決してジェラシイしない妻だから……。

△マسمミは果して約束通り、今日も来ているだろうか――▽（どうも、前置きが長くなった。ゴメンナサイ）

レストラン「大使館」の奥に陣取って、私は時計を見る。約束の午後七時を少し過ぎている。日本酒の酔いで少し頭が重い。正月以来すっかり食餌療法は狂っている。メチャクチャだ。随分ブドー糖が体外に出ていることだろう。早く復旧せねばと思いつつ、今日もこうして来ているのだから世話はない。どうも克己心の弱い私である。

小娘の約束を真にうけて、ポツンと一人待つ中年男――。人が知ったらバカと思うだろ

う。ジョッキの小コップをチビチビなめて、心は少しいらいらしてきた時、入口が開いてボーイの「いらっしやいませ」という声と共に、おずおずと少女の頭が見えた。

やはり、来たな。欲と二人連れといえば、実も蓋もない。いいおじさんの遊び相手になつてくれる可愛い小悪魔は、今日は莫迦に神妙に見えた。私は手を振る。ホッとした安堵を顔一杯に浮べて、マスミはそそくさと私の前に、テーブルを挟んで座った。

小さく折りたためる私の紺の袋には、オリンパスペン、長尺レリーズ、ストロボと、三脚代りのクランプペットののみ。ロープは妻の手前とうとう持ち出せなかった。いざとなれば買う気でいたからである。それにどの程度までプレイ出来るかも疑問だったのも原因していた。最初から沢山のロープを準備して驚かすのもよくあるまい。

「やはり来てくれたね」

行きずりの彼女だけに、五分五分の期待であつたが、マスミは約束を裏切らなかつた。彼女は、はにかんだ笑いを頬に浮べて微かにうなづいた。

「何か食べるだろう？」

またうなづいた。中年の男性と一対一とな

ると、この若い娘は、何もいえないのだろうか。

運ばれた食事も、昨夜とうって変つて、つましいたべ振りだった。微笑ましくそれを私は眺める。

「じゃあ、ここを出たら、昨夜の約束通り、時計買いに行こう。あまり高いものは少し困るけど——」

「ほんまにええの、うち何や悪いような気がするわ」

「その代り……」

「えッ？」

「まあ、いいよ。早速出掛けよう」

その代りプレイの方をといいかけたが、私は止めた。小娘であっても、昨日あったばかりの見知らぬ男が、何の欲求もなく時計を買い与えようとは、まさか思わぬだろう。

いわぬが花、先物買だが、ままよ買ってやれ。話はそれからだ。

私達は道頓堀をぶらぶら歩いて、心斎橋筋へ出た。マスミは自然に私の腕に手をかけてきた。クリーム色のトックリセーターに真赤なスーツの上着、縞子のストラックスのいでたちのマスミと私、知らぬ人が見れば親子にも見えそうな、この奇妙なカップルは夜の心斎

橋を行く。

若鮎のように伸々とのびた肢態、発洩として何となく心優しい。今日は意識してか、化粧していない。九重佑三子の可憐さと、いしだあゆみの明朗さ、そして丸々と可愛い。私の過去のカメラ・ハントの経歴からいっても、こんな若い娘は始めてのことだ。

時計店で期せずして足は止る。高級品がズラリと陳列台に並んでいる。私は眼をつむった。今更あとへも引けないが、小娘にプレゼントしようとする私の時計の見積額は、せいぜい六、七千円程度まで。一流店の眼もきらびやかな時計のその正札には、ピンは数万円からついてある。キリでなくてもいいが、さでどんなところを物色することだろう。

マスミは眼を輝やかせて、あれこれ眺めていたが、思案したのだろう。その一つをとり上げると私に示した。

「あの、これくらいでも構いませんか？」

見ると、セイコーの婦人用で四千二百円である。私はマスミの遠慮した気持がたまらなくいじらしくなってきた。これなどキリに近い方だ。私は急に元氣が出る。内心もう少し奮発してやる気になっていた。男心も微妙なものである。

データ付の矩形を手にとってこれならどうと示す。八千円少しオーバー。

「そんな高いの、悪いわ」

「いいよ、いいよ。これにし給え。じゃあ」

マスマはすっかり感激したようだった。いそいそと嬉しくて耐らぬように私にかじりついて歩調を揃える。片手には小さい紙包が、しっかりと握られている。私を見上げるようにして小声で囁きかけて来た。

「おじさん約束守ってくれたんやから、今度はウチが約束守る番やわ。どこへでもついていくわ」

「そういわれるとつらいね。じゃあ、ホンのちよっぴりだけつき合ってくれるかネ」

「覚悟出来てまッサ」

マスマは蓮ッ葉にいつて白い歯を見せて笑った。

心齋橋筋では、生憎とロープを売っているような店が見付からない。戎橋筋へと辿ってやっと一軒、高級日用品店があった。ビニールの袋に入った白いロープを二袋買っている



私を、マスマは案外ケロリとして見ている。歩きながら、緊縛プレイの手ほどきをしてやった。ほんの初歩の知識であったが、マスマはうなずいていた。

「おじさんの趣味、一寸わるいな。でも構へん。ウチ、おじさんがいい人と思うわ」

私の心は弾み切っていた。正直いってこんな若いマスマをハント出来ようとは、夢想だにしていなかった。梨花悠紀子の如く、この若い娘を飼育出来れば占めたものだが、案外割り切っているかも知れない。意馬心猿と逸る気持を鎮めて、私は行き当りばったりに、

千日デパート裏通りの、とある小じんまりした旅館の表を開いた。

× × ×

寒々しい部屋に石油ストーブを点火し、女中はお茶を二つ並べてきいた。「お床とりましようか？」ビクリとマスマの肩が動いた。

「いいよ、いらないから。それよりお風呂ある？」

「内湯ありますけど、部屋にはございませんが——」

「じゃあ、のちほど入るようだったら知らせるよ」

「へえ、ごゆっくり」

ここは、近頃流行りのテレビ、バス、トイレ付のアベックホテルではなかった。上六界隈や、少し足を伸ばして桜の宮方面へ行けば連れ込みホテルはわんさどあるが、マスマの若さに照れて、私は心ならずもこんな旅館を選んてしまった。部屋に鍵はかかるが、通り一ぺんの和室はガラシとして、ろくな調度もおいていない。正月しめのうちらしく、床の間の松竹梅と、翁の掛図だけが、幾分部屋を

正月めかしていた。

電源だけは部屋の隅に、スタンド用のがあってホッとした。古い旅館だと往々にして差し込みのないことすらある。

マスマは真剣な表情になって、膝に手をのせ、座布団の上に硬くなって行儀よく坐っていた。不安と危惧と期待と好奇の錯綜した一瞬である。

「寒いからお風呂へ入ってくる？」

「いいわ。でもおじさんも一緒に行くのならはいる」

「ほう、大胆だね、いうことが……」

「背中流したげるわ」

「いよいよもって有難いね。だがよう。君遅くなると困るんだろ」

「八尾の駅を降りてから、一寸淋しいところ歩くんよ。あんまりおそなると心配するかも知れへんわ」

「そうだよネ。若い娘でスゴく魅力ある君のことだ。若いアンチャンがお尻をつけ廻すかもしれないものネ」

「しょっちゅうやわ、そんなこと。だから、男はみんな狼やと思えますねん」

「私は？」

「さあ、狼は狼でも、おじさんは一級の狼か

もしれへんわ。でしょう……」

「凶星。この老いたる狼は、君を噛み殺すかもしれないぞ」

私は冗談めかして、膝を進めると、両手でマスマの頬を挟んだ。スベスベした頬の感触が、掌に快よく反応した。マスマはされるがままになって、そっと眼をつぶった。あるいは私のキスを予想したのかも知れない。自然に紅く染まった健康そうな頬は、ほてって熱っぽかった。キスしたい、欲望は私にもあった。マスマの受入態勢がそれを示していたから。

しかし私はそっと両手を引いた。マスマはやおら臉を開く。私は、じっと喰い入るように、マスマを凝視していた。

「どないしたん？ いややわ。そんなに見つめてたら……。ウチ恥かしながらくるわ」

「眼が綺麗なんだ。澄み切っているんだネ。」

私は君を最初、千日前辺りのズベ公の仲間かと思っ、つい心易く声をかけたが、君が意外に純真な乙女なので、内心弱っているんだよ。むしろズベ公の方が私にとっても気が軽いのだよ。分るかネ私のいうことが……」

マスマは急に悲しい顔になった。緊張し切った娘の心理に私の言葉は、思いがけない衝

撃を与えたようだった。マスマ自身、ズベ公になり切った気で、この中年男について来たのだろう。表面的な偽悪を装おっても、若い純真な乙女の真の姿は、まやかしのものうわべだけのズベ公の姿では隠し切れるものではなかったのだ。

「私は今迄、何千人となく女の人を撮ってきたが、君のような若い娘は始めてなのだ。私の長女は高校三年で今年卒業するが、恐らく君と幾らも違わないだろう。私の逸っていた心が、君の眼を見ているうち、だんだんと萎縮してゆくんだ。困ったことになったネ」

「おじさん、ウチを悪い子やと思う？」

「思わないから困るんだよ」

「いやいや。今更、そんなお説教めいたこといい出して。ゆうべのおじさんの方がよかったわ。ウチの気持くじけてしまうやないの」

この娘は、今夜の私とのデートに、あるいは肉体を賭けてのぞんで、来たのかも知れない。中年男の欲求が、世間並みにどんなものであるかぐらいは察していたのだろう。時計の代償として、当然、肉体で支払うべきだけの覚悟は持っていたのかも知れない。それだけに、私のこうした言葉が、張りつめた気持ちに水をさして、反って彼女はとまどって

るのではなからうか。であるとすれば、私も中年男の卑らしさを身につけて、欲望を剥き出しにしてのぞんだ方が、この場合反ってよいのではなからうか。マスマの言葉が、事実そのことを示唆していた。

「参った参った。よし、ほんならいっちゃうヤッタルデー。さあ、その服脱いだ脱いだ」

マスマの堅い表情が崩れ、ほっとした安堵心が部屋の空気をなごやかにした。

私は袋の中の道具をとり出し、チャブ台を立てて、クランプペットを台の脚に挟んで三脚代りとし、ストロボを電源に挿した。準備はすぐさまO・Kである。石油ストーブは赤々と燃えて、部屋の上層は相当に高温に暖まっていた。

ストラックスを脱ぎ、ソックスをとり、スーツの上着をぬいで、袖なしのトックリセータを脱ごうとしている彼女に、私は矢庭に背後から襲いかかった。長尺レリーズは私の腰のバンドに挟んである。咄嗟のことで、彼女は「呀っ！」と恐怖に近い小さい悲鳴を洩らし俄破と前に倒れる。真新しい縄をいきなり胸にかけ、両手を後手にねじ上げて、エックスに重なった左右の手首にロープを巻きつけ

る。二巻き三巻きして押し倒す。私の息遣いは心なしか荒くなっていた。プレイは前触れもなく既に始まっているのだ。

縛る時思わず胸にやった私の手が、マスマの隆起に触れて刹那ドキリとした。少女めいたマスマの、その異様な発達振りが、私にとっては、予想もかけぬ驚きであったのだ。下着を隔てて縄目に挟まれたその隆起は、もの見事に、ぽっかりとあざとくも浮き上っていたのであった。途々、肉感的な娘だなとは思っていたが、まさか、かくも見事に発達した肉体の所有者であるとは想像もしなかっただけに、この青い麦を縛る私の心は二重の欣びに大きく膨れ上っていった。

レリーズを握ると、パツと尖光が走る。緊縛の過程を次々数枚私はカメラへ納めていった。私の肌に触れる手が擦ぐったのか、マスマはクスクス笑い、一向に緊縛の実感が湧いて来ない。箸が転んでも可笑しい年頃なら私のこのプレイが、彼女にとっては、すべてが可笑しい出来事であったのかも知れない。

「おじさん嬉しい？」

マスマは上目使いに突拍子もないことを私にきいた。

「ウン、いや、とても嬉しいね。本番はこれ

からさ。じわじわと虐めてやるぞ」

マスマは再び眼をつむって、口許に笑いを浮べた。中年男のお遊びに対する、やや軽蔑的な笑いととれたが、解釈の仕様によっては、マスマ自身の代償的行為に甘んじている自嘲の笑いととれた。

コルセットを外しシュミーズをたくし上げて行き、下着をとり払おうとする私に、マスマは両腿に力をこめて、やや抵抗を示した。乙女の羞恥が自ずからそんなポーズをとらせたのかも知れない。

クリーム色の袖なしセーターを脱がし、シュミーズをとるため、私は第一歩の緊縛をといた。体をかがめてうずくまるマスマに私の手は容赦なく襲いかかる。すべての肌を曝したマスマの体は、桃色に染まり、豊かな双つの乳房は強く直角に吃立して尖っていた。

実に見事な乳房としか形容出来ない素晴らしいものである。床の間の柱まで引立って行って、柱に縛りつけ、私は思わず一方の乳房を力強く握りしめていた。苦悶の相を見せて、眉をしかめるマスマの首をぐっと抱きしめ、私は、しばしこの見事な乙女の肌の感触に、しみじみと耽溺していった。綺麗な白い歯並びの間から、軽い呻きが洩れ、愛らしい八重

歯が微かに震えていた。

若い新鮮な肉体は疲れを知らない。緊縛の縄跡をまざまざ残して、肌はじつとりと汗ばみ、つやつやと輝やいて来た。胸の膨らみを強調して、胸でエックスに紐をかけた。窓際に面したジュータンを敷いた板間においてあるソファを中へ持ち込んで、そこへ座らせ、両脚首にそれぞれ一本のロープを使って、一方は床柱、一方は障子の鴨居へと引っ張る。縄がこれで精一杯だから、胸にかけた紐は、旅館の寝巻の紐のつぎ足しで間に合せる始末である。

ぎりぎり足首の縄を引きしぼると、マスマは羞恥の声を洩らして眉をしかめ、顔を背けた。私の眼前には、今やみずみずしい彼女の全貌が、あますところなく曝されているの

☆代理部分譲品について☆

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。○お申込みは（大阪阿部野郵便局私書箱第十四号天星社）宛に願います。○御希望の品名は必ずハ略号Vにて御指定下さい。○古い号に広告してあります最近号に広告していないものは在庫していないことがありますから一応御照会願います。

だ。

私はこのみずみずしく張り切った青い肉体を鞭打ちたい欲望にかられ出した。レリーズを放り出すと、私はズボンをぬぎ、バンドを引き抜いてマスマの前に立ちはだかった。

気配を感じて彼女は眼を見開き、異様に上ずった私の形相に激しい恐怖を覚えたのか、「いやーん、おじさん、もうカンニンして」と哀願するように弱々しくいった。

「いや、カンベンしないよ。このバンドでピシシぶってやるよ」

「いやよいやよ。痛いわ、ああカンニン……」
いい終らぬうち、私のバンドは、ピシリとマスマの肩を打っていた。

「ヒューッ！」

大仰にマスマは叫んだ。プレイの判る年頃ではない。快感はおろか、唯、痛みのみビリビリと全身に走るのか、泣き出しそうになって、大声で喚き始めた。マスマの皮膚に鳥肌が立った。

「いやいや、助けてエー」

私は急拠、マスマのパンティを叫ぶ彼女の口中に押し込み、上からしっかりタオルで口を嵌めた。

恐怖のまなざしが、訴えるように、なじる。

ように私をみつめていた。この娘は生れて始めての経験に、恐怖にさいなまれ、驚愕に悶絶しようとしているのだ。

振り上げた私の手は力なく垂れた。熱し切り、激していた私の感情の炎に、そのいじらしい眼は、清冽な冷水となって振りかかったのだ。熱はさめ、昂奮の一時は過ぎた。

私はしらけた自己嫌悪の気持にとりつかれて、彼女の猿轡を外し、左右の足首の縄をといた。バンドの僅か一打のみですべては終ったかに見えた。

後手の縄をとくと、私はマスマを見ず、こゝとさらに眼を逸らせて、カメラ類を片付け始めた。そそくさと立上ったマスマは素早く衣服を纏っているのが、それとなく気配でしれる。

気拙い、極く僅かな時間の空白が部屋を占めていた。私も無言、叫喚したマスマも無言——。沈黙ほど辛いものはない。

私はまずそうにピースをやけにふかしていた。決してマスマに腹を立てているのではない。プレイを逸脱して、柔肌に鞭打ちしようとした。己れの感情の起伏がやり切れなかったのである。

マスマは帰ろうとしない。部屋の隅に坐り

服のケバをつまんで、所在なくいじくっていた。気拙い沈黙をどうして破ればいいのか。私は私なりに、未知の世界を知ったマスマスはマスマなりに必死に考えているのだが――。

「おじさん……カンニン……カンニンしてね」

マスマは小声で呟くようにいった。

「私がつい感情がたかぶって行き過ぎたのだよ。マスマのあやまることはないよ」

「怒ってるの？」

「とんでもない」

少し空気がほぐれた。マスマはテーブルにじり寄って来て、私の傍らに來ると、そつと膝をつついた。振り向くと、眼を閉じ、眉をしかめ、顔をクチャクチャにさせて、ヒョットコ面になってペツと舌を出して見せた。

「おじさんのバカ」

私の心は一抛に暖かくなった。

「こいつ！」

笑いが戻って、雲を破って再び太陽がさし込んだようなほのぼのとした空気が流れ出した。

「どうせお値段一緒やと思うから、お風呂へ入りましょうよ。おじさんの、背中流しなげる。えらいハリ切ってはったから、肩ももん

だげる。ねえ」

この媚態は、少女のものではなかった。私に対する彼女の最高の大人の感情であるかも知れない。

「うん、入ろう」

私は笑顔を取り戻し、と共に、すっかりいいおじさんになっていた。改めて、旅館の浴衣を身につけると部屋を出て、帳場の前で浴室の在りかを聞いた。

「恰度、ええ工合にあいてます」

女中は二人のこのとり合せを好奇の眼で眺め、ニヤニヤしながら浴室へ案内した。

広くもない浴槽は、二人にとっては天国に等しかった。正に約束通り、彼女はまめまめしく背中を流し、タオルを肩にのせて私の両肩をうまく揉んでくれた。抱きしめたいような愛情が湧き上ってくる。

二人で湯につかる、とザーツと溢れ、マスマは私の胸にクリクリと豊かな乳房を押しつけ、首に手を廻して来て体をすり寄せた。こうしていても、いやらしさを微塵も感じさせない、いつて見れば親子の愛情にも似たものが、仄々と通じ合う思いだった。

「こうしているおじさんと、さっきウチをくくってバンドで叩こうとしたおじさんが、同

じ人だとは、どうしても思えへんわ。一寸の間に同じ人が、何でこんなに違うんやろね」
SMプレイの解せぬマスマにして、当然起り得る疑問である。偽悪ぶり、ズベ公ぶつても、所詮は何もしらない乙女なのだろう。

「可愛いから、ぶちたくなる時もある。好きになったから、自分の自由にして縛りたくなる時だってある。これが大人の気持なんだよ。うんと虐じめて泣かせて見たいのだよ」
「分らへんわ、そんな気持。好きになつてくれたら、もっと優しく抱いてくれはったらいいのに。そーっとキスしてくれはったらええのに」

「そうだね。マスマにはそれがふさわしいんだね。こうして抱いて、そしてそつとキスしてあげる」

際限もない長湯になりそうで私は音を立てて湯槽を出た。こうしているうち、徐々に起ってくる身内の変化が恐ろしかったから。

× × ×

彼女を上六まで送って私は別れた。国分行の各停に乗り込んだのを確かめて私は改札を離れた。別れ際、タクシーに乗るんだよといって、そつと握らせた紙幣を、マスマは素直に受取って、私の手渡した指を強く握り返え

した。

「また、きつと逢えるわね、おじさん。きつとよ、きつとまた逢ってネ。手紙で知らせてくれたら、いつでもいくわ」

別れに際して、マスマはくどい程念を押した大切な小箱をしっかりと胸に抱きしめて、はためもあるのに、堂々と私に手を振り、二、三度振り返ってからこの可愛い小悪魔は男心をかき乱してホームを小走りに走り去っていった。旅館を出る時、やや稚拙な字で書いてくれた彼女の住所と、呼出し電話のしるされ

た一片が、私カッターシャツの胸のポケットに、嬉しい思い出と共に活々といきづいていた。

△潔ぎよく別れてよかった！▽

そんな想念が駆け廻る。青い麦を踏みにじることなく、いさぎよく綺麗にサヨナラした後味のよさが、マスマに対して、これからも清純ないい思い出として、私のハントの一言をすがすがしく飾ってくれることだろう。

夕方までの新年宴会のあの雑音は、かけらも止めず、私の脳裡から消え去り、帰宅までの

の数十分、私の全脳は、マスマとのプレイの残香を追っていた。妻に土産のにぎり寿司を渡し、私は今日のプレイの模様を妻に話してきかせた。それによってジェラシーを起す妻ではないが――。

「随分若返ったことでしょね。今夜、そのマスマとかいう若い娘の夢を見ないよう、私が邪魔してあげますわ。あまりハッスルすると体に悪いわよ。プレイも程々にネ」

とチクリと針をさした。プレイの告白が妻の刺激の材料にいつもなる私達である。

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)

K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)
K 7	厳しき縛りに酔う (山原)
K 8	荒縄で仕置される (美木)
K 9	土壇に観念した女 (美木)
K 10	ムチ打たれる女囚 (美木)
K 11	縛り人形を眺める (山原)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K 13	足首と首を連繫す (大塚)
K 14	後手の複雑な縛り (玉田)
K 15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 16	夫にされる鼻責め (増田)
K 17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 18	猿轡で鼻を虐める (増田)

K 19	開股縛にあう女囚 (美木)
K 20	罪状を訊かれる女 (美木)
K 21	股間縛りの全裸像 (山原)
K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)
K 23	革拘束衣で括らる (大塚)
K 24	庭木に立縛りなる (木村)
K 25	柱に晒される裸身 (玉田)
K 26	セーラー服しばり (大塚)
K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K 28	黒輝豊満刺青縛り (山原)
K 29	踏みにじられた女 (山原)
K 30	古墳にて吊り準備 (木村)
K 31	拷問にあう裸女賊 (山原)
K 32	ロープブラジャー (山原)
K 33	嚴重な後手縛猿轡 (刑部)
K 34	エビ縛りにあう女 (木村)

K 35	イルリのある風景 (大塚)
K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 39	全裸を投げだして (山原)
K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)
K 41	エビ責め放置十分 (木村)
K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K 43	観念アグラ縛り図 (玉田)
K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)
K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 49	立木より逆さ吊り (木村)
K 50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

「痴人の糧」

……………ちじんのかて……………

山本一章

△ 拷問 (二) ▽

疲れていたのか、アケミはいつしか土の上で眠っていた。手足を杭に引きつけている四本の縄もそう強くはなく、掛けられた毛布が体温を保ってくれたため寝苦しさは少なかった。しかし大の字の姿は、横に伸ばした腕をだるくさせ少し痺れを呼んでいた。

アケミが目を覚ましたのは、もう十一時近くで、碧い空が目の前一ぱいに拡がってまぶしかった。その明るい太陽の中では、アケミの束縛された姿は不自然な存在であった。彼女自身からも被虐の陶醉といったものは消し飛んで、羞恥心と孤独感が蘇っていた。

「よく眠ったかい？」

大山の横にセツコと百合子が立ってアケミ

を見降ろしていた。体を蔽っている唯一の毛布が引き剥がされた。彼女は瞬間、体を縮めようとしたが、四本の杭が非情にそれを許さなかった。

「綺麗な体をしてるわね。それに可愛いじゃないの」

百合子は腰をかがめると、仰向けのアケミの体を軽く撫でた。適度に脂肪ののった白い皮膚は滑らかで暖かかった。臍窩に指を入れて擦ると、アケミの体が左右にくねって挑発的な動きをし、柔らかい胸のふくらみを揉むように押しつけるとぐっと腕に力が入った。すき透るように白い腋窩から腕裏の肌は、みずみずしい若さを象徴しているかのようで、

噛みつきたいような誘惑を感じさせた。

「もう解いてやるの？」

百合子の問に大山は顔を横に振った。

「じゃ、うんと虐じめてやろうよ。昨日のはこたえていないようだしね。この子はマゾだから悦ぶわよ。セツチャンどう思う？」

「面白いわ」

二人の会話に大山は苦笑した。そのくせ彼も少し興奮していた。

(鄭さんの別荘へ連れて行こうか)

鄭さんというのは貿易商の三国人で、別荘を淡路島の洲本近くに持っていた。彼はK誌の愛読者で最近拷問用具を作っているということだった。この春レザニマルで会った時も



彼は大山に、その製作した器具を試みるモデルがいまいかと尋ねたことがあった。

「本当に拷問にかけてもいいというモデルなんて実際にはいないからな。たまに売春婦の中であることはあっても、金が目当てか、そうでなければ、こっちがげっそりするようなお婆ちゃんだからね。小説のようにはいかないものさ」

鄭のその言葉を大山は思い出していた。

どんな器具を作ったのか知らなかったが、アケミを彼の拷問に委せることは興味深かった。それに今の彼女なら少々の苦痛には耐え

られるだろう。

大山はアケミの耳もとに顔を近づけて囁いた。

「どんなにしても、いいかい？」

アケミがかすかに肯くのを見て大山は決心した。遊戯ではない拷問を、この女の体で体験させてやろう。

「よし、じゃ最初に丸坊主にしてやる」

乱れた黒髪を片手に握った大山は、百合子達にも聞えるように云った。

「ウウウムムムッ、ウウウン」

拡げた四肢に力を入れてアケミは烈しく体

をふるわせた。体のどの部分に対するとどんな

苦痛にも辛抱ができそうだったが、丸坊主の頭にされるということは耐え難い屈辱に思えた。

それは女としての最後の誇りを奪われることを意味している。貞操の危機は今のアケミにはむしろかすかに期待こそすれ拒絶し切るような心理ではなかったから、文字通り彼女に残された唯一の女の誇りはその黒髪だった。だからくりくり坊主にされた姿を想像するだけで気が遠くなりそうだった。

アケミの意外に激しい抵抗の姿を見て、大山はその思いつきの効果に満足していた。皮膚と粘膜だけのアケミを拷問にかける——女としてではなくて一匹の牝として苦痛を味わすのには、最もふさわしい姿ではないか。「やっちゃおうよ。いい考えだわ。わたし剃刀を持ってくる」

百合子は、はしゃぐように手を打って母屋へ走った。閉じたままのアケミの目から涙が一筋耳に落ちた。うらめしかった。面白半分に賛成する百合子を呪いたかった。

百合子が洋鋏と西洋剃刀を持って来た。

「鋏で短くしてから剃った方がいいわよ」

百合子がアケミの頭の上に足を投げ出して坐り、頭を持ち上げて膝の上に載せたので、

アケミは頭を起した恰好になった。更に百合子は両耳を手で掴んで頭を動かさないようにすると、セツコに目で指図した。セツコが腹の上をまたいで坐った。もうアケミは身動きできなかった。

ジャキッ、ジャキッ！ 鋏が長い頭髪を根元近くから切り始めた。その髪量は多く、鋏を手に行っている大山は次第に指が疲れ、何度も左右に持ち変えた。次いで剃刀がアケミの額の上から逆に剃り上げて行った。

ジョリ、ジョリと金属音をまじえた音は、女の悲しみを無視して、頭蓋骨の円みをむき出しにして行った。

「泣いているわ。馬鹿だねえ。別に殺されるわけでもないのにねえ」

百合子はそう云いながらも、とめどなく流れる涙をハンカチで拭いてやっていた。南の国の野蠻人のような、いや尼さんのような艶やかな丸坊主ができ上るまでに三十分はかかった。眉毛までも落されてしまった彼女の顔は別人のようになっていたが、反って子供のような可愛らしさの中に不思議な色気があった。

大山は剃刀をまだ殆んど伸びていない腋ともう一方所にも当てた。

「まる裸ってこのことね。いい恰好だわ。そ

れにこの方がすっきりしていいじゃないの」百合子は膝にかかった毛髪を払い落しながら云った。

「可愛いわ、お稚児さんみたい」

セツコが低い声で云った。大山は女の頭が以外に小さいのに驚いていた。

「遠出するからアケミを風呂へ入れてやってくれ」

「どこへ行くの？」

「お前は駄目か？ 旦那が来るんだろう？」

「ええ今晚は行かないとまずいわ。ここでやたらいいのに」

「いや、計画があるんだ。そうだな、お前、明日手が抜けたら来たらいい。地図を書いとかから」

百合子は、ちょっと残念そうな顔をした。

そしてアケミの四肢を縛っている縄をセツコと二人で解いてやった。アケミはぐったりとして体を動かさうともしなかった。

大山は自分の部屋に戻ると電話をかけた。

鄭さんに連絡するためだった。二三度かけ直して、やっと鄭さんをつかまえることができた。大山の申し出で、鄭さんは非常な乗気だった。

「その娘って、大丈夫なんだろうね。告訴さ

れたりしたら、ことだからね。それに可愛い娘かい？」

大山が電話をしている間に、百合子とアケミは入浴していた。百合子がアケミを風呂へ入れてやっているという表現の方が当たっているかもしれない。アケミは子供か人形のように、百合子が体を洗い、頭から湯をかけるのに体をまかせ切っていた。

「ねえ、いい子ちゃん、好きだわ。とっても好き！」

百合子は洗い終ったアケミの体を力一ぱいに抱き締め、そして口づけをした。アケミの吐く息が彼女の頬をなま暖かくめぐり、濡れた唇のなまなましい質感が彼女の唇を快く刺激した。アケミは手をだらりとしたままだった。二人は狭い湯槽の中に浸った。

「ねえ、頑張るのよ。わたしも明日はきっとアケミのとこへ行くから。うーん、可愛いアケミちゃん！」

二人の抱擁が繰り返えされた。そして再び長い口づけが続けられた。アケミは疲れがすーと抜けて行くように感じた。

○

大山の運転する緑のオースチンが明石のフエリーを渡り、鄭の別荘に着いたのは、もう

四時近くだった。服を着て帽子をかぶったアケミと、セツコは並んで坐っていた。神戸で少し豪華な食事を摂り、また道中チョコレートやキャラメルをしゃぶっていた二人は、ドライブ旅行に出たような気分になっていた。事実アケミ自身、これから何処へ行つて何が起こるのか全く知らなかった。ただ剃り落された頭のことだけが気になっていた。顔は百合子が化粧してくれ、眉も描いてくれたので外観は普通の女と変ったところはなかった。ぼつんと一軒だけ建っている高い生垣の家に車が着くと、その音を聞いて一人の少し肥った男が中から門を開けた。四十五、六のその男が鄭だった。

「やあ、よく来たね。遅いからどうしたんかと心配してたところだ。大山君車は中へ入れとく方がいいだろう。ここには誰もいないよ。留守番の婆さんは里帰りさせてやったし。邪魔者は去れだからね。二人も連れてくるなんて大山君もなかなか大したもんだね。いい娘じゃないか。どっちだい？二人ともかい？」

まくし立てるように喋る鄭の顔を、じっと見ながら、大山はアケミを指さして言った。

「一人でもいいでしょう。そっちのは見学とお手伝いのつもりで連れてきたんです」

「何か食うかい？ それとも早速かかることにするか？」

「御自由に」

四人は洒落れた洋館の横を通つて裏の方へ歩いた。自然のままの林になっている庭を横切った時、大山はちよつとした空地の真中に高さ二メートル以上もある十字架が立っているのを見た。角材で作られたそれは昔の刑場を連想させた。

「あそこへはついこの間、一人架けてみたんだが、わあわあ泣かれて困つたよ。男だったんだがね。あれは作るのに苦労したんだよ。土の中に二メートル位柱を埋めたんだから。勿論石を詰めてだがね。一メートルじゃ人を架けたら倒れてしまうんだから」

鄭は大山が尋ねるのを待たずに喋った。少し得意気だった。そこから少し奥まったところにある窓のない火薬庫のような建物に鄭が案内した。重い鉄の扉は開いたままになっていて、内部に電気が点いていた。十畳位のタイル張りの床で、奥に物置があるのか四枚の板戸が並んでいた。部屋の片隅には、お厚い板で作った低い四角の組のようなものが置かれてあり、もう一方には、よく絵などで見たことのある背が三角になって脚のついた木馬

のようなものが置いてあった。それよりも大山が感心したのは、コンクリートの壁にも天井にも鉄製の鉤が無数と云つて良い程埋め込まれていることだった。それを利用すれば、吊ることもどんな恰好にすることも可能に思えた。この建物は鄭の趣味のためだけに建てられたことが明白だった。

「よくできてるだろう。床は洗えるように水道まで引いてあるんだよ。しかし、まだ肝腎の囚人がいなくてね」

鄭はアケミを見ながら云った。

「じゃアケミ、体をお見せするんだよ」

この時になってアケミは初めて大山の意図を覚った。（わたしをこの生贄にするんだわ）しかし彼女はごく自然に、ヌードモデルが裸になるように服を脱いだ。

「帽子も取って貰おうか」

その言葉はアケミにとって最も辛かった。

後から大山がさつと帽子を取った。

「はほう、丸坊主とは思ひ切ったね。大丈夫かい？ 本当にいいんだね」

大山は大きく肯くと裸になったアケミの背を鄭の方へ押しやった。よろよろと歩いたアケミの手首を鄭が掴むと、ポケットから出した柔かい革の紐で前手に縛り合わせた。そ

してフットボール選手がかぶるような円い革の頭布を両手でアケミにかぶせた。顔の前で編まれた紐をしぼると、頭布はびったりと頭部に密着し、内側に出たふくらみが両耳と目を押し、視覚を奪ってしまった。中央に円く切り込みがあるため鼻が頭布の真中に露出しているだけで、口の上も包まれた。

鄭は更に革の平たい帯のようなものをアケミの顎の下に当てがってから、その両端を頭の頂上にある、ホックにしっかりと引っ掛けた。閉じたままの口はもう開くことができなかった。鼻だけを残して首から上をびったりと黒い革で包まれてしまった姿は、小説に出て来る鉄仮面のものであった。彼女の顔に許されているものは呼吸だけだった。

「この引き伸ばしにかけてみよう。これはこたえるらしいよ」

一たん手首の紐が解かれると俎のような板の上に俯伏せに寝かされた。そして手首、足首にそれぞれ革のバンドが巻かれ、その端の輪が台の左右から突き出ている二つずつの鉤に引掛けられた。両腕、両足を平行に背伸びした時のような姿だった。鄭は台の横に立つと把手を掴んで廻わした。ギギギッと、きしむ音がして、アケミの頭の上と足の下にある

二つずつの鉤が、徐々に反対方向に動き始めた。それはその間にある女体を引き伸ばすことを意味した。足の方へ少しずつ下ってからアケミの体は動かなくなり、ぐきくと関節が鳴った。手首と足首の革帯の食い込みから、彼女の体が強い力で引き伸ばされていることがわかった。鄭が把手から手をはなしてカチッと安全装置を掛けたので、アケミの体は俯伏せの引き伸ばされた姿のまま固定した。大山はそのように人体を引き伸ばす拷問具を映画で見たことがあったが、それは木の大きな歯車のついた仰々しいもので台には傾斜がついていた。しかし今アケミを伸ばしている台はそれとは異なり、俎と云った表現の当る水平なもので、台の裏側に仕掛けられた鉄の小さな歯車も目立たなかった。自動車のジャッキを横にしたようなもので、把手の回転によって溝の入った鉄の棒が伸び縮みするのだった。合理的な設計の割には、仰々しさはなかった。

適当に肉の附いたアケミの背面が台の上で時々ピクピクとふるえた。鄭がよく撓う短い乗馬用の鞭を手にして、無抵抗のアケミに近づいた。そしていきなり彼女の上向きになっている足の裏を打った。ポン、ポンと妙な音

がした。その打撃には少しの手加減もないのか、伸び切ったアケミの体が打たれる度にビリビリとふるえ続けた。大山は鄭が彼女を俯伏せにした理由をはじめで知った。鞭打ちの目的には恰好の姿勢に違いなかった。足の裏を片方ずつ十回程打つと鄭は手を止めた。

「大山君、ここを打つのは効果的だよ。昔の人間は良く考えたものさ。痛い割には傷がつかないし、それにもう少し打つと腫れ上って歩けなくなるんだから。僕は思うね。拷問や責めに関する限り、すべての方法が既に実験されているということだ。人間が人間を責める方法で、全く新しいものなんて絶対ないね。言い換えたなら人間の智慧は、残酷な面では既に最高を究めているということさ。殺し方だってそうだろう。新しい道具が作られれば、可能な限り必ずそれは人間を痛め殺す道具に使用されるけれど基本的には新しいことではないよ。そうじゃないか。人工衛星に載せて宇宙へ放り出すことと、舟に載せて海へ流した昔の方法とは、基本的には変りないじゃないか。尻からピストルを打ち込むのと、串刺しとは同じことさ。僕は責め道具をいろいろ考えている内に、人間の本能の一つに残忍性があると思うようになったくらいだよ」

鄭は手にした鞭で、アケミの臀部を軽く突つきながら一気に喋った。そしてふと気づいて再び口を開いた。

「ふーん、大山君。もう尻打ちをやったらいいね。少し内出血をしている」

鄭は鞭を、その臀部に力一ぱい振り降ろし

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

た。ピン、ピン! 打たれた筋肉に力が入り、そしてその部分が赤味を帯びた。

鞭が空を切るビューンという音と、肌を打つピンという音を聞きながら大山はアケミ

が哀れになってきた。彼女には苦痛の意思表示の方法が全くないからだった。

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返されます。

拷問というものが死をも無視するものならそれも止むを得ないことかもしれないが――。そして今まで彼女に加えてきた加虐の方法が、なまぬるい前戯的な戯れでしかなかったことを大山は自覚した。拷問のすさまじさ非情さ、処刑の残酷さ――観念的には理解しているつもりが、鄭の鞭打ちを見ている内に、異った感動を、もたらすのを知った。その感動は彼が今はおぼろ気にしか感じるこのできないあの中国での処刑の際のショックと同じものだった。

アケミの真赤になった尻の力所から細い血の糸が筋を引いた。そして、その筋は次の打撃で乱され、彼女の臀部を赤く染めた。

セツコは目を閉じ、耳を蓋していた。足がふるえ、胸がドンドンと烈しく鳴った。

「背中を打つと病気になるかもしれないから止しとくよ。大山君心配しないでいいよ。殺すようなことはしないから」

鄭は鞭を床に置くと、台の把手を逆に廻わして引き伸ばしたアケミの体を弛め、手足の革帯を外した。

「体を横にさせると股裂きもできるんだよ。参考にやってみるか」

ぐったりと俯伏せのままの体が抱き起され

大山達の方に、足を投げ出した姿で坐らされた。両足首に革帯を巻くと、鄭はそれを引張って先程彼女の体を伸ばした左右の鉤に別々に引掛けた。もうそれだけで彼女の両足は九十度以上の角度を作っていた。胸を抱きかかえるようにしていた両腕が荒々しく後に廻わされて革紐で縛り合わされた。ギギッギギッ……把手が廻わされると、アケミの両足首は同じ速度で、ゆっくりと左右に引き寄せられた。起した上体をねじるようにして彼女は悶えた。

ムムッ声にならない音が鼻から低く洩れた。把手がカチッと留められた。鄭は、それからアケミの上体をゆっくり後へ倒した。

腰から上が台からはみ出てそり返り、頭布をかぶった頭が、大山達の反対側の床に着いた。脚を開いたまま弓なりにそり返ったその姿勢は苦しそうだ。鄭はそのアケミの首に革紐を巻くと台の裏の金具に結んだ。もうアケミは起き上がることができなかった。

「なかなか魅力的な体をしているね。大山君には勿体ないよ。それにしても、よく鍛えたものだね。若い女のマゾというのは貴重だよ。若い女の体は、どんなところも綺麗だからね。僕は女を責めるのには素っ裸に限ると

いう主義なんだ。悲愴美は着衣の方があっても知れないがねえ——」

鄭は再び手にした鞭の先で、アケミの肌を軽く押した。ぴんと張りつめた内腿の肉が引きつった。

「この娘は、まだ男を知ってはいないようだね。知っていたにしても数少ないだろう」

「処女ですよ」

初めて大山が声を出した。

「もういいだろう。この姿勢は苦しいんだから。それに日の暮れるまでに、もう一つやってみたいことがあるからね」

鄭の言葉を聞いて、大山はおどけたように肩をそびやかした。

アケミの体が起され、革帯が足から解かれた。そのまま仰向けに台の上に横たえられたが、彼女は開いた足を閉じようともせず裸身を晒していた。

「だいぶ参ったらしいが最後に磔をやるう。

それでおしまいにするから、いいだろう？」

大山君

「どうぞ御遠慮なく。あの十字架を使うんでしょう？」

大山はアケミの体を立たせようとしたが、叩かれた足の裏が痛いのか、直ぐに床の上に

倒れてしまった。大山は仕方なく彼女を背負った。庭へ出て十字架の下まで運ぶと、後から鄭とセツコが朝礼台のようなものを引きずってきて、十字架の下へ置いた。

「男式をやってみよう。その方が凄惨な感じが出ているから」

鄭は一度建物に引返すと、一メートル余りの角材を担いできた。そして中央の切り込みを十字架の柱に組み合わせて、太い鉤を何本も打ち込んだ。それでキの字型の十字架ができ上った。大山はアケミを背負ったまま台の上に上った。鄭が彼女の両腕を万歳させて手首を上横木に革帯で縛りつけた。そして柱を背に台の上に爪先立ったアケミの両脚を少し開かせると、股下二、三センチの柱に釘を半分程打ち込んだ。太い釘は四、五センチ突出していた。そこへ鄭が丹念にハンカチを巻きつけた。

「これがあれば、うんと楽なんだよ。釘づけの場合、これがなければ掌の皮が破れてしまふと云うんだからね」

鄭がアケミの片足を両手で持ち上げ、下の横木の端近くに足首を縛りつけると、アケミの体が少し下り、ハンカチを巻きつけた突起に胴が載った。もう一方の足が反対に引かれ

て下の横木に縛りつけられると、その突起は彼女の体重の何分の一かを完全に支えた。更に脛の上あたりが後の柱と共に革帯で強く縛りつけられ、上に差し伸ばした両腕のつけ根にも革帯が巻かれて羽搔締めをするように柱の後で結ばれた。キの字型の十字架にアケミの裸身が完全に磔つけられた。両腕、両脚を拡げたその磔は凄絶な感じだった。台が取り除かれ、白い裸形が空間に残った。

「いいね、とてもいい」

鄭が感動したように云った。大山も夕暮れ

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対すると連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所などお知らせ致します。勝手に直接訪問され

の空を背景に浮び上ったアケミの姿を美しいと思った。今までどんな写真にも見つけることのできなかつた本格的な磔だった。鄭がストロボをきらめかして十数枚、前後左右からフィルムに、その処刑の姿を刻み込んだ。二人は夢中になって、横でセツコがぼんやりと見上げているのに気がつかない程だった。しばらくは起していた頭をアケミはうなだれさせた。手足を引張っている革帯と、胴と肩を締めつけている帯が、彼女の自由を完全に奪い、頭以外動かせるところはなかった。

たり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

そして彼女の体重を支えている釘が、胴を縦に割ってしまう程強く肌に食い込んでいた。「じゃ少し一ぶくしますから。二、三十分なら保つでしょう」

鄭の言葉で、大山とセツコは我に返った。そして三人の執行人は、十字架上にアケミを残して洋館の方に消えた。黄昏れは十字架のあたりを静かにぼかし始めた。曇った空に夕焼けは見られなかったが、しのび寄る夜の気持は湿っていた。

（ああ、わたしって、どうしたんだろう。）

架けられたままアケミは自分を軽蔑していた。体を引き伸ばされ、足の裏を打たれ、尻を皮が破れる程叩かれ、幾度か苦痛に気を失いかけてながらも、彼女の体は次の折檻を待っていた。股裂きの苦痛と屈辱は、自分の持っているすべてを見られているという快感で減殺されていた。あのまま凌辱されても彼女は悔いはしなかったかもしれない。マゾの女――わたしは恥を失った女になってしまった。

上に差し伸ばした腕が痺れ始めていた。強く縛られた足首から先の感覚が薄れて、叩かれた足の裏だけがズキズキと動悸を打っていた。そして柱に密着している臀部にヒリヒリとした痛みがうごめいていた。

風が突き出した乳房を軽く撫でて過ぎ去ったが、頭布の中は汗と涙で蒸れ切っていた。

なま暖い風に水滴が加わった。その水滴がやがて、アケミの裸身を洗い始めた。雨だった。暗闇と共に雨足が烈しくアケミの全身を叩き流れた。ザアツというその音は聞えなかったが、彼女は肌で雨の烈しさを知った。

（わたしの卑しい欲望を洗い流して欲しい。何もかも流れ去るがいい。生命も貞操もいらない）

強い雨足は磔つけられた女体を擦るように叩き続けた。それは天の怒りなのだろうか。それともこのマゾの女への残酷な贈り物なのだろうか。体に巻かれた革帯が水気を吸って責めの力を、増すようにとの激励なのだろうか。空間に浮び上った女体は、じっと雨の中で四肢を晒しているだけだった。

「大山君、素晴らしいよ。雨に打たれる磔なんて滅多に見られるもんじゃないよ」

鄭と大山が傘をさして近寄っていた。磔つけられてから二十分近くは経っているようだった。鄭が、再びライカのシャッターを押した。この磔に三十六枚撮りが三本消費されていた。

「おい、大丈夫か？ 大丈夫なら頭を縦に

振るんだ。今降してやるから」

大山が大声で叫んだ。アケミは半ば意識を失いながらも、頭を縦に肯ずいた。

○

十字架から降ろされ、大山の背に載って運ばれたアケミは、最初引き伸ばされたぶ厚い台の上に横たえられていた。その濡れた素肌をセツコがバスタオルでゆっくりと拭いていた。

「大山君、今夜は泊って行くんだろう？ いいじゃないか。この娘はもうこれ以上は無理だから寝かしてやったらいいよ。食事も電話すれば出前が来るし、今から明石に渡るのも厄介だからな。そうだから娘に注射をしてやる。だいぶ弱っているからな」

鄭はアケミを俯伏せにすると、鞭跡でまだらになった尻の下に注射を二本打った。ビタミンかホルモン剤のようだった。

「それに君、まだまだいくらも道具があるんだからな。折角だから、一通り使ってみようや。二、三日ゆっくりして行けよ。失望はさせないから」

大山は心の中では最初からこの別荘に泊って行くつもりだった。だから百合子にも地図を渡して置いたのだが、この男に恩を着せて

少しは小遣いを出させるつもりで、困ったような表情をしてみせたのだった。

「仕方ないですな。鄭さん、サービスしましょう」

その返事に、鄭は愉快そうに声を出して笑った。

「じゃ、あっちで話しよう」

鄭と大山の二人が重い鉄の扉を外から閉めて出て行った。セツコは心細い気持になって傍のアケミの体をバスタオルで烈しく磨擦した。

二人の男がどんな相談をしているのか、セツコは心配だった。昨夜のような凌辱なら辛抱できそうだし、一度失った貞操に未練はなかった。しかし、アケミが受けたような拷問にかけられるのなら恐ろしかった。その残酷な責めにはとても耐えられないような気持がした。ヌードスタジオでの私刑も、レザニマルでの狂宴も、ここで行なわれた虐待に較べたら遊びでしかないように思えた。そこでは手加減があった。しかしここでは容赦のない折檻そのものしかなかった。

セツコはその生贄から自分が除かれることを祈った。そしてアケミが元氣を取り戻してくれることを希うのだった。（つづく）

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦唐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歎 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦唐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上にのびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外的後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦唐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	貴折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	輝姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

『マゾヒズム天国』

田 沼 醜 男

1 美とは社会的範疇であるか？

敗戦後日本人の審美眼が欧米的基準に傾いて従来の純日本の美人はもてはやされず、白色人種のような如何にもバタ臭い容貌と肢体をもった女性が尊ばれるようになったということはいまでは常識である。たしかにその通りであって手頃の例を芸能界にとってみても淡路恵子、団令子、加賀まりこなどといった日本人離れした女性達が絶大な人気を博している。哀れな日本人は自分達自身の容姿を嫌い、白色人種の容姿を理想として仰いでいるのだ。

だが、このことから直ちに美女の標準が、または美の標準が社会的な基礎によって一方

的に決定されると結論するならば、それはあまりにも、単純素朴な見解と断ぜざるを得ない。敗戦後日本の社会経済機構はアメリカ資本主義の支配するところとなり、その後独立に向かったとはいってもいまだにその羈絆を脱することが出来ない。この下部構造が日本人の意識に反映して金髪碧眼のヤンキー・ガールを理想とする審美眼を形作ったとする一見唯物史観風の論である。

これはたしかに一面の真理を語ってはいるし、そのような見方をする人間は日本人ばかりでなく外国人の間にも多いようである。P・K・ディックの「高い城の男」という小説がある。これは第二次大戦にドイツと日本が勝利を収めたと仮定して書かれた一種のS・

Fであるが、この中には日本女性の黒髪に憧れるアメリカ人が登場する。勿論あり得ないことではない。しかし……。

まだ中学校も一年か二年頃の記憶である。私の田舎に非常に美しい女の子が疎開して来た。年齢は私より二、三才下だったと思う。眼が大きく、抜けるように白い皮膚をしていて。近所の大人達はみんなこの子の美しいことを噂したし、私も強く惹かれた。口を利いたこともなかった癖に彼女を見かけると胸がドキドキした。そのうちに夜も眠られぬ位になり食欲がまるでなくなって家の者を心配させた。戦後この女の子は某映画会社のニュー・フェイスになったが、それから間もなく私は彼女の祖母という人がフランス人と

の混血であつたことを聞いた。

私が彼女に惹かれたのは第二次大戦の最中であつて欧米的なもののすべてが悪のかたまりみたいに排撃されていた時代である。それでも私はこの白色人種の血を引く少女に手もなく惹きつけられたのだ。

断つておくが私は美が社会的制約を超えた絶対のものである等と言っているわけではない。社会的な基礎だけが美の基準をすべて決定してしまうという見方に異議を申し立てているだけだ。社会的基礎以外に私達の審美眼を左右する要素がたしかにある。だから私の田舎の大人達は口を揃えて彼女の美しいことを認めた。ではその要素とは何か？

それは本能化した太古以来の記憶なのではあるまいか？ 有史以前から白色人種に侵略され征服され奴隷化されて来た有色人種は、生まれながら本能の中に白人に対する崇敬の感情を持っているのではあるまいか？ 社会的基礎を環境という名で呼ぶならばこの記憶を遺伝と呼んでもいい。社会的基礎がその時代限りの環境であるに反して、遺伝は環境の産物ではあるが太古以来の長い時間をかけた環境の産物である。

戦前、戦中の日本人の女性に対する審美眼

は、むしろ遺伝的基準が社会的基準によって歪められた不具のものだったと言える。ディアナ・ダービンよりも田中絹代の方が美しいとする審美眼などおよそ健康的とは思えないではないか。現代日本人の審美眼こそ遺伝的基準と社会的基準が一致した素直な価値評価だと言えるだろう。我々は白色人種に從属し支配されると共に、白人女性を理想の美として跪拝するのである。

2 下着讚

いま時の都会の女の下着つうもんは、はア何と恰好のいいもんだべか……わしら水呑み百姓にゃ滅多にお目に掛れるしろものじゃねえけど、一目拝んだらもう忘れられっこはねえ。

こないだ団体で東京さ行つたとき、権兵衛の奴がストリップ見物しべえつうでおそろおそろ一緒に覗いたんだけど、そのとき五月美沙とかいう凄く身体のいい女子がよ、ストリップして下着姿になっただ……おら、はア、ぶったまげちまつただ。

胸にゃ乳隠し当ててるだがよ、ビククラこいたのはホレ、パンティとかいう西洋サルマタよ。サルマタつうたかて、わしらのはいて

るみてえなブカブカのたア違うだな。ピッチリしまつててよ、その小せえの何のって……ヘソが出ちまつてるだに……おまけにフンドシみてえにギュッと切れあがつててよ、臀の肉なんか半分位はみ出しちまつてるだよ。あれでよく中味が見えねえもんだ。そうよな、一口で言つたらその……勇ましいって感じだな、何だかアメリカさんの婦人土官みてえな感じで、おら思わずお辞儀しただよ。

それから靴下よ。そんな裸かみてえな恰好してながら靴下はナイロンのな、ピカピカ光るのを腿ツたの途中までピシツとはいってるだよ。だから脚で肌がジカに痒めるのは太腿の上の方だけってわけだよ、其処ンとこの色の白えこと言つたら……。

靴下をとめてるのは輪ゴムなんかじゃねえだよ。どうなってるだかよくは判んねえけどもパンティの中からベルトが何本も下がっててよ、靴下をピッチリ吊ってるだに……いいなア、あれは……あれでまた女の身体が一層勇ましく見えるだよ。はア、まるで満艦飾の軍艦のようだよ、おらなんか、あんな恰好した女子の前に立ったらヘナヘナになって地べたに土下座して謝まるだよ、とっても敵いっこねえだ。

都会の女子つうもんは、はアみんなああいう勇ましい下着附けとるんだべか……その帰り、権兵衛と一緒にキャバレさ行っただよ。おらの隣りに坐ってくれたのは髪を赤く染めた十七、八のお姐ちゃんだったが、おら勇気出して訊いてみただ。姐ちゃんもあんな恰好いい下着附けとるんかってな。

都会の女子は大胆なもんよなア、その姐ちゃんもニヤニヤしておらの言うことを聞いてたっけが、いきなり立上ると、おらの眼の前でパツとスカートを捲くって見せた。おらドキン！ としたけど其処はぬかりねえ、一目で短けえ白パンティと靴下さ吊ってるベルトを見ちまっただよ。

「どう、判った？」

姐ちゃんは威張って言った。

「へい、判りましたがな、有難うさんです」
おらにゃあ急にその姐ちゃんが偉い人に見えるて来てよ、姐ちゃんがタバコ吸うときにや火をつけてやったりしたもんだ。そのうち酔っぱらった振りしてよ、靴下吊ってるベルトにさわらしちゃ貰えめえかつうて頼んでみただ。そしたら姐ちゃんは

「馬鹿ねッ！」とか何とか言ってさ、赤く染めた爪でおらの尻をつねっただよ。それから

スカートの中へ手え突っこんでベルトを一本おらの手に握らしてくれたもんな。

「それいじって温和しく飲んでな」姐ちゃん、はアすっかりおらをバカにしたみてえだった。それでもよ、おらそれから二時間も姐ちゃんのベルトをいじらして貰えたに……。

3 11PMガールズ

日本テレビで始まった深夜11時のワイド・ショウ「11PM」にすばらしい脚線を誇る六人のカパー・ガールが網タイツをつけて登場している。驚くべきことに、これらお嬢さん達はいずれも一八才から二一才までという若さ、平均身長実に一六五センチという溜息の出るような肢体の持主である。同年輩の日本人女子平均身長は一五二センチ。

しかも嬉しいことには、純粋の日本人は一人もいなくて、みんなアメリカ、イギリス、フランス、台湾などの混血だという。なかでも一段と目立って美しいジュン・アダムスさんはまだ一九才、アメリカ人を父に日本人を母にもつ上智大学の学生で身長一六八センチという素晴らしきである。

日本の芸能界が混血児達に全面的に占領され支配され、純日本人の憧憬を集める日の近

いことを願う私などにとっては、まことに心強い限りである。若冠一六才の若さで私達純日本マゾ男の魂を奪い、狂崇跪拝せしめた入江美樹さんはいまでは日本一のファッション・モデルに成長し、アメリカで「世界一可愛いらしいモデル」と折り紙をつけられた。軽々しくその名を口にするさえ恐れ多いような存在にまで出世されたことを、お喜び申し上げずにはいられない。

そのほか、お茶の間のアイドル、大空真弓さんや、NHK「歌のグラウンド・ショウ」で一六七センチの巨体をもって踊りまくり、純白の清潔なパンティーを拝まして下さる金井克子さんも純粋の日本人ではないように聞いている。

スポーツの世界でも混血児の活躍はめざましい。国技といわれる相撲界にあっては第一人者の大鵬がロシア人との混血であることが判って私達を驚かせたのはつい先頃のこと。プロレスの開祖力道山、野球界の天皇的存在である金田や張本などいずれも朝鮮系の血統だし、御存じ王選手は言うまでもなく中国系である。純日本人は数が多いばかりで到底彼等の体力には敵すべくもない。

さて話を11PMガールズに戻して、彼女達

のような若く美しい混血のお嬢さん方にとって日本という国は何と快適で住み心地のいいことか！ 中学や高校生の間では、混血児は混血だというだけで周囲から憧れの眼で見られ人氣が集中するという。子供の頃から周りの者にチャホヤされて育ち、長ずるに及んでは男共の憧憬の眼を一身に集めて来た彼女達が、自分は一般日本人よりも一段高等な人間なのだという意識を抱かない筈はない。それが当然なのだ。私共純日本人は自分自身の体内を流れる血を恥じ、白人が自分達より数等高級な人種だということをやるせない諦めの氣持で認めているのだから。

11PMガールズと同年輩の労働者が身を粉にして働いたとしてその収入が彼女達のモデル代の何十分の一に及ぶであろうか？ ましてや同年輩のアルバイト学生が牛乳配達をしようと思洗いをしようと思いつきはしない。また卒業してサラリーマンになったところで彼女達の月収の何分の一が貰えるだろうか？ 私共貧しい純日本マゾ男は彼女達の前で深く頭を垂れ溜息でもついているしか能がないのだ。実際これら希望に満ちたお嬢さん方ではマゾヒスティックな関係を持つことすら許されない夢である。彼女達は外人の青年を

選ぶか、または日本人でもハンサムで若くて金持ちの、いわゆるエリートと結婚すべく将来が約束されている。奴隷になりたがっても奴隷にすらさせて頂けないに決まっている。「生命売ります」というプラカードを持って銀座を歩いていた男がいた。この場合は売るのでからまだ余裕がある。私達マゾ男が、11PMガールズにお願いするときは「生命タダで差上げます」と書かなければならないだろう。それでも彼女達はそれこそツバキも引っかけてくれないと思う。純日本人に生まれたことが、いま更のようにやるせない今日この頃である。

4 現代タコ部屋記

池袋のバーのマダムやミス・トルコ数人が左前の暴力団と結託して日傭労働者数十人を倉庫に監禁し、上前をはねていたというニュースは私達マゾ系の読者の心胆を寒からしめた。女達はいずれも二十代の若さであり美貌であって、その彼女達が、中には自分の父親程の年をした男もいる労働者達を牛馬のように働かせ、血も涙もなく搾りあげて何等罪の意識を持たなかったという点には心底から恐怖と崇敬を覚えざるを得ない。

これらバーのマダムやミス・トルコ達は月に数十万を軽く稼いでいた者が大部分だったという。そんな彼女達から見れば毎日額に汗して馬鹿みたいに働いて月二、三万にしかならない日傭人夫などおそらく同じ人種という氣がしなかったのも無理はない。実際の日本では女性が若く美しくその氣にさえなれば金はいくらでもころがりこんで来る。トルコ嬢を例にとっても彼女達が白魚のような指先を使って一晩に五回スペシャル・サービスをやれば、大の男の月給の半分位は一晩で軽く稼ぎだせるのだ。

それにしても日傭労働者達の方もだらしない。彼等が全部マゾヒストだったのなら十分納得の行くところだが勿論そんなことはなかったらしい。にもかかわらず易々諾々としてほしいままに搾取され、誰一人として警察に訴えようとしなかったのはよくよく暴力団が怖しかったのか、それともこれも女尊男卑の時勢の影響なのか……いずれにせよかき集められた労働者達は一人残らず独身者に限られていたそうで、若い女の肉体に餓えきっていたことは確実である。非常に頭のいいアイディアだと思ふ。

日傭労働者達が監禁されていた倉庫に踏み

こんだ警察関係者は、あまりの惨状に一瞬眼を疑う程だったと言われる。数十人の労務者がムシロやゴザ、毛布などにくるまって土の上にジカに寝ており、倉庫の中はムツとする異臭が立ちこめていた。便所は倉庫の隅に掘られた穴が使われており、その周りはゴザのカーテンで仕切られているだけだった。炊事係の労務者が決まっていた、毎日暴力団の若い者が仕込んで来る粗末な材料や残飯を使って全員の食事を用意したという。

労務者はいくら日当を貰おうが一日に二百円を渡されるだけで、あとは全部暴力団と女達に捲きあげられた。食事は無料だったが酒やタバコは二百円の中から求めなければならなかった。

一つしかない出入口には四六時中暴力団の若い者が見張っていた。脱走しようとしたら反抗したりした労務者に対する制裁は苛酷を極めた。足腰の立たなくなるまで撲られたり蹴られたりするのには日常茶飯事で、いちばんひどい刑罰は便所の穴に放りこまれ、二時間も三時間も糞尿の中に浸けておかれることだった。

それにしてもいままで述べた事実だけでは日傭労務者達が警察当局に訴えて出なかった

理由は判らない。いくら監視の眼が光っていたとはいえ、真ッ昼間作業に従事しているようなときには逃げだす隙がなかったとは思えないのである。この謎こそが実はこの事件の特異な性格を明かにするポイントではあるまいか？

新聞記事によれば、マダムやミス・トルコ達はときどき倉庫へ押しかけて行っては労務者達の前でストリップそのけのエロ・ショウを演じてみせたという。バーのマダムやミス・トルコだから商売柄踊りは大して巧くなくとも男のセックスの泣き所だけはイヤというほど心得ているだろう。どうせ彼女達は酒に酔っていただろうし、相手はもともと同じ人間とも思っていない労務者共である。此処に書くことさえはばかりのような凄絶なエロ・シーンが展開されたであろうことは想像に難くない。若い女体に餓え欲情に血走った眼をした男共をからかい、その頭上をまたぎ越しながらストリップ・ショウが行われたのではあるまいか？ 最初の頃は挑発された男が手を出そうとしたこともあったらしい。しかし暴力団の若者が容赦なくリンチにかけたので手を出す者はいなくなったという。

マダム達は自分が忙しいときには代りに気

心の知れたホステスを行かせることもあったそうだ。いい小遣い稼ぎになるのでホステスは喜んだし、労務者達も若々しく新鮮なホステスのストリップは大歓迎だった。

しかしこれが墓穴を掘る結果となった。ホステス某(一九才)が別のバーにスカウトされて移り、興にまかせてタコ部屋のことを話したのがもとで当局は捜査に踏み切ったのである。

検挙された女達は誰一人反省の色を見せていなかったという。ある若いマダムは傲然として言った。

「あいつら、男の癖に女の妾にからかわれても引っぱたかれても、抵抗する奴なんかいない。身体さえ見せてやったら嬉しがって寄って来るんだわ。豚よ、色気ずいた豚、オス豚よ。豚なんだから、人間じゃないんだから少しも可哀そうでなんかない……あいつらに聞いてごらんないよ、豚は豚なりに結構いい思いをしてたんだから」

私はこれらマダムやミス・トルコ達に対してお恥しいことだがマゾヒスティックな憧憬を覚えざるを得ない。世の女性達の多くが不良っぽい男に惹かれ、ヤクザなお兄さんに欺されるように、危険だとは知りながらも彼女

達にはたまらない魅力を感じるのだ。

5 爬虫類型女性像

何となく爬虫類のような感じのする女性に私は滅法弱い。電車の中なんかでこの種の女性に出食わすとゾクゾクして他人が見ていなかったらその女性の足元に土下座して許しを乞いたくなる位だ。

爬虫類のような感じといってもすぐには判って貰えないかも知れないがこれは決して私だけの印象ではなく説明すれば、ああ、あのタイプだな……と判って貰えるのではないかなと思う。

映画スターでいえば淡路恵子とか岸恵子、岸田今日子、江波杏子、宝塚の真帆志ぶき、引退したストリップパーのローザ・ユキ等がこのタイプだった。彼女達はいずれも透き通るように色が白く、口は如何にも意志が強そうに大きい。そして皮膚に毛が少いのである。側に立っただけで彼女達の気の強さが電気のように伝わって来る。

電車の中などでジロジロ見ていたりすれば彼女はキツとなって見返して来るだろう。そしてこっちが気押されて眼を伏せる迄みつめているか、或はグイと唇を引きしめてそっぽ

を向き二度とこっちを向いてくれないかのどちらかである。少くとも私の経験ではそうだった。

普通の女性だったら前者の態度——男が眼を伏せるまで見返すという——は絶対にとらない。また後者にしても、そっぽを向きながら如何にも具合の悪そうな被害者的な態度をとるものである。しかしこの種の女性は絶対に被害者っぽい様子は見せない。そっぽを向きながらも横顔にあらわな敵意を見せつけて来るのである。その激しい敵意はテレパシーのように私に伝わり、私は彼女の美しい横顔を盗み見ながら、ひそかな快感に打震えるのだ。

白人の世界ではいざ知らず、日本人の世界にあつてはこの種爬虫類型の女性こそが真の意味で支配者たるにふさわしいタイプなのであるまいか？ 少くとも私のようなマゾヒストならこの種女性の意志と力の前にはヘナヘナと無条件降伏するに決まっている。

こういう女性の夫となる男性はどんな男性なのだろう？ 彼女達の信頼を克ち得るにはそれこそ男の中の男、「素晴らしい男性」でなければなるまい。それとも逆に、強い女性である彼女達が弱い男性を夫として支配する

ことに興味を持つとしたら……離婚した淡路恵子さんが目下どんな心境でいらっしゃるか問いたいのには私ばかりではあるまい。

6 ストリップパーの度胸

浅草でストリップを見たあと友人三人ばかりで近くの喫茶店にはいり話していると若い二人連れの女がはいって来た。そのうちの一人、背の高い方は明かにさっき見たストリップパーで、私の斜め前に席を一つへだてて坐ったので思わずその方に眼を奪われた。氣分的にリラックスしていたのでいつもより相当大胆になっていたように思う。

彼女は黒革のジャンパーを着ており脚を組んでいたがスカートの短いのでかなり上の方まで脚が見えた。彼女がいつ私の視線に氣附いたのかはハッキリ判らない。とにかく私はかなり長い間、この素敵な見ものを眺めていた。近頃電車の中などで普通に見られる光景で、さほど珍しいわけでもない筈だったが彼女が小気味よいほど背が高く、いかにも氣が強そうだったのが私の好みに合っていたし、ストリップパーだから職業柄見られることに慣れているだろうという氣があった。

そのうちにコーヒーが運ばれて来て脚がも

うすし露わになった。ストッキングの上端の茶色の濃くなった辺りまで覗けた。私は友人の話も上の空でチラチラ彼女の脚を盗み見ていた。そのうちに彼女は組んでいた脚をおろしたが、気がついたのはこの前後ではあるまいか？

ふと眼をあげると彼女はニヤニヤしながらしきりに私を罵っている。声は出さないの。何と言っているのか判らないが相手が私であることは確実である。私は情けないことにいい年をして思わず照れ笑いしオズオズと眼を伏せた。しかしマゾヒストとしては彼女を見たい気持を抑えることが出来ない。チラリと見ると相変らず彼女はニヤニヤしながら私を罵っている。連れの女が何か言うとかからさまに私の方を指さして囁いた。

それ以上私が見ていたら彼女はほんとに声に出して罵りはじめたかも知れない。こっちの席へ来て友人のいる前で私を罵り辱しめるかも知れなかった。そんなことになったらマゾ的習性のしみついた私は抗弁することも出来ずにただニヤニヤして彼女の思うがままに隷従してしまうかも知れない……そんな場面が一瞬にして私の頭の中を横切ったが、そのとき幸いにも友人の一人が「もう出ようよ」

と言って立上ったのだった。

私は身体中が恥しきで熱くなっていた。そして友人の後について立上りながらもオズオズと眼を伏せ、彼女を振返る勇氣すらなかった。振返ったりしてイチャモンつけられることが実は怖しかったのである。

店を出てしばらく行ってから惜しいことをしたと思いはじめた。友人が一緒でなかったらもう少しいい線に迄行けたのではないかなどとクドクド思いはじめた。しかし彼女は一体何と言っていたのだらう？

「何よ、何見てるのよ、助平！」みたいなことを言っていたのであろうか、それとも「どうよ、妾が好きなら遊んでやろうか」とでも言ってくれていたのであらうか？

しかし私を手招きするような素振りが全然なかった処からすると罵倒していたに違いない。それもあれだけ長いこと言い続けていた処をみると相当ドギツイことを言っていたのだらう。ボーイ等には判らないように声には出さず私にだけしか判らないやり方で彼女は私を辱しめていたのだ。私がそうされても何も出来ない男であることを見抜き、心底からナメてかかったのに違いない。

しかし全然見ず知らずの男をあれだけバカ

に出来る女はストリッパーの中にもザラにはいない。

「阿呆！ 人の脚ジロジロ見やがって……助平！ バカ！ 間抜け！ ウスノロ！ トンカチ！ 色気狂い！」等ありとあらゆる罵倒を浴びせて私を辱しめてくれたのだ。

あのストリッパーなら私が辞を低うして頼みこんだら心ゆくまでサドしてくれるだろうという気がしてならない。いや、むしろ顔付きからして私がマゾであることを見抜いたからこそあまでバカにしてくれ、罵ってくれたのではあるまいか？ いずれにせよ自分の脚を盗み見た男を軽蔑しニヤニヤしながら罵る女……そういう女性が私は好きである。彼女に骨がミシミシいうまでサドされたくてならない。

7 女優大統領

フランスの大統領選挙に際して女優のブリジッド・バルドオに幾らかの投票が集まったという。もちろん大統領選挙は立候補制だから何万票の票が集まろうともB・バルドオは大統領にはなれない。

しかし現在の日本の代議士のように、或は都會議員のように、国民の利益を二の次に考

え自分自身の欲得ずくで行動することが多い場合には、本当に女優さんやモデルさんが立候補して下されば有難いと思う。私などは真ッ先にその方に投票する。

税金がどうせ喰い散らかされるにしても、むさっ苦しいヒゲ面の議員にされれば腹が立つが、みずみずしく若い女性に濫費されるのなら満足だ。淡路恵子さんあたり税金の高いことには大変憤慨していらっしゃる様子だけれども思い切って立候補してごらんになってはどうだろうか？

さらに言えば、いまの日本では政府与党の代議士連中は日本の利益を第一に考えているのか、アメリカの利益が第一なのか、どうも判らないところがある。それならばいっそのこと日本のみならず、ハリウッドの金髪女優さん、金髪モデルさんにも代議士に立候補して貰うといい。選挙運動のときだけ日本に来てくれればあとはアメリカにいて議員としての報酬を受取ることが出来る。それでも代議士としての地位を利用して業者からリベートをとり国政を私物化する連中よりは遙かにましだ。たとえ金髪娘が同じように汚職、収賄をしたとしたって、選挙運動で叩頭するヒゲ面を見るより悩ましい曲線美を見せてくれる

だけでもましである。アニタ・エクバーグやジェーン・マンズフィールドが日本の国会議員に当選したら愉快ではないか。

それに、いまは成行き上最低の線だけで考えていたが、実はその本職から莫大な収入がはいり、しかも若い彼女達はもしかすると理想に燃えて本当によい政治をしてくれるかも知れないのだ。そうになったら大成功ではないか。

女優さんやモデルさんばかりで内閣が構成されたら……ああ、そうになったら私は朝起きて新聞を読むときも先ず最初にスポーツ欄をひろげるようなことはしない、必ず第一面から読むようにすることを誓う。

8 混血の歴史

入江美樹さんの活躍や11PMガールズの登場でほとんど毎日のようにブラウン管を通じて混血美人の容姿を拝めることになったのは御同慶に耐えないが、一つ気がついたことがある。それは、彼女達白色混血の美貌は私達にとって必ずしも目新しいものではなかったという認識である。

私は以前にも入江美樹の眼と叶順子の眼との類似を指摘したことがあったと思うのだけ

れども、たとえばまさしく混血児である鰐淵晴子と東宝の団令子とを並べてみせてどちらが混血児らしいかと訊いたら十人のうち半数以上の者が団令子を指さすのではないだろうか？

ということは、何も純日本人が白色混血に劣らず美しいとか、両者の間に差異がないとか等と言っているのではない。敗戦以前から、いや、明治維新の昔からも白色混血は普通考えられている以上に多かったのではないかと思うのである。フィリッピンの土着民の女がアメリカの男性に憧れるように、開港したての野蕃国、日本の女達が白人男性に血道をあげたのも想像に難くない。

その傾向は正当だったけれども、日本資本主義の急速度の勃興によって中絶された。日本民族は不当にも世界に冠たる民族であるという教育、宣伝がなされ、その迷蒙から日本人がハッキリ目覚めたのは敗戦後しばらくたってからのことなのである。

いまでもこそ白色混血児は日本人の憧れの的であり光榮ある存在になっているけれども、一時代の日本においては谷崎潤一郎などの有識者の発言にもかかわらず、あまり威張れる存在ではなかった。

たとえば前にも例にあげたことだが戦争中私達の田舎に疎開して来た非常に美しい女の子がいた。年に似合わず発達した体格をしており、血色のいい丸顔、キリッとしてあがった大きな眼が如何にも男好きのしそうな女の子だった。ブルーマー一枚で体操する彼女のピンク色の太腿が私の眼底に焼きついて離れず、彼女の妄想に悩まされ何度も夢精した。戦後映画会社のニュー・フェイスになったが彼女の祖母が白色混血だったと聞いたのはそれから大分後になってからのことだった。

事ほど左様に、日本人の中には圧倒的多数の私共純日本人のほかに、まるで隠れキリシタンのようにひそかに白色人種の血を引く人達が意外に多くいるのだと考えてもよいのではないか？ 前に挙げた団令子さんなど必ず何代か前に白人の血を強く受けているに違いない。これは調べてみさえすれば判ることである。そうでなければ、ああいう種類の美貌は純日本人の中から生まれ得ない筈だと思う。

団令子一人にはとどまらない。現代日本の芸能界、歌謡界、モデル界に君臨するスターの大部分、そして私達中年男が魂を奪われ、適当にあしらわれる美しいバーのホステスの

多くが、実はひそかに白人の血を引いているのではないだろうか？ このことを実証する時間的余裕を持たないのが残念であるけれども、実際に調べてみればきっとそうなのだろうと思う。

私のような純日本人は、つねづねそういう女性と接する毎に「この女が俺と同じ日本人なのだろうか？」と首を傾げることが屢々であった。彼女達はいずれも社交的でおそろしく気が強く、生まれながらに「神の恩寵」を受けているようなところがある。身体のみずみにまで卓越した白人的特徴を残しているし、いつでも人気者になる、運動神経が発達していて男好きがする、他人に劣等感を覚えさせる……何やら神がかりめくけれども、それぞれ自分の胸に手を当てて考えてみれば、成程と合点の行く向きも案外多いのではなからうか？

9 キャメラ・アイ

A 人気ストリッパー

中年の男性は割合ヴァンプ型のストリッパーを好む。決して微笑を浮かべることなく、冷めたい切れ長の眼でジッとみつめられると脚の方から快感が走るといふ。冷めたい素ッ

気ない態度に逆に興味が湧くのだろう。

B ハリウッド・スターの収入

映画女優中の最高給とりはオードリー・ヘップバーン、エリザベス・テイラー、ソフィア・ローレン、ブリジット・バルドオなど、一本の出演料が三十五万ドル（一億二千六百万円）以上と言われる。この数字を聞いて一般サラリーマンが虚無的な気持ちに陥入ることを怖れる。

C 腕力ホステス

「態度が悪い」と三人連れの女に注意した男が逆に袋叩きにあった。国鉄平塚駅ホームで上り電車を待っていたパチンコ屋、島田孝橘（四七）が、若い女三人の言葉遣いが乱暴なので注意したところ口論となり憤慨した女達に取囲まれメチャメチャにのされて平塚署に突きだされた。女は岩崎絹枝（二〇）ほかいずれもバーのホステス。

D 訴えられたストリッパー

訴えたのは秋田清（三九）で、訴えられたのは元日劇ミュージック・ホールのダンサー白川明美こと田丸照子（二〇）。以下はその弁——。

「囲ってる女に逃げられたからって告訴するなんて最低ヨ。秋月先生は実は妾のファンだ

ったのよ。地位も金も持っていたし、ちょっと助平だったからパトロンにするにはピッタリだった。でもね、一千万とか二千万ならともかく、たった三十万円じゃないの、計画的にやったとか何とか言ってるけど計画的ならもっとガッチリ欺しこむわヨ」

E SとD・エイトピーチェス

SKDでは「秋の踊り」に新しく三人の若手踊り子を、エイト・ピーチェスに加入させた。三鈴晶子、香椎さゆり、若葉慶子の三人

で、いずれも十二期生、身長一六三センチ前後、体重五〇〜五四キロという均斉のとれた身体の主である。

F ズベ公の弁

「一月に五万円位家から貰ってるかな。でも使いでがない。晩に新宿なんかでブラブラしてると男がいっぱい通るじゃない？」

「オジさん、コーヒー奢らない？」って言うとすぐ喫茶店かバーに連れてってくれるよ。そのうち

◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▽

▽内容 容△

一、特異なる風俗文獻誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文獻的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、SMの他、フェティッシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、パナリオなど、最も効果を発揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規定△

一、作品はすべて未発表の自作品に限りま
す。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
○以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▽

「旅館に行ってもいい」って言う十人のうち十人まで喜んで旅館に連れて行くわ。お金を貰ったら

「トイレに行く」とか何とか言って逃げちゃうのよ。これがヤロウ・コマシ。捕まる心配なく全然ない。中年の男しか、狙わないもの。若い男の子はヤバイけど中年男なら体面もあるしね、稼いだ金は男に使うわ。彼氏にね。ケンカ？ 珍しいことじゃないわ。

「デメエ、やるのか」ってね、男の子の両腕を、ブスッ、ブスッさ。中野のグループはハンド・バッグにいつも安全カミソリの刃を隠してる。あれでやられるとイチコロよ」

G SとD・アトミック・ガールズ

SとDの名物、アトミック・ガールズは日本人離れしたグラマーな踊り子ばかりを集めたのが魅力になっている。これまで大型踊り子のリーダーとして長い間先頭をつとめていたのが三条みやこで身長一六三センチ。ところが今度の「春の踊り」には彼女を遥かに上回る踊り子が現れた。中村千尋、一六九センチ、水原なみじ、一六八・五センチの二人。二人ともハイヒールをはくと一七〇センチになるといい、アトミック・ガールズは一段と大型打線になった感じだ。

きよじの鼻責めシリーズ

「檻の中のお正月」

増田喜代司



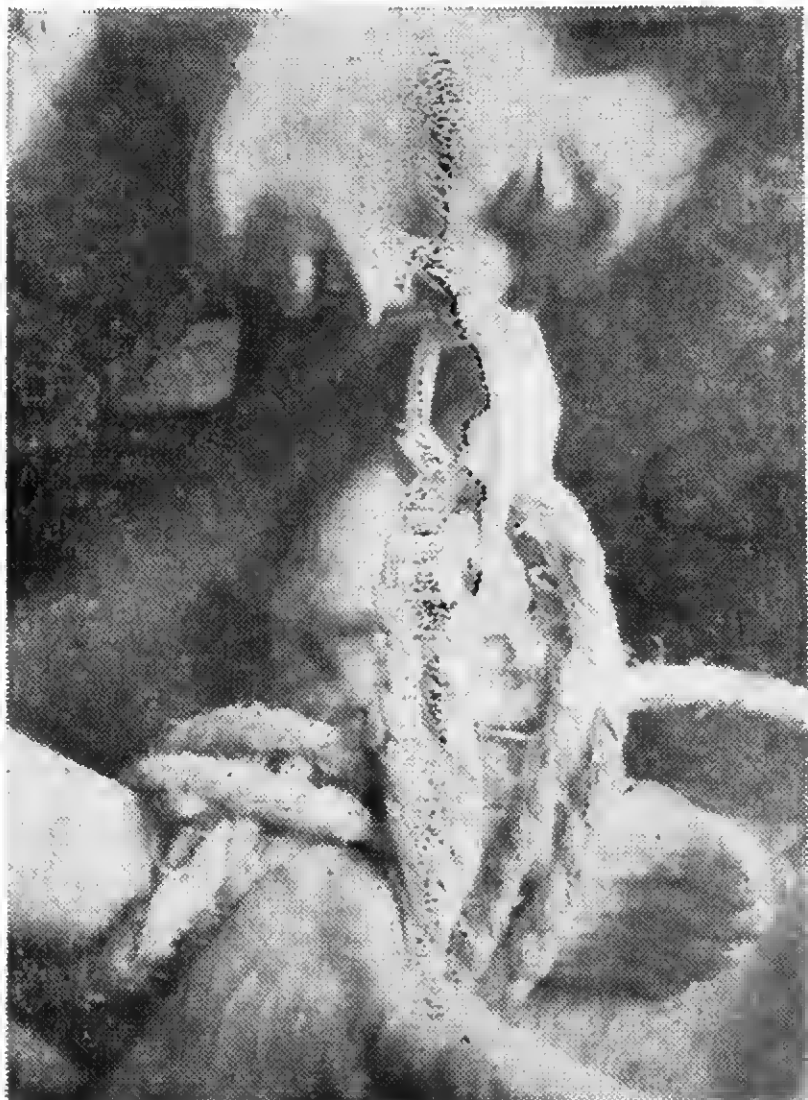
奇クの皆様！、檻の中から明けましておめでとうを申し上げておりますのは、辻村隆氏のカメラ・ハントで紹介して頂いた『鼻責版夫婦善哉』の増田で御座います。今年もよろしくお願い致します。辻村氏よりすすめられて、とうとう私も拙ないシリーズを書く決心をつけました。

お正月は妻のみゆきの奴隷となつて、三カ日を過しましたが、妻の女王振りが予想以上に板についておりまして私は一驚しました。

年末にボーナスで妻に真珠のネックレスを買ってやるつもりでしたが、不況のせいか、思った程も出ず、緊縮財政になりましたので、妻へ奉仕する事によって、その償ないをする事にしました。年末、私は私のために使用する檻を、私自身の手で作成し、除夜の鐘と共に、みゆきは女王となり、私は奴隷となりました。女王の手によって荒縄で縛られ檻に押しこめられ、鼻輪を通して檻に繋がれました。雑煮も正月料理もすべて、女王のたべ残し

を与えられ、それを口でじかに喰べさせられます。身に纏うもの、一切剥ぎとられました。が、幸いガストロブで寒くはありません。私は元来Mの方が強いのでしょうか、こうされている事がスゴく快適に感じます。同封のフォトは妻の撮ったものです。辻村氏にこの奴隷の有様を見せてやるといつて、妻は二度許り彼に電話しましたが、いつも留守で私の奴隷姿を見て頂けず残念でした。妻はすっかり女王気取りで、足の指先で、私の鼻に簞った牛の鼻木を引っ張ったり、足指を口に押し込んだりします。生理現象についても、いろいろと面白いことがあります、少し露骨になるので避けます。

妻の勤める会社の女友達が二日目に訪問した時、みゆき女王は私に猿轡をはめ、檻にシートを蔽せて、平然と迎え入れました。且那さんは？と女友達で私も心易いK子の声が聞えます。この女性の鼻を、私は二度許りみゆきに内緒で少し責めたことがあります。K子も少しSMの理解者です。いいところにいるのよと妻みゆきはシャアシャアと返事して、それからペチャクチャと女同志のお喋りが始まりました。息苦しくとも身動きもならず、私はじっと我慢しておりましたが、お恥かしいことに、じっとしているため腹が張って、大きな奴を一発落しました。アラッ！とK子の声、二人はクスクス笑ってい



ましたが、みゆきは腹をきめたのか、檻のシートをパツとはぎとりました。

浅ましい荒縄で縛られた、鼻枷で檻に繋がれた私の全裸は、かくしようもなくK子の前に曝されました。形容の出来ない、悲鳴とも驚嘆ともつかぬ声がK子の口から洩れ、それから恐る恐る私の檻へ近づきました。

「正月の三日間は私の奴隷なの。どうワリカシ私、スゴいことするでしょう」

細い棒で、檻のすき間から、私をつつき乍ら、みゆき女王は平然としています。K子もやがてこの異様な雰囲気になれたのか、しま

いには面白がって、妻と一緒にさまたまに私を虐めます。K子にも一風変わった私達夫婦のお遊びが分ったようです。

「今度仲間に入れてあげようか。でも会社では絶対秘密よ。分るでしょ」

みゆきはK子をプレイ仲間には誘い込んで、二人して私をいじめるつもりです。

（今年はずっと面白くなりそうだな）

私は尿意を覚えて、苦しくなった下腹のしぶりを我慢して、女二人の会話をうっとりときいておりました。

（いつか、そのうち、K子の鼻にも孔をあけてやろう。そうすれば

私達三人、お互いに鼻責めが、出来るものなあ）

「こんなこと絶対喋べっちゃいやよ」

「ウン、いわない。絶対」

「対——」

「その証拠を見せて」

「どうすればいいの」

「私の可愛い奴隷をK子がいじめているところを、私がカメラにとっておくわ」

「いいわ、そんなことぐらい」

「いいわ、どう奴隷さん、K子と一緒にとって欲しいでしょ」

私はあわててうなずきました。こんな愉しい正月であるかしらと思いました。女二人は相談の結果、私の鼻孔にK子がローソクを垂しているところをとる事になりました。熱いローソクのしずくが、ポトポトと鼻孔にそそぐ度に、私の欣喜は一段と増しました。K子も真剣にプレイしておりました。

辻村氏が仰ったように、SとMは隣り合せだっていわれた言葉がよく分りました。

妻のみゆきはMにもなりますが、こんなS的な要素もありました。元来抑圧されている女性が、何かの刹那に反転すると、こんなにもSになるものであることを、私はつくづく知りました。

いい妻をもって私は幸せだとつくづく思う正月でした。そして、これからはK子も時と場合によっては、一枚加わることを、その時彼女は妻に約束しました。

奴隷のお正月。みゆきのヒナの節句。奴隷のタンゴの節句。みゆきの七夕。奴隷の誕生日。みゆきのクリスマス——と、今年一年は交互に、歳時記SMプレイをとるのが私の念願です。



△マゾヒスチック・ストーリー▽

モツキン・バード

三 原 寛

朝の二時だというのに、この六本木の、レストラン・Gの細長いカウンターには人が溢れ、ビートのきいたデキシーランド・スタイルのブルーキィを叩き続ける隅の自動ピアノの周囲には、ビールのジョッキを片手にした若いヤンキー達が群れ集って大声でわめき散らし合っていた。

奥のボックス席の方ではロースト・チキンの皿を前にして、きつねの様に細く吊り上げた眼を何とかねこの眼に似せようとしたらしい黒い隈をつけた厚化粧の女が、タイトの切れ上った割れ目から這い上って来る芋虫の様に

に無恰好な四本の執拗な指を根気よく払いのけ続けていたが、先程から焦らされて段々に値段を吊り上げさせられているこの芋虫指の持主は、その指にふさわしいバターの塊りの様に肥え太った四十男で、まん丸い頭は耳の後迄はげ上って、あから顔にみかんの皮のような鼻がぶら下っていた。ケチなくせに抜けているアメリカ人根性をまるだしにして、最初から相場ですっぱり決めればよいものを、靴下一足も買えない様な値段から切り出して結局、焦らされた揚句法外な買物をさせられているのだった。

隣のテーブルで譲は、イルゼの為にフルード・ド・ラ・メール・オ・シトロンにサラッド・ニス注文してやり、自分はクール・ヴォアジェのX・Oを頼んだ。この方がヘネシイのV・S・O・Pよりは柔らかくて好きだった。いんぎん無礼な給仕がひきさがり、譲はイルゼのくわえた煙草にダンヒルの火を近付けた。ジャスミンの香水に浸した特製のシガレットである。譲はパチュラー・ジャックにビートニクな六フィート・マフラーをひっかけていた。ダーク・グリーンのコードデュロイのジャケットを無雑作に羽織った一七〇セ

ンチのイルゼが立ち上ると、細くくびれた腰から、コットンスエードのストラックスに包まれたヒップがはち切れんばかりで、ヴォリュームのあるバストが圧倒的にのしかかって来た。イルゼは赤坂のクラブ・リーの専属ヌード・ダンサー、ドイツ系のアメリカ女で、譲はイルゼのモッキン・バードである。

譲のアルファ・ロメオ・ジュリアスパイダー一六〇〇CCが彼女の青山のマンションとクラブ・リーとの間の往復に利用され、そして譲の毎月の小遣いも、そっくり彼女のお遊びに利用されていた。そして譲は何もかも、すっかり、今の状態に満足していた。



金森はどうして自分がいつも、女性にいじめられる破目になるのか、わからなかった。彼はフェミニストではないと自分では思っている。それ所かいつでも女性に対しては或る種の反感を持っていた。彼には女性特有のわがままが我慢ならなかった。岡島啓子にしてもそうである。社長秘書といっても、何の能もない短大出の小娘に過ぎないではないか。タイプ一つ打てない女だ。それが、まるで自分が社長にでもなったかの様に思い上っている。

金森は、頭の切れるT大経済学部出身、眉目端麗、S銀行重役の長男で家柄もよく、非の打ち所のないエリートで、このP国専門の商社内での実績も抜群、三十才で未だ独身乍ら、社内取扱品目の中でも最重要な位置を占めるプラント輸出課の課長に抜てきされ、そして、同業他商社の間でも、彼の名は切れ者として恐れられていた。

それが、岡島啓子の如き小娘のモッキン・バードにされているのだ。モッキン・バード所かモッキン・スレイヴである。もう一年にもなる。大した契約ではなかった。ポンプ設備二基、十萬ドル以下の取引きである。しかし逃す事は出来なかった。この契約を捨てる事によって、P国賠償使節団とのつながりが切れる事は、今後のレパレーション・ファン・ド・アロケーション（賠償資金枠）への権利を放棄する事を意味するのだ。そしてシュアティ・ボンド・ドラフトの提出は翌日に迫っていた。これを提出することによって契約が発効するのであるが、期日迄に提出できなかった場合、契約は一方的なキャンセルを受けるのである。ドラフトには使節団登録署名権所持代表者のサインを必要とし、そして、署名権の所持者は社長のみである。

普通のケースでは書類は課長の金森から、輸出部長及び管掌重役の側印を得た上で、秘書課を通じて社長室に廻わされる訳であるがこれではどうしても二、三日以上かかり、今度の様な場合は間に合わなかった。緊急の時には、金森自身で書類を持ち廻って、部長と重役の側印を貰った上で秘書に直接事情を頼んで、その場でサインを貰う事になるのだ。

社長室の手前に応接室があり、応接室の奥社長室の入口に社長秘書の席がある。秘書の岡島啓子は美人だという事で社員間でも評判高かったが、その尊大な態度が金森の気に喰わなかった。金森の持つて行った書類を見もしないで「社長は今忙しいのよ」ときめつけた。金森がくどくどと事情を説明しはじめる。「しつこいわね。そこに置いておいたら、順番が来たら廻しておくわよ」とあごで示された書類の中には未決書類が積み重なっていて、とても順番を待つていられない。

「順番を待つていられないから持廻りをして来たのです。会社の為の仕事です。どうしても今社長のサインが必要なのです。その事はこの通り、部長も重役も認めているのです。それを貴女の一存で手違いを起して会社の利益に迄影響を及ぼす権利はない筈です。それに、社

長には今来客もない様だし、都合が悪いとも
思えません。今行って頼んで来て下さい」

「貴男にどうして社長の都合がわかるの？」

「だったら自分で持って行ったら？ あたくし
に命令する権利はない筈よ！」

課長が直接社長室に入っていく事は許され
てなかった。

「そうですか。それなら管掌重役にそういっ
て、頼んでみましょう。貴女が、社長室への
連絡を拒否した事も伝えて置きます」

金森は床を蹴って秘書室を離れた。金森は
管掌重役に事情を話し社長への取次ぎを頼み
込んだが、「社長が忙しいと言っているのに
入っていく訳にも行くまい。君もう一度行っ
て、社長の手が空いたらサインして貰う様、
よく秘書に頼んでくるんだな」と押し返えさ
れてしまった。社長のかんしゃく持ちは有名
で、仕事より、社長の機嫌を損ねるのを恐れ
る重役連は、社長に対しては、はれ物に触る
ような態度を採っていた。社長の性格からし
て、金森自身が禁を破って社長室に直接入っ
て行っても頭から怒鳴りつけられて追い出さ
れる事は見え透いていた。と言って、この契
約を取り落すと、折角これ迄に築き上げた賠
償枠というドル箱の地盤が一挙に潰れ去り、

今後の商売種を失ってしまうのだ。金森は屈
辱を噛みしめて、今一度秘書の前に立った。

「先程は申訳ありませんでした。私の将来は
貴女の御氣持一つにかかっているのです。何
とか社長にお取次ぎ願えないでしょうか。こ
の通りお願いします」深々と頭を下げた上か
ら、岡島啓子の勝ち誇った嬌声が、とんで来
た。

「さっきは一人前の口をきいてたくせに、い
くじなく謝りに来たのね、どうなの？」

「申し訳ありません。先程はお気に触れる様
なことをいってお許し下さい」

金森は又頭を下げた。

「ふん、はじめからそういう態度で来るもの
よ。それで謝ってるつもりなの！」

顔を上げた金森を岡島啓子は唇に嘲笑を浮
べて見据えた。

「本当にお願ひしたいのだったら、そこに土
下座して頼んでみたら？ そうしたら、聞い
て上げてもいいという気になるかも知れない
わね」

図に上った彼女の言葉に金森は目まいのし
ような憤怒にカッと我を忘れかけたが、今度
彼女の気嫌を損ってはもう破滅しかねない。
金森は岡島啓子の机の前の床にひざまずいて

両手を床について頭を下げた。

「うふふ、このざまを皆に見せてやりたいわ
ね。やり手だとか切れ者だとかいって、あな
たも卑屈な一匹の犬じゃないの」

彼女は立ち上って、机を廻って来て金森の
前に立ちはだかり、ハイヒールの足を上げて
「頭が高いわよ」と彼の頭を踏みつけた。

「こうなったら、好きな様に料理して上げる
わ。どんなにされても不服はないわね」

彼女は、はいていたハイヒールを脱いで部
屋の隅に投げた。

「四つん這いであのハイヒールを犬のように
取って来て頂戴。そしたら、サインは取って
来てあげるわよ」

ハイヒールを口にくわえて四つん這いにな
った金森の醜態は、岡島啓子が机のひき出し
から取り出したカメラにおさめられた。

「あたしに、この写真をばらまかせたい気持
を起させる程貴男もバカじゃないわね？」

岡島啓子の勝ち誇った声を背に、金森は社
長のサインの入ったドラフトを手に応接室を
出たのだった。

「うちの社員よ。出世したいと思ったら、ど
んないやらしい事でもするわね」

岡島啓子のアパートに呼びつけられた金森

は彼女の女友達の軽べつに満ちた視線を浴びながら、彼女達の靴を磨かせられたり、ダイニング・ルームで食事の彼女達の足許を這いずり廻って床ふきをさせられたりした。

「あたしの御機嫌をとる為だったら、どんないつけだって聞くわよ」

金森は床にひれふして、つき出された岡島啓子の足の裏まで舐めさせられるのだ。それから一年間、金森は彼女のトイレ代わりに使われる迄に岡島啓子に仕込まれた。

◆
金森は広々とした緑の芝生に囲まれた青山のマンション、シャトー・Mのロビーのエレ

ベーターの前の椅子に腰を下して今度の取引きの事を考えていた。元々今度の相手は彼の会社が専門としているP国が相手ではない。現在国内で大規模なクーデターで新聞紙上を賑わせているI国の大統領につながる話である。大統領の秘命を帯びた腹心の国防局長が現金をもって火薬の大量買付に来日しているのだ。

本来、I国向の取引きはI国の大統領と当時の日本の首相の地位にあったKとの両方に深いつながりのあるK産商が殆んど独占していたといつてよかった。所が、K首相の失脚と相前後してK産商は崩壊してM物産に合併

吸収され、日本政界とのパイプラインの切れたI国大統領に結びつくには今度の火薬の買付は絶好の機会であった。P国向け一、五〇〇万ドルのケミカル・プラントの賠償契約に実績のあった金森は、メーカー筋の斡旋で今回来日したI国の局長との秘密会談に成功した。契約金額を三割水増しして、その水増し分は香港で米ドルに換金し局長個人名の口座に振込むというのが取引の条件である。契約額は二〇〇万弗、七億円余で、額としては大きくないが、これで大統領につながるラインにがっちり喰いつく事が出来るとすれば大成功である。

その夜、金森は局長をクラブ・リイに招待した。輸出部長と管掌部長も一緒である。この取引で二億円相当の現金が私腹に転がり込んでくるので、局長は大いに満足し、その夜は破目を外して飲み、はしゃいでいたが、さて、勘定も済んで、席を立つ段になって難題を吹っかけて来たのだ。フロア・ショーに出演したヌード・ダンサーのイルゼ嬢がお氣に召して、どうしても彼女を取持ってくれねば、契約の相手を変えろと駄々をこねだしたのである。契約調印は翌日に予定されている。明日迄に良い返事を聞かしてくれる事を期待す

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊

写真と絵画 文献 特集号

直接発行所へお申込を！

定価 五〇〇円

(〒20円)

略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女相撲、女体切腹、女体浣腸とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今度二度再びこのような内容は集録出来ない特殊文献を満載いたします。今、街の古本店では一部千円以上で取引きされています。こういった値段では、これからは到底入手できません。

三十八年に発売以来、相当部数直接購読者用として保有しておきましたが、愈々残部が僅少となりました。売切れますと補充はつきませんし又、二度と発刊も出来ません故、未入手の方は今のうち、お求め下さるようお待ちします。ここ二、三カ月で売切れになる予定です。

るといつて局長は片目をつぶってみせた。局長は大きな脂ぎった手を差しのべて一同に握手し、金森の社で差し向けたキャディラックにふんぞり返って、これも金森の会社で手配したT・ホテルに引上げて行った。

金森は奴等のやり口をよく知っていた。冗談ではないのである。買手は万能であった。翌日中にイルゼ嬢を彼の部屋に連れ込めねば簡単に契約の相手を変える事はこれ迄の経験で、あり得る事だった。他社で、香港でのリベートを三割五分出してくれる所があったから、というのがその理由で、事実、彼が口をかけさえしたら、それに応じる商社は十指に余るだろう。管掌重役が二十万円の小切手を書いて呉れた。

「仕方ないだろう。うまくやってくれ」
イルゼ嬢の斡旋を金森に押しつけた重役と部長も、彼を残して引上げていった。

金森はボーイに千円札を握らせて、クラブ・リーの楽屋に案内して貰った。暗い廊下の奥の小部屋のドアをノックするとブリーズという声がかかった。大柄なイルゼ嬢が黒い網目のブラジャーとパンティだけの姿で真正面を向いて椅子にまたがり、筋肉の盛り上った太腿をガーゼで拭いていた。金森はどきまぎ

して、得意の英語もつかえてしまっただけで立ちすくんだ。

「あんた、誰よ？ 何の用なのさ？」

顔のドーランを落しながら無愛想にイルゼが言った。

「用がないのなら出て行ってよ。黙って立つて人の着替えをのぞこうって魂胆だったら迷惑だよ。さっさと消え失せない人と人を呼ぶよ！」

全く取りつくしかなかった。どう切り出したものか廊下を歩き乍ら一生懸命に暗誦していた持ちかけ方も、きっかけを失ったのどもとで止ってしまった。金森は、ごそごそと、ダーク・グレイの上衣のポケットに手を突っこんで、二十万の小切手をつまみ出した。金森の震える手で差し出された小切手に目をやったイルゼはそれをひったくった。化粧鏡の上の蛍光灯で、小切手をすかしながら「戴いとくわ。他に用がなければもう出て行っていいのよ」とはじめて顔をあげて、金森の顔を真正面から観察する目付きで眺めた。金森は必死だった。しどろもどろの英語で「I 国の局長に会ってくれる様、手を合わせんばかりに哀願した。彼女が、「それでは話を聞いてやるから、マンションで、待ってなさ

い」とアドレスを教えて呉れた時は天にも登るような気持で涙がこぼれてくる程の始末だった。

直ぐにタクシーをここ迄飛ばしてロビーで待ち続けたのだが、イルゼがシルヴァーグレイのアルファ・ロメオ・ジュリアスパイダー一六〇〇CCの排気音を響かせて、男と一緒にこのマンションの入口迄乗りつけて来たのは四時を廻った頃だった。男は譲だった。一七〇センチ、ヴォリュームのあるイルゼと並んで少しの見劣りもしない上背と広い肩巾の譲はバチュラー・ジャックのはだけた胸元にウールのセーターを通して盛り上った筋肉の動きを見せつけながら金森の前に立った。

「イルゼに聞いたんだが、話をつけたいというのはあんたかい」

バチュラー・ジャックのポケットからサンダラスの柄がぶら下っている。

◆
イルゼの部屋は嵐の跡の様に散らかっていたがコイルマンのスペース・ヒーターが適度の室温を保っていた。フィリップのステレオ装置の上にはチェコ製らしいカットのグラスが乱雑に転がり、ソファの上にはエレキ・ギターが投げ出してあった。厚いじゅうたんの

上には脱いだままの下着やストッキングが投げ出されたままになっていて、部屋の隅の豪華な三面鏡の前には、マルセル・ロシヤやシヤネル等の香水がひっくり返っていた。譲が奥の間からグラスを三つ持って来てテーブルの上の銀の盆の上に置いて首の長い壺を傾けて三つのグラスを一杯にして、一つを金森の

前に押して寄越した。

「ディゼスティフはコアントローがいいのさ、やれよ」

おすおすと借りて来た猫のように小さくあった金森がグラスに手を伸ばした時、「それで？」とソファの背に身をもたせたイルゼが眠そうな声を出した。

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mファン待望の超傑作集

Mフオト
最新作

M場面決定版

大手札印画紙焼付
各組十二枚一組
八組全部にて

二〇〇〇円
一三〇〇〇円

裸女二人の尻の下

(略号
(まふ)

遅ましい素肌の臀部が男の顔の上に乗っかってゆく、全裸の美女二人から責められる幸福なるMモデル男の生態。

二女の戯むれと男

(略号
(まも)

美しい蝶々のように二人の裸女が尻に敷いた男の上にて、戯れていたが、やがて尻の下でうごめく男をなぶるのだった。

美女から縛られる

(略号
(まね)

暴君と化した二人の遅ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程。

男馬を乗り潰す女

(略号
(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイドウドウ。いくばくもなく乗り潰された男は、勝気な二人の美女から辱しめられる。

痛烈ムチのご馳走

(略号
(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとつては恰好の弄び道具である。男の肌にムチが炸裂してミミズ脹れが凄い。

首絞めで刺す止どめ

(略号
(まむ)

いくら痛めつけても喜んでるM男に対しては、最後の止めとして遅ましい太股による首絞めで昇天させてやるのがよい。

汚臭と足舐の強制

(略号
(まり)

女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている男はどうすることも出来ない。

二女の臀臭に泣く

(略号
(まみ)

肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしゃげ、その臀臭をいやという程嗅がされている。

「その何とかという田舎の局長さんに会ってやればいいんだろ。二十万円じゃ足りないわね。ああいう田舎のおいぼれっていうのは知ってるけど変に助平ったらしくって、がつついてくるからね。あと五十万持って来たら話に乗って上げるわよ。それでいいんでしょ」

イルゼは大きなあくびをした。それから、グラスをとり上げて中の液体をすっかり空になる迄ゆっくりと口の中に注ぎ込み、そして品定めでもするような目付になって金森の方を見やりはじめた。

「あたしは退屈なのよ。あんたの頼みも聞いてやったんだから、今度はあたしの言う事も聞いてくれていいだろ？ ジョー、この子とダンスをして見せてよ」

譲はそれを聞いて片目をつぶって見せた。

「よう、イルゼがああ言ってるんだ。上衣をとりなよ」

譲は奥の間に行つて、ボクシングのグラブを二組手にして戻つて来た。

有無を言わずグラブを手になせられた金森は、これもグラブを手にして嘲うような眼付きをした譲と向い合う羽目になった。金森も体格は人並み以上で彼のスタイルは社の女の子にも騒がれたものだが、ボクシングなど

やるのは生まれてはじめてだった。

「さあ、来いよ。そちらで来なけりゃ、遠慮なく行くぜ」

金森は急にこの得体の知れない譲という男に限りない憎悪感を抱きはじめた。イルゼの退屈しのぎの気晴しの為に、この俺をなぶりものにしてみせようというのだろう。そうはさせぬぞと金森は思った。それでもT大の柔道部の主将をつとめていたことがあり、講道館の三段である。空手部の合宿に参加してまきわらを突いた事だってあるのだ。何だか知らないが、金を持って遊び廻るしか能のなさそうなこの男を、ここで思い切り打ちのめして、彼女に認識を変えさせてやろうと斗志があふれてきた。

「よし」と金森はうなずいて両手を胸の所に構えて譲をにらみつけた。譲は相変らず口に薄笑いを浮かべて突っ立っている。二人の間隔はまだ五米位離れていた。金森は左手を前に右手をあごの所に構え、身体を半身に開いて、譲の方に左足を踏み出そうとした。あつという瞬間だった。十分の間合いがあると思つたのに、一瞬のうちに譲はステップインして、その間合いを射程距離内に縮め、金森が思わず窓出した左をスリップしてはずし、譲

のダイナマイトの様なレフトがジョルト気味に金森の胃袋にめり込んだ。身を屈める金森のあごにそのまま、レフトがはね上ってアッパークットとなってさく裂、金森は、息がつまって、全身の筋肉がばらばらにはじけとぶような苦痛とあごに当たった強烈なショックで意識を失ないそうになり辛うじて両足ををふんばって堪えるのに精一杯だった。

「だめよ、ジョー、それじゃダンスにならないわ。ゆっくり料理しなきゃあ」

イルゼの声で金森は再び憤怒の気持を燃え立たせた。譲はまた、間合をとって手の届かない距離に突っ立っている。畜生、不意打を喰わせやがって、金森は、煮えたぎる怒りをぶちまける様に今度は自分の方から飛び込んで行った。怒りを込めてパンチを譲の身に思い切り叩き込んだ。

はじける様なイルゼの嬌笑、金森は鼻柱をいやという程叩きつけられて、目から火花がとんだ。譲が軽くステップを外して差し出したレフトに自分から飛び込んで鼻柱をぶつけたのだ。ぬるぬると鼻血が流れ出し口に生臭いっぱがたまる。思わず手を顔の方に上げた所をボディにレフトの連打を浴びて口から血を吐きそうな苦しさ腹を押さえて屈み込み

そうになる。そうすると今度はガードの空いた顔を目がけてジャブの乱打を浴びる。

譲はレフトだけしか使ってなかった。その譲に一発のパンチもかすりさえもしない間に金森は顔中を化物の様に腫らして、眼もよくみえなくなったのか病んだ老婆のような恰好で広間の真中に立ってなすすべもなくおろろしているのを譲はそのまわりをまわりながら時々ジャブを出してこづき廻した。その間中イルゼの嬌声は止みそうもなかった。遂に譲の強烈なアッパーをあごに喰った金森は投げ出された丸太ん棒の様にすっ飛んで、ソファに反りかえって笑い転がっているイルゼの足許に仰向けにひっくり返った。それで起き上がる気力がある位だったらもっと前に上衣をつかんでドアをあけて逃げ出していただろう。

もう先程から、何がどうなっているのか意識も薄れて、なぶられ放題だった金森はイルゼに素足で顔の上を踏みつけられたまま段々遠のいていく意識の片隅でかすかに、I国の局長のむくんだ顔を思い出し乍ら気を失っていた。

「エキサイトしたわ、ジョー」とイルゼが上ずった声を出した。「しずめて頂戴」譲はセーターを脱ぎ捨てた。筋肉の盛り上った弾力

のある譲の上半身がむき出しになった。譲はじゅうたんの上に仰向きになった。譲のひき締った腹筋の上にイルゼの足の裏がびたりと吸いつき、ぐいとふみにじる。譲の仰向きの身体の上に完全に両足を乗せたイルゼは全体重をかけて、譲の顔の上、のど、胸、腹と情

容赦なく踏み込んでゆく。譲が時々、うっ、うっ、と苦痛の吐息をもらす度にイルゼの顔が紅潮してゆくのだ。

譲からとび下りたイルゼが今度は譲の身体を足で蹴り返してうつ伏せにした。筋肉の盛り上った譲の背中一面には赤黒いみみずばれ

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キヤピネ版印画紙焼付
各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

仰向け木馬責

略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足を四方に縛りつけられて仰向けに固定された無防備の女賊に対して加えられる羞恥責の数々。

海老責の拷問

略号(よす)

全身が二つ折りになるまで両手首と両足首とが連結されると、流石強情我慢の女賊も骨身にしみて苦痛の呻きを洩すのだ。

全裸入墨女折檻

略号(よせ)

厳しい高小手の上更に股間縛りにされた女囚は竹棒で追いまくられ足蹴にされて白洲の上を転りまくるのだった。

全裸四這木馬責

略号(よも)

見事な入墨をさらけだして木馬に四這いに括りつけられた女賊の豊満な臀部に竹のささらが炸烈する凄惨なシーン。

笞打ち白洲糾問

略号(よゆ)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引き据えられた女賊はむきだしの入墨の背中を、竹の棒にて打ちまくられ悶え苦しむのだった。

逆さ吊りの仕置

略号(よき)

荒縄で両足首を括られて逆さに吊り上げられた女賊、首がかるうじて床についているが非情な竹が容赦なくムチを加える。

ハリツケの拷問

略号(よめ)

僅かに白布を前に当てた裸の女賊は磔架にかけられ美しい白肌をさらけだして身動きも出来ない裸身をいとおしむのだった。

大の字磔処刑

略号(よさ)

磔台に四肢を思いきりひろげた大の字に固定され、いよいよ胴斬り、足斬り、両腕斬りと一寸刻み五分試しに寸断される。

が走っている。鞭のあとである。ソファの後から黒く光る革鞭をひっぱり出したイルゼはそれをしゅっとしごいて譲の背中にぱしっと第一撃をくれた。うっと譲がうめく、続いてぱしっぱしっと打ち下される革鞭が背中の皮膚にはじける度に譲の固く喰いしばった歯の間からうめきがもれ、その度に、神の名と卑猥な単語を一緒くたにしてののしっていたイルゼの興奮も頂点に近づき、遂には革鞭を真紅のじゅうたんの上に放り出したイルゼは両股を大きくひろげ、すんなりと伸びた脚線美をみせつけてソファの上に仰向けになる。ソファにかけてある豹の毛皮を手に握りしめぴんと突き上った胸の谷間に抱きしめる。背中を血だらけにした譲が白い二本の大理石の柱のような彼女の両脚の間に這い寄って、彼の舌がイルゼの足の裏からなめくじのように這い上っていく。ぐったりとなったイルゼを譲は両手に抱え上げてバス・ルームに運ぶ。金森は紫色にふくれ上った顔を床に横に押しつけたまま、まだ死んだように横たわっている。バス・ルームからはシャワーの水沫の飛び散る音、イルゼのけたたましい笑い声が聞えて来る。一旦首を上げかけた金森はまたぐったりと横になった。

昭和40年台風23号顛末記

△暴風雨下の責め日記▽



森 中 雨 奇 男

その日、9月10日に台風23号は近畿地方へやってきました。

かねてから、暴風雨の恐怖にさらしながら

の責め折檻を企んでいた私にとっては、絶好のチャンスだ。

台風の襲来がもはやほぼ確実になった、そ

の日の朝。食事をとりながら、どういう口実を作って、台風襲来を告げるテレビのニュースを、おびえた目つきで見入っている、この可愛い妻を責めてやろうかなと思いをはせていた。そして、結局はよく利用する「朝食のまずさ」ということになっていた。

「おい、今朝のこの味噌汁の味は、これは一体なんだ。辛いばかりが能じゃないぞ」

「どうもすみません。つい、台風のニュースに氣をとられていたものですから」

「何だと、台風のこわさも知らないくせに。一度教えてやろうか」

「えッ？」と一瞬考えた妻は、すぐにもう私のいつものくせ？に気づいたのだらう。おののきながらも、一度言い出したら、きかない私の性質にあきらめたのか。

「はい、よろしく教えて下さいませ」

とうなだれる。まあ、日常このような調子で責めのプレーを楽しむことが多いだけに、ツーといえばカーとくる。

「早く後片付けして、道具を用意しておけ。それから今日は、とくにWCへ行かせてやるから、早くしろ」

外は、もうかなり風雨もきつくなってきたよう、窓はガタガタなり始めている。

昼食の用意はできているなと念を押してから、責め道具に手をつけたのは、もう10時に近かった。いつもなら裸にさせるところだが今日は風雨にさらしてみようということで、まず、ふだん着の上からピンクのゴム引レインコートを付けさせ、フード、ベルトをきっちりさせて、白いゴムブーツを眼がわずかにのぞく程度に顔面に当てさせ、フードの上からぐるぐる巻きにした八猿ぐつわVを自分の手で例によってさせる。それを私が△検査▽してから、レインコートの上へ男物の黒いゴム引雨合羽を着せ、両手両足には長い白のゴムブーツをはかせて、これで準備完了。

さて、まずは縛り上げた身を吹き荒れる風雨にさらしてみようということで、室内で嚴重に上半身をゴム合羽の上からロープで縛り上げてから、私も合羽を着込み、縄尻をとって雨戸を少し開け、裏庭へ出た。

庭はまず相当な台風がきても、ものがとんでくるような危険性は非常に少なくて済みますし、立木にでもつないでおけば、室内の窓から、その姿態を十分楽しめるような位置になっている。

妻を連れだした私は、高さが二米ばかりあるモミジの木の根もと近くの幹に、その縄尻

を結びつけ、丁度高手小手にしめ上げた後手から出ている縄をきつく引いて、まっすぐに立っておれないように、ひざをかなり曲げた姿勢になるように縛りつけ、その上でブーツの両足も全く自由にならないように、別に用意したロープで二〇センチほどなら動かせるように結びつけ、すぐさま室内にひきかえした。どうも表現がまずいので、書いてしまえば、それまでのことだが、風雨の吹きすさぶ中ですばやく樹に縛りつけてきただけで、私の合羽の中もずくずくになった仕末で、ゴム雨具に身を包んだまま、自由を奪われた妻はさぞかし、もう風雨の恐怖と身体の痛み、冷たさにのた打ち始めたことだろう。

早速、室へ戻ると窓から、そのさまをのぞきにかかった。

ひざを曲げて縛られた妻の姿態を、正面からうかがうと、長目のゴム合羽が地面にひきずっているのを、強い風が襲う毎にめくれ上って、縛られた白いブーツがぬれて輝くようにのぞいている。もう完全に暴風雨圏内に入ったようで、立木がゆれるとともに、妻ののたうちが激しくなってきた。縛め上げられた上半身が痛いのか、足のしびれか、暴風雨の恐怖か、恐らくそれらのミックスされたもの

だろう。わずかにのぞく妻のびしょ濡れの顔の上半分からは、かたく目を閉じて、必死にこの台風のこわさを身をもって味わっているさまが十分にうかがわれた。

そのうちに風が次第に強まってきたのか、妻のよるめきは段々とはげしくなり、追風をお尻をつき出すようにして両足でこらえたかと思うと、逆風に前につんのめったり……。そして遂に足をとられてころんだ。もはや自力では全く自由がきかず、風に吹かれるままあちらへ、こちらへと少しずつころがされている。

こちらは室内だが、それでも台風のおそろしさを身にしみながら、用意された昼食をパクついたりして妻をうかがっていた。やがて妻のころんだ姿が窓から見えて背中向きになり、その表情が、うかがえなくなってしまう。失神でもしたか、また何か物でも当たったのかと心配になってきた。ビュービューとなりを上げて吹きつける雨風の音が、その心配に拍車をかける。いたたまれず、再び雨合羽をひっかけた私は、強風の合間を見つけて雨戸から、さっと庭にとび出し、ナイフでロープを切って、抱きかかえるようにして、妻の身体を室内にひきずり込んだ。

目を閉じたままの、ずぶ濡れの妻に「おい
しっかりしろ」と、どなりつけ、ゴム合羽の
フードをとり、あわてて猿ぐつわのひもをゆ
るめ、ブーツをはずして平手で打ちつけると
眼を開けた妻は、「こわいッ」と悲鳴を挙げ
る。やっと安心した私は、落ちつきを取り戻
すにつれ、いままでの妻の姿態に次第に感情
の高まりを覚え、中々、このままでは許すま
い、まだまだいじめてやろうと考えた。

よく見ると、露出していた妻の額に、黒と
赤の細い斑が一面に出ている。「黒」は砂利
で、「赤」は比較的大きな砂粒などがきつく
当ってにじみ出た血である。唇は青くわなな
き、このまま更に責めつづけることは無理の
ようだ。時計を見ると、もう正午。外はます
ます吹き荒れているが、もう二時間近くも風
雨にもてあそばされ、ゴム雨具にしめあげられ
た哀れな妻の縄を一旦といてやり、濡れたも
のを全部着かえさせようとしたが、全くもう
グロッキーのようである。

ムチをとりだして追い立てながら、今度は
しびれきった手でレインコートのオムツカバ
ーをさせ、ズボンスタイルに着がえさせてか
ら、また新しい紺のゴムレインコートを着せ
軽く後手にしばって、熱いお茶をのませてや

り、スプーンで食事を与えてやったりしてい
るうちに、どうやら、暴風雨も峠をこしたの
か、幾分やわらいできた。それでもまだ外は
相当な雨風なので、外装は朝と同じように、
ゴム合羽、ブーツをまとわせ、大きな枝をプ
ラカードのようにしたものを背負うように縛
りつけた。

「庭の中央で立っている、辛抱できなくなれ
ば、坐ってもよいが、こらえられるだけ我慢
しなければ、あとがこわいぞ」

とおどかして、雨戸をわずかに開けて庭へ
追い立てた。こんどは、頭上に背負った大き
な板が風圧を受けて、そのたびに妻はよろめ
きながら、両足をふんばって必死にこらえて
いるのだが、よたよたとしている。

そのうち、たえきれなくなって、フラフラ
とくずれるようにして、ひざから坐りこみ、
板を地面につけて、大きく前かがみの姿勢に
なってしまった。プラカードようにした、う
しろの棒が長くて、丁度お尻の下あたりまで
になっているので、まっすぐ坐ることができ
ず、ひざをついて前かがみになるか、ころが
ってしまふしか、できないわけだ。

しばらく、そのまま放置して眺めているう
ちに、ほとんど風雨もおさまってきたので、

雨戸をあけはなし 私もゴム合羽を着こんで
ムチを手にして庭へおりた。

「さあ、立つんだ」と命じても、もはやその
気力もなくなったか、不自然な姿勢で立つこ
とが不可能なのか、ゴソゴソともがくだけで
ある。ゴム合羽の上から、お尻をピチャピチ
ヤと打っても、背負わされたものが邪魔をし
て、ころげ回ってムチをさけることもできず
わずかにゴソゴソもだえるだけである。

風雨もやみ、薄日さえさしてきた。

まだ許してやるまいという気になって、ム
チのプレイはやめたが、今度はまだそのまま
の姿で、大きな立木のところへ引き立ててゆ
き、ぐるぐる樹にしばりつける。

一旦「くつわ」を解いてやり、水を一杯与
えてから

「どうだ、少しは台風のこわさが判ったか」
と顔を寄せて尋ねる。

「ハ、ハイ。恐ろしゅうございました。よく
判りましたので、お許し下さい」

目深かにかぶったフードから水滴をたらし
ながら、うなだれて許しを乞う。

「バカをいえ、じっと立っているといったの
に、よたよたと動いたのは何だ。少しも判っ
ていない証拠じゃないか」

「でも、風が強くて、じっとこらえられなかったのです」

「いい加減に立っておればよいという態度だからだ、一つも腹に力を入れて、ふんばっていなかったじゃないか。その性根がなっていないぞ」

横面に平手打ちを数発くわせてから、再び「くつわ」をきつく纏ませ

「しばらく、そのままよく反省してみろ、自分で反省できたと思ったら、身体をもちいてナワを切って帰ってこい。ナワをゆるめて

限定版写真集 第七集
限定版写真集 第八集

完成！

長らくお待ちいたしました。二月上旬完成いたしました。今すぐお申込み下さい。折返しお送りいたします。

△美しき縛め△ 第七集

刺青の魅力を探ぐる

一部一、〇〇〇円 略号「美7」

△美しき縛め△ 第八集

女斗緊縛競艶写真特集

一部一、〇〇〇円 略号「美8」

おいてやるからナ」

といって（少しもナワなどゆるめずに）私は屋内にもどり、台風のと片づけなどしながら、時々妻の姿態を眺める。

折からの陽光に黒いゴム合羽の異様な姿を光らせて、ぐったりと立木につながれた妻。

コートのオシメカバーは、外からも内からもびしょぬれになっていることだろう。後手などは、もう感覚がなくなっている筈だ。

やがて夕方、縄目を切ろうと、ゴソゴソとゴム衣の音を立ててもがき始めた様だが、そう簡単には切れない。日もとつぷりと暮れて屋内からは妻の姿も、はっきりとは見えなくなって、その苦しむ姿を眺める楽しみのうすれてきた頃、庭へ下りていって、やっと解放してやった。

いつものことだが、屋内へ入っても、まだ濡れた雨装のまま、しばらくはどっとくず折れて、シクシクと涙を流しているだけ。やっと自力で着換えをし居間におちついたときはもう午後7時を過ぎていた。

夜おそく、夕餉の膳に差し向いで坐ったところで、またもや妻を朝と同じような完全ゴム雨装にさせビールの酌をさせます。お前も今日は疲れただろうといって、朝、猿ぐつわ

に使った白ゴムブーツをもってこさせ、ジョッキ代りにビールをのませたりして

「今日の態度はなっていないかったから、今度台風がきたら、この前の池へ連れていって野外で思いきり責めてやるからナ」

（註）以前に紹介したことのある宝塚近くの池のこと。

「もう台風だけはコリゴリですわ、このまま死んでしまふかと思いました。家でよく判りましたから、それだけはお許し下さい」

必死に訴えるような眼許を見て、どうやらよほど骨身にこたえたらしいと思い、早くまた台風がきたら面白かろうにと、想像をめぐらす。

○

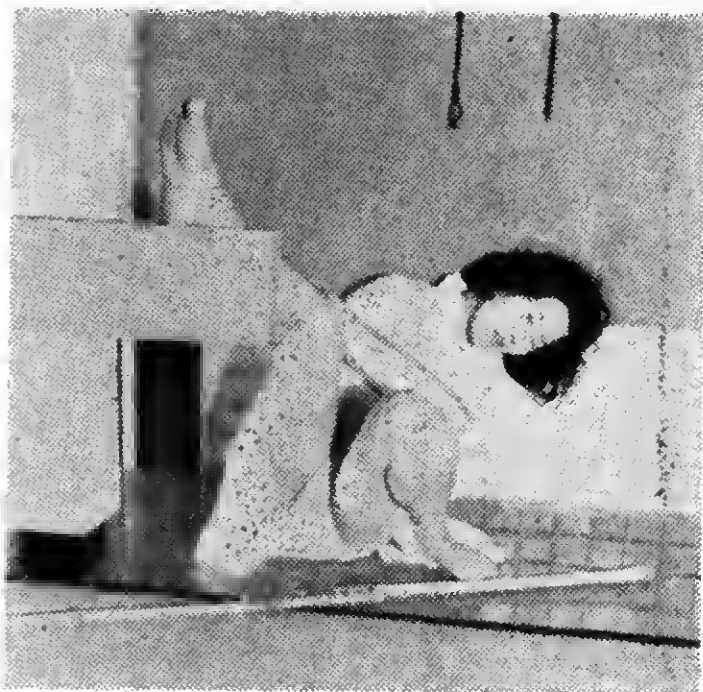
ところが、意外と早く、次の台風24号がやってきたわけだが（9月17日）、これが夕刻からの来襲であっただけに、人目を避けての野外でのプレイには、もってこいの絶好のチャンスであったのだが、誠に残念なことに、私が商用で家をはなれていたため、機会を失ってしまった。

妻はホツとしたかもしれないが、いつの日にか、素晴らしいプレイを堪能した上で、また紹介させて貰うことにしよう。

ハロー・御機嫌いかが！

《モデル嬢さん》

よるの・たんぽう



書く、投稿する。または大方マニアの作品を読む。奇クを知ってから、もっぱらそんな動作をくり返してきた私にとってグラビヤ・フォトが本誌上から消えたことも仕方が無いです。むしろ「読む雑誌」本文充実こそ、新しい風俗文献誌「奇譚クラブ」の本質ではないかと過信というより狂信し、ペンを大上段にふりかざして論壇提供とあばれわった人間です。

フォトが廃止になった昭和四〇年三月号ですか、それ以前のグラビヤ・フォトでのモデ

ル嬢さんたちの御熱演も、少しく美は感じましたが、むしろまぶしさが先になって、照れてしまうありさまでした。探郎は、しよせん（なま）生より幻を好む夢男なんですね。だからフォト評もモデル論も、本格的な物はいまだに書けません。（すまなく思ってます）

「小説・梨花悠紀子」（40・八月号）を書きこんど辻村さんのSMカメラ・ハントハクリス・ラプソディ「続・美木乃々子の巻」（十二月号）を発表して頂いた心ばかりのお返しに「小説・美木乃々子」（これを書いている

現在は未発表）を書いたのも、御発表になった乃々子嬢のフォト・カットもうれしかったが、それ以上に辻村さんの麗筆と乃々子嬢の内部の心理状態に強く刺激されるものがあつたからです。梨花さんの小説も同じ心境からです。私は芸術家というよりは、むしろ文章家の方ですね。——そんな私が、ことさらハローとモデル嬢さんによびかけたくなつたのは、近頃、あまりモデル嬢さんたちのお声がかきこえなくなった事に気付いたからです。まだテレビがお目見得しなかった頃は、ラ



ジョを評して、声はすれども姿は見えずと言った。せめて（分譲品はハニーが限られている）声だけでも、本誌上にたくさん発表して頂けませんか。たしか、モデル嬢さんの中には達筆者も居た筈です。いま手もとの既刊号をペラペラめくったら、大塚啓子さんの『いけにえの幸福』という手記が眼にとまりました。（38・5月号）「フラッシュが一瞬、部屋のすみすみまでを照らし出します。カメラの距離と向きから判断して、自らの大腿部までが、四角の枠の中に切り取られたことを私は知っていました」とか「女の生肌に灼ける

ような痛みを与えるのが、現実の鞭であるならば、この光線の鞭は女の心理の奥底を打撃する一番辛い鞭なのです」など、実際にモデルとなってみなければ、書けない鋭い筆致です。私はただうなずいてしまった。これこそ生きた文章です。△告白文学△のジャンルに入るべき物です。

奇くは△モデルさんたちと共に発展してきた△とはある一読者のお言葉ですが、たしかにグラビヤフォト廃止以前の誌歴の中には多彩なドラマをふくんで緊縛フォトは、モデル嬢さんたちや、辻村さん、塚本さんなど、ベテラン氏が、リードされて△美△の花を咲かせてきた。特に、三十八年十一月発行の増刊号『写真と絵画△文献△特集号』に新鮮な姿体を、さらした△自己愛の女神△長野良子。△柔らかい肌を持つ△新井マリ子。△可愛らしき顔△五月亜紀子などのモデル嬢さんたちはみなこれからだという期待をいだかせた。

また、グラビヤフォト廃止前夜。三十九年十二月号で、とつじよとしてグラビヤに初登場した△刺青の女王△山原清子さんのことはまだ読者も記憶が生々しく、——はじめてでもあろう『刺青』というモデルとの組合せに他のモデル嬢さんたちもさぞかし眼を見はっ



たことと思います。

このような、外に制約の風が吹きまくるところを意識されても、本誌上のグラビヤフォトをかざるベテラン・モデル嬢はもとより新人モデル嬢など充分、一層の多彩なバラエティある花が咲き乱れることが予想される寸前。

三月号のグラビヤフォトの廃止は、モデル嬢さんにとっても、辻村、塚本さん等にとっても、口惜しいものがあつたと考えます。勿論モデル嬢によるフォト・ファンも——。ここから読む雑誌としての尖兵たる△論争△が活発化された。私など、いまから考えてみると



「ワッショイ・ワッショイ」という音頭取りの一人でもあったでしょうか。だが、その時も今も、グラビヤ・フォト廃止についてのモデル嬢さんたちの「真実」のさけびが誌上にのることをひそかに期待していました。いまの所その期待は裏切られた感があります。辻村さんなどの声も、マニアの声は、耳にしています。でも、貴女たちの声は？ フォト観については、まったくの素人でもありません。私に、モデル嬢さんたちの心理も小説など形式にかくれて書くことは少しは出来ますが、このようなお便りのような文体となると気が

引けて……。

そのような事を御理解願って書かせて頂きますと、——グラビヤ・フォトに掲載されます事を承知で、花はずかしき肌をさらし無情なひもにまきつかれ、カメラに写された。その事は、まことに自虐的な、だからこそ一層羞恥の底に、悦楽が秘められたそんなデリケートなお気持があったのではなかったでしょうか。ただ、知人を介してなど編集部からは非にと願われただけで、はたして裸身になれたでしょうか。

数の中には、別なモデル業をしていたから頼まれたというビジネス的な動作をふんでカメラの前に立たれたお方もいらっしゃるでしょうが。それだって、ただ単に、ヌードを見せるだけでなく緊縛という無防備状態が意味されます。いざとなつて縛られてからでは手でもって羞恥をカバーすることは出来ません。多少なれど、グラビヤ・フォトに紹介されたモデル嬢さんたちは、奇クをとおして全国のこの種マニアに、自分の緊縛ヌードを「美」的に観賞されたいという自己愛的な「いじめ」られて響く心」が秘められていたのでは——。身体の美の最高状態でもあろうあの四十年三月号にてグラビヤ・フォト廃止当時。



これは辻村さんや大方マニアばかりではなく、絶好の場を失^うなつたモデル嬢さんたちのショックは、多少なりとあったと指摘されます。(どんなものでしょうか)。先にも書きましたように「分譲」というルートだけでは観賞してもらうことは限られていますね。こんなにあからさまに、書きましてお許し下さい。いまこそ、赤裸々なモデル嬢さんたちの告白なりエッセイが出るべき時であり、それらが発表される事によって、おやかましい関係方面の方々にも「美」のなんたるかを、性の真実を理解してもらええるチャンスでもあり

そこから、グラビヤ・フォトの頁、復活という線も出てくるのではと信じたからです。ハ読む雑誌／賛成の私が、グラビヤ・フォトの復活など言葉に出す。ちよっとおかしな風に思われましょうが。そのような私が、このよ

うなお便りを書くのは、よっぽどの事と御推察されて分譲フォトと共に、ペンの方でも大いにハッスルして下さるようお願いします。ここで、私の真意をうちあけますと、読む雑誌に脱皮され、奇くもバラエティある編集

がなされた時。いつか、グラビヤ・フォトの頁も復活されたら、それこそ鬼に金棒と信じているからです。それ迄、モデル嬢さんたちも、どうぞペン陣を張られんことを期待しています。

＜華々しき女体緊縛の組写真集＞

美しき縛しめ

〔第四集〕

限定版
グラビヤ印刷写真集

頒価一部 一〇〇〇円（送共） 略号「美4」

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態◎

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに加えるにべテラン大塚啓子の極最近撮影のフォトなど、ここ数カ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アート紙によって、皆様にごらんに入れます。写真はどれも未発表のとおきおきの傑作ば

かりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に発揮した文獻的価値豊かなフォト揃いです。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に見て頂けるといふことだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるようモデル嬢たちと共に心からお待ちいたします。

登場モデル 山原清子、木村洋子、玉田美佐子、大塚啓子

◇写真集アルバム内容◇

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛首吊り晒し (玉田美佐子)
- ブロックの石抱き責め (木村洋子)
- 箆子の浣腸器と鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳にて後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 立木から完全逆さ吊りに揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束具による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの晒し責め組写真 (玉田美佐子)

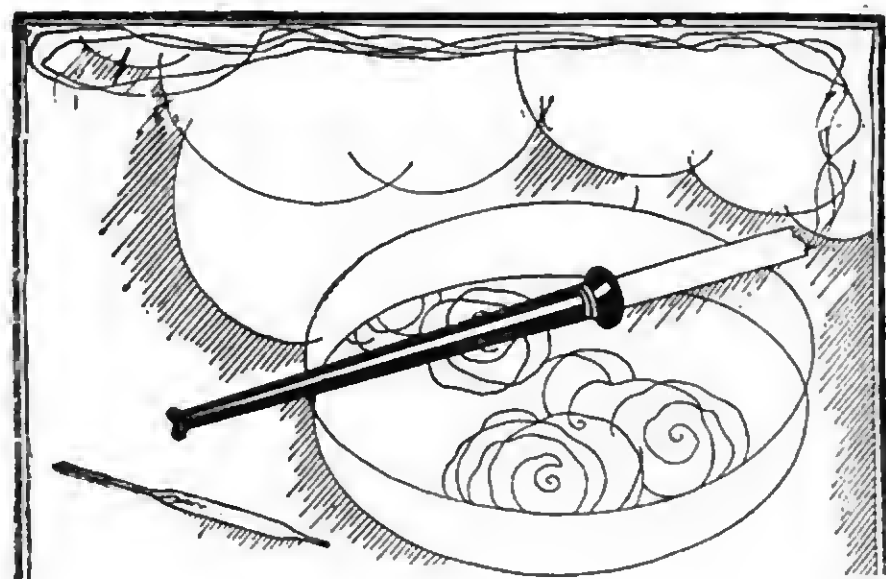
○セーラ服緊縛組写真

- 野外に於ける晒責組写真 (玉田美佐子、木村洋子)
- 刺青女体の柱吊り責め (山原清子)
- 捕獲された縛られ女、裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足半吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何カ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アート紙に對する鮮明なるグラビヤ印刷によって、写真集を完成いたしました。必ずや皆さまの御満足を得ることと信じます。限定版につき一般書店には姿を現わしません。数にも限りがありま

す故、売切れにならない中、お早くお申込み下さい。一般書店売は一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。



濡れにぞ

濡れし

眉美大阪に行く

芳野眉美

大阪

一月初旬、思い立って、東京国際空港からジェットに乗った。快晴。目的は、大阪に箕田編集長と辻村隆氏を訪問することであり、京都に、竜安寺と西芳寺、奈良に、薬師寺と唐招提寺を歩くことである。予定は四泊五日。辻村さんのお言葉に甘えて、図う図うしく辻

村さん宅にとめていただくことにした。

四十分余で、大阪城を眼下に、大阪国際空港。ただちに辻村さん宅に直行。この日初対面

伊吹真砂子さんの一夜――

いきなり、

「伊吹さんに会いに行きましょう」

と辻村さんに云われて驚いた。

「紹介しようと思って、電話をしておいたの

ですよ」

返答に困った。あまりにも早すぎる、辻村さんと会話をかわしたばかりなのである。

「伊吹さん、って」

「伊吹真砂子ですよ」

「ああ」

あまりなつかしい名前なので、しばらく茫然とした。私がはじめて奇クに投稿した頃、伊吹真砂子さんは、奇クのグラビヤで活躍していたのである。

「もう十年も前になりますね」

「会いますか」

「おまかせします」

これは最高に意外だった。辻村さんのお手紙には、一度も伊吹さんに就いて触れていなかったからである。

「暮にね、京都の河原町で偶然に会ったのですよ」

にこにこしながら辻村さんは云った。

「いやあ、まったく偶然だったな」

伊吹真砂子さんに再会したのが本当にうれしいらしい。

「結婚はしなかったのですか」

「失敗したのですよ。離婚して、今は独身」

「そうですか」

「さあ、約束の時間だ。行きましょう」

辻村さんは気軽に立ち上った。

天王寺に近い喫茶店に入ると、ドアの近くに見覚えのある顔が微笑んでいた。伊吹真砂子さんである。

「早かったね」

と辻村さんは伊吹さんの隣に腰掛けた。

「話をした、芳野さんだ」

私は軽く会釈をした。まさか、伊吹真砂子さんに会えるとは思ってもいなかった。

「飲ませてくれるそうさ」

と楽しそうに辻村さんは私に云った。

伊吹さんと私は、顔を見合せて、くすぐったそうに笑顔をつくった。これでは挨拶のしようがない。

「素直な女性です。彼女は」

辻村さんの声は大きい。

「いや、と云えない人だ」

と伊吹さんを説明する。

「SにもMにもなれる」

レモンティを飲むと、

「芳野さんとプレイしていてもいいのだろう」

と伊吹さんに云った。

「先生の紹介ですから、安心してますわ」

「少しビールでも飲んでおくといい」

「大丈夫ですわ」

辻村さんはさっさと喫茶店を出ていった。まるでつむじ風だ。

ホテルに入ったものの戸惑った。なかなか気持の整理がつかないのである。十年前の恋人に不意に会ったとしたら、話しかける言葉もとっさに浮かんでこないだろう。困った。

辻村さんは心得たようにさっさと緊縛のプレイを始めた。どうもシゲキが強すぎる。愈々出番だ。

「先生のおすすめに従って、ビールでも飲みますか」

笑いながら云った。

「ええ」

彼女は素直に立上って、冷蔵庫のドアを開いた。

ここまで書いて、書けなくなった。伊吹真砂子さんとの一夜が、あまりにも刺激的だったからである。思い出することが多すぎて書けないのだ。

私は伊吹さんの住所を聞いてこなかった。東京と大阪は遠くはない。知っていれば、私とそう年令の違わない伊吹さんに、私は没入してしまいうだろう。それがこわい。

伊吹真砂子さんはすばらしい女性だ。

いつか、会って下さるなら、私は、また会いに行く。その時は、また、辻村さんをわずらわせなければならぬが、辻村さんは許して下さるだろう。

その直後、お湯を浴びながら、

「はじめて……」

と伊吹さんは云った。

「はじめてですか」

「ええ」

「経験が無い」

飲ませる、という一つのこと、と、どれだけの時間がかかったことだろう。途中、気の毒になって、

「いいんですよ、無理をなさらなくても」

と何度も繰り返した。部屋で辻村さんが待っていると思うと気が気でない。こればかりは、そう都合よくいくものではない。

浴室のタイルに横になり、伊吹さんに顔を圧迫されながら、私はその瞬間を、待った。すでに、それだけで満足だった。

伊吹さんに顔を押し潰されている。考えてもみないことだった。

突然、

「いいですわ」

と伊吹さんが小さな声で云った。その短かい言葉が終らぬうちに、顔の圧力が増して、あたたかい激流が私の口をあふれていった。浴室の窓から、通天閣がにじんで見えた。有難う、伊吹真砂子さん。

伊吹さんはやさしすぎる。

箕田編集長――

翌日、箕田編集長より、茶臼山本陣に招待される。定刻、玄関に並んだ数体の大鎧に迎えられて、広島藩の部屋に案内された。同行した辻村さんが、編集長に紹介して下さる。そのまま岩風呂に。初対面で、三人とも裸。

編集長は柔和な方である。

浴衣に着がえ、陣羽織を羽織り、てっちり（フグ）を囲む。御二方共、よくビールを飲む。そのスピードに圧倒される。重量級にはさまれては、軽量級はひとたまりもない。今夜の編集長は車を運転なさっていないらしいし、辻村さんの病状も回復にむかっているのだろう。

日本髪の腰元、サービス係さんがちよっと気になったが、気にしているひまがない。御二人の対談に耳をかたむけ、たまにちよっかいをだす。面白い。くわしくは辻村さんの対談をどうぞ。

食い、かつ、飲めば、話は次第に熱を帯びてくる。ということは、露骨になる。露骨にならなければ、酒を飲んだ意味が無い。

「あなた方の御職業、何かしら」

と腰元サンがあきれて云った。

「人類学のプロフェッサー」

「ジンルイガク」

「そうだ」

（註）現在、今村昌平監督が「人類学入門エロ事師たち」を製作している。

「こんな文部省推選みたいな道徳的な話をしてくれる客なんかいないだろう」

「いないわ」

「顔があかいぞ」

「今夜は寝られそうにないわ」

「これですやすやす寝られたら不感症だ」

「失礼ね」

「ところで、一人か」

「そうよ」

「それはもったいない」

これは腰元サンと私だけの会話である。

「俺と寝ようか」

こんなフキンシンな言葉は云わなかった。

辻村さんが歌をうたいだした。

雨の通天閣の夜景は美しい。

京都

京都の冬にしては、めずらしくあたたかい日にめぐまれて幸運だった。辻村さんに同行をお願いする。京都駅から竜安寺に直行。

竜安寺――

右京区竜安寺御陵の下町。臨済宗妙心寺派平安期以来の徳大寺家山荘跡を、一四五〇年細川勝元により開創。

方丈前庭の石庭は有名である。

あらためて説明の必要は無いと思うが、矩形の前庭は、波紋状の白砂の上に、十五箇の石が東から、五二三二三、の五つの集団に別れて配置されている。その配置の妙は、その石群をどこから見ても、一個はかならず隠れて見えないようにしてあることで、虎が子供を連れて川を渡るときは、必ず子供を自分の陰にかくして、敵の攻撃から守る古事にならって、別名『虎の子渡し』とも云われる。

白砂と石だけの庭である。

「禅とは、無、の宗教である」

と竜安寺の案内書にあった。

石庭は、その時の、心の動静で、種々な感情を反映するだろう。すべての美術品と同じように。

やわらかな落日が、石庭に影を落としていた。

竜安寺とうふを囲んで休憩。淡白な味がおいしい。見たいものを見たという満足感が空腹を呼んだのだろう。

西芳寺（苔寺）

竜安寺山門で、可愛い顔をした二人の若い女性と一緒になり、四人で西芳寺に直行。話しかけたのは辻村さんで、私ではない。途中渡月橋（嵐山）を通過、苔寺に着いたのは閉門の四時半であった。あわてた。

右京区松尾神力谷町。臨済宗天竜寺派。奈良時代、行基が開山した近畿四十九院の一。のち一三三九年、夢窓国師が再興し、鎌倉式庭園は有名である。

庭中一面に敷き詰められた百二十余種の苔で、別名苔寺と呼ばれる。苔寺のほうがかかりやすい。

表門より本堂庫裡まで一直線の参道の両側が、すでに苔で眼を奪う。本堂より右折して庭に入る。心字形の黄金池を中心にした、池泉廻遊式庭園になる。

四人はお互に並んで記念写真をとる。別に自己紹介もしていないのが、旅行の気やすさかもしれない。別れてしまえば二度と会えない二組なのだが。

い二組なのだが。

夢窓国師の建立になる国宝湘南亭を右に、黄金池を左に見て、そぞろ歩きは続く。右も左も、びっしりと、苔、苔である。

苔の最も美しいのは、五、六月頃だということから、その頃また来ようと思う。

「竜安寺で、ゆっくりしすぎたね」

と辻村さんが云った。

「もう少し早く来ればよかったですね」

同感であった。

辻村さんは、竜安寺の石庭より、西芳寺の名園により感動を受けたらしい。

辻村さんと私とは、年代も違うし、生活態度も異なるから、京都の二寺を歩いた感想も私と違うのは当然のことである。

ただ、二寺を歩きながら、時折、同じことを感じているのだな、同じことを考えているのだな、という心の触れ合いに会ったとき、大阪に来てよかった、としみじみ思ったのである。

竜安寺の石庭も、苔寺の庭園も私は十二分に満足していた。

池を一周して、向上関の山門にかかり、洪隠山に向って石段になる。庭園はここから枯山水の石組の庭になる。

即ち、西芳寺の庭園は、上下二段構の雄大なもののなのだ。

このあたりになると、若い二人の女性との間がかなり離れてきた。辻村さんも私も大分くたびれていたのである。

夕闇がすぐそこまで下りていた。

増田喜代司、みゆき夫妻に会う――

残念だが、京都駅で二人の女性と別れ、木屋町で夜食した。焼肉と生野菜とビール。

「増田さん、もう会社から帰っているかな」と辻村さんがいった。

「増田さん、って、あの鼻責めの」

「そう。途中だから会っていきましょか」

「かまわなければ会いたいですね」

「電話してみましょう」

辻村さんはサービスが良すぎる。

ここでまた、増田夫妻に会えば、これも予定外のことになる。

「彼のアパートで会うことにしましたよ」

増田さんは帰宅していたらしい。

河原町から阪急に乗る。

辻村さんの、四十年七月号のSMカメラハント「鼻責版夫婦善哉」によると、

「私も妻も、鼻障子を穿孔してあります。今

私の生活の生甲斐は、毎夜就寝前、妻と交互に行なう鼻責めプレイがそのすべてです」とあり、その鼻障子を穿孔した時の様子は「最初の穿孔の第一針を鼻障子に貫通させました。するどい痛みが全身をはしり抜け、木綿針は、見事に右の鼻穴より、左の鼻穴に通りました」

木綿針を使うことは、増田さんにお会いしてあらためて確認した。鼻に穴をあける、というその事実に興味があったのである。

さて、増田さんは、結婚してまもないみゆき夫人を穿孔しているのである。

「私は妻に鼻障子の穿孔を切り出しました。すぐ反対されと思ったのに、案外妻はにこやかに、この重大な申し出を受諾しました」とあり、

「私は縫針の先を消毒し、震える指先に力を籠めて、一瞬妻の鼻障子を突きさしました」

「痛かったです」

とみゆき夫人にいうと、

「ええ」

とにこにこ笑っていた。

「マスイは」

「使いません」

と増田さんがいった。

「針で突いたあと、化膿するでしょう」「ペニシリン軟膏を、つけておけば大丈夫です」

夫と同じく、鼻障子を貫通させることが夫への愛の証明なら、みゆき夫人は、夫の行為を、少しも残酷だとは思わなかったのに違いない。

みゆき夫人は、カメラ・ハントで拝見するよりずっと可愛い。どこに強力な意志がひそんでいるのか不思議だった。

幸福な御夫婦だとうらやましくなる。夫婦生活はこうありたいものだと思う。

増田さんの穿孔の続き。

「このまま抜いてしまうと、やがて又塞がりますので、木綿針に絹糸を通して鼻障子を縫い通し、糸の両端を鼻先で、結んでおきました」

「腫れが引いてから、あとは次々と実に根気よく、色々なものを挿入しては、徐々に穴を大きく拡大していきました」

かくして、

「現在、私の穴の直径は五ミリ、妻は二ミリ足らずです」

となる。

四十一年二月号のSMカメラ・ハント「み

ゆきのバースディ」に、増田夫妻は再登場している。

私は、薄いなめし皮の嵌口具をされたみゆき夫人のフォートが好きである。

増田さんの製作になるこの嵌口具は、「口に当る部分は、口中一杯になる程度の袋がとりつけてあり、これだけでも相当口中を圧迫しますが、更に責めるときには、口のフアスナーを開けて、綿や布などを少しずつ押し込んでいけば、口中の袋は徐々に拡大していきます」

とあり、

「鼻の部分は丸く切取ってあり、鼻孔吊上器で、高々と吊り上げ、それを額のバンドに接続させ、頭部にかけるようになっていきます」と説明されている。

増田さんが、そのなめし革の嵌口具を見せて下さったことは、思いがけない喜びだった。手にとって、嵌口具のなやましい感触に触れてみた。口のフアスナーを開けて、みゆき夫人が押し込まれる袋に指を入れてみたりした。

増田夫妻の夫婦プレイは、二回にわたるカメラ・ハントにくわしい。

奈良

雨の音で目がさめ、また眠ってしまった。すでに四日目だが、毎日の刺激が強すぎてつかれていた。

辻村夫人は、ひかえめで、やさしい方である。昨夜も夜半まで辻村さんと話をしていたので、夫人が寝不足になってしまっているのではないかと心配になる。

辻村さんは、家庭円満で、なんの不満もないという。だから、辻村さんはいつも楽しそうなのかもしれない。いつでも、微笑を忘れない。

幸福な家庭であり、うらやましい夫婦生活

女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌受読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記載の上編集部宛お申込み下されば、報酬そ

である。

仕事を終えた辻村さんが、

「明日、帰京しますか」

ときいた。

「今日は雨ですが、奈良の西の京を廻ってきます」

「雨でも、西の京に行きますか」

「薬師寺の吉祥天女が開扉になっているので」

と私はいった。

「これだけは、どうしても見たいのです」

辻村さん宅を辞して西の京に向った。

予定外の意外なことが重なって、とうとう三つ目の目的が最後になってしまった。す

の他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

に四日目であった。あまりにも早すぎる。

薬師寺の吉祥天は、天平時代の名画であり日本最古の色彩画である。しかし、そんなことより、豊頬艶麗な吉祥天女は、私の憧れの美の女神でもあった。

西の京駅前の土産物屋にスーツケースをあずけて、カメラだけを持ち、三分とはなれない薬師寺に行った。

金堂の薬師三尊（薬師如来、日光、月光菩薩）の三米余の巨大な白鳳仏の前に、静かに歩を運ぶ吉祥天女が開扉されていた。

鼻をつけるようにして私はみとれていた。

雨足が早く団体客の無かったことも幸した。

見ているだけで、私は幸福だった。

金堂の右に、白鳳時代の唯一の建造物である東塔がある、各層に裳階をつけて、六重に見える美しい三重塔である。その奥に鎌倉時代の東院堂がある。

本尊は白鳳仏聖観世音。

金堂の左に西塔跡。そのまた左に仏足堂がある。天平時代の仏足石が安置されている。

南都七大寺の一。法相宗大本山。奈良市西ノ京町。

雨がまた激しくなった。境内の茶店でうす茶を飲む。

唐招提寺――

薬師寺より歩いて五分ばかり、真新しい唐招提寺の南大門にぶつかる。

南大門より金堂を見る。天平時代の建築中最大にして、当時の金堂唯一の遺構という。単層四柱造。

金堂を一周して裏の講堂へ。奈良朝宮殿建築唯一の遺構である。平城宮の東朝集殿を移建したもの。単層八母屋造。

唐招提寺にきたのは、この巨大な二堂を見るためであった。

金堂と講堂の右に、舍利殿、礼堂東室、宝蔵、経蔵と並ぶ。

奈良市五条町。南都七大寺の一。律宗総本山。聖武孝謙両帝の勅願により、唐僧鑑真より天平宝字三年（七五九）に創立。日本屈指の巨刹である。

これで目的はすべて終った。

雨の唐招提寺には誰もいなかった。

再び大阪へ

「それじゃ最後の大阪の夜を楽しみますか」ということになった。夜になって、雨はあがっていた。降ったりやんだり、全くいそがしい。

ガール・ハント――

千日前に出て、ブラブラしていると、三人のハイティーンに辻村さんが近寄った。ガール・ハントは、辻村さんにまかせることにしている。

「お茶でも飲もうか」

とか、

「食事のほうがいいかな」

とか笑いながら話をしている。このガール・ハントも、辻村さんのサービスとあれば、感謝しなければならぬ。

ガール・ハントは、一対一より、お互に複数のほうがやりやすい。安心感があるからである。

レストランで、五人で食事をした。まず、それなりの雰囲気をつくることだ。

三人とも、八尾市から遊びにきたらしい。

「河内カルメンか」

辻村さんは一人で喜んでいる。

五人の中では、辻村さんだけが大人であった。彼女たちが、中年の魅力を感じたら、それは辻村さんの徳とするところである。私のことは、二つ三つ年上位に思っているらしい。そのほうが都合はいい。

隣のストラックスに、ざっくりしたセーター

というシンプルな服装が、彼女たちの性格をあらわしているようで面白かった。三人とも何んともなく盛り場を歩いてみたい年頃なのである。星の見えない、冬の夜は淋しいものだ。

私ははじめから、一人の少女に目をつけていた。ちょっと不良じみてはいるけれど、今までかぶりそうなふさふさしたオカッパと、アイシャドウが奇妙に似合う子だった。アイシャドウだけで、あとは化粧をしていない。丸顔の、厚い唇がどうもすでに男を知っているように感じられる。

「二人だけになるか」

「いいわ」

とユリコがいった。

あとの二人はベテランの辻村さんにまかせて、

「わるいですね」

二人はづらかった。

「二人になれば行くところは決まっている」

と私はユリコにいった。

「ところが、俺は、方向オンチでね。どこがどこかさっぱりわからない」

「案内するわよ」

「それじゃ、上六あたりのホテルに連れてい

つてくれ。」

ユリコのストラックスは、ぴっちりすぎて破けそうだった。

途中薬局に寄る。

バス・トイレ付きの部屋におさまった。ユリコはなかなか行動的だ。一人で知らないホテルに平気で入っていく。

浴槽にお湯をためながら、ユリコはさっさとセーターを脱ぎ、ストラックスを脱ぎ、下着をとると、部屋のガストロープの前で、パンティー一枚になった。

可愛い乳房がまだあどけない。乳首がちょっと突起しているのは寒さのせいだろうか。

「意外に薄着なんだな」

肌はけっして白いとはいえないが、健康な裸体は美しかった。

お湯がたまると、ユリコは目の前でパンティを脱ぎ、裸で歩いていった。

「一緒に入っているかい」

「いちいち、ことわらなくてもいいわよ」

「そうだな」

おもわず苦笑した。

浴槽にひたりながらユリコを抱いた。のびのびとした肢体が心地良い。

両手でユリコのやわらかい乳房をつかみ、

産毛の消えない首筋に唇をつけた。

「くすぐりたい」

「帰らなくてもいいのか」

「いいわ」

「とまっていくか」

「そのほうがいいのでしょう」

「こいつ」

ユリコの顔が反転して、上から私の顔におおいかぶさった。

ビールを注文してユリコにもすすめた。

とにかく、ユリコのを飲まないと気が落ち着かなかった。それでも、ユリコは午後十一時、独りでホテルを出ていった。

夜おそく、辻村さんの家へ帰るのも臆病だった。私は床に一人腹這いながら、ユリコのユリンの味を、しみじみ反芻していた。

よそさまに宿泊していて、朝帰りとは気がひけるが、今日は帰京しなければならぬ。辻村さんのところに寄って荷物をまとめた。

「飲んだかい」

「ええ」

これが朝の挨拶になった。

「それはよかった」

「ガール・ハントのおかげですよ」

二時間程ユリコの報告や、奇クの話をする。くわしくは辻村さんの対談をどうぞ。今日も、また雨であった。

東京へ

翠の味――

タクシーで大阪城を一周し、ぐずぐずしていたら夕方になった。そのまま大阪国際空港に直行。夜間飛行となる。

東京に着いたら急に翠に会いたくなった。

雨の大阪を歩いて気持も悪かった。

電話で店に出ているか、どうかを聞く。いた。予約する。

それでしばらく待たされた。

客を送り出した翠が近寄って来た。

「お久しぶり」

スーツケースを見て

「旅行」

「帰りだ」

「忘れた頃に、思い出しては来るのね」

「そうらしい」

フフ、と翠が笑った。独特なヘアスタイルが小柄な翠にマッチして、お人形のように思わせる。可愛い。

蒸風呂に入り、蒸気を強くしてもらう。

「いい気持だ」

が、あまり蒸風呂は好きな方ではない。

「もういいよ」

と云ったら、

「だめ」

「だめって、熱いよ」

「浴槽にお湯がたまるまで入っていないさい」

「そんなこと云ったって無理だよ」

「だめ」

あどけない声である。冷めたいおしぼりで汗をふいてくれた。大阪のトルコより味がいい。

「死にそうだ」

「弱虫」

「弱いんだよ、俺は」

「もう少し我慢しなさい」

こんなことを翠が云うのは、はじめてである。

「我慢したら、飲ませてくれる」

「えっ」

「飲ませていただけますか」

「ああ、あれ」

「あれ、ですよ」

「今、行こうかと思っていたのよ」

「ちょうどよかった」

「そうかしら」

翠が部屋のドアを開けて外に出て行った。

しばらくして、

「せいせいした」

「おトイレに行ったのではないでしょうね」

「そうよ」

「もったいない」

「フフ、ウソ、よ」

「助かった」

「もったいない、だって」

「もったいないですよ」

「そんなに飲みたいの」

「飲みたい」

「そう」

胸が苦しくなった。

「もうだしてよ」

「だめ」

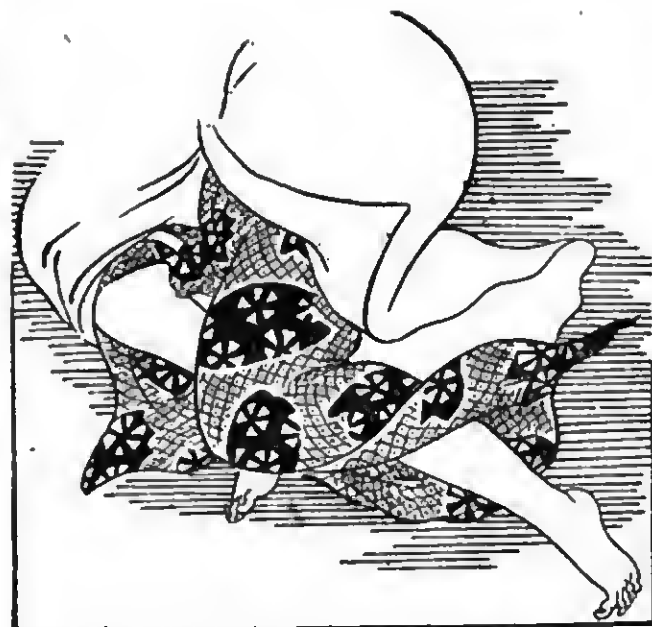
と翠が云った。

「もう少しがんばれば、飲ませてあげてもいいわ」

やっと許してくれたものの、私はタイルの上に長々とびた。胸がどきどきして一時はどうなるかとひやひやした。

「どうすればいいの」

頭のあたりで翠の声がした。



「どうにでもしてくれ」

「だって、知らないもの」

「腰掛けて、すればいい」

「洋式ね」

「そうだ」

「目をつむっていて」

翠はお尻だけ裸になったらしい。顔をまたぐ気配がして、翠の芳香がひそと漂った。

目の上に、翠のまっ白な小さなお尻があった。

翠はゆっくり私の顔に腰をかがめた。

そして、お尻で私の顔を踏んづけてから、かなりの時間がたった。

一条の暖流が、静かに口に流れ込んだ。